

ソフィア・ベル、ワン・ミン教授

紅塵

金光

RED DUST, GOLDEN LIGHT

中国に隠された謎と真実



THE LIVES
MEDIA®

紅塵、金光

(Red Dust, Golden Light)

中国に隠された謎と真実

著者：ソフィア・ベル、ワン・ミン教授

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を
保有します。無断複製を禁じます。

編集部より

本書は実在の物語、出来事、そして背景に基づいて執筆されました。しかしながら、個人のプライバシーを尊重し、特定の方々への影響を避けるため、登場人物の名前および個人を特定しうる一部の詳細は、文学的な表現として変更、簡略化、あるいは再構成されています。

本書の一部は、当事者の個人的な視点から語られており、その時点での彼ら自身の体験と認識を反映したものです。これらの見解は、必ずしも THE LIVES MEDIA の公式な立場と一致するものではありません。

文章表現については、編集部が必要な修正を加えておりますが、登場人物の原型を尊重し、物語の精神と躍動感を保つため、登場人物が持つ素朴な味わいと本来の語り口を最大限に維持するよう努めました。

編集部



著者より

本書のページに綴られた旅路は、すべてがワン・ミン教授のものです。著者としての私の役割は、教授と緊密に協力し、その体験に耳を傾け、彼の非凡な物語をこの一冊の本へと紡ぎ出す手助けをすることでした。本書は私たちの共同作業によって形作られましたが、ここに記された語り、追憶、そして深い真理は、すべて彼自身のものであります。

— ソフィア・ベル (**Sophia Bell**)

序文

私はかつて、科学を絶対的に信奉する人間でした。医学教授として、また一人の企業家として、論理と証拠、そして目に見え耳に聞こえるものだけを通して世界を見ていた私は、人生というものを——成功についても、人間の限界についても——かなりよく理解しているつもりでした。あの夏の中国への旅は、当初、伝統医学への好奇心と、長年離れていた祖国の変貌を見たいという軽い気持ちから始まったにすぎません。これから何が起ころうとしているのか、私には何の準備もできていませんでした。

別世界への扉が開かれたのは、実験室や大学の講義室の中ではありませんでした。それは静かな茶室で、霧深い山頂で、時間が止まったかのような小さな町で、そして非凡な知性を宿す素朴な人々の眼差しの中にありました。私は隠者たちに、奇妙な方法で病を癒す人々に、科学の視界を遥かに超えたものを見通す人々に出会いました。生涯をかけて築き上げてきた私の確固たる世界観は、その根底から揺らぎ始めたのです。

しかし、古代東洋文化の神秘を探る旅はまた、私たち——妻のチン・リンと私——を別の現実へと導きました。それは、近代中国の華やかな見かけの裏に隠された、暗く、残酷な現実でした。私たちは偶然にも、真・善・忍の原理に基づく真の修煉の道に触れることになりました。それは何百万人もの人々に光と希望をもたらす法門でした。そして、まさにそのために、私たちは不条理な迫害、外部の世界がほとんど知らない信仰への苛烈な弾圧という、むき出しの真実に直面することになったのです。

本書は、その激動の約七ヶ月間の記録です——懐疑的な科学者から真理の探求者へ、好奇心旺盛な旅行者から偉大なる善良さと極限の邪悪さの両方を目の当たりにした不本意な証人へ。これは私だけの物語ではありません。逆境における不動の心、信仰の力、そして最も深い闇の中にあっても決して消えることのない希望の光についての物語でもあります。

私がこれを書くのは、誰かを説得するためではなく、私の人生を根底から変えた一つの体験を分かち合うためです。おそらく、この旅路のどこかで、あなたもまた自分自身の何かを——一つの示唆を、一筋の光を、ずっと心

に抱いてきた問いへの答えを——見つけ出すことができるでしょう。

さあ、私と共に、東洋が真に輝きを放つ旅へと足を踏み入れてください。

王明 (ワン・ミン)

第一章：筋書きになかった瞬間

奇妙な招待状と異質な空間

私は、六〇三号室と記された濃い茶色の木製ドアの前に、静かに佇んでいた。

その部屋は一階の廊下の突き当たり、人目につかない隅にひっそりとあった。まるで、会議場の青白い蛍光灯の光からも忘れ去られたかのような場所だ。私の手には、時を経て変色した真鍮の部屋番号プレートの冷たさがまだ残っている。薄暗い光の下で、その数字は微かに震え

ているように見えた。まるで私自身を待っていたかのような、漠然とした感覚だった。

十分ほど前、私はまだ三階のメインホールにいた。そこでは、複雑なグラフを映し出すパワーポイントのスライドが、絶え間ない競争を続けるグローバル医療産業の性急な鼓動のように、目まぐるしく点滅していた。そのとき、ふとした衝動に駆られ、私はベストのポケットにひっそりとしまわれていた、あの小さな紙切れのことを思い出した。学会初日にゴミ箱に捨てようと思っていたものだ。

それは何の変哲もないものだった。象牙色の紙片に、ただ一行、シンプルな英語が印刷されているだけ。

“Ancient Healing Arts and Uncharted Possibilities”
(古代の癒しの術と未知の可能性)

そして一つの名前。張峰 (ジャン・フォン) — 中国より。
会場：六〇三号室。

その時、私は微かに口の端を上げたのを覚えている。一つには、そのタイトルがありきたりに聞こえ、どこか人里離れた田舎での週末瞑想コースの広告のように思えた

からだ。そしてもう一つ、おそらくはこちらの理由の方が大きかったが、私は数字の人間、検証済みの研究の人間、そして明確に分析されたデータの人間だったからだ。妻のチン・リンは、言語を扱う者らしい繊細さで、私の思考は私がいつも身につけているスイス製腕時計の機械のように緻密で正確だとよく例えた。私はいつも黙って、それを自分の不動の精神に対する暗黙の賛辞と受け取っていた。

それなのに、どういうわけか、その紙切れは二日間ずっと、多忙なスケジュールと重要な会合の合間に、私のポケットの中で静かに眠っていた。まるで、ある瞬間を待つかのように、目に見えない重みを持っているかのようだった。そして今日の午後、予定に突然四十分ほどの空白ができ、無限に繰り返されるかのような統計グラフに頭が疲れ果てていたとき、私の手はまるで自らの意志でポケットに触れ――そしてゆっくりとその紙切れを取り出したのだった。

「少し覗いてみるくらい、どうということはないだろう」と私は呟いた。熟考の上での決断というよりは、ふとよぎった思いつきだった。

そして今、私はここに、六〇三号室の前にいる。近づくにつれて、メインの会議室から聞こえてくる騒音や雑多な音は、まるで目に見えない壁に濾過され、消え去っていくようだった。分厚い絨毯に沈む自分の足音がはっきりと聞こえる。一步一步が、奇妙なほど静まり返った、ほとんど実体を持つかのような静寂の中へ、ゆっくりと落ちる水滴のようだった。

私はそっとドアを押した。古びた木が長く息を吐くように、小さな軋み音を立てた。

中には……まったく別の世界が広がっていた。

眩いプロジェクターはない。格式張った演壇もない。会議の近代的な音響システムから響き渡る冷たい白色光や、増幅されたマイクの音もない。その代わり、部屋は柔らかく温かい黄金色の光に照らされていた。それは、天井近くに吊るされた数個の楮紙の提灯から放たれる光だった。清らかで優しい薬草の香りが鼻先をかすめる。沈香のようでありながら、より澄んでいて繊細なその香りに、なぜか私の心は不意に和らいでいくのを感じた。

部屋には十数人ほどしかいなかった。彼らは簡素な木製の椅子に、行儀よく、静かに座り、全員が前を向いてい

た。まるで、目に見えない音楽、意識の深層でしか感じられない旋律に共に耳を傾けているかのようなだった。誰もスマートフォンを見ていない。誰もメモを取っていない。誰も声を発しない。ここにある沈黙は、単なる音の欠如ではなく、部屋の隅々までを覆い尽くし、浸透する、生き生きとした実体だった。私は思わず息をのんだ。

私は入り口で数秒間、立ち尽くした。しわ一つないビジネススーツ、縞模様のシルクのネクタイ、胸につけた光沢のある金属製の名札――これらは私の地位と自信の象徴であったはずが、今やこの静寂の協奏曲における不協和音のように、場違いな感じがした。しかし不思議なことに、招かれざる侵入者を見るような視線は一つもなかった。彼らの視線は私を素早くかすめたが、そこには批判や探るような好奇心は一切なく、むしろ……この光景、あるいは似たような光景を以前にも見たことがあるかのような、そんな視線だった。暗黙の受容があった。

私は静かに息を吸い込み、できるだけそっと中へ足を踏み入れ、最後列の空いている椅子を選んだ。背もたれは少し傾き、布地は古びていたが、これほどまで躊躇いと慎重さをもって椅子に腰を下ろしたことは、私の人生で一度もなかった。

前方には、他の人々より少し低い、素朴な木製の椅子に一人の男性が座っていた。張峰（ジャン・フォン）だろう、紙切れの名からそう推測した。一番近くの提灯から放たれる黄金色の光が、彼の頬骨と片方のこめかみに斜めの光の筋を落としている。その顔は、一見しただけでは特に際立ったものはないかもしれない。だが、私の目を引きつけて離さない何かを秘めていた。彼の眼差しは突き刺すようでもなく、探るようでもない。ただそこに在るだけで、波一つない秋の湖のように静かで深く、そして寛容で物静かだった。

ここで一体何が起きているのか、私にはまったく理解できなかった。

この部屋に入ると決めた時、何を期待していたのかも、もはや思い出せない。伝統医学に関する学術的な講演だろうか？秘伝の気功の実演だろうか？あるいはもっと悪く、未検証の治療法への巧みな勧誘だろうか？

この空気は、そのどれとも似つかない。すべてが…奇妙なほどに、真実味を帯びていた。その真実味は、常に自分の管理能力と分析能力に自信を持っていた私を、少し…途方に暮れさせた。

私は両手を膝の上に置き、その場を支配する神聖さにも似た静寂を乱さぬよう、呼吸をできるだけゆっくりと、そして浅く整えながら、ただ座っていた。一分一分が鉛のように重く過ぎていく。奇妙な感覚、未だかつてない好奇心が、私の心の隅々まで忍び寄る。まるで、自分が何かとてつもなく大きなもの、これまで知らなかった世界、そして…まだ名前のつけられていない一つの真実の、その縁に立っているかのようなだった。

私はそっと座り直し、凝固していく静寂に溶け込もうと努めた。私の視線は、無意識のうちに張峰（ジャン・フォン）と名乗る男へと向けられ、待っていた。

何を待っているのか、私自身にも分からなかった。

物静かで神秘的な人々

私は後方の目立たない席を選び、身を縮こまらせて座っていた。まるで、いつの間にか幕が上がっていた無言劇に迷い込んだ、不意の観客のように。

物音一つない。言葉一つない。彼らはただそこに座っているだけだった――その姿勢がまるで彼らの血肉の一部であるかのように、奇妙なほどに端正で、自然だった。背筋は伸びているが、肩の力は完全に抜けており、手は静かに膝の上に置かれている。内側から滲み出るような安定感があり、そこには何の力みも、見せびらかすような素振りもなかった。

私は一人一人をより注意深く観察し始めた。

私に一番近い席には、六十歳は超えているであろう一人の老婆がいた。地味な濃い茶色の服をまとい、白髪はうなじで綺麗にまとめられている。彼女は目を閉じてはいなかったが、その視線はまるで幻の霧の層を突き抜け、部屋の向こうの壁よりもさらに遠く、定まらない一点を見つめているかのようなようだった。別の隅には、まだかなり若い男性がいた。その目は澄み渡っているが静かで、探るような好奇心は微塵もなく、むしろ、まだ三十路にも達していないであろう年齢にもかかわらず、多くの浮き沈みを経験してきたかのような沈黙をたたえていた。そして彼らの前方には、一人の老人がゆったりと座っていた。背中を軽く椅子にもたせかけ、その表情はあまりに

穏やかで、私は彼がこの場でうたた寝しているのではないかと錯覚したほどだった。

誰一人として視線を交わさない。儀礼的な微笑みも、意味ありげな頷きも、眉をひそめるような素振りさえもない。それなのに、彼ら一人一人の存在感は…満ち溢れ、濃厚だった。

冷たい無関心さは感じられない。ましてや、よくある「義理で座っている」といった様子でもない。彼らは本当にそこに、一瞬一瞬を、一呼吸一呼吸を、完全に生きていた。奇妙な感覚が私の中に忍び寄る。まるで、目に見えず、音もなく、形もなく、私の知るいかなる器具でも測定不可能な何かが、空気中に穏やかに広がっているかのようだった。これは、我々の科学がまだ定義していないエネルギーの一種なのだろうか。それとも、この特異な空間における私だけの幻覚なのだろうか。

彼らがどこから来たのか、何をしているのか、普段の生活がどのようなものなのか、私には分からない。彼らが以前からの知り合いなのかどうかも定かではない。しかし、ここ、この部屋において――彼らは大きな川の流れの中にある、物言わぬ古えの岩のようだった。注意を引

こうとはしないが、揺るぎない安定感と、言葉にならない秘密を秘めている。

再び、場違いな感覚が私を襲った。高級ブランドのスーツ、名誉ある医学教授の学位、国際的な学術誌に何百回と引用された研究論文——かつて私の誇りであったこれらすべてが、今この部屋では何の重みも持たないように思えた。

沈黙が…あたりを包む。だが、それは空虚ではない。まるで、私は古井戸の口の前に立っており、その奥深くから何か神秘的なものが発見されるのを待っているかのような、漠然とした胸の高まりが私の中に湧き上がってくる。

前方では、張峰（ジャン・フォン）がまだ静かに座り、一言も発していなかった。だがその時、彼は微かに動いた。

静かな湖面を風が撫でるように——ただ軽く首を傾げただけなのに、部屋全体もまた、それに呼応して微かに動いたように感じられた。私は、すべての視線が一斉に彼の方へ向かうのを見た。それはゆっくりと、自然で、慌てることも、強いられることもない動きだった。言葉を介さない…合意。

私もまた、無意識のうちに彼に視線を向けた。好奇心からというよりは、まるで目に見えない引力があり、そうせずにはいられなかった。

張峰（ジャン・フォン）との出会い

軽く首を傾げた後も、張峰（ジャン・フォン）は数呼吸の間、沈黙を守っていた。部屋はさらに静まり返る。そして、何の紹介もなく、無駄な仕草一つなく、彼は口を開いた。

その声は低く、温かく、一言一言がはっきりとしており、速くも遅くもない。私が知る、聴衆に感銘を与えたり感情を操作したりしようとするプロの講演者たちの雄弁な語り口とは全く異なっていた。彼は中国語で話した。それは、人々がマイクや派手なプレゼンテーションのスライドではなく、真心で語り合っていた時代のものを受け継いできたかのような、古風で素朴な響きを持つ中国語だった。

彼は「気」について語った。体内の目に見えないエネルギーの流れについて。心臓の鼓動と、宇宙の微細な変動との繋がりについて。「脈象」——体が発する静かな信号について。それらは皆、私が東洋伝統医学を調べる際に書物で目にしたことのある概念だったが、真剣に受け止めたことは一度もなかった。西洋で正規の教育を受けた医学教授のレンズを通して見れば、私にとっての「気」とは、「勇敢な精神」や「燃える心」といったものと同様に曖昧なものだった。美しく、イメージ豊かな美辞麗句ではあるが、どうやって定量化し、どうやって実験室に持ち込めるというのか。

しかし、張峰（ジャン・フォン）の語り口は全く違った。彼は理論を説くのではない。物語を語るのだ。昔の名医たちが、薬を用いる前にまず患者の心持ちを整えるだけで難病を癒したという話。複雑な病状でありながら、最新の血液検査の結果よりも深い事柄を脈象が明らかにしたという症例。私は初め、おそらくは儀礼的に聞いていたが、いつの間にか引き込まれていた。信じたからというよりは、聞かずにはいられなかったからだ。その声質に、その淡々とした語り口に、私を惹きつけて離さない何かがあった。

そして突然、彼は話を止めた。

もとより静かであった空間が、今や凝固し、停滞したかのようだった。咳一つ、荒い息遣い一つない、ほとんど絶対的な沈黙が、すべてを包み込んだ。

彼はゆっくりと部屋にいる人々を見渡した。そして——その視線は、唯一の部外者である私の上で止まった。

探るような好奇心はない。「君が誰だか知っているよ」といった意味ありげな視線でもない。ただ、まっすぐで、穏やかで、しかし深淵な眼差し。奇妙な感覚が私の背筋を駆け抜けた。その眼差しの下では、私という人間を形作ってきたもの——高価なスーツ、学位——が、もはや大した意味を持たないように感じられた。さらには、固く鍵をかけたはずの心の奥底までもが、触れられたかのようだった。

彼は微かに微笑んだ。口元をかすめるだけの、ごく軽い笑み。そして彼は言った——その声は抑揚がなく、大きくもなく、警告や批判のニュアンスも一切帯びていない。ただ一言、静寂の中で発せられたその言葉は、まるで私自身が意図的に忘れようとしていた深い傷に、そっと触れるかのようだった。

「あなたの脈は」と、彼は私から目を離さずに言った。

「少し沈み、滞っている箇所があります。まるで流れの中に巨岩が横たわり、水が自然に流れられない小川のようにです。気血はそのため淀んでいます。しかし、それ以上に言うべきは、あなたの心に何かこだわりがあるようだという事です。癒えぬ過去の出来事、名状しがたいプレッシャーが、あなたの気の状態を、本来あるべき平衡の状態に戻るのが難しくさせている」

私は全身が硬直した。耳が鳴る。

私は彼に一言も話していない。挨拶の会釈すらしていない。そして当然ながら、彼は近くに来てもしなければ、その細長い指で私の手首に触れてもしない。私が医学研究に費やした長年の歳月の中で学び、あるいは知るに至ったいかなる方法による「脈診」も行っていなかった。

では……彼が今したのは何だ？ どうして分かったのだ？

生来の懐疑心、科学者としての本能が、私の頭の中で即座に、そして力強く鎌首をもたげた。これは巧妙な心理トリックではないか？ 観察に基づき周到に準備された「読心術」の一種か？あるいは、彼はこの講演の前に私について「調査」する手間をかけたのか？

だが、違う。ありえない。彼が今言ったこと…どうして
見ず知らずの他人が知り得ようか？それは私だけが胸に
秘めていること、せいぜい、妻のチン・リンがぼんやり
と感じ取れるかもしれないことだ。中には、最も近い
存在である彼女でさえ、私が打ち明けたことのない深い
秘密もある。

私は膝の上に手を置き、震えないように努めたが、胸中
は千々に乱れていた。

私の科学的な理性は、論理的な説明を求めて叫んでいた。
しかし、もう一方の——私がいつもは無視し、めったに
用いることのない直感の部分は——沈黙し、観察してい
た。

私はふと、自分が巨大な世界地図の前に初めて立った子
供のように感じた。そして突然、その見慣れた紙の裏に、
奇妙な線と名もなき土地を持つ、より複雑で深遠な、第
二の地図が隠されていることに気づいたのだ——それは、
境界線も凡例もない地図だった。

その境界線のない地図の前に立ち、私は自分の慣れ親し
んだ物差しが、いかに限られたものであるかを痛感した。
科学の定量化能力を超えた真実というものが、存在する
のだろうか？

言葉なき対話と深い印象

私に直接向けられたあの奇妙な言葉の後、張峰（ジャン・フォン）はもはや私に注意を払うそぶりを見せなかった。彼は中断などなかったかのように、自然に話を続けた。その声は、軒先に落ちる霧雨の音のように、穏やかで、抑揚がなかった。

私は自分の席で身じろぎもせず座っていたが、心は少しも落ち着かなかった。

彼がその後語った言葉――気と心の繋がりについて、小さな人間と広大な天地との調和について――それら一つ一つが、今の私にはただ耳元を漂う音に過ぎなかった。なぜなら、私の意識のすべてが、ただ一つの、明確な答えのない問いの周りを渦巻いていたからだ。どうして彼は、私のことをそこまで知っていたのだろうか？

私はできる限り平静を装い、内面の動揺を悟られまいとした。しかし、自分の表情がいくらか硬く、不自然になっていることは確かだった。時折、視線を上げると、彼

の眼差しが私を素早くかすめるのが分かった。その眼差しには、説明しようとする意図も、申し訳なさそうな素振りも一切ない。ただ、そこには一つの…存在があった。静かで、深く。まるで彼は、私の心の中で渦巻く小さな嵐を完全に見通しており——そしてそれを、ただ静かに、批判することなく受け入れているかのようなようだった。

私たちの視線が交差した時のあの感覚は、名状しがたいものだった。それは通常の対話とは似ておらず、意図的な説得などでは断じてない。むしろ、言葉を必要としない、静かな感受、非常に曖昧だが、確かに存在する繋がりがかった。

私は元来、心霊的な事柄を容易に信じる人間ではない。しかし、その瞬間、何かが私に触れているのを私は知った。それは論理的な理屈によってではなく、まさにその沈黙と、すべてを見通すかのような眼差しによってだった。それは強烈な衝撃をもたらしたわけではないが、ゆっくりと、私の認識に深い痕跡を刻みつけていった。

そしておそらく、私の中のある部分が、もはやその奇妙な感覚に抗うことを望んでいなかった。

講演が終わった時も、部屋は驚くほどの静寂を保っていた。称賛の拍手はない。講演者に握手を求めようと、慌てて前に押し寄せる者もない。人々は次々と立ち上がり、張峰（ジャン・フォン）の方へ静かに一礼すると、厳かで慣れた様子で、一人、また一人と静かに去っていく。まるでこれが特別な講演会ではなく、親しい者たちの集い、あるいは、私がまだ到達していないある種の認識レベルで…ずっと以前から知り合っていたかのような人々による、日常の営みであるかのようにだった。

私はなぜか、その場にぐずぐずと留まっていた。部屋に数人しか残らなくなった時、私は無意識のうちに前へと歩み出していた。

張峰（ジャン・フォン）は私を見た。その眼差しは、最初と同じように穏やかで、優しく澄んでいた。

「お聞きしたいことが、たくさんおありでしょう」と、彼は小さな声で言った。その声に驚きはなく、まるでこのことを予期していたかのようにだった。

私はただ静かに頷き、初めは何も言うつもりはなかった。しかし、抑えきれない疑問が、途切れ途切れではあったが、言葉となって口をついて出た。「私の…脈について

おっしゃったこと…そして…どうしてあのようなことを…」

彼は軽く微笑み、私の問いを遮ることも、急いで答えようとしなかった。数秒の沈黙の後、彼は風がそよぐように軽い声で、ゆっくりと口を開いた。

「あれは、人の心と体の密接な繋がりについての、ほんの初歩的な理解に過ぎません。あなた方の現代科学は、体の目に見える構造を解明する上で驚異的な成果を上げていますが、目に見えない側面、微細なエネルギーの流れの前では、まだ少し戸惑いがあるのかもしれません」

私は黙って耳を傾けた。

それから彼は、ゆっくりとした口調のまま、しかし私をまっすぐに見つめ、何か深遠なものをたたえた眼差しで続けた。

「短い講演で、すべてを詳しく説明できるものではありません。もしあなたが本当に深く知りたいと――書物の理論ではなく、ご自身の体験を通して――望むのであれば、おそらく、中国こそがあなたが訪れるべき場所でしょう」

私の心臓が、微かに音を立てた。

彼は少し間を置き、そして最後の言葉を口にした。その声は穏やかでありながら重みを持ち、まるで馴染み深い扉を閉ざし、同時に全く新しい道を開くかのようだった。

「もしあなたがその旅に足を踏み入れる勇気があるなら、おそらく、あなたはもはや以前のあなたではなくなるでしょう」

彼は私にもう一度静かに頷くと、奇妙なほどの落ち着き払った様子で、残っていた数人の人々に紛れて部屋を出て行った。彼の姿はドアの向こうに消え、その速さは、私がまるで幻を見ていたかのようだった。

私は、冷え始めた部屋の中に一人で立っていた。外の東京の風が、ドアの隙間から吹き込み始めていた。

しかし、私の心の中では…

何かが、確かに揺さぶられていた。ごく僅かに。だが、無視することのできないほどに。

旅への誘い

最後の人々の姿がドアの向こうに消えた。私はまだそこに、静まり返った部屋の中に立ち、乱れた思考を整理しようとしていた。張峰（ジャン・フォン）氏の中国への誘いは、まだ曖昧ではあるが、心の中で響き続けていた。不可解な衝動に駆られ、私は彼に再び会えることを願い、急いで廊下に出た。

幸いなことに、彼はまだ遠くへは行っていなかった。出口に近い廊下の突き当たりに、彼は一人で立っていた。何かを待っているかのような、あるいは、おそらくは私を待っているかのような、物思いに沈んだ様子だった。

私が近づくと、彼は私を見た。その眼差しは変わらず穏やかで深く、まるで私が彼を探しに来ることが、ごく自然なことであるかのように。

「王明（ワン・ミン）さん、何かもう少しお話しになりたいことでも？」彼の声は小さく、抑揚がなく、静かな庭の木々の葉の間を吹き抜ける風のようにだった。

私はただ静かに頷いた。「実を申しますと、もっと理解したいことがたくさんあります。しかし…どこから始め

ればいいのか、何を尋ねればいいのか、分からないのです」

張峰（ジャン・フォン）は微笑んだ。滅多に見せない、しかし真心のこもった笑みだった。「格式張って『始める』必要などありませんよ。時には、ただ物事を自然に『続けさせる』だけで十分なのです」

私は黙っていた。一見単純に聞こえるが、私がまだ完全には掴みきれないある種の深い意味を秘めたその言葉の前に、自分の小ささを感じていた。まるで、慣れ親しんだ地図がすべて役に立たなくなる、深く暗い原生林の前に立っているかのようなだった。

「先ほどの講演で私がお話しできたことは」と、彼は変わらず抑揚のない声で続けた。「実のところ、広大な海の表面に浮かぶ数滴の水のようなものです。もしあなたが本当に理解したいと、感じたいと望むなら、あなた自身がその流れに足を踏み入れる必要があります」

私は眉をひそめ、彼の意図を掴もうとした。

「これは、あなたが何かを対象として研究するために行くものではありません」と、彼は私の考えを読んだかのよ

うに続けた。「知識の蓄えに新たな理論を一つ加えるためでもありません。ただシンプルに、生きるのです——あなたが探し求めているものが、まだ日々の暮らしの息吹の中に存在している場所で、十分に長く、完全に生きるのです」

そう言うと、彼はゆっくりと上着のポケットから、古びて色褪せた手帳から破り取ったような小さな紙片を取り出した。彼はそれを私に手渡した。そこには、かなりはっきりとした手書きの文字で、中国の貴州省にある住所と、電話番号の列が記されていた。

「もし時間が取れるようでしたら、おそらくこの夏がよろしいでしょう」と彼は言った。「私に知らせる必要はありません。ただお越しなさい。もしあなたの心が本当に来たいと望み、そしてその時が来たと感じたなら」

私は紙片を受け取った。その薄さと、彼の手から残された温もりを、手のひらが無意識に感じ取っていた。何十もの質問が喉まで出かかっていたが、何かがある種の力で、私にそれを言わせまいとした。

「奥様もご一緒にお連れになることを検討なさるといいでしょう」と、彼は付け加えた。その視線は変わらず私

を見つめ、まるで何かを見通すかのようだった。「彼女は、古来の文化と非常に自然な繋がりをお持ちのように感じます。そこにある事柄の中には、おそらく彼女の方が、論理的な解釈を必要とせず、あなたよりも早く感じ取れるものがあるでしょう」

私ははっと顔を上げた。胸にこみ上げてくる驚きを悟られまいとした。彼はチン・リンのことを知っている。どうして？ほんの数分の間に、どうして彼はそのような私的なことまで知ることができたのだろうか？

張峰（ジャン・フォン）は私の表情に意を介する様子もなく、静かに身を正した。彼の背丈は高くはないが、彼が上着の裾を直した時、その背中には奇妙なほどの揺るぎない力が秘められているように感じられた。

「これは、普通の物見遊山の旅にはなりませんよ、王明（ワン・ミン）さん」と、彼は最後の言葉を、低く、はっきりとした声で言った。「あなたが何かを検証するための科学実験でもありません。これを一つの縁の始まり、一つの機会と捉えなさい。残りは…すべてあなたの選択次第です」

彼は静かに会釈すると、外の東京の雑踏の中に身を投じ、まるで私の心にふとよぎった一瞬の思考であったかのように、素早く姿を消した。

私は、再び騒がしくなり始めた廊下に、一人取り残された。

手書きの住所が記された小さな紙片が、私の手のひらに、奇妙なほど温かく収まっていた。行の最後のインクが、少しだけ滲んでいた。

私はまだ、何の決断も下していなかった。しかし、心の揺らぎ、どこか遠い場所からの微かな呼び声が、私の魂の最も奥深い片隅に、忍び込み始めているかのようにだった。

* * *

第二章： 未知の地への第一歩

旅立ちの決意

その夜、私はまるで白昼夢から覚めたかのような奇妙な感覚を抱え、六〇三号室を後にした。会議場のメインホールは依然として煌々と明かりが灯り、隣のプレゼンテーションルームからはマイクを通した声が絶え間なく響いてくる。しかし、それら慣れ親しんだ音はすべて遠くに追いやられ、色褪せ、現実感を失っているように感じられた。今、私のベストのポケットには、張峰（ジャン

・フォン)氏が手渡したあの小さな紙片が入っている。会社のロゴも、役職の記載もない。ただ、中国の貴州(きしゅう)省にある手書きの住所と電話番号、そしてあの風変わりな出会いから残された、名状しがたい余韻があるだけだった。

ホテルに戻り、いつものように豪華な部屋に足を踏み入れたが、感覚はもはやいつも通りではなかった。その部屋は——温かい黄金色の照明、整然と配置された木製の調度品、テーブルに用意された新鮮なフルーツの盛り合わせは相変わらずだ——それなのに今夜は、奇妙なほどがらんとした空虚さをまとっていた。本来なら心地よいはずの静けさが、今や私の中で渦巻く、説明のつかない曖昧な感情を増幅させるだけのようには思えた。

私はポケットから紙片を取り出し、テーブルの上に置いた。何度も裏返す。わずか数行の簡素な文字。それなのに、私の視線はその見知らぬ地名に吸い寄せられ、まるでそれが私のまだ知らないどこかへと開く、半開きの扉であるかのような、何とも言えない感覚に囚われた。

誰かにこのことを話さなければ、と思った。乱れた思考に少しでも平衡を取り戻すために。私は電話を取り、妻のチン・リンにかけた。

「ハロー、あなた。今日の学会はどうだった？」——受話器の向こうから聞こえてくる彼女の声は、いつものように聞き慣れ、優しく、そして温かみに満ちていた。

「万事順調だよ…でも、少し奇妙なことがあってね…君にも聞いてもらいたいんだ」

私はゆっくりと、冷静な声色を保ち、何も付け加えたり誇張したりしないように気をつけながら、すべてを話し始めた。一階にあった風変わりな会議室のこと、名状しがたいほど穏やかな風格を持つ物静かな人々のこと、そして張峰（ジャン・フォン）という名の男性のことを。私は彼の眼差しを、体に一切触れずに「脈を診る」という行為を、そして私の状態について彼が語った言葉——私自身、そしておそらくはチン・リン以外には誰も知り得ないはずのこと——を描写しようと努めた。

受話器の向こうは、しばらく沈黙していた。物思いに耽る彼女の顔が目浮かぶようだ。

「……本当に、気のせいじゃないの、ミン？」——やがて聞こえてきた彼女の声は、厳しい疑念というよりは、新しい概念に正確な定義を見つけようとする言語学者の

ようだった。「何日も続いた緊張感のある学会で、少し疲れているんじゃない？」

「いや、僕は完全に正常だよ、リン」私は確信に満ちた声で答えた。「それに、君も僕の性格を知っているだろう。科学的根拠のないことを簡単に信じるタイプじゃない。でも…この出来事は、あまりにも現実的だった。そして正直なところ、自分がこれまで知り、学んできた知識の、どの引き出しにこれを収めればいいのか分からないんだ」

私は続けて、張峰（ジャン・フォン）氏との間に、まるで言葉を介さないコミュニケーションがあったかのような奇妙な感覚について彼女に話した。それは分析的な理性を介したものではなく、より深い認識の層から来るかのような繋がりだった。

「そして彼は、僕を中国に招待したんだ。おそらくはこの夏に」と、私はできる限り普段通りの声で言った。

「貴州（きしゅう）の、かなり辺鄙な場所らしい。そこで具体的に何をするのか、誰に会うのかは言わなかった。ただ…もし僕が体験したことをもっと深く理解したいなら、そこへ行くべきだ、と」

チン・リンは再び沈黙した。今度の沈黙は、もう少し長かった。

彼女が中国文化を愛し、多くの古典に通じ、東洋哲学の各流派について教鞭を執ったことさえあるのは知っていた。しかし、「気功」や「修煉」、「潜在能力の開花」といった概念は、彼女にとってこれまで主に文学や思想史の範疇に属するものであり、体験可能な現実や、生活における実践的な信仰では決してなかった。

「あなた、思うの…その人、何かの修煉者か何かなの？」——チン・リンは少し用心深い声で尋ねた。「明確な情報も、検証できる経歴もないんでしょう？もし…もしすべてが、とても巧妙に仕組まれたパフォーマンスだったら？何か特殊な心理的影響を与えるための」

「僕もその可能性はすべて考えたよ」と私は正直に認めた。「でも、僕がこの出来事を簡単に片付けられないのは——彼が僕の状態について語ったことだ。あんなに正確に言い当てられるはずがない。それに彼の眼差しは…僕がこれまで出会った誰とも、本当に違っていた」

私は彼女を説得しようとはしなかった。私自身もまた、理解しようと努めている最中なのだ。

チン・リンは非常に慎重な人間だ。彼女の慎重さが、私がビジネスで不必要な冒険を避けるのに役立ったことは一度や二度ではない。しかし同時に、彼女がただ常識的な解釈の範囲外にあるというだけで、何かを性急に否定するような浅薄な人間でないことも、私は知っていた。

「あなたの話を聞いていると」と、しばらく物思いに沈んだ後、彼女は言った。「私も少し…奇妙に感じるわ。私が神秘的なことを簡単に信じないのは、あなたも知っているでしょう。でも、好奇心はある。貴州（きしゅう）？あの土地は、古い文化の物語の中でも、多くの神秘を秘めている場所よ…分かったわ」彼女の声は不意に、より決然としたものになった。「もしあなたがそこまで行きたいのなら、私も一緒に行く準備をする。書物だけでは記録しきれない文化の側面を、もっと知るための実地調査のようなものと考えましょう。でも、計画は慎重に立てる必要があるわ。それに、行くとしても、私たちの夏休みの期間だけにすべきよ、いいかしら？」

私は微かに微笑んだ。温かい感覚が胸に広がる。彼女がそばにいてくれれば、ずっと心強い。

「ありがとう」私は心からの声で言った。

「あなたを一人で、そんな曖昧な事柄を抱えて見知らぬ場所に行かせたくないだけよ。それに…」——受話器の向こうで、彼女の声はふっと軽くなり、少しからかうような響きを帯びた——「あの理性的なことで有名なワン・ミン教授を、ここまで戸惑わせる神秘的な男性がどんな人なのか、私も本当に知りたいもの」

電話は終わった。ホテルの大きなガラス窓の外では、東京の街が華やかにライトアップされていたが、今の私の心の中にも…まるで別の光が灯されたかのようなようだった。それは煌びやかでも、派手でもないが、静かに燃え続け、これから踏み出す一步を照らすには十分な温かさを持っていた。

私は無意識のうちに窓の外、東京の夜空がぼんやりとした星々と溶け合う彼方へと目をやった。
貴州（きしゅう）への旅。チン・リンと共に。その思いが、頭の中で何度も巡っていた。

銅仁（どうじん）への旅路

科学者としての理性は、あの奇妙な招待状と張峰（ジャン・フォン）という神秘的な男性について、絶えず数々の疑問を投げかけていたが、私の内ではある種の好奇心と、漠然とした信頼感が静かに育っていた。そして、寝返りを打つ幾夜もの夜を経て、ついに中国へ行く決断が下された。旅は夏のはじめに始まり、約三ヶ月間を予定していた。流暢な中国語と東洋文化への深い理解を持つチン・リンは、当然のことながら、欠くことのできない旅の伴侶となった。彼女はあらゆる手配において私を大いに助けてくれた。必要な慎重さは保ちつつも、彼女の眼差しには、書物だけでは決して描ききれない文化や精神世界の側面を探求したいという、静かな熱意が感じ取れた。

東洋特有の湿気を帯びた暑さが広がり始めた初夏、私たちは長時間のフライトを経て上海に降り立った。そこは、チン・リンが幼少期を過ごした街だった。私が中国大陆に足を踏み入れるのはこれが初めてだった。数千年の歴史を持つ広大な国であることは覚悟していたが、上海の近代性と規模には、実に驚かされた。巨大で活気あふれる国際空港、都心に誇らしげにそびえ立つ摩天楼、複雑でありながら円滑に機能する都市交通システム…そのすべてが、飛躍的な発展と驚異的な生命力を物語っていた。

「上海もずいぶん変わったわね」と、空港を出るタクシーの中で、チン・リンが少し感慨深げな声で言った。
「これは今の中国のほんの一部にすぎないのよ。この国はとても広くて、これから内陸部へ深く入っていけば、もっと多くの違いを目にすることになるわ」

テクノロジーに素地のある私が特に強い印象を受けたのは、中国の高速鉄道システムの効率性と近代性だった。上海から、私たちはその高速鉄道に乗り、貴州（きしゅう）省へと向かった。列車は滑るように静かに疾走し、見渡す限りに広がる青々とした水田や、緩やかに続く茶畑の丘を通り過ぎていく。そして次第に、平野の風景は遠い地平線に姿を現し始めた石灰岩の山々にとって代わられていった。私はまるで、時がゆっくりと流れ、生活のリズムも穏やかになるような、別の土地へと深く分け入っていくかのような感覚に陥った。

貴州（きしゅう）の領域に深く入るにつれて、車窓からの風景はますます雄大になり、言葉では言い表せない原生の美しさを帯びてきた。緑豊かな植生に覆われた石灰岩の山々が幾重にも連なり、まるで創造主がうっかり落とした柔らかな白い絹の帯のように漂う霧の中に、その姿を時折見え隠れさせ、巨大で生き生きとした水墨画を描

き出していた。これは確かに、現代の巨大都市で目にする中国とは全く異なる姿だった。

省のより大きな都市に到着した後、私たちは車で旅を続け、張峰（ジャン・フォン）氏の紙片に記されていた小さな町、銅仁（どうじん）を目指した。この道のりは、曲がりくねった峠道を抜け、手つかずの原生林を貫き、冷たく澄み切った溪流に沿って進むものだった。ここの自然はその壮大な美しさで、私を心から驚かせた。そそり立つ断崖、まるで幾千代もの秘密を隠しているかのような深く底知れない谷。時には、遠くに梵浄山（ぼんじょうさん）の荘厳な頂が、漂う霧の中に垣間見えた。そこは、地元の住民たちが悟りを開いた者の住処だと語り継ぐ、神聖な山だった。

道中、車は時折、小さな村々を通り過ぎた。そこでは、木や竹で造られた高床式の家々が、古風な瓦屋根をいただき、雄大な山々の麓に静かに寄り添っていた。簡素な家々の屋根からは夕餉の煙が立ち上り、丘の中腹には、実った稲穂で黄金色に輝く棚田が広がっていた。ここの人々は、日焼けした肌と穏やかな微笑みを持ち、都会の人々に見られるような慌ただしさや競争心とはかけ離れた、素朴な佇まいをしていた。

「ここは静かで、穏やかな、ミン」と、道端で悠々と草を食む水牛の群れを目で追いながら、チン・リンがそっと言った。「貴州(きしゅう)がこんなにも素朴な美しさと、清らかな空気を持っているなんて、思ってもみなかったわ」

私は頷いて同意した。現代世界の絶え間ない騒音とプレッシャーに慣れていた私にとって、この澄んだ空気、山林の静寂、そしてややゆったりとした生活リズムは、非常に異質な感覚をもたらした。それはどこか魅力的でありながら、少し馴染めない感じもした。その感覚は、私の心を自然と落ち着かせ、仕事や待っているビジネスプロジェクトではない事柄について考えるための、余白を与えてくれた。

ついに、私たちは銅仁(どうじん)に到着した。それは私が想像していたよりもずっと小さな町で、連なる山々の腕の中に静かに抱かれていた。有名な鳳凰古城からもそう遠くないと聞いたが、ここはまるでマスツーリズムの流れに一度も乱されたことがないかのような、静かで奥深い趣があった。壮麗で近代的な上海とは対照的に、銅仁(どうじん)は古風で物静かな、山間の息吹が色濃く漂う美しさをまとっていた。時を経て滑らかになった石畳

の小道、伝統的な建築様式を持つ苔むした反り屋根の家々。賑やかではあるが決して騒々しくはない地元の市場が混在していた。昔ながらの漢方薬店から漂う干した薬草特有の香り、道端の小さな食堂からの郷土料理の香ばしい匂い、そして山と川の地域の湿潤な香りが混じり合い、非常に独特な雰囲気醸し出していた。

私たちは、町の中心とされる場所に近い三叉路で車を降りた。荷物は、いくつかのコンパクトなバックパックと、張峰（ジャン・フォン）氏がくれた住所の書かれた紙片以外に、大したものではなかった。その住所に直行するのを急がず、私とチン・リンはまず一時的な宿を探すことにした。一つには、長い移動の後に二人とも休息を取りたかったからであり、もう一つ、正直に言えば、誰かに会う前に、ここの生活のリズムや人々について、もう少し時間をかけて肌で感じておきたかったからだ。

チン・リンは、その言語能力と器用さで、地元の何人かに積極的に話しかけ、道を尋ねたり、適切な宿を探したりした。彼女は上海で暮らした経験があったが、銅仁（どうじん）は明らかに全く別の世界だった。人々は温かく素朴な地元の方言で呼び合い、私たちのような見知ら

ぬ客を、穏やかで好奇心に満ち、それでいて少し控えめな眼差しで迎えてくれた。

最終的に、私たちは川沿いに続く石畳の小道に入った。そこには、黄色い漆喰壁の古い宿がいくつか、大きく枝を広げた古い木々の下に、謙虚にたたずんでいた。その時私の心にあったのは、実に漠然とした感覚だった。まるで、結末が全く分からない物語へと、まさに足を踏み入れようとしているかのようだった。

銅仁（どうじん）の空気と人々

車はついに、張峰（ジャン・フォン）氏の紙片に記された小さな町、銅仁（どうじん）に停車した。車から降り、最初の一息を吸い込んだ瞬間、私はまるで目に見えない境界線を越え、全く別の世界に足を踏み入れたかのような感覚に襲われた。

ここの空気は、奇妙なほどに澄み切っていた。

上海のようなけたたましいクラクションの音もなく、点滅する電子広告板や、高層ビルのガラス面をなでる色鮮

やかなネオンサインもない。

そこにあるのはただ、石畳の狭い小道、時の経過と共に苔むした不揃いな瓦屋根、そして夕風に乗って漂ってくる、山と土の湿った独特の匂いだけだった。

チン・リンは深く息を吸い込むと、そっと私の方を向き、少し驚いたような声で言った。

「この空気…本当に違うわね。昔の小説で読んだ場所を思い出すわ。でもこの感覚は…奇妙なほどに現実的」

小さな町は、連なる石灰岩の山々の間に静かにたたずんでいた。この小道はどれも、まるで異なる空間の層へと続いているかのようだ。賑やかそうに見える市場通りも、決して騒々しくはない。道行く人々も、明らかに慌ただしい様子はない。小さな食堂、昔ながらの漢方薬店、工芸品の露店の一つ一つが、どこかゆったりとした、古風でありながら温かく親しみやすい雰囲気醸し出している。八角の香り、干した茶葉の香り、年季の入った湿った木の匂い、そして家々の台所から漂う懐かしいかまどの煙の匂いが、空気中に溶け合っていた。すべてが完璧に清潔というわけでも、ぴかぴかに現代的というわけでもない――だが、途方もなく真実味があった。

私はふと、古びた木の軒下で生薬を丹念に並べている老人や、色褪せた制服を着て苔むした小道を楽しそうに自転車で駆け抜けていく生徒たちの集団を眺めるために、何度となく足を止めている自分に気づいた。

銅仁（どうじん）は、旅行者に「感銘を与えよう」と努めているわけでは全くない。しかしおそらく、その飾らない自然な姿こそが、私の心を何かとても真実で、とても穏やかなものにそっと触れさせたのだろう。

事前に話し合った計画通り、宿を探すのはチン・リンの役目だった。中国語に堪能で、現地の文化にもある程度の理解がある彼女は、手際よく地元の人々と情報交換をした。ほどなくして、彼女は私を川沿いに続く石畳の小道へと案内した。そこには、三階建ての木造の宿が一軒、さほど新しくはないが、こざっぱりとして居心地の良さそうな佇まいで建っていた。

宿の女将は四十歳くらいの、ふくよかな体つきで、福々しい顔立ちの女性だった。彼女は私たちを愛想よく迎えてくれたが、客引きのような過剰な売り込みは一切なかった。私たちがアメリカ在住の華僑の大学教授で、伝統文化を学ぶためにここに来たと知ると、彼女は意味ありげに微笑んだ。

「この町にはね、古いものがたくさん残っていますよ。でも、ここに来たからといって、誰もがそれを見る縁に恵まれるわけじゃないんです」

その言葉に、私は少しどきりとした。彼女の言葉に隠された深い含意のせいか、あるいはただ、この女性のあまりにも真実味のある、素朴な語り口のせいか、分からなかった。

私たちが借りた部屋は二階にあり、遠くに緑豊かな低い丘を望む小さなバルコニーが付いていた。出入り口も窓も、すべて引き戸式の木製だった。部屋の内装も極めてシンプルで、頑丈な木製ベッド、竹製の小さな茶器セット、電気ケトル、そして隅に置かれた小さな本棚があるだけだった。薄型テレビはない。三つも四つもの言語で書かれた規則の掲示もない。

私はベッドの端に腰掛け、大きく開け放たれた窓の外に目をやった。夕暮れの淡い黄金色の陽光が、向かいの家の軒先に差し込み、そこでは白髪の老人が、ココナッツの殻で作られた柄杓で、いくつかの鉢植えにゆったりと水をやっていた。

「ここは、私たちが滞在するのにとても良い場所だと思うわ、ミン」と、部屋を一通り確認し終えたチン・リンが小声で言った。

私は静かに頷いた。十分な利便性や手頃な価格のためだけではない。それよりも重要なのは、ここであら…私は本当に「心を落ち着ける」ことができると感じたからだ。

科学的な報告書を書くためではない。これからの詳細なスケジュールを立てるためでもない。ただ、この素朴で、どこか馴染みのない世界が、私に何を囁きかけようとしているのか、耳を澄ませてみたかったのだ。

その夜、何日もの疲れる移動と心の動揺の後で、私は初めて本当に深い眠りについた。夢は一つも見なかった。途中で目が覚めることも一度もなかった。

ただ、木製のドアの隙間を吹き抜ける夜風の音と――そして、とても穏やかで、安らかな感覚だけがあった…まるで私が、ゆっくりと、名付けることのできない何かの中へと足を踏み入れていくかのようなようだった。

張峰（ジャン・フォン）の質素な住まい

銅仁（どうじん）に三日間滞在し、山間の地のゆったりとした生活リズムと特有の静けさに少しずつ慣れてきた頃、私とチン・リンは、張峰（ジャン・フォン）氏が小さな紙片に記してくれた住所を訪ねる時が来たと決心した。この数日間、私は少し躊躇していた。それは疑念からというよりは、おそらく、これから訪れるであろう、これまでのどんな出会いとも違うであろう会見の前に、自分自身の心を真に落ち着かせ、準備するための時間がもう少し欲しかったからだ。しかし、この土地の穏やかで清らかな空気が、かえって私の心を彼のことへと、そして東京での短い出会いの後に残された印象や、未解決の疑問へと向かわせた。

私たちは案内に従い、石畳の小さな路地に入った。ここでは、苔むした古い家々の壁が、緑豊かな古い木々の木陰にひっそりとたたずんでいた。銅仁（どうじん）の午後には、一日の他のどの時間帯よりも、常に色濃く、静かであるように感じられた。石畳の上で響く私たちの足音は、

まるで長い眠りについてた空間を不意に呼び覚ます、
場違いな音のようだった。

ついに、目の前に木製の門が現れた。雨風にさらされて
黒ずみ、青々とした蔦に覆われた簡素な門。あまりに古
びていて、まるでこの土地と空の自然な一部であるか
のようだった。私は深く息を吸い込み、そっと三度、扉
を叩いた。その音は大きくはなかったが、私の胸を微か
に震わせるには十分だった。

その日は週末の土曜日だった。私たちは事前に電話連絡
はしていなかったが、彼が家にいることを密かに願って
いた。

しばらくして、木製の門がきしむ音を立てて開いた。小
柄な老婆が姿を現した。白髪はきれいにまとめられ、顔
には時の流れが刻んだ無数のしわがあったが、その目は
慈愛に満ち、清らかな泉のように澄み渡っていた。彼女
は私たちに微笑んだ。それは、何のよそよそしさも探る
ような素振りもない、心からの笑みだった。

「どうぞお入りください」と、チン・リンが標準中国語
で挨拶し、名を名乗った後、彼女は温かい地元訛りで言

った。「主人は奥の茶室で、お二人をお待ちしております」

私たちは彼女の後に続き、小さな中庭を通り抜けた。内部の空間は、まるで全く異なる世界のように開けていた。それは形而上学的であったり、神秘的であったりする類のものではなく、ただ、とても静かで、とても軽く、そして生命力に満ち溢れているという趣だった。

木陰に覆われた小さな愛らしい庭が現れた。色とりどりの鯉が泳ぐ小さな池、様々な種類の野花が咲き誇る茂み、そして玉石で造られた築山から聞こえる、水のせせらぎ。ここのすべては、どんな設計流派にも従っていないように見え、意図的に手入れされている様子もない。それはまるで、そこに住む人々の生活リズムに合わせて、長い年月をかけて自然に形成され、配置された空間のようだった。とても自然で、とても真実味のある調和。

母屋は、黒光りする鉄刀木の柱、白い漆喰の壁、そして庭を囲むように続く赤煉瓦の廊下を持つ、簡素な伝統建築だった。現代的なテクノロジー製品はどこにも見当たらない。豪華で余分な装飾品もない。ただ、長年使われて艶の出た、時と生命の痕跡を色濃く残す、簡素な木製の家具があるだけだった。

張峰 (ジャン・フォン) はそこに座っていた。庭に面した小さな部屋で、午後の陽光が窓格子を斜めに差し込み、彼がまとった濃い茶色の服の肩に、淡い黄金色の光の筋を落としていた。私たちが中に入ると、彼は顔を上げた。その目は変わらず澄み渡り、顔は静かで安らかな表情を保っていた。まるで、この瞬間が来ることを、ずっとずっと前から知っていたかのように。

「ああ、教授ご夫妻、お見えになりましたか」と、彼は変わらず低く穏やかな声で言うと、ゆっくりと立ち上がった。「私のこの質素な住まいへ、ようこそおいでくださいました」

私たちは静かに会釈して応えた。煩わしい紹介の手順も、儀礼的な社交辞令もない。ただ、温かく、不思議なほど心地よい空間があるだけで、私たちはただ腰を下ろし、何も話さなくても良いと感じるには十分だった。

彼はお茶を勧めてくれた。

先ほどの老婆は気を利かせて去り、私たちだけの空間を残してくれた。張峰 (ジャン・フォン) は自らの手で、真っ白な磁器の茶器セットと、手のひらにちょうど収まるほどの小さな茶杯を取り出した。彼はゆったりと熱湯で

茶器を温めると、小さな木箱を開けた。中には、くると縮れた、濃い緑色の茶葉が入っていた。

「これはシャンシュエ茶です」と彼は穏やかな声で言った。「梵浄山（ぼんじょうさん）の高い山腹に自生する古木の茶です」

私は、彼が慎重に茶葉を急須に入れ、湯を注ぐその指先を黙って見ていた。彼の動作はゆっくりと、落ち着いており、形式的なパフォーマンスの要素は一切なかった。ただ、おそらく人生で何千、何万回とお茶を淹れてきたであろう人の、純粹な集中力と自然さがあるだけだった。しかし、その一回一回に、今この瞬間そのものへの敬意と、完全な敬虔さが保たれているようだった。

熱湯が急須に注がれる。茶の香りを乗せた薄い湯気が立ち上り始めた。それはとても軽く、とても清らかで、強くはない香りだった。まるで、木の葉に残る朝露の匂い、あるいは、にわか雨の後の山頂の雲の匂いのようなようだった。

彼は順々に小さな茶杯に茶を注ぎ、私たちに差し出した。私は慎重に茶杯を持ち上げ、鼻に近づけてそっと香りを吸い込み、それから小さな一口をすすった。茶の味は、想像していたような強い苦みは全くなかった。渋みも濃

くない。それは清らかで優しく、まるで透明な、ちょうど良い温かさの水が、ゆっくりと胸を流れ落ち、不思議なほどの爽快感をもたらすかのようだった。

チン・リンも茶を飲み、そして静かに、午後の陽光に満ちた小さな庭に目をやった。彼女は何も言わなかった。しかし、今の彼女の眼差しはもはや、研究対象を観察する教授の詮索するような、分析的な眼差しではないことに私は気づいた。まるで…彼女はこの静かな空間から、何かを真に聴き取っているかのようだった。

私は茶杯を置き、そっと尋ねた。「張 (ジャン) さん、こちらにお住まいになって長いのですか？」

張峰 (ジャン・フォン) は軽く微笑んだ。「私は生きています。しかしおそらく、この場所だけに、ではありません」

私は彼がさらに説明するのを待ったが、彼はそれ以上何も言わず、ただ静かに自分の茶杯に茶を注ぎ足した。一つの考えが、ぼんやりと、しかし執拗に私の頭をよぎった。特定の場所に『住む』のではなく、ある種の存在状態で『生きている』人々がいるのだろうか？そして、

この場所、この家、この庭は…おそらくはその状態の、
外的な現れに過ぎないのだろうか？

私は簡素な茶室を見渡した。何かを懸命に解釈しなければなら
ないような、特別なものは何もない。解き明かさ
なければならぬような、謎めいたものも何もない。

そしておそらく——これまでの人生で初めて、何年もの
間、科学的な論理と証拠を追い求めてきた後で——私は、
理由をはっきりと理解する必要もなく、不思議なほどの
安らぎを感じていた。

より深い、最初の対話

会話は自然に、誰かが促したり導いたりするでもなく、
ただ流れていった。いつの間にか、私たちの話が別の流
れへと——よりゆっくりと、より深く、そして私が日常
の対話で慣れ親しんだものよりも遥かに遠い流れへ
と——静かに移っていったのか、私にも分からなかった。

私は張峰（ジャン・フォン）氏を見た。彼は私の向かいに穏やかに座っている。やや痩身で、髪には白髪が混じっているが、その目は変わらず澄み渡り、鋭さはなく、むしろ不思議な温かみを秘めている。七十歳は超えていると推測したが、その顔には年齢相応の深いしわは見当たらず、明るく、聡明な表情を保っていた。彼の眼差しには特別な深みがあり、本当の年齢を推し量ることは難しかった。

彼の前に座っていると、私がいつもまとっている医学教授という役割が、もはや相応しくないように不意に感じられた。知識や凝り固まった先入観を一旦脇に置き、完全に開かれた心で耳を傾けたいという、内なる衝動があった。

「張（ジャン）さん」と私は、声を落ち着かせようと努めながら口を開いた。「先日の東京での学会で…あなたは心と体の密接な繋がりについてお話しになりました。そして…あの時の私の『脈診』のやり方についても…正直なところ、今に至るまで私には全く理解できません」

私は一呼吸おいて、静かに息を吸い込み、続けた。

「私が学び、教えてきた現代医学の知識をもってすれば、

あなたがその時おっしゃったことはすべて、測定や実験による検証の範囲を超えているように思えます」

張峰（ジャン・フォン）氏は微かに微笑んだ。反論や嘲笑の意図は全くない笑みだった。

「あなた方の科学は、肉眼で見え、機械で測定でき、実験室で再現できるものを調査し、分析することにおいて、実に素晴らしく、非凡なものです」と、彼はゆっくりと、落ち着いた口調で言った。「しかし、この世界——そして私たち人間自身もまた——ただその一つの、目に見える物質の層だけで存在しているわけではありません。もっと微細な、精神に属するもの、エネルギーに属するものがあり、おそらく現代の科学はまだ、それに触れ、感じ取るための適切な道具を持ち合わせていないのでしょうか」

彼は、まるで自分にとってあまりにも自然で、馴染み深い事柄を語っているかのようであり、私に何かを説得したり、押し付けたりする意図は全くなかった。

彼は「気」という概念に再び触れた。それは、各人の体の内外を常に流転しているとされる微細なエネルギーの一種であり、その人の思考や感情、そして全般的な心性

に大きく影響されるという。心が不安定で不安に満ちていると、その気の流れは滞り、乱れる。逆に、心が清らかで穏やかであれば、気は軽やかに、滞りなく流れる。私は耳を傾け、不意に東京でのあの瞬間を思い出した。彼の視線が私をまっすぐに見つめ、そして私を愕然とさせたあの言葉。「あなたの心にはこだわりがある」

これまで静かに耳を傾けていたチン・リンが、そっと身を乗り出した。「張 (ジャン) さん、今おっしゃったことは…古代の東洋医学の基本理論と、とてもよく似ているように思えますが、違いますでしょうか？そして、道家や仏家の経典の中でも、似たような概念を読んだことがあるような気がします」

張峰 (ジャン・フォン) 氏は彼女に静かに頷いた。「我々の民族の伝統文化は、実のところ、かつては非常に深遠で完成された知識体系をまるごと所有していました。それは単に肉体の病を癒す医学であるだけでなく、包括的な人間生命学とでも言うべきものでした。人が身体、精神、そして自らの生命との深い繋がりを理解するのを助けるものです」

彼は学術研究者のような言葉遣いも、空理空論を弄する者のような話し方も用いなかった。彼の口から出る言葉

の一つ一つが、深く染み込んだ体験から、真に思索し、実証してきた人生から、選び抜かれているかのように感じた。

そして彼は、抑揚のない平坦な声で、ゆっくりと語り始めた。

「何年も前のことですが、ある人物に出会いました。彼は医療業界で働き、それなりの成功を収め、非常に規律正しく、少なからぬ責任を背負っていました。傍目には、彼は何の問題もない安定した生活を送っているように見えたのですが、その心の奥底には、名状しがたいプレッシャーと、容易には打ち明けられない悩みが常に重くのしかかっていました。その時、彼の心臓には非常に小さな腫瘍が形成されつつありました。現代の医療機器ではおそらくまだ発見できなかったでしょうが、私にはその存在を感じ取ることができたのです。肉眼ではなく、非常に曖昧で、微細な感応の流れによって…」

彼はその物語を語る時、私をまっすぐには見なかった。しかし、その一言一句が、私の魂のどこかにある秘密の扉を、私がその存在を知らなかったか、あるいは長らく意図的に忘れ去っていた扉を、そっと叩いているかのようにだった。

私は無意識のうちに、背筋を冷たいものが走るのを感じた。

私の心臓が微かに痛んだ。それは肉体的な痛みではなく、突然の、あまりにも明白で衝撃的な気づきによるものだった。私は分かっていた。彼がただ「ある人物」について話しているのではないことを。彼は、私のことを話しているのだ。

「あなたは…本当に…それが分かったのですか?!」私は思わず口走り、声が抑えきれずに震えた。

張峰 (ジャン・フォン) 氏はその時、初めて私を見た。彼の眼差しには、自身の能力に対する自己満足や誇示は微塵もなく、また神秘的な雰囲気醸し出そうとする意図もない。ただ、不思議なほどの慈愛と、穏やかさがあるだけだった。

「あれはほんの些細な感応に過ぎませんよ、王 (ワン) さん」と、彼は優しい声で言った。「特別な神通力などではありません。ただ…人の心が十分に静まるとき、時には、肉眼では見通すのが難しいものが見えることがあるのです」

「そして、そのことをあまりご心配なさらないでください」彼は慰めるような声で続けた。「ご夫妻には、心身を修養する古えの教えと、非常に大きなご縁があると感じています。それこそが、私があなたにこの旅のための時間を作るよう、心からお勧めした主な理由なのです。やがて時が来れば、おそらくそう遠くないうちに…別の人が、別の道が、あなた方ご夫妻の心と体を真に癒す手助けをしてくれるでしょう」

私は完全に沈黙し、何を言うべきか分からなかった…彼は再びゆっくりと私たちの茶杯に茶を注ぎ、そして自分自身に言い聞かせるかのように、そっと言った。

「人が修煉の道を求めるのは、主に超常的な能力を得るためではありません。それよりも重要なのは、人の心の奥深くに本来備わっている、最も純粹で善良な部分を見つけ出し、そこへ立ち返ることなのです」

彼は小さな庭に目をやった。そこでは、夕方の風が緑の葉を優しく揺らしていた。

「反本帰真(はんぽんきしん)」と彼はその四文字を静かに口ずさみ、そして付け加えた。「それは、根源へ、本来の面目へ、生命の最も真実なる本源へと立ち返るということです」

私は聞いていたが、正直なところ、すぐには完全には理解できなかった。その言葉が難解で複雑だからではない。むしろ…その真の意味が、文字の表面だけにあるのではないと感じたからだ。

それは、どこか遠くから響いてくる寺の鐘の音のようだった。大きくもなく、性急でもないが、その音は長く響き渡り、広がり、そして私の心の中でいつまでも鳴り止まなかった。

チン・リンもまた、長い間黙っていた。中国文化を研究し、教える者として、彼女が「修心養性」について、古今の隠者や真の修行者について書かれた書物をどれほど読んできたか、私は知っていた。しかしおそらく、彼女の人生で初めて、目の前の、血肉を備えた一人の人間が、これまで彼女が古い書物を通してしか見ることのできなかった事柄を、まさに生きて体現しているのを目の当たりにしたのだろう。

私は不意にチン・リンの方を見た。彼女の目尻が微かに潤んでいるのが見えた。彼女は、突然こみ上げてきた感情を隠すかのように、さっと顔を背けた。

私たちの会話は、そうして昼近くまで続いた。茶室の空気は変わらず穏やかで、清らかだった。誰も、何事につ

いても最終的な結論を出そうとはしなかった。「正解」が断定されることもなかった。ただ、かつて生き、かつて体験した一人の人間が、まだ探求の道半ばにいる二人の人間に、分かち合っているだけだった。

張峰（ジャン・フォン）氏は私たちを引き止め、昼食を共にした。それは非常に簡素な食事だった。炊きたての白米、茹でたての青々とした畑の野菜、そして椎茸と豆腐の吸い物だけ。凝った香辛料もなく、儀礼的なもてなしの言葉もない。しかしなぜか、私がこれまで豪華なレストランで味わってきたどの宴席よりも、美味しく感じられた。

私たちが席を立ち、別れの挨拶をしようとした時には、太陽はすでに頭上に昇り始めていた。張峰（ジャン・フォン）氏は私たちを無理に引き止めようともせず、具体的な再会の日を約束することもしなかった。彼はただ、門まで私たちを見送り、そして静かに会釈した。まるで、芽生えたばかりの一片の縁に、静かに頷くかのように。

蔦に覆われた木製の門を出て、石畳の小道に戻った時、私とチン・リンはどちらも一言も交わさなかった。二人とも、沈黙を守っていた。まるで、それぞれの心が

まだ、あの静かで温かい空間に、残り香の漂う茶と、まだ冷めやらぬ言葉と共に、留まっているかのようだった。

* * *

第三章： 山頂の隠者

新たな地への準備と旅立ち

私たちが銅仁（どうじん）を離れる前、張峰（ジャン・フォン）氏は、私たちの旅は実は始まったばかりだと語っていた。彼は具体的な日程は何も示さなかったが、もし縁があるならば「会うべき」だと彼が考える数人の人物について、ほのめかしていた。その中で最も近くにいるのは、銅仁（どうじん）の町から三十キロほど離れた小さな山に隠遁していると聞く、一人の修行僧だった。そこは有名な景勝地でも、観光客を惹きつける巡礼地でもな

く、地元の住民でさえその名を口にすることはめったにないようだった。しかし、張峰（ジャン・フォン）氏の話しぶりから、私はその場所に何か特別なもの、探求を続ける機会が隠されているように感じた。

こうして、銅仁（どうじん）での日々は、より長い旅路への穏やかな序曲のように幕を閉じた。張峰（ジャン・フォン）氏と二度会い、言葉を交わしたことで、私はこの古い文化の厚みを持つ中国の土地には、まだ無数の秘密が隠されていることを実感した。それは、この先どこへ続くのか全く分からないにもかかわらず、私の中に強烈な興味をかき立て、旅を続けたいと駆り立てるには十分だった。

私たちは、山へ向かう準備のために、さらに数日間、銅仁（どうじん）に滞在することにした。チン・リンは、近隣の村々に住む何人かの人々に、それとなく意見を尋ねてみた。ほとんどの人がその山については知っていた。広大な竹林、一年中水が流れるいくつかの小さな滝、そして高地へと続くいくつかの古い小道がある場所だ。そこへキノコやタケノコを採りに行ったことがあると言う者もいた。政府が何らかのエコツーリズム開発プロジェクトを調査しているという噂を、かすかに聞いたことが

あると言う者もいた。しかし、チン・リンが山に隠遁している人物がいるかどうかを巧みに尋ねると、ほとんどの人が首を横に振った。「もし誰かいるとしたら、きっと森の奥深くにいるんでしょう。私たちが行くとしても、麓のあたりをうろつくだけです」

誰も疑いの表情を見せたり、真っ向から否定したりはしなかった。ただ…その話は、彼らの関心を引くものではなかったようだ。

私たちは町の市場へ行き、旅に必要なものをいくつか買い足した。履いていたスニーカーよりも良い登山靴、よりコンパクトなバックパック、持ち運びやすい乾物、そして急な天候の変化に備えるための薄手の服を数着。私はアメリカの同僚たちと定期的に連絡を取り続け、毎日メールをチェックし、夜には短いオンライン会議にいくつか参加した。仕事は、特に重要なプロジェクトが進行中の段階では、完全に脇に置くことはできなかった。しかし、仕事に充てる決まった時間以外は、私は意識的に心を休ませ、考え事を減らすようにした。

いつからか、私は自分の周りで起こる些細で平凡な事柄に、より注意を払うようになっていくことに気づいた。不意に袖口をすり抜けるひんやりとした風、宿の木の軒

先に斜めに差し込む清らかな朝の光、あるいは朝霧の中から遠くの山の寺から響いてくる、重々しい鐘の音。まだ凝り固まった習慣を完全に捨て去ることはできなかったが、私はゆっくりと生きること、すべてをコントロールしたいという欲求を一時的に手放し、人生の自然な流れに身を任せてみることを、少しずつ学んでいるように感じた。

私たちは、まだ白い霧が山々の頂に漂う、夜明け前の朝に銅仁（どうじん）を出発した。事前に雇っておいた地元の車が、かなり滑らかな舗装路を走ってくれた。しかし、山の麓へと続く細い道に入ると、路面は次第に砂利だらけになった。赤土の道もあれば、かなり起伏が激しく滑りやすい区間もあったが、車がゆっくりと進むには十分だった。まばらな水田やトウモロコシ畑は、次第に緩やかな丘陵地と、鬱蒼とした木々の茂る森へと姿を変えていった。

一時間以上走った後、車はそれ以上進むことができなくなった。私たちは車を降り、バックパックを背負い、雑草と鬱蒼とした木々にほとんど覆い隠された、狭い小道の方に目をやった。案内板一つない。近代的な手が加えられた痕跡も一切ない。

「本当にこっちで合っているのかしら？」チン・リンが、少し躊躇いがちな声で尋ねた。その目は、疑念に満ちて小道を見つめていた。「まるで…冒険映画のワンシーンみたい」

私も彼女と大差ない心境だったが、思わず軽く笑ってしまった。「正直なところ、僕にも分からないよ、リン。でもなぜか、こっちが正しいという気がするんだ。論理的な理由があるわけじゃない。ただ純粹に…ある種の感覚だ」

「感覚ですって？」彼女は、その日最も奇妙なことを聞いたかのような表情で私を見た。「自分が医学教授だってこと、忘れてない？ 私たちはプロの登山家でもなければ、経験もないのよ」

「分かっている。でも、張峰（ジャン・フォン）氏が何と言っていたか覚えているかい？ 時には自然に従い、自分の心の声に耳を傾ける必要がある、と。おそらく、今この瞬間、それが僕にできる精一杯のことなんだ」

チン・リンはそれ以上何も言わなかった。彼女はしばらく黙って小道を見つめ、そして静かに頷いた。

私たちは森へと足を踏み入れた。一步ごとに、別の世界へと少しずつ分け入っていくようだった。それは詳細な地図や、あらかじめ定められた旅程の世界ではない。むしろ、魅力に満ちた曖昧さの世界だった。小道は時にかなり急で険しい登りになり、またある時は石にびっしりと生えた青苔のせいで滑りやすかった。私の体は疲れ始めていたが、対照的に、頭は奇妙なほどに明晰で、冴え渡っていた。それは、濃いコーヒーやアドレナリンの興奮から来るものとは全く異なる種類の覚醒だった。むしろ、山林の広大な静寂そのものから来ているかのようだった。

私たちはただ歩き続け、時折他愛ない話を交わし、またある時はただ黙って、頭上の木の葉のアーチを吹き抜ける風のざわめきに耳を傾けた。道が険しい場所では、せせらぎの音が聞こえる小さな小川のほとりで足を止めて休んだ。小川の水は、まるで氷から溶け出したばかりのように、透き通り、そして冷たかった。

「あなたがどうして、これらすべてにそこまで惹きつけられるのか、私にはまだ本当に理解できないわ」と、小川のほとりの大きな岩の上で休んでいたチン・リンが、不意に口を開いた。彼女の指は、水面に意味のない円を

そっと描いていた。「以前の、あの実利主義で理性的なあなたとは、少しも似ていないもの」

私は彼女の隣に腰を下ろし、山林の清らかな空気を深く吸い込んだ。

「おそらく…僕は、測定可能なもの、計算でき、理性でコントロールできるものに、あまりにも長く、慣れ親しんで生きてきたからだろう。一方、ここでは——僕が説明できないこと、僕のコントロールの及ばないことこそが、僕を…より安らかな気持ちにさせてくれる。それらをはっきりと理解したからではない。おそらく、人生で初めて、すべてを徹底的に理解しなくても、その存在を受け入れることができる、と感じているからだ」

チン・リンは私の方を向き、その眼差しは和らぎ、そこにはある種の理解が浮かんでいた。「あなたのその気持ち、分かるわ。それは、誰かに理屈で説得されるのとは違って、何かとても壮大で、とても異なるものの前に立った時のようなね。それを把握したり、定義したりすることはできなくても、決して無視することはできない」

私は微かに微笑んだ。おそらく、まだ完全に同じ信念を共有しているわけではないが、私たちは新しい事柄に対

して、同じ視点、同じ開かれた心を分かち合い始めていた。

私たちは歩き続けた。手には地図もなく、目の前には明確な旅程もない。ただ、現れたり消えたりする小道と、もっとゆっくり歩き、もっと注意深く見つめ、そしてもっと耳を傾ける必要があるという感覚だけがあった。周囲の山林の音にも、そしておそらくは、内なる深い場所からの静かな声にも。

山頂への道のり

私たちは小道をたどり、ますます深く鬱蒼とした山腹へと分け入っていった。道はそれほど険しいわけではないが、決して楽ではなかった。長らく忘れ去られたかのような区間もあった。石の表面は青苔に覆われ、腐った落ち葉が厚く積もり、雑草は膝の高さまで伸びていた。前の晩に降った雨で地面は滑りやすく、湿っており、一步一步に多くの注意と慎重さが求められた。時には、緩やかな坂道を通過する際に、道端に生える木の幹に捕まっ

てバランスを取ったり、杖で道を覆い隠す茂みをかき分けたりしなければならなかった。これは冒険的な征服を目的とした登山ではなかったが、山林のほぼ完全な沈黙の中を数時間歩き続けた後には、私とチン・リンが疲労困憊で言葉を失うには十分だった。

太陽が徐々に高く昇り、漂っていた霧を晴らすと、森はゆっくりとその姿を現し始めた。そこには、これまでの出張や旅行ではおそらく一度も目にしなかったであろう多くの光景が広がっていた。それらが格別に壮大だからというわけではなく、おそらく、私が本当に心を留めて観察するのが、これが初めてだったからだろう。高くそびえる古い木々が緑の葉のアーチを作り、青々とした草地の脇では紫色の野花がいくつか静かに咲き、虫の鳴き声が木の葉を揺らす風の音に混じり合っている…それら一つ一つは、それ自体では華麗な美しさを持っているわけではないかもしれないが、不思議なことに、それらは皆で共に、何かとても穏やかなことを囁き合っているかのようにだった。

私たちは、古い木々の木陰にある、青々とした苔で覆われた涼しい大岩のそばで足を止めて休んだ。チン・リンは腰を下ろし、静かに小さなバックパックを肩から降ろ

すと、手で足首をそっとさすった。おそらく先ほどどこかで軽く捻ったのだろう。彼女は一言も不平を言わなかった。ただ静かに周りを見渡し、その視線は遠くの霧深い谷にしばらく留まり、そして不意に、まるで記憶の中から何かとても懐かしいものに再会したかのように、穏やかに微笑んだ。

私は何か言おうとしたが、やめた。周りの空間はあまりに静かで、どんな言葉も余計なものになりかねないと感じた。一枚の黄葉がそっと枝を離れ、風の中で数回くるくると舞い、そして私の足元に静かに舞い降りた。その短い瞬間に、ふと一つの考えが頭をよぎった。自分はこれまで一度も、このように人生の些細なディテールの中に、完全に「存在」したことはなかったな、と。

私たちは再び旅を続けた。道はより急になり、岩肌に沿って曲がりくねっていた。高く登るにつれて風は強くなり、土の湿った匂い、腐った落ち葉の匂い、そして茂みのどこかに隠れているであろう野花の清らかな香りが混じり合って運ばれてきた。私の呼吸は次第に重くなり、心拍数も速くなったが、対照的に、頭は奇妙なほどに明晰で冴え渡っていた。もはや、以前のようにまとわりつくような雑念や日常の心配事はなく、ただ、踏み出す一

歩一歩、打つ心臓の鼓動、そして前方のどこかで聞こえる木の葉のざわめきの、純粋な存在だけがあった。

ある時、チン・リンが道端に危うげに横たわる大きな岩の前で、ふと立ち止まった。彼女はそっと岩の表面に触れた。そこには非常に自然な曲線があり、そのせいで岩全体が、まるで身をかがめてうずくまる巨大な龍の姿のように見えた。彼女は何も言わず、ただ私の方を振り返り、その眼差しにはどこか遠くを見るような色があった。そして再び、前方の深い森へと視線を向けた。その眼差しの中にある何かが、彼女もまたこの場所の特別な空気に引き込まれているのだと私に感じさせた。

道中、私たちは他にも奇妙な形をした岩を数多く見かけた。瞑想するように座る人の姿に似た岩もあれば、小さな石の門のように見える岩もあった。それらはすべて、深く暗い原生林の中で、静かに、物言わずに横たわっていた。人工的な手が加えられた痕跡は一切ない。ただ純粋に、自然の手が、偶然か、あるいは意図的か、独特の形を作り出し、通りかかる者の心を一瞬立ち止まらせ、見入らせるのだった。

それらが、張峰（ジャン・フォン）氏がかつてほのめかした「古の痕跡」なのかどうか、私には確信が持てなかつた。

た。しかし、一つだけ、私がますますはっきりと感じ取っていたことがある。この場所は、非常に異質な種類の静寂を宿しているということだ。それは、人のいない荒涼とした場所の寂しさではない。むしろ、人の心を自然と落ち着かせ、もはや余計なことや無益なことを話したり考えたりする気をなくさせるような、重みのある、特別な静寂だった。

数時間の連続した登りの後、太陽が西に傾き始めた頃、私たちはついに山頂近くの、かなり平坦な土地にたどり着いた。休憩する場所を探そうとしていた矢先、私は前方のそう遠くない場所に、竹と葉で仮設された小さな小屋が、道端の平らな大岩の上にひっそりと建っているのを見つけた。小屋の下では、若い男女のカップルが——おそらく景色を見に来たか、ピクニックに来た地元の若者だろう——座って水を飲み、何か話していた。彼らの隣には、白髪で、清々しい佇まいの老人が、小さな碁盤に向かって一心不乱に座っていた。

私たちは慎重に近づいた。若い女性は私たちに親しげに微笑みかけ、若い男性は依然として興味津々の表情で盤上の形勢を観察していた。老人はそこに座ったまま、奇

妙なほど穏やかで、私たちに視線を上げることもなく、二人の見知らぬ客の出現に全く動じていないようだった。

私は囲碁に詳しくないので、数分間ざっと見ただけで、彼らの邪魔にならないようにその場を去ろうと思った。背を向けて数歩歩き出した時、背後から不意に、低く、そして非常にはっきりとした声が響いた。

「あなたは王明（ワン・ミン）さん、でしょう？」

私は立ち止まり、心臓が無意識のうちに速く鼓動した。振り返ると、老人は依然として私を見ていなかった。彼の手は、ちょうど盤上の一点に黒い碁石をそっと置いたところだった。

私は平静を装い、ゆっくりと答えた。「はい、そうです」

何か用かと尋ねようとしたが、彼は続けた。その声は変わらず抑揚がなかった。

「ある方から、少しの間ここに留まり…あなたに道を指し示すようにと、頼まれていましてな」

彼は視線を上げることなく、再び白い碁石をそっと持ち上げ、盤上に置いた。

しばらくして、自分の手番を終えると、彼は再び口を開いた。その口調は、まるで事前に念入りに言い聞かされた何かを読み上げるかのように、ゆったりとしていた。

「この小道を、そのまま進みなされ。三叉路に行き当たったら、そこには大きな竹の茂みがある。そこを右に曲がりなさい。さらに一時間ほど行くと、また別の三叉路がある。その時は左に曲がり、あとはまっすぐ進むだけだ。その道の突き当たりに、あなた方が探している場所が見つかるだろう」

私は彼の言葉を一言一句、記憶しようと努めた。道案内は長くはないが、彼が言葉を区切り、一語一語を強調するその話し方から、私はまるで、すべてが事前に手配されていたかのような感覚を覚えた。そこには無理強いもなく、かといって完全な偶然でもない。

一つの考えが私の頭をよぎった。張峰（ジャン・フォン）氏が、この老人に私たちの出現を電話で知らせておいたのだろうか？しかし、すぐに思い出した。この山に深く分け入ってからというもの、私の携帯電話は完全に圏外だったのだ。麓の小さな村々を通過する際に何度か確認したが、微弱な電波の印さえ一つもなかった。チン・リンも、この山岳地帯はまだ通信網が十分に整備されてい

ないと、彼女の知る限りでは言っていた。将来的に地方政府がエコツーリズムの開発を計画しているという噂はかすかに耳にしたものの。

そのことを考えると、私は無意識のうちに背筋を冷たいものが走るのを感じた。もし事前の連絡ではなかったとしたら…この老人はどうして私の名前を知り、そして私がこの場所を探しに来た理由まで知ることができたのだろうか？

チン・リンは私を見た。その眼差しもまた、驚きに満ち、隠しきれない戸惑いを浮かべていた。私たちは何も言わなかったが、二人とも同じことを考えているのが分かった。この旅は、どうやら私たちの当初の予測を遥かに超えた何かへと、私たちを導いているようだ。

隠者との出会い

私たちは、暮を打っていた老人の簡潔な案内に、慎重に従った。大きな竹の茂みがある三叉路を過ぎて右に曲がり、青苔に覆われた滑りやすい緩やかな坂道を一時間近くかけて進んだ。その後、古い竹林の隣にある狭い小道を左に曲がった。夕暮れの黄金色の光が木の葉の間から差し込み始めた時、私たちは不意に、薄い靄と青々とした竹林の向こうに、小さな茅葺き屋根の家が姿を見え隠れさせているのを目にした。それはあまりに簡素で素朴で、注意深く見ていなければ、気づかずに通り過ぎてしまったかもしれない。

軒先の前の土間は、きれいに掃き清められていた。みずみずしい青菜が植えられた数本の畝、たわわに実をつけたゴレンシの木、そして名も知らぬ古い木々の木陰にひっそりとたたずむ、古風な石の井戸があった。この空間は不思議なほど静かで、夕風が竹の葉叢をそっと撫でる、かさかさという音まではっきりと聞こえるほどだった。

家の縁側には、一人の男性が静かに座っていた。彼は着古した土色の粗布の服をまとい、白髪は肩まで長く伸び、銀色の髭もまた胸まで届いていた。その姿は痩せて見えたが、枯れたような、やつれた感じは全くない。むしろ、

閉じられた目と、穏やかで規則正しい呼吸から、内なる力に満ちた生命力と、荘厳な静けさが放たれていた。彼は簡素な莫座の上に背筋を伸ばして座り、両手は膝の上にそっと置かれ、その姿は揺るぎなく、安らかで、まるで時間や周りの世界のあらゆる変動が存在せず、もはや流れていないかのようにだった。

私たちは無意識のうちに足を止め、自然な距離を保った。誰も口を開かなかった。おそらく、この瞬間は何も言う必要はないのだろう。彼の存在そのものが、彼を包む静謐な空気が、この場所全体の空間を特別なものに変えていたからだ。それは人を畏怖させるような荘厳さではなく、人の心を自然と落ち着かせる、深く静かな安らぎだった。

しばらくして、私たちの存在に気づいたかのように、彼はゆっくりと目を開けた。

その目は――澄み渡り、静かで、人々が互いを見る時のような詮索するような、批判的な「視線」ではなく、まるで鏡のように物事を映し出し、そしてそっと下ろされる。それは深く、淵の底にある秋の湖面のようだった。

彼は私を見ると、ほとんど気づかないほどの、ごく軽い笑みを口元に浮かべた。

「あなたは王明（ワン・ミン）さん、でしょう」それは問いではなく、断定だった。

私が反応する間もなく、彼は驚いた様子もなく、変わらず平坦な声で続けた。

「お二人が来ることは分かっていました。先に知らせてくれた者がいましたのでな。しかし実際のところ、その知らせがなくとも、私はすでに知っていました」

その言葉に、私とチン・リンは思わず立ち尽くした。

またしても、あの馴染み深い感覚——東京で、張峰（ジャン・フォン）氏が人々の集まる茶屋で初めて私の名を正しく呼んだ時に訪れたあの感覚。まるで、自分のこれまでの計算や準備が、すべて全く無駄になってしまうかのような感覚。しかし今回は、以前のような驚愕はなかった。私はただ、ゆっくりと静かに頷いただけだった。まるで、私自身の内なる深い場所でも、この出会いがいずれ訪れることを、ただそれがいつなのかは分からなかったが、漠然と知っていたかのように。

「はい、ご挨拶申し上げます」と、私はできるだけ敬意を込めた声で言った。「私は王明（ワン・ミン）と申します。そしてこちらは妻のチン・リンです。私たちは…友

人の張峰 (ジャン・フォン) さんの紹介で、こちらに伺いました」

男性はもう一度静かに頷き、その視線はチン・リンをちらりとかすめた。彼はそれ以上何も尋ねず、ただ穏やかな声で言った。

「縁がなければ、たとえ偶然出会ったとしても、腰を据えて話すことは難しいものです。お二人がここまでたどり着けたのは、あなた方の心に探し求めているものがあるからであり、また、我々の間に、かつて繋がりがあった何らかの根があるからです」

彼はそっと手で、とても優雅な招き入れる仕草をした。

「さあ、家の中へどうぞ。まずはお茶でも一杯。遠路はるばる、お疲れでしょう。何かお尋になりたいことがあれば、どうぞごゆっくり」

私たちは彼の後に続き、小さな家の中へと入った。床は粘土で平らに固められ、清潔だった。床には数枚の蓆が敷かれ、素朴な木製の低い茶卓、そして竹で組まれた簡素な棚に、数冊の古びた本がきちんと並べられているだけだった。電気はない。便利な現代製品もない。私たちがちょうど離れてきた工業化時代の痕跡は、一切なかった。しかし不思議なことに、私は何の不自由も不便も

感じなかった。ここのすべては、まるで必要十分であり、その清潔さと整頓された様子に、私は足を踏み入れるのを少し躊躇したほどだった。

彼は自らの手で、私たちに水を注いでくれた。水は外の石の井戸から汲まれ、古びた濃い色の陶器の水差しに入れられていた。山の湧き水は透き通り、冷たく、はっきりとした味は何もないが、喉を通り過ぎる時、私はまるで何か心に引っかかっていたものが洗い流されたかのような感覚を覚えた。

「わしのこの場所には、普段はあまり人は訪れん」と、私たちが落ち着いた後、彼は言った。「道が陰しいからというわけではない。おそらく、こんな人里離れた辺鄙な場所に、わざわざ訪れる価値のあるものがあるとは、誰も思わんからだろう。来た者もいたが、庭先で少し眺めて、すぐに踵を返していった。軒先までたどり着きながら、結局一言も発することができなかった者もいた」

彼は私に、深い眼差しを向けた。

「あなたには縁がある。だからこそ、ここまで来ることができた。あなたの友人の張峰 (ジャン・フォン) 氏は、そのことをとっくに見抜いていた。そしてわしは…わしは、会うべきだと思う者としか会わんのだ」

私は黙っていた。何かあるものが、私の心の中でとても静かに動き始めているようだった。それは重い扉が、ほんの少しだけ開かれたかのようなようだった。彼が口にした具体的な言葉のせいというよりは、おそらく、彼の話し方、何かを説得したり証明したりしようと全くしないその姿勢のせいだろう。彼の口から出る言葉はどれも穏やかで平坦だったが、まるで私の魂の最も深く、最も静かな場所に、的確に落ちる水滴のようだった。

チン・リンは隣に座り、両手を膝の上でそっと組んでいた。彼女の視線は静かに家の隅々を観察し、そして静かな庭を望む窓枠で止まった。彼女は何も言わなかったが、その顔には、普段とは違う物思いの色が見えた。

しばらくして、水差しの中の水が少なくなった頃、彼は竹林を吹き抜ける風のように軽い声で言った。

「お二人は着いたばかりで、遠路お疲れでしょう。まずは少し休んで、元気を取り戻しなさい。お茶でも淹れて差し上げましょう」

彼は立ち上がり、軽く、ゆっくりとした足取りで家の隅へと向かった。そこにはまだ熾火の残る小さな囲炉裏があり、彼は囲炉裏の上に置かれた別の陶器の急須から、ゆっくりと湯を注いだ。素朴で清らかな茶の香りが、山

の午後の澄んだ涼しい空気の中に、穏やかに広がり始めた。

私たちは、誰に言われるでもなく、また誰もこの瞬間に口を開こうとも思わず、静かに座っていた。彼の落ち着いた、急ぐことのないそのリズムの中に、私の心の中のあらゆる思考や動揺を、一時的に後退させる何かがあるかのような感覚があった。

彼が熱いお茶を私の前に置いた時、彼はもう一度私をそっと見て言った。

「もしお二人が、お仕事でそれほどお忙しくないのであれば…どうぞ自由に、ここに数日滞在なさってください。このような静かな場所は、騒がしく忙しい生活に慣れすぎた方々には、きっと良いことだと信じております」

私は感謝を述べようか、何か尋ねようかとしたが、やめた。この時の空間と時間は、あまりにも穏やかで、深く澄み渡っていた。私はただそこに、チン・リンと共に座り、彼が私の茶杯に湯を注ぎ足すのを、静かに待っていた。

隠者との対話

空は次第に夜の帳に包まれ始めていた。晴れ渡った一日の最後の光が、軒先の青々とした竹林の上でゆっくりと消えていく。隠者はゆったりと古いランプに油を注ぎ足し、そしてまた新しい薬缶を囲炉裏の火にかけた。私たちは変わらず小さな木の卓を囲んでいた。簡素な家の中だが、不思議な温かみがあった。空間は完全に静まり返り、ただ庭のどこかで虫の音が鳴き始め、そして年季の入った陶器の薬缶の中で湯が沸く、ぱちぱちという規則正しい音だけが聞こえていた。

私とチン・リンは、どちらも急いで問いを重ねようとはしなかった。まるで、この場所の静かで荘厳な空気そのものが、あらゆる問いは、いずれその然るべき時に訪れるのだと、私たちに教えてくれているかのようだった。

長い沈黙の後、ただお茶を注ぐ微かな音だけが聞こえる中、私はできるだけ自然な声で、そっと口を開いた。

「老師、私は元々、実証科学こそが全ての知識、全ての真理の根幹であると考えている世界で生きてきました。しかし、正直に申しますと、東京で偶然体験したこと、そし

て張峰 (ジャン・フォン) 氏が示唆してくださったこと…さらにはこの場所の特別な空気…そのすべてが、私に多くのことを考え直させています。もっと深く理解したいのです——古の修煉の道とはどのようなものだったのか、そして、何が人々をその道に身を投じ、生涯を捧げるまでにさせたのかを」

隠者は穏やかに微笑み、その手は温かい茶杯を優しく回していた。「修煉というのはな、王 (ワン) さん、実はそれほど目新しいものでも、縁遠いものでもない。それは遥か昔からこの世に存在しておったのだ。我々のアジアだけでなく、この地球上にかつて現れ、そして消えていった多くの文明の中にもな。外的な表現形式は異なるかもしれないが、全ての真の修煉の道の核心は、みな同じじゃ。それは、自らの最も善良で、根源的な本性へと立ち返り、一步一步、人の世の迷いと苦しみから抜け出していく旅路なのだ」

彼は、古の人々が自らを修めるために選んだ様々な道について、ゆっくりと語った。寺院や深い山の静寂を求める者もいれば、人生の喧騒の真っ只中で心性を練磨する道を選ぶ者もいた。人それぞれに方法は異なるかもしれ

んが、重要なのは、その心が真に善良さと、気高さへと向いているかどうかだと、彼は言った。

「我々が生きているこの宇宙はな、肉眼で見えるほど単純なものではない。無数の異なる空間の層があり、それらは目に見えないエネルギーの波のように、互いに重なり合い、貫き合っておる。我々人間の生命もまた同じじゃ。単にこの物質的な肉体だけでなく、もっと微細な、別の部分がある。それを精神と呼ぶことも、魂と呼ぶことも、あるいは元神と呼ぶこともできる。呼び名は、人それぞれの、文化それぞれの理解によって異なる。わしが見るところ、あなた方の現代科学は、それらの事柄の、ごく表面的な一部分を観察し、研究しているに過ぎん」

彼はそっと私の方を向き、その眼差しは優しいままだが、名状しがたい深みを帯びていた。

「あなたは医学を研究する者だ。では、自問したことはあるかね。恐怖や、信愛といった感情、あるいは心からの慰めの言葉…それらは一体、人の体のどこに存在するのかと？」

私はその不意の問いに、思わず言葉を失った。

彼は私の具体的な答えを待つでもなく、続けた。

「心臓は感情をしまっておく場所ではない。脳もまた、

新たな考えを一つ持ったからといって、少しも重くなったりはせん。しかし、まさにその目に見えず、掴むことも、測ることもできぬものこそが、人の物質的な体全体を支配し、動かしておるのだ」

彼は再び私の茶杯に茶を注ぎ足した。その声は変わらず抑揚がなかった。

「今の世の人は、目に見え、機械で測定できるものばかりを信じる。しかし、真に生命を、生けるものを創り出しておるものは…常に姿を隠し、人が懸命に打ち立てようとする、あらゆる公式や法則の外にあるのだ」

私は手の中の温かい茶杯を静かに見つめた。薄い湯気が立ち上り、私自身にも理由の分からない、指先の微かな震えに合わせて、そっと揺れていた。

彼は、温かい声で続けた。

「古の修煉法ではな、『業力(ごうりき)』と呼ばれる概念がしばしば語られる。それは単に道德や善悪に属する概念ではない。実のところ、それは一種の微細で、目に見えない物質なのだ。それは、人が過去の無数の生涯において、一つ一つの行い、思い、言葉を通して自ら生み出し、蓄積してきたものじゃ。その物質は異なる空間に存在し、肉眼では見えんが、病や不運、不幸を引き起こ

し、さらには良くない性格や、魂の歪みさえも生み出すことがある。真の修煉の目的の、重要な一部分は、まさにその業力を消し去り、自らの魂を日増しに清らかで、軽やかなものにしていくことにある」

「東京の張峰 (ジャン・フォン) さんも、そのことについて少しだけ触れていました…」私は、バラバラになったパズルのピースを繋ぎ合わせようとするかのように、呟いた。

隠者は静かに頷いた。

「あなたは実に縁のある方だ。誰もがこれらの話を聞いてすぐに理解できるわけではないし、理解したからといってすぐに信じられるわけでもない。しかし、真に気高い生き方を知り、常に思考と行動において善なるものを目指す者であれば、たとえその者が『修煉』という二文字を知らずとも、その生命は、実のところ、すでによりき変化を始めているのだ」

チン・リンは私の隣で静かに座ったまま、その視線は古びた木の卓の表面にそっと落とされていた。彼女は非常に注意深く耳を傾け、一言も口を挟まなかった。時折、彼女がごく僅かに頷くのが見えた。まるで、聞いたばかりの、おそらくは非常に目新しいが、同時に彼女にとっ

てはどこか馴染み深い事柄の前で、心の平衡を保とうとしているかのようだった。

「では、私たちがここまで登ってくる途中で見たあの痕跡——奇妙な形をした岩や、ぼんやりとした刻み目…あれらは、古の修煉法と何か関係があるのでしょうか？」
私は、山腹で見かけた異様な姿の岩々を思い出し、尋ねた。

「そうである可能性は高いな」と彼は穏やかな声で答えた。「遙か昔、人々がまだ純朴さを保っていた時代には、天地宇宙の微細なエネルギーの流れを感じ取ることができた。彼らは、自らが会得したこと、この世界に対する理解を、刻み記そうと努めた。しかし、年月が経つにつれ、それらの真実の理解は次第に失われ、後の世の人々に忘れ去られてしまった。今、人々がそれらの岩を見ても、ただの石としか見えん。その背後に、かつて秘められていた深遠な事柄を感じ取れる者は、もはやほとんどおらんのだ」

確固たる断定も、完全にきっぱりとした答えもなかった。私はまだ、何も付け加えてはいなかった。今の私の頭の中では、非常に多くの考えや概念がぶつかり合っていた。それは是非を争う議論ではなく、まるでそれらが、ゆっ

くりと落ち、沈殿することができるような、何らかの隙間、何らかの足がかりを探しているかのようだった。

外では、竹林からの風が再びそっと吹き寄せ、夜の山林の冷気を運んできた。卓の上のランプの光が微かに揺れる。隠者はゆっくりと立ち上がり、囲炉裏のそばへと歩み寄り、乾いた薪を数本くべた。

「冷えてきたな」と彼は、変わらず優しい声で言った。

「今夜は、山の月がさぞ明るかろう」

月夜と奇妙な客

月は高く昇っていた。山の夜空は一点の雲もなく澄み渡り、銀色の幻想的な月光が、軒先の前の小さな土間に柔らかな光の層を広げていた。

隠者は茶卓の上にもう一つ小さなランプを置いた。ランプの温かい黄金色の光が、外の月光と溶け合う。彼は再びゆっくりと新しいお茶を淹れ、そして穏やかな声でそっと言った。

「この山の中にはな、普段はわし一人きりでの。ご夫妻

にもし差し支えなければ、魂が清らかになるまで、もう数日、ご自由にここに滞在なさるといい。ここには何の決まった予定もないし、わしにも忙しい用事などない」

彼は微かに微笑み、そして私の方を向いた。

「今宵、王（ワン）さんは一局、いかがかな？ 象棋（シャンチー）でも囲碁でも、わしは少しは打てる」

私が返事をする間もなく、彼はふと動きを止め、夜風にさざめく竹林の方へと視線を上げた。

「おや、道友が一人…どうやら訪ねてくるようだ」

私とチン・リンが彼の意図を理解する前に、竹林の向こうに隠れた小道から、すらりとした人影が不意に現れた。その人物は髪を短く刈り込み、その足取りは奇妙なほどに軽やかだった。その動きには、私がこれまで見たことのない、ある種の優雅さがあった。

その人物が近づき、私たちから十数歩の距離になった時、私は信じられない光景に不意に気づき、愕然とした。その人物は、飛んでいるかのように見えたのだ！

高く飛び上がるのではなく、地面から手のひら一つ分ほどの高さを、ただ滑るように進んでいる。しかし、それは明らかに空中を滑空していた。彼のかかとは、地面の

乾いた落ち葉に触れることもなく、その影もまた、月光の下の私たちの影のようにはっきりと映ってはいない。すべてが私の目の前で繰り広げられた。あまりにも現実的で、あまりにも明白でありながら、同時に、私の常識を遥かに超えた、あまりにも非合理的な光景だった。

チン・リンは無意識のうちに、私の腕を強く握りしめた。私たち二人とも、この信じがたい光景の一瞬たりとも見逃すまいと、息をのんでいるのが分かった。

隠者はゆっくりと立ち上がり、古風な作法で胸の前で両手を合わせた。

「劉雲（リウ・ユン）道友、お見えになったか」

奇妙な客もまた、手を合わせて応えると、さらに近づいてきた。この時、彼の足取りは完全に普通に帰り、他の人々と同じように地面に触れていた。彼は四十歳を少し過ぎた頃で、シンプルな薄灰色の布の服をまとい、足には柔らかい布製の靴を履いていた。その体つきは非常にしなやかで頑健そうに見え、肌は常に戸外で働く者のように日焼けしており、その目は鋭く、輝いていた。

隠者は私たちの方を向き、自然な様子で紹介した。

「こちらは劉雲（リウ・ユン）、わしの友人だ。彼は普段、

麓の町で暮らし、自由業を営んでおる。時折、こうしてわしを訪ねてくるのだ。今回上がってきたのは…おそらく、何か渡したいものでもあるのだろう」

劉雲（リウ・ユン）は微笑み、私たちに会釈すると、丁寧に包まれた小さな布包みを茶卓の上に置いた。

「はい、兄者。麓の仲間たちが、この数冊の本を新たに印刷しまして。兄者ならお気に召すかと思い、一冊お持ちしました」

私の視線はもはやその本の包みではなく、先ほどの彼の現れ方に、心はまだ混乱していた。彼ら三人の間で交わされた、ごく穏やかな会話の後、私はもはや好奇心を抑えることができず、思い切って尋ねた。

「劉雲（リウ・ユン）さん…失礼ですが、一つお伺いしてもよろしいでしょうか？あなたは先ほど…本当に飛ぶことができたのですか？…そして、もしそうだとしたら、普段からその方法で仕事に行かれたりするのですか？それとも、このような特別な、人気のない場所に来る時にだけ、そうされるのですか？」

劉雲（リウ・ユン）は、隠すところのない、爽快な笑い声を上げた。

「毎日、他の人たちと同じように、車やバイクに乗って

いますよ、王（ワン）さん。これについては…」彼は静かに首を振った。「…気ままに使えるものではありません。天理がそれを許さないのです。本当に静かで、常人がおらず、社会の秩序を乱すことのない場所で、ごく稀に少しだけ使う程度です」

彼はお茶を一口すすると、ゆっくりと立ち上がった。

「さて、私は今夜のうちに行かねばなりません。麓の町にまだ片付けねばならぬ用事が少しありますので。お忙しい時に、きっとまたお会いする機会があるでしょう」

彼は隠者と私たちに軽く会釈すると、来た時と同じように、静かに、そして神秘的に去っていき、その姿はすぐに山林の夜の闇に溶け込んでいった。

小さな家の中の空気は、再びもとの静けさに戻った。卓の上のランプの炎が静かに揺らめき、物思いに沈む顔々を照らし出していた。

チン・リンが、まるで何かを壊すのを恐れるかのように、そっと囁いた。

「私…あんなふうに、本当に飛べる人を、今まで一度も見ることがないわ」

私もただ黙っているしかなかった。私たち二人はまだそこに、呆然と座り、目の当たりにしたばかりの出来事を消化しようと努めていたが、それを自分の認識のどこに位置づけてよいのか、まだ分からなかった。

隠者は、劉雲（リウ・ユン）が持ってきた本を静かに閉じ、卓の脇に置いた。

「ただ外の世界を懸命に探し求めても、真の姿が見えるとは限らんのだ」と彼は、変わらず穏やかで、どこか遠くを見るような声で言った。「時には、ただ静かに座り、心を落ち着かせるだけで、自ずと別の扉が開かれることもある」

私たちは、さらに三日間、隠者の家に滞在した。その日々は、実に素朴に過ぎていった。朝には、彼と共に近くの丘へ登り、いくつかの薬草を摘むこともあった。昼には、軒先の土間で一緒に日向ぼっこをした。夜には、温かいお茶を囲み、静かに月が昇るのを眺めた。彼は多くを語らず、高尚な説法をすることもなかった。しかし、彼が語る物語、彼が口にする言葉は、ごく簡素でありながら、しばしば私に丸一日、時にはその後何日も考えさせるものだった。ある日には、私たち三人が何時間もただ黙って座り、誰も何も尋ねず、彼も何も言わないこと

もあった。しかし不思議なことに、まさにその静寂の瞬間に、私がかつて切に尋ねたかったこと、私を悩ませていた疑問が、次第に重要でなくなり、もはや具体的な答えを必要としなくなっていくのだった。

三日目、私が身の回りのものを片付け、山を下りる準備をしていた時、彼は風がそよぐように穏やかな声で、そっと私に言った。

「麓には、あなたを待っている別の者がおる。この旅の次の扉は…あなたがそこに足を踏み入れた時、自ずと開かれるだろう」

私は彼の意図を完全には理解できなかったが、それ以上何も聞き返さなかった。その時、私がただ一つ分かっていたことは、この場所で過ごした短い日々は、その大半が沈黙の中であったが、私の内に何か非常に新しく、非常に異なるものを、確かに開いてくれたということだった。それは、私たちがここに来た最初の夜の、あの澄み切った月光のようだった。決して騒がしくも、眩しくもないが、まだぼんやりとして、未知の事柄に満ちた前方の道を照らすには、十分な光だった。

奇遇の終わりと、続く旅路

空はまだ夜が明けきらぬ時間だった。薄い雲の帯が、遠くの山々の頂をゆっくりと横切っていく。清らかな朝の光が、軒先の前の土間に柔らかな銀灰色の光を落としていた。小さな台所からは、囲炉裏の火にかけられた湯が沸く、か細く、規則正しい音が聞こえてくる。隠者は他の朝と変わらず、ゆったりと火を熾し、新しいお茶の準備をしていた。見送りの儀式もなく、別れの言葉も交わされなかった。

私とチン・リンは、わずかな荷物を静かにまとめた。この場所に来て、いつの間にか三日が経っていた。初めは、午後に一度彼を訪ねるだけのつもりだったが、結局、私たち二人とも立ち去ることを言い出さず、そうして、奇妙なほどの静寂と平穏の中で、日々は過ぎていった。毎日、隠者が行うのは、ごく質素で、日常的な仕事だけだった。ある時は近くの山腹へ登り、いくつかの山野草を摘んで帰り、またある時は、囲炉裏のそばで一心に薬を煎じている姿が見られた。静かに火を熾し、お茶を淹れているだけの時もあった。彼はほとんど何も説法せず、

自ら進んで何かを語ることもなかった。しかし不思議なことに、まさにそのほぼ完全な沈黙の中で、私たちは、おそらくどんな言葉でも完全には表現できないであろう、多くのことを感じ取っていた。

ある日の午後、私が彼の裏庭で、薬草を筵に広げて干すのを手伝っていた時、彼は不意に、私を見ずに、変わらぬ平坦な声で尋ねた。

「あなたの国では今、人は本当に魂を持つと、まだ信じられているのかね？」

私はふと手を止め、彼に視線を上げた。彼は振り返ることなく、ただ丁寧に、一つまみずつ薬草を竹の筵の上に並べ続けていた。私は、少し躊躇いがちな声で答えた。

「老師、おそらく…そう信じている人はまだ多いと思います。しかし、彼らは魂が実際に何であるかをはっきりと知らず、また、そのことに真に心を留める者も、ほとんどいません」

彼はそれ以上何も言わなかった。しかし、その日の午後から、私は無意識のうちに、自分の周りで起こる些細な出来事や、ごくありふれた音に、より注意を払うようになった。不意に風が吹き、竹の葉でできた軒先をかさかさとして鳴らす時、茶釜の中で湯がくつつと静かに沸く音、

あるいは雲が通り過ぎるたびに土間の地面の陽光の色が変わる様子…それらすべてが、私に何かを語りかけているかのようだった。何かとても古く、とても身近な、そしておそらく、私がずっと以前からうっかり見過ごしてきた何かを。

今朝、私たちが山を下りる準備をすっかり終えた時、隠者は家の中から出てきて、私に楮紙で包まれた小さな包みを渡した。中には、清らかな香りを放つ、乾燥させた山野草が少し入っており、そして数文字が手書きされた小さな紙片があった。

「病を治すためではない。ただ、山林の香りを思い出すために」

私は丁重にそれを受け取り、彼に頭を下げた。彼もまた、静かに頷いて応えた。それ以上、言葉は交わされなかった。

私たちは、その簡素な小さな家を静かに後にした。竹林を抜け、麓へと続く見慣れた小道は、数日前の道と変わらないはずなのに、なぜか、今日の私たち二人の足取りは、どこか違っていているように感じられた。道中、誰も一言も話さなかった。早朝の山の風は、少し湿った冷氣と、雑草の青臭い香りを運んできた。チン・リンは私の隣を

歩き、時折、道端の枯れ枝にそっと手を触れていた。静かな別れの挨拶のように。

麓に近づいた時、私は無意識のうちに振り返った。隠者の小さな茅葺き屋根の家は、今や鬱蒼とした木々の向こうに完全に隠れてしまっていた。しかし、私の心の奥深くには、彼の静かで澄み渡った眼差しの面影と、そして、朝もやの中に溶け込んでいた、あの懐かしいかまどの煙の匂いが、はっきりと残っていた。

谷底から風が吹き上げ、そっと襟元をすり抜け、日常の暮らしの息吹を運んできた。私はバックパックスの肩紐をぐっと引き上げ、そしてもう二度と、振り返ることはなかった。

* * *

第四章： 神秘を解剖する法 医

生と死の狭間の物語

隠者が隠棲する山頂を後にしてからも、私の心にはまだ森の葉と朝霧の香りが残り、言葉では到底表現しきれない神秘的な余韻がどこか漂っているようだった。清らかな空気と山々の絶対的な静寂は、私の心にまとわりついてきた俗世の塵を一時的に洗い流してくれたかのようにだったが、同時に、私が持つ現代医学の知識の宝庫では到底満足な答えを出せない、無数の新たな問いを心に植え付けた。妻のチン・リンは、私のように隠者との深い対

話に直接参加したわけではないが、彼女もまた、この場所の異質な空気と、私たちの常識を遥かに超えた事柄を、少なからず感じ取っていた。彼女がいつもより口数が少なくなり、時折、遠くを見つめるその眼差しに、好奇心と、まだ言葉にならないある種の疑念が秘められているのを、私は見かけた。

私たちは、騒がしく活気のある大都市へ急いで戻ることはしないと決めた。その代わり、麓で別れる前に雇った地元の案内人からの、どこか曖昧な助言に従い、私たちは別の山脈の麓に静かにたたずむ、清溪（せいけい）という名の小さな町を訪れた。この小さな町には、建築様式や景観において、特に凝ったものや際立ったものは何もなかったが、まるで時の慌ただしい歯車がそっと止まったか、あるいは意図的に忘れ去られたかのような、不思議なほどの平穏と静けさをまとっていた。苔むした古風な瓦屋根が、漆喰の匂いがまだ残るいくつかの新築の建物と混在し、石畳の曲がりくねった小道が続き、そしておそらくはその名の通り清溪（せいけい）と呼ばれる小川が、透き通った水をたたえ、穏やかに町の片側を抱くように流れていた。ここの人々もまた、他の場所によく見られる慌ただしさとは異なり、ゆっくりと、悠々と暮らしているように見えた。

私たちは、小川のほとりを望むバルコニー付きの小さな宿を借り、ここで数日間休みながら、これまでの豊かな体験を整理し、旅の次なる方向性を二人で決めようと計画していた。宿の主人は陳（チェン）という姓の老人で、とても温厚で福々しい顔立ちをしており、口数も少ないようだった。そしてまさにその老人から、私たち三人が夕暮れ時に軒先の竹の寝椅子に腰掛けてお茶を飲んでいた時、清溪（せいけい）での最初の奇妙な物語が、私たちのもとへやって来たのだった。

初め、その物語は、陳（チェン）老人の家に遊びに来てお茶を飲んでいた数人の隣人たちの間の、小さな囁きや噂話に過ぎなかった。彼らは、数日前に町で執り行われた、町の外れで生涯を過ごした王（ワン）という名の年老いた大工の葬儀について話していた。もしその後に起こった、あまりにも奇妙な出来事がなければ、その話は特に語るに値するものではなかっただろう。

隣人たちが帰った後、陳（チェン）老人は、私たち夫婦がかなり興味を示しているのに気づき、ゆっくりと自らの手で茶を注ぎ足し、そして落ち着いた様子で事の次第を語り始めた。王（ワン）老人は今年で七十歳を超え、妻に先立たれてからは古い家で一人暮らしをしており、子供

たちは皆、遠くの大都市へ働きに出ていた。数日前の午後、老人は突然、激しい心臓発作に見舞われた。隣人たちが発見し、急いで町の診療所に運んだが、もはや手遅れだった。診療所で働く若い医師は、都会の医学校を卒業して赴任してきたばかりだと聞いたが、入念な検査の後、老人が心停止、呼吸停止、両側瞳孔散大、そして一切の反射消失の状態にあることを確認した。それらはすべて、死の極めて明白な臨床的兆候だった。遠方の省にいる老人の家族にも知らせが届き、彼らは急いで葬儀の準備のために戻る途中だった。

地元の風習に従い、王（ワン）老人の遺体は家族と隣人によって家に運ばれ、きれいに清められ、新しい服に着替えさせられ、母屋の木製ベッドの上に安置された。親族や近隣の人々が最後の別れを告げるためだ。葬儀は翌日執り行われる予定だった。すべてが、葬儀でよく見られる悲嘆にくれた雰囲気の中で、進行しているように見えた。

しかし、最も奇妙なことが起こったのは、その夜の真夜中頃、まさに葬儀を控えたその日のことだった。老人の長男が、揺らめくランプの光と立ち込める線香の煙の中、父の棺のそばで見守っていた時、彼は父の胸が微かに上

下するのを不意に見て、飛び上がらんばかりに驚いた。初めは、疲労と悲しみで幻覚を見たのだろうと思った。しかし、弱々しいランプの光と漂う線香の煙の下で、胸の微弱な動きは、否定しようのないほどはっきりと再び現れた。それだけではない。老人は身じろぎをし、ゆっくりと目を開け、そしてベッドの上で、がばと身を起こしたのだ。その目は大きく見開かれ、まるで非常に長く、深い眠りから覚めたばかりの人のように、当惑した様子で周りを見回していた。

老人の息子がどれほど恐ろしかったかは、言うまでもない。彼は甲高い悲鳴を上げ、庭に飛び出して人々を呼んだ。家に残って葬儀を手伝っていた家族や数人の隣人たちは、慌てて中に駆け込んだ。ほんの一日前に診療所の医師によって死亡が確認されたはずの王（ワン）老人が、今やベッドの上に堂々と座り、紛れもなく生きているのを目の当たりにして、誰もが恐怖に震え、その場に凍りついた。

「そんな…ありえない！」私は思わず声を上げた。長年の医師としての職業的反射が、不意に頭をもたげた。

「仮死状態 (apparent death) だった可能性は？あるいは、診療所の若い医師が誤診したとか？」

陳(チェン)老人はゆっくりと首を振った。

「初めは誰もがそう思いましたよ、教授。王(ワン)老人のご家族は、慌ててあの若い先生を呼び戻しました。先生は駆けつけ、王(ワン)老人がそこに座っているのを見て、血の気も引くほど真っ青になりました。彼は震える手で老人の脈拍、血圧、呼吸を再検査しました…すべての数値があり、弱々しいながらも、明らかに生命の兆候があったのです。若い先生は、どもりながらも全く説明できず、ただ、自分が以前検査した時には、老人は確かに完全に心停止、呼吸停止しており、いかなる生命の兆候もなかった、と主張するばかりでした。彼は老人の死亡診断書まで書いてしまっていたのです」

これまで隣で静かに聞いていたチン・リンが、そっと私の手を握った。彼女もまた、この信じがたい話に引き込まれているのが分かった。彼女は陳(チェン)老人にそっと尋ねた。

「では…老師、王(ワン)老人は『生き返った』後、どうなったのですか？何か覚えていらっしゃるのでしょうか？そして、お体の具合は？」

陳(チェン)老人は静かにため息をつき、その声は小さくなり、視線は家の前の庭の彼方へと向けられた。

「それこそが、この話の中で最も奇妙な点なのです、お嬢さん。王（ワン）老人は確かに生き返りましたが、もはや以前の彼ではありませんでした。彼は家の子供や孫を認識せず、自分が誰で、自分の家がどこなのかも覚えていません。一日中ぼんやりと座っているか、時折家の中を歩き回り、誰も理解できない何かをぶつぶつと呟いています。ある時には、遥か昔に起こった出来事、この町の最高齢の者でさえ聞いたことのないような話を、すらすらと語るのです。普段の彼の目は虚ろで魂が抜けたようですが、時折、どういうわけか、人をぞっとさせるような鋭い光を放つのです」

「身内を認識できない？完全な記憶喪失だと？」私は、合理的な説明を見つけようと、呟いた。「以前の心停止期間中の、長期にわたる脳の酸素不足が原因である可能性は？それが深刻で、回復不能な脳損傷を引き起こしたのかもしれない」これは、現代医学の観点からすれば、最も妥当な説明だろう。

「診療所の若い先生も、そう言っていました」と陳（チェン）老人は頷いた。「しかし、彼でさえ全く説明できないこともあるのです。例えば、王（ワン）老人は元々大工で、文字はかろうじて読め、自分の名前が書ける程度

でした。それなのにここ数日、彼が毛筆を持ち、非常に美しい漢文を書いているのを人々が見たということです。町の識者が言うには、それは修仙の道理か何かについての詩だそうです。またある時には、彼は庭に降る雨を見るだけで、次の雨が降る正確な日時を言い当てたり、隣人の顔色を見るだけで、その人の体内に潜む、本人さえまだ知らない病をすらすらと言い当てたりする。それらのことを、ただ脳損傷のせいだと言って、どうして辻褄が合うように説明できるでしょう？」

陳(チェン) 老人の話は、私をひどく混乱させた。科学者として、長年の経験を持つ医学教授として、私は観察でき、測定でき、実験で証明できるものだけを信じるように訓練されてきた。私にとって死とは、極めて明確で、決定的な生物学的状態だ。それは、血液循環の停止、呼吸の停止、そして最終的には脳死である。専門の医師によって臨床的に死亡が確認された人物が、ほぼ丸一日経ってから「生き返る」というのは、極めて稀な出来事であり、稀な医療過誤か、世界でも極めて珍しい仮死現象に分類されうる。しかし、その後の王(ワン) 老人の精神、知識、そして突如として現れた「予知」能力における奇妙な変化こそが、私の理解の限界を真に試すものだった。通常の脳損傷は、身体機能の低下をもたらすだけであり、

どうしてそのような超越的とも思える能力を「解き放つ」ことができるというのか？

チン・リンは最初から最後まで静かに耳を傾け、その秀麗な眉は思案深く寄せられていた。言語と文化の教授として、彼女はおそらく、古くから中国の民間伝承に伝わる「神霊の憑依」や「借屍還魂（しゃくしかんこん）」（死体を借りて魂を蘇らせる）といった奇妙な物語を連想しているのだろうと、私は推測した。それらは皆、以前は私たち二人とも、古人の豊かな、そしてやや迷信的な想像力の産物としか見ていなかった概念だ。

「それで…今、王（ワン）老人のご様子はどうなのですか？」チン・リンは、好奇心を隠せない声で尋ねた。

「相変わらずですよ。何も変わりありません」と陳（チェン）老人は、少し気の毒そうな声で答えた。「ご家族は今、喜びと心配が入り混じっています。父が奇跡的に生き返ったことは喜びですが、彼が全くの別人になってしまったことは心配なのです。彼らは何人かの祈祷師や、どこかの道士を呼んで見てもらいましたが、誰も何もできませんでした。ある者は老人が『悪霊に取り憑かれた』と言い、またある者は、これは『大いなる福縁』であり、ある修行者の魂が、かつてやり残した事を続けるために

老人の肉体に入ったのだと言いました。もはや、どの道を信じてよいのやら」

老人は少し間を置き、ゆっくりと私たちの茶杯に茶を注ぎ足し、そして以前より少し躊躇いがちな声で続けた。

「私たちのこの小さな町では、奇妙な出来事、生と死の境界が蜘蛛の糸のように儚くなるような出来事が起こるたびに、人々は一人の人物について囁き合います。それが墨老先生（モーラオシェンション）です。人々は、彼が我々凡人の目には到底見えないものまで見通せると噂しています。彼は医者でもなければ、法師や祈祷師でもありません。しかし、人々は彼が特別な目を持ち、常人には見えないもの、特に、生と死の間の極めて儚い境界に関わる神秘的な事柄を見通せると言うのです」

墨老先生（モーラオシェンション）についての紹介は、王（ワン）老人の奇妙な物語の、ほとんど必然的な結果として、ごく自然に私たちにもたらされた。強烈な好奇心が、不意に私の中に湧き上がった。これは、この旅が私たちの目の前に少しずつ広げている、神秘に満ちた絵画の、次なるピースなのだろうか？鋭いメスの刃や、最新の顕微鏡の範囲をも超えて、生と死を見通せる人物？私の科学的な理性は依然として疑念に満ちていたが、私の心は

今、この特別な人物に会いたいと、激しく駆り立てられていた。私は無意識のうちにチン・リンの方を見た。すると、彼女の眼差しにもまた、同じような期待と、切望が輝いているのが見えた。どうやら、私たち二人は、神秘に満ちた東洋の、さらなる秘密への扉が、再び開かれようとしているのを、漠然と感じ取っているようだった。

墨老先生（モーラオシェンション）との出会い

翌朝早く、抑えきれない好奇心に駆られ、私とチン・リンは、昨夜陳（チェン）老人が口にした墨老先生（モーラオシェンション）を訪ねてみることにした。宿の主人と、町で慎重に尋ねた数人の住民からの、どこか曖昧な案内に従うと、その先生の住まいは、よくある賑やかな住宅街ではなく、町の外れ、長らく使われていない古い墓地の近くにあるという。そこは木々が鬱蒼と生い茂り、空気は常に他の場所よりも静まり返り、ひっそりとしていた。そこへ続く道は、時を経てすり減った石畳の小道で、でこぼこで湿っぽく、まるで日常の喧騒から切り離され

た別世界の入り口のようなだった。苔むした石壁の間を縫うように進むと、私たちは次第に、より静かで古風な空間へと足を踏み入れていった。

しばらく探した後、私たちはついに、小さな木造の家の前に立ち止まった。かなり古びてはいるが、清潔でしっかりとした佇まいのその家は、巨大なガジュマルの木の木陰にひっそりと寄り添っていた。その木の根は、まるで巨大な蟒蛇のように、大地に深く食い込んでいた。看板はなく、ここが誰かの仕事場や診療所であることを示すものは何もない。ただ、濃い茶色の木製の扉が、半開きになっているだけだった。周りの空気は不思議なほど静かだった。それは、近くの墓地の、どこか陰鬱な荒涼とした静けさとは違う。むしろ、目に見えない内なる力を秘めた特別な静けさで、近づく者に無意識のうちに声を潜めさせ、足取りを自然と軽く、穏やかにさせた。

私は手を上げ、そっと三度、木の扉を叩いた。すぐに返事はなかった。私とチン・リンは顔を見合わせ、二人ともその目には少しの躊躇いが浮かんでいた。勝手に入ってもいいのだろうか？あるいは、場所を間違えたのだろうか？ちょうどその時、家の内側から、低く、温かく、そして少ししゃがれた声が不意に響いた。

「入りなされ、鍵はかかっておらん。遠方からの客人が来たというのに、風に吹かれて外に立っていることはない」

その声は大きくはなかったが、奇妙なほどの浸透力を持っていた。まるで、その主が私たちの足音をずっと以前から知っており、この瞬間をただ待って声をかけたかのようだった。私たちはもう一度顔を見合わせ、そして私がそっと扉を押して中に入り、チン・リンがすぐ後ろに続いた。

内部は、私が想像していたような普通の診療所でも、神々を祀る道観でもなかった。それは、古風な書斎と、どこか雑然とした研究室が奇妙に混ざり合ったかのようだった。楮紙を貼った窓から差し込む自然光が、まるで黄金色の絹糸のように優しく、時さえも息をのんで耳を澄ましているかのような静かな空間に、ふわりと舞い降りていた。その光は、天井近くまで届く本棚を照らし出していた。そこには、布張りの古びた古書、丁寧に縛られた竹簡、そして現代的に印刷された資料の束がぎっしりと詰まっていた。素朴な木の机の上には、私がすぐには名前を呼べないような様々な道具が雑然と置かれていた。銅製の人体模型、色も形も様々な石、古風な羅針盤、大

きさの異なるいくつかの虫眼鏡、毛筆、宣紙、そして特に、部屋の隅には場違いに見える一台の顕微鏡があった。古い紙の匂い、墨の匂い、そして何かの乾燥した薬草の香りが混じり合い、どこか荘厳でありながら、神秘的な雰囲気醸し出していた。

部屋の中央に置かれた一番大きな机の後ろ、入り口の真正面に、一人の男性が座っていた。彼はそれほど年老いては見えず、おそらく六十代半ばといったところだろうが、その髪は真っ白で、簡素な簪でうなじにきちんとまとめられていた。彼は藍色の粗布の服を着ており、その様式もまた非常に質素だったが、どこか俗世離れした、非凡な雰囲気を放っていた。背は高くなく、むしろ小柄な方だったが、その目は奇妙なほどに鋭く、輝いていた。私たちが中に入ると、彼は顔を上げた。その視線は私とチン・リンを素早く捉え、それは私たちの外見だけに留まらない、非常に深い眼差しだった。

「お二人は、わしに何か用かな？」彼は、最初と同じ、低く温かく、そして少ししゃがれた声で尋ねた。

私は一度、軽く咳払いをし、科学者としての冷静さと自制心を保とうと努めたが、正直なところ、この人物の風格と、この特別な空間に、少なからず圧倒されていた。

「はい、先生。私は王明 (ワン・ミン) と申します。こちらは妻のチン・リンです。私たちはアメリカから、観光と、伝統文化を学ぶために参りました。町の方から、先生のことを偶然お聞きしまして…」

彼は微かに微笑んだ。それはとても穏やかな笑みだったが、私たちがなぜここまで来たのか、その理由をすでに見抜いているかのようなだった。

「町の人々は、わしをただ墨先生 (モーシェンション) と呼んでおるだけじゃ。お二人が耳にしたかもしれん『神秘の法医』という呼び名も、実のところ、彼らが常識では解明できぬ事柄に遭遇した時の、冗談のようなものよ。わしはただ、人の生命がどのように機能するのか、それがはっきりと外に現れる時も、目に見えない領域へと隠れていく時も、その仕組みに好奇心を抱く一人の人間に過ぎん」

彼が「生命」という言葉を使い、その「隠れていく」様について語ったことに、私は特に注意を引かれた。それは、医師が体の生物学的機能について語る普通の話し方とは違い、より深く、哲学的な含意を帯びているように思えた。

「先生、あなた様が『隠れていく』とおっしゃったのは…それは、死についてのことでしょうか？」チン・リンが不意に問いかけた。文化と言語を研究する者としての生来の好奇心が、彼女の最初の疑念を上回ったようだった。

墨先生（モーシェンション）はチン・リンを見た。その目には、一瞬、称賛の色が浮かんた。

「あなたの言うことも、一理ある。世の人々はそれを死と呼ぶ。しかし、『死』とは本当に完全な終わり、永遠の消滅なのだろうか？あるいは、それは単に生命の状態が変化すること、別の扉が開かれたり閉じられたりすることに過ぎないのではないか？」彼は少し間を置き、そして私の目をまっすぐに見つめた。「王（ワン）教授は医療の分野におられる。きっと、多くの人々の最期に立ち会ってこられたことだろう。では、あなたの経験をもって、定義してみてください。何をもって、『死』と呼ぶのか？」

その不意で、直接的な問いに、私は一瞬言葉を失った。私は、自分がいつも教えている標準的な医学的定義——心臓の活動停止、呼吸停止、脳死、基本的な生命機能の喪失——を述べようとし始めた。しかし、私が話してい

る間も、墨先生（モーシェンション）の眼差しは、それらすべての科学的な言葉や専門用語を、見透かしているかのようにだった。

「それらはすべて、外的な現れ、あなた方の道具や機械が、この目に見える肉体の上で測定できる兆候に過ぎん」と、私が説明を終えた後、彼はゆっくりと言った。「しかし、この肉体を実際に活動させていた『何か』、意識や感情、そして我々一人一人の中に絶えず流れる思考を生み出していた『何か』…では、それらの生物学的兆候が停止した時、その『何か』はどこへ行ったのか？それは本当に、煙や霧のように無に帰してしまうのだろうか？」

私は完全に沈黙した。これこそが核心的な問い、我々の現代科学が答えを見つけようと日夜格闘している深淵であり、物質と意識、純粋な生物学と、精神的な生とでも呼べるものの間の、極めて儚い境界線だった。

「わしは、教授のようにメスや顕微鏡は使わん」と墨先生（モーシェンション）は続け、机の上に置かれた奇妙な道具の数々を、そっと指差した。「わしには、別の道具、別の『見る』方法がある。微細なエネルギーの流れを見る。古の者が『魂』や『神識』と呼んだ、肉体を離れた

後に残される痕跡を見る。そして、ある人間の生あるいは死という出来事へと、静かに導いた因果の繋がりを見るのだ」

「エネルギー？魂ですか？」私は無意識のうちにその二つの言葉を繰り返した。それらは、私が普段使う科学の辞書にはない言葉だった。「先生、あなたは、そのようなものの存在を、本当に信じておられるのですか？」

彼は私の問いに直接答えず、ただ、どこか神秘的な笑みを微かに浮かべた。

「わしが信じるか信じないかは、実のところ、それが実際に存在し、それ自身の法則に従って機能しているかどうかということほど、重要ではないのだよ、教授。外の風のようなものじゃ。我々はその姿を見ることはできんが、それがもたらす涼しさを感じ、それが木々や水面に及ぼす強い影響を見ることができる。肉眼では見えず、機械では測定できぬものもあるが、それはそれが存在しないという意味ではない」

彼はゆっくりと立ち上がり、窓辺へと歩み寄り、遠くの古い墓地の、静かでぼんやりとした空間を見つめた。

「お二人がここを訪ねてきたのは、きっと、町の外れの王（ワン）という大工の老人の話を聞いたからだろう？」

彼の問いは、答えを必要としなかった。明らかに、彼はすべてを予期していた。

「はい、その通りです」と私は正直に認めた。「私たちは、彼に起こったことを、医学の常識では全く説明できません。医師によって完全に死亡が確認された人物が、生き返り、そしてその後、全くの別人になってしまうなど…」

墨先生（モーシェンション）は振り返った。その眼差しは今、以前よりもさらに遠く、深く見えた。

「それは実に、興味深い症例じゃ」と彼は静かに言った。「人々が『生』と『死』と呼ぶものの境界が、我々が思うよりもずっと儚く、複雑であることを示す、良い典型例だ。それは、電気のスイッチを入れたり切ったりするほど単純なものではない。それは、幻想的な回転扉のようなものじゃ。そこでは、それぞれの生命が、その心に抱える業の重荷や、善良さの光に応じて、全く異なる道へと導かれる。それは、我々常人には到底認識できぬ、無数の要因によって、様々な道へと通じる回転扉のようなものなのだ」

彼は、茶卓の近くに置かれた簡素な木の椅子に座るよう、私たちにそっと合図した。

「もしお二人が本当に、もっと知りたいと望むなら、わしがいくつかの私見を分かち合うこともできよう。しかし、これらは現代科学の書物には見いだせぬ知識であることを、心に留めておいてください。それは、我々により開かれた視点、単なる分析的な理性だけでなく、心全体で聴く姿勢を要求する」

私とチン・リンは顔を見合わせた。私の中の、科学者としての生来の疑念は依然としてあったが、同時に、好奇心と、私たちが全く異なる知識の世界への半開きの扉の前に立っているという感覚が、それに打ち勝った。この人物、墨老先生（モーシェンション）は、見た目は非常に質素でありながら、すべてを見通す眼差しと、無数の深い含意を秘めた言葉を持つ、明らかに普通の人ではなかった。彼は、肉体的な死因を突き止めるために死体を検死する法医学者のようではなく、むしろ、生と死そのものの、より深い謎を「解剖」する専門家であるかのようだった。私たちは共に静かに頷き、黙って、耳を傾ける準備ができていた。

肉体を超えた視点

墨老先生（モーラオシェンション）は、翡翠色の小さな陶器の茶杯に、ゆっくりと茶を注いでくれた。清らかで優しい茶の香りが空気中に広がり、部屋特有の古い紙と乾燥した薬草の匂いと繊細に溶け合い、静かで、どこか荘厳な感覚を生み出していた。彼はすぐに説明に入ることにはせず、ただ小さな一口茶をすすると、その視線はまるで茶杯から立ち上る薄い湯気の筋を追い、凝縮されて穏やかな言葉となる前に、深い思索の層に沈み込んでいくかのようだった。

「王（ワン）老人に起こったような事を理解するためには」と彼は、以前と同じ低く、ゆっくりとした声で語り始めた。「おそらく、あなた方の現代医学が通常用いる、物理的な肉体という側面にのみ焦点を当てた見方を、一時的に脇に置く必要があるでしょう」

彼は茶杯を木の卓に置き、そして私をまっすぐに見つめた。「王（ワン）教授、わしの理解するところでは、あなた方は通常、人体を非常に複雑な生物学的機械と見なしておられる。そうではありませんかな？心臓は循環ポンプと見なされ、脳はすべての活動を制御する中央処理装

置、そして他の器官はそれぞれ専門化された機能を果たしている。その機械の重要な部品が一つでも活動を停止すれば、その機械は『故障した』、つまり死んだと見なされる」

私は静かに頷いた。それは確かに、現代医学の非常に基本的で、一般的なアプローチだった。

「しかし」と彼は、思案深い眼差しで私を見ながら続けた。「その『機械』を、そもそも最初に起動させたものは何ですか？意識、感情、記憶の流れ、そして個性的な性格といった、目に見えないすべて——それらが単なる細胞や器官の集合体ではなく、真の『人間』を創り上げているわけですが、それを実際に生み出したものは何ですか？あなた方の医学は、それを脳の複雑な機能、無数の化学反応と精巧な神経インパルスの結果と呼ぶかもしれません。しかし、それで果たして、物語のすべてが語られたことになるのでしょうか？」

彼は少し間を置き、その問いが部屋の静かな空気の中に、まるで漂うかのようにさせた。

「古の人々、そして今日なお生命の真の本質を深く探求する道を歩む者たちの視点によれば、この目に見える肉

体の他に、我々一人一人は皆、核心となる精神的な実体を内に秘めておる。人々はそれを、文化や認識の流派に応じて、様々な名で呼ぶ。最も一般的で、想像しやすい呼び名は、おそらく魂 (Soul) でしょう。修煉の道をより深く進む者たちは、それを元神 (Primordial Spirit) と呼ぶかもしれん。それは、真実の自己、生命の最も根源的な部分を指す言葉じゃ。またある時は、その意識や認識の側面を表すために、神識という言葉が使われる。呼び名は異なれど、それらはすべて、目に見えず、微細で、我々が通常理解する意味での物質ではなく、あなた方の科学的な道具では到底測ることのできない部分を指しておる。しかし、それこそが生命の核心であり、各人の独特な自己、過ぎ去った記憶、潜在的な知恵、そして遥か昔の生涯からの深い痕跡を、真に宿している場所なのです」

「魂 (Soul) ? 元神 (Primordial Spirit) ?」 チン・リンはその二つの言葉をそっと繰り返し、その目には明らかな好奇心と興味が輝いていた。「これらの概念は、私も書物や文化資料で読んだことがあります」

墨先生 (モーラオシェンション) は静かに頷いた。「その通りです。もっとも、民間における『魂』という言葉は、

時に世の人々によって、迷信や俗信の殻をあまりにも多く着せられてしまいました。お二人は、こう想像してみてもいいかな。我々の肉体は、目に見える馬車のようなもの。そしてその魂（あるいは元神、神識と呼んでもよい）こそが、その馬車を操る、目に見えない御者なのです。馬車が疲れ果て、古びて、あるいは何らかの理由で停止しなければならなくなった時も、その御者は存在し続け、新たな旅路を、別の馬車で出発するための、適切な機会を待つのです」

私は彼の言葉に従って、想像を巡らせた。この考え方は、実のところ私にとって全く未知のものではなかった。それは、世界の多くの主要な宗教や、古代の哲学流派の中に、常に存在してきたものだ。しかし今日、墨先生（モーラオシェンション）のような、博識で深遠な風格を持つ人物から、冷静に、そして理路整然と説明されると、それは全く異なる重みと、説得力を持っていた。

「では、死とは…この観点から見れば、それは何なのでしょう、先生？」私は問いかけた。

「肉体の死とは」と彼は、変わらず抑揚のない声で答えた。「まさに、魂がその肉体から完全に分離した瞬間じゃ。御者と馬車の繋がりが、永遠に断たれる。その時、

物理的な肉体は、自然の法則に従って、分解の過程を始める。しかし、魂はその意味で『死ぬ』ことはない。それは、その『馬車を駆る』過程で蓄積したすべてを——そして、さらに昔の旅路からのものもすべて——携えて、別の存在状態へと入り、新たな旅を始めるのだ」

彼は私たち二人を注意深く見つめ、そして続けた。「そして、それぞれの魂が携えていく最も重要なものの一つ、それが業力（ごうりき）(Karma) なのです」

「業力 (Karma)?」私は眉をひそめた。この概念は何度か耳にしたことがあり、通常は仏教の教えと結びつけられていた。

「その通り。業力（ごうりき）とはな、最も簡潔に理解するならば、因果の法則の目に見えない流れのことじゃ。そこでは、我々のこの生涯における——あるいは、過ぎ去った生涯におけるものでさえ——一つ一つの思い、言葉、行いが、我々の肉眼では見ることのできない運命の糸を、静かに織り上げておる。善良で、善き行いは、善業（あるいは福德とも呼ばれる）を生み出し、逆に、邪悪で、不正な行いは、悪業（あるいは業障）を生み出す。この業力（ごうりき）は、決して自然に消えることはない。それは蓄積され、各人の魂に固く結びつき、我々がこの

現在の肉体を離れた後でさえも、運命、生活環境、そして我々が将来遭遇するであろう事柄の大部分を決定するのだ」

彼は非常に明晰に、そしてはっきりと説明した。そこには、布教しようとしたり、何らかの信念を私たちに押し付けようとしたりする様子は、微塵もなかった。

「それは目に見えない川のようなものじゃ。我々の一つ一つの行いや思いは、そこに注がれる一滴の水。その川は絶えず流れ続け、善行の甘みと、悪行の苦みを共に運び、遅かれ早かれ、我々は自らが注いだ水の味を、再び味わうことになるのだ」

ここで彼は少し間を置き、そして王（ワン）老人の大工の話に戻った。

「お二人が聞いた王（ワン）老人の大工の件は、実に特別なものじゃ。彼が突然の心臓発作に見舞われ、その後、診療所の医師によって死亡が確認された時、おそらくは、彼の木工としての一生の業力（ごうりき）をすべて携えた、彼の根源的な魂が、実際に、生と死の通常のプロセスに従って、肉体を離れた可能性が高い」

「では、なぜ彼はその後、『生き返る』ことができたのですか？」チン・リンは抑えきれずに、すぐに尋ねた。

「これこそが、この事柄の複雑な点であり、また稀有な点でもある」と墨先生（モーラオシェンション）は言い、その声は少し低くなった。「極めて稀なケースがある。肉体が、魂が去ったばかりで『空っぽ』になったが、肉体自体はまだ分解を始めておらず、そしてまさにその瞬間に、因果の要素、時間、空間、そして業力（ごうりき）の目に見えない流れといった、非常に精巧で複雑な要素が重なり合った時、別の魂が――それは、まだ返し終えていない前世の借りのためかもしれんし、あるいは遥か昔の約束や使命のためかもしれんが――やって来て、空になったばかりのその肉体を、再び引き継ぐことがあるのだ」

私はほとんど呆然としていた。「それはつまり…民間伝承で言うところの、『借屍還魂（しゃくしかんこん）』ということですか？」

「民間での呼び方は、その通りじゃ」と彼は静かに頷き、認めた。「しかし、そのより深い本質は、おそらく依然として業力（ごうりき）と密接に関わっておる。おそらく、その新しい魂は、まさにこの場所で返さねばならぬ、非常に大きな業の借りを抱えているのかもしれない、あるいは、前世で果たせなかった特別な使命があるのかもしれない」

れん。元の持ち主が去ったばかりの肉体を『借りる』ことは、起こりうる可能性ではあるが、それは極めて稀であり、非常に多くの複雑な因果の要素が、同時に重なり合うことを要求する」

「そのことが、王（ワン）老人が生き返った後、まるで全くの別人になったかのように見える理由を説明できるわけですね？」私は、一見完全に非合理的に思えたこの出来事の塊の中に、わずかな論理の光が見え始めたのを感じながら、尋ねた。

「全くその通りである可能性が高い」と墨先生（モーラオシェンション）は頷いた。「新しい魂が入る時、それは自らの記憶、知識、性格、そして業力（ごうりき）のすべてを携えてくる。それは、以前の王（ワン）老人の大工としての一生の記憶は全く持っておらんから、家の子供や孫を認識できないのも、理解できることじゃ。それはまた、遥か昔の前世からの知識や、特別な能力を携えているかもしれん。例えば、古い漢文を読み書きできることや、修道の道理についての詩を作れることなどだ。それはまた、業力（ごうりき）や、前世での修行によってもたらされた、特別な能力を持っているかもしれん。例え

ば、これから起こることを感じ取れたり、他人の体内に潜む病を見通せたりする、といったことじゃ」

彼は静かにため息を一つついた。「しかし、この『体を借りる』という行為は、通常、決して完璧ではありえん。新しい魂と古い肉体との繋がりが、完全に適合しないかもしれない。そのことが、ぼんやりとした状態、正気と狂気の間を行き来するような状態、あるいは、外部の者には到底理解できぬ、奇妙な振る舞いを引き起こすことがある。そして、さらに重要なことは、この魂は依然として、自らが携えてきた業力（ごうりき）全体の支配を受けるだけでなく、この肉体そのものに関連して残された業力（ごうりき）の部分にも、支配されるということじゃ」

墨老先生（モーラオシェンション）の説明は、私の目の前に、この出来事全体を再認識するための、全く異なる扉を開いたかのようなだった。それは、私が知っている死の生物学的兆候を否定するものではなかったが、それに、より深い意味の層、存在の別の次元――すなわち魂と業力（ごうりき）――を付け加えた。この説明は、信じがたいように見えたが、我々の現代医学が全く手も足も出なかった、王（ワン）老人の物語における極めて非合理的な点――奇跡的な「蘇生」と、その後の人格、知識、そし

て特別な能力の完全な変化――を、説明することができた。

私の中の、科学者としての生来の理性は、依然として多くの問いと、これらの事柄の真実性に対する疑念、検証可能な具体的な証拠を求めていたが、この説明が、我々の現代医学では解明できなかった事柄の側面に、触れているようであることは、否定できなかった。

私はチン・リンの方を見た。彼女は注意深く耳を傾け、その目は大きく見開かれ、墨老先生（モーラオシェンション）の方へ向けられていた。彼女の東洋文化と哲学の素養をもってすれば、おそらく、魂と業力（ごうりき）というこれらの概念は、それほど縁遠いものではないだろう。もっとも、これほど生き生きと、そして具体的な事例と結びつけて説明されるのを聞くのは、これが初めてだったかもしれないが。

部屋は再び沈黙に包まれ、ただ茶釜の中で湯がくつくと静かに沸く音と、私たち三人の軽い息遣いだけが聞こえていた。墨老先生（モーラオシェンション）の言葉は、まだ私の心の中で響いていた。それは、完全な説明というよりは、私がこれまで想像したこともなかった、非常

に広大な絵画、一つの世界観の、最初の素描のようだった。

懷疑と開眼の間で

墨老先生（モーラオシェンション）の木造家屋の敷居をまたいだ時、私はまるで全く異なる世界から帰ってきたかのような感覚に襲われた。外の空気は、相変わらず清溪（せいけい）の町外れの静けさを保っていたが、今や万物が、名状しがたい重みを帯びた、目に見えない薄い霧の層に覆われているかのようにだった。ここに来た当初の好奇心、あるいは少しの興奮さえも、完全に消え去り、その代わりに、私とチン・リンの間を、言葉では言い表せないほど濃密な沈黙が支配していた。私たちはでこぼこの石畳の小道を並んで歩いた。二人の靴底で碎ける砂利の音が、まるで完全に覆された内面世界で唯一存在する音であるかのように、やけにはっきりと聞こえた。

私は何も言わず、チン・リンもまた黙っていた。私たち二人とも、あの古い紙と薬草の香りが漂う小さな部屋で

聞き、感じたことすべてを、ゆっくりと消化するための、一人の空間と時間を必要としていた。今の私の頭は、まるで古いドキュメンタリーフィルムのように、墨先生（モーシェンション）の言葉や姿を絶えず繰り返し再生しており、そのフィルムが再生されるたびに、苦悩に満ちた疑問が、心にさらに深く刻み込まれていくかのようにだった。魂？業力（ごうりき）？借屍還魂（しゃくしかんこん）？これらすべての概念は、以前の私にとっては単に奇想小説や民間信仰の研究論文の中に存在するものでしかなかったが、今や、鋭い眼差しと非常に穏やかな風格を持つ一人の男性によって、あたかも自明の理、我々が常に知っている目に見える物理的世界と並行して機能する、目に見えない法則であるかのように、提示されたのだ。

馬鹿げている！私の中の、頑固な理性の部分——長年の厳格な科学研究によって鍛え上げられたその部分——は依然として激しく反発し、私の認識に静かに、しかし力強く侵入してくる懷疑の波に抗うため、最後の城壁を築こうと叫んでいた。具体的な証拠はどこにある？検証可能なデータはどこにある？どうして私が、このような曖昧で、非物質的なものを受け入れられるというのか？私が学び、目撃してきた死とは、明白な生物学的現象であ

り、基本的な生命機能の、不可逆的な終焉だった。私はキャリアの中でそれを何百回と目撃し、数え切れないほどの死亡診断書に署名し、患者の遺族に、具体的で明確な医学用語で説明しなければならなかった。それは知識の基盤であり、何世代にもわたって科学が証明してきた真実だった。

しかし、その時、王（ワン）老人の大工が「生き返った」後の奇妙な変化のイメージが、私の心に鮮明に浮かび上がってきた。それは、否定しようのない挑戦状のようだった。専門の医師によって、ほぼ丸一日、臨床的に死亡が確認された肉体。生涯、土にまみれて働き、基本的な読み書きしかできなかった大工が、突如として「目覚め」、全くの別人へと変貌したのだ。深遠な古の知識を持ち、常人には見えないものを見通す能力を備えて。脳損傷？長期にわたる脳の酸素不足？私が考えつく限りの、ありきたりの医学的説明は、今となってはどこかぎこちなく、弱々しく聞こえる。まるで、大きすぎる体に、あまりにも窮屈な服を無理やり着せようとしているかのようだった。それらは、新たな知識と能力の突然の出現を、完全には説明できなかった。

そして、墨老先生（モーラオシェンション）自身も…。彼は、私が想像していたような占い師や祈祷師とは全く似ていなかった。作り物の神秘的な雰囲気も、空虚で難解な、人を惑わすような言葉もない。ただ、異常なほどの落ち着きと、その目に宿る見通す力、そして、一見荒唐無稽に見える概念を結びつけて、異様な現象を説明するそのやり方には、恐ろしいほどの論理的な脈絡があった。彼は、まるで血管を流れる血液や、脳内の神経インパルスの伝達について語るかのように、自然に魂や業力（ごうりき）について話した。まさにその平然とした態度、誇張も粉飾も必要としないその確信が、私をさらに混乱させ、当惑させた。

私は無意識のうちに手でこめかみをそっと押さえた。自分が常に科学的、客観的であると誇りにしてきた思考の土台そのものが、実は激しく揺さぶられているように感じられた。私が常に十分で、正しいと考えてきた世界観は、実はあまりにも狭く、偏っていたのではないか？我々の現在の研究ツールが、目に見える物質世界しか測定できないというだけで、我々は、我々には理解できない方法で人の運命を静かに支配している、別の現実の層、目に見えない法則の存在を、性急に否定してしまっていたのではないか？数日前の山頂での隠者との出会いは、

私の心に最初の懷疑の種を蒔いた。そして今、墨老先生（モーラオシェンション）は、まるでその種に力強い水を注いだかのようにだった。そのせいで、種は芽吹き、成長を始めざるを得なかった。私は自分が、これまでその存在を小さな、淀んだ水たまりを通してしか知らなかった、広大で神秘的な知識の大洋の前に立っているように感じた。

私はそっとチン・リンに目をやった。彼女はまだ私の隣をゆっくりと歩き、その視線は足元の古風な石畳に落とされているが、彼女の心が今そこにはないことは確かだった。その秀麗な眉は微かに寄せられ、時折、唇を固く結ぶのは、まるで複雑な思考の流れと格闘しているかのようだった。彼女の東洋文化に関する深い知識をもってすれば、これらの事柄を私よりも容易に受け入れられるのだろうか？あるいは、まさにその知識のせいで、彼女はこの事柄をより複雑で、解明しがたいと感じているのだろうか？私は、墨先生（モーシェンション）の家 にいた時の彼女の眼差しを思い出した。初めは好奇心、次に少しの驚き、そして最後には深い物思い。彼女はただ耳で聞いているだけでなく、まるで、聞いたばかりの概念と対峙するために、自身の知識のすべてと、最も繊細な感受性を総動員しているかのようだった。

「何を考えているの、ミン？」

チン・リンの囁くような声が、ついに私たち二人の間の長い沈黙を破った。その声はどこか躊躇いがちで、まるで彼女自身も、どんな答えを聞きたいのか、確信が持てないかのようだった。

私は立ち止まり、彼女の方を向いた。新しい一日の朝の光が、木の葉の間から差し込み始め、彼女の秀麗な顔の上で光の斑点を躍らせていたが、その目に浮かぶ物憂げな表情を、消し去ることはできないようだった。私は深く息を吸い込み、今、心の中で起こっている混乱を表現できる言葉を探そうとした。

「僕も…僕も、本当に分からないんだ、リン」と私は、少し疲れた声で正直に答えた。「それはまるで…まるで、自分が絶対にその正確さを信じていた世界地図全体が、突然真っ白な紙になり、そして僕は、これまで夢にも思わなかった、全く見知らぬ土地、地平線の真ん中に立っているかのようだ。古い地図には全く記されていない、新しい土地、新しい道が、少しずつ現れてきている」

チン・リンは穏やかに、静かに頷いた。その目は私への共感に満ちていたが、彼女自身の戸惑いを隠すことはできなかった。「分かるわ」と彼女は小さく言った。「私

も同じような感覚よ。魂や、業報といった概念は…以前、書物で何度も読んできたし、大抵は民間信仰の一部、あるいは古代の哲学流派のものとして見ていた。でも、墨先生（モーシェンション）が丁寧に説明し、それを王（ワン）老人の話と直接結びつけるのを聞くと…もはやそれは、空論ではなくなるの。それは生き生きとして、具体的で…そして、どこか奇妙に、恐ろしくなる」彼女は少し黙り、そして自分自身に囁くかのように続けた。「まるで、鏡を通り抜けたような気分よ。周りのすべては以前と同じように見えるけれど、その本質は、まるで大きく変わってしまったかのよう」

私たちは再び黙り込んだ。しかし今回は、二人の間の空気は、もはやそれぞれの懷疑によってそれほど重苦しくはなかった。まるで二人とも同じ方向を見つめ、共に、あまりにも大きな何かに直面しているかのような、静かな繋がりがあった。

私たちが小道の出口近く、道が広がり始め、町の日常の慣れ親しんだ音が次第に聞こえてくる場所まで来た時、私の目は偶然、小さな光景を捉えた。苔むした、古びた石壁の上で、一本の華奢な、しかし非常にたくましい野花が、冷たく湿った亀裂を通り抜け、微かな太陽の光に

届こうと、懸命に身を伸ばしていた。それは、あらゆる逆境を乗り越えようとする、不滅の生命力の、静かな証のようだった。その小さな花びらの、儚い青紫色は、灰色の石の背景の上で際立ち、どんな過酷な状況にもかかわらず、生命の極めて力強い *biểu* 現のように見えた。私は無意識のうちに立ち止まり、それをしばらく見つめていた。心の中に、非常に曖昧な考えが湧き上がった。この生命は…本当に、複雑な化学反応と細胞分裂の結果に過ぎないのだろうか？あるいはそれは、ある種の意志、目に見えないエネルギー、常に自らを表現しようとし、常に存在しようと努める、たとえ最も不可能に見える状況下でも、我々が全く予期せぬ方法で、存在しようとする何かではないのか？

私はその不意の考えをチン・リンには言わなかったが、あの小さな野花のイメージと、墨老先生（モーシェンション）の含蓄のある言葉とが、私の心に、まだ長い間、つきまとうであろうと感じていた。

小さな町、清溪（せいけい）の慣れ親しんだ音がよりはっきりと聞こえ始めた時、私は私たちが日常の世界に戻ってきたことを知った。しかし、私の内なる何か、そしておそらくはチン・リンの内なる何かもまた、もはや完全

には以前と同じではなかった。私の中の、科学者としての生来の懐疑心は、依然として強く、理性的だった。しかしその隣で、非常に狭い扉が、確かに半開きになり、私がこれまで考えることさえ敢えてしなかった、可能性の領域へと通じているようだった。存在の本質についての問いは、今や、これまで以上に大きく、そして深遠であるように思えた。

* * *

第五章： 時が止まる町

忘れられた地での十三日間の眠り

墨老先生（モーラオシェンション）との心に深く刻まれる出会い、そして清溪（せいけい）の町での、魂と業力（ごうりき）に関する衝撃的な解釈の後、私とチン・リンは二人とも、真の静寂の時を求める強い衝動を感じていた。隠者の山頂から王（ワン）老人の「借屍還魂（しゃくしかんこん）」の物語に至るまで、立て続けの体験は、私たち二人の思考の基盤を根底から揺さぶっていた。私たちは、打ち砕かれた信念の破片を整理し、目の前に開かれたばかりの無数の大きな問いと向き合うために、時間と、本当に静かな空間を必要としていた。

墨老先生（モーラオシェンション）との最後の会話で、私たちが数日間、静養するための静かな場所を探したいと申し出た時、彼はただ物思いに沈んで窓の外を眺め、そしてどこか上の空で、耳慣れない地名を口にした。「忘憂鎮（ワンヨウジェン）」。彼はその場所について多くを語らず、ただ微かに微笑み、そこでは「時折、ある人々にとっては時間が奇妙に伸縮し、また、世俗の憂いを忘れやすい」と言った。その半ば冗談めいた言葉と、多くの連想を掻き立てる「忘憂」（憂いを忘れる）という名前が、私たちの心に、言葉では言い表せない好奇心を静かに植え付けた。

忘憂鎮（ワンヨウジェン）への道を探すのは、実に容易なことではなかった。それは普通の観光地図には全く載っておらず、近隣の町で尋ねた人々も、どこか人里離れた谷の存在について、非常に曖昧にしか知らなかった。私たちの旅は列車で始まり、次に、古びた地元のバスに乗り換え、曲がりくねった峠道をのろのろと進み、そして最終的に、高い山脈の麓にある、ひっそりとした小さな町で停車した。ここから忘憂（ワンヨウ）へ行くには、地元の若者を雇い、彼の手製の三輪バイクで、でこぼこで険しい未舗装の道を行くしかなかった。

私たちが忘憂（ワンヨウ）の谷の端に着いた時には、空はもう薄暗くなっていた。私とチン・リンは、一日中移動し続けた後で、疲れ果てていた。遠くに見える忘憂鎮（ワンヨウジェン）の風景は、夕霧の中に濃い茶色の瓦屋根が見え隠れし、古風で、どこか隔絶された美しさがあった。案内人の若者は、私たちを町の入り口にある、もてなしの良い地元の家族に紹介してくれた。そこには、道に迷った旅人のために普段用意されている、簡素な小さな部屋があった。

家の主である、中年の夫婦と幼い息子は、山の人特有の見知らぬ客への少しの臆病さを見せながらも、私たちをととても温かく迎えてくれた。彼らはすぐに、白米、茹でた山菜、そして小川の魚の塩辛い煮付けという、質素な夕食を用意してくれた。あまりの疲労に、私とチン・リンはどちらもあまり食べられなかった。夕食の直後、これまでにないほどの、重く、抗いがたい眠気が、突然、私たち二人を襲った。私はただ、頭がくらくらし、まぶたが重く垂れ下がり、そしてすべてが茫漠とした空間に沈んでいくのを、ぼんやりと覚えているだけだった。意識を完全に失う前に頭をよぎった最後の考えは、この空間は本当に静かだ、異常なほどに静かだ、ということだった。

私ははっと目を覚ました。全身が羽のように軽く、まるで非常に深く、安らかな眠りを経たかのように、不思議なほど爽快だった。頭は完全に明晰で、長旅の後のいつもの気だるい朝とは違い、少しの疲れも残っていなかった。私はそっと身じろぎをし、簡素な木の部屋を見渡した。朝の光がドアの隙間から差し込み、床に淡い黄金色の光の筋を落としていた。

隣ではチン・リンも目を覚ましたばかりで、私と同じような表情で、当惑したように周りを見回していた。その顔にはどこか、生き生きとして、不思議なほど晴れやかな様子があった。

「よく眠れたかい？」私はそっと尋ねた。「体が妙にすっきりしているし、頭も冴えている。ほんの少しうたた寝しただけのような感じだ、信じられない！」

チン・リンは頷き、そっと目をこすった。「私もよ。とても軽やか。でも不思議ね、今、とてもはっきりとした、生き生きとした夢を見ていたの」

「夢？」私は驚いた。普段、私は自分の夢をめったに覚えていない。「どんな夢だったんだい？」

「私たち二人が、白い霧に覆われた谷で道に迷っている夢よ」とチン・リンは、まだ少し夢見心地な声で語った。

「そして、とても高い山へ続く小道を見つけるの。その山頂には、反り返った屋根がとても荘厳な、古風なお寺があったわ。中に入ると、たくさんの僧侶が黄色い袈裟を着て、きちんと座って読経していた。重々しいお経の声、鐘と木魚の音が響き渡って…とても穏やかで、とても清らかで、それでいて、どこかとても懐かしい感じがしたの。まるで、以前そこにいたことがあるかのよう」

私はチン・リンの話を聞きながら、心に少しの動揺を感じずにはいられなかった。実を言うと、私もまた、ほとんど全く同じ夢を、細部まではっきりと見ていたのだ。しかし、彼女にそれを話す前に、部屋のドアがそっときしむ音を立てて開いた。

家の女将が、湯気の立つ白粥の椀二つと、簡素な茹で野菜の皿を乗せた小さな盆を運んできた。私たちが起きているのを見ると、彼女は穏やかに微笑んだ。

「ああ、お客様、お目覚めでしたか。どうぞ、温かいお粥でも召し上がってください。さぞお腹が空いたでしょう」

「はい、ありがとうございます」と私は、彼女の心遣いに少し驚きながら言った。「私たちは少し、眠りすぎたようですね。ご迷惑をおかけしました」

女将はただにこやかに笑った。「とんでもない。お二人がよく眠れたのなら、それが一番です。あまりにぐっすり眠っていらっしゃるので、私たちも起こすのをためらったのです」

「ええと、私たち、もうお昼近くまで寝てしまったのでしょうか？」とチン・リンは、陽が高く昇っている窓の外を見ながら尋ねた。

女将は私たちを見ると、その目には少しの躊躇いがあった。そして彼女はゆっくりと言った。

「あの…お二方…信じられないかもしれませんが、今日で、お二人がここに来られてから、十四日目になります」

「じゅ…十四日?!」私とチン・リンは、信じられないという表情で、声をそろえて叫んだ。私は急いで腕時計を見たが、いつからか止まっていた。おそらく、とうに電池が切れたのだろう。チン・リンも慌てて携帯電話を取り出したが、画面は真っ暗で、何の信号もなかった。

「本当…本当ですか？」私はどもりながら尋ね返した。心臓が胸の中で、飛び出さんばかりに激しく鼓動していた。「私たちは…十三日間も、眠り続けていたのですか？」

女将は、奇妙なほど平然とした表情のまま、頷いた。

「はい、その通りです。最初の数日は、お二人が目覚まさないで、私たちも少し心配しました。でも、主人や村の年寄りたちが言うには、昔々、遠方から来た旅人が、同じように長い眠りについたことが、一度や二度あったそうです。ここの山の空気に慣れないからだと言う者もいれば、修行の素質があり、この山の神仏と縁があるからそうなのだと言う者もいました。お二人の呼吸は規則正しく、顔色も良かったので、私たちもあまり邪魔はせず、時折様子を見に来て、唇があまりに乾いている時に、薄いお粥の水分を少し含ませて差し上げる程度でした」

十三日間！十三日間もの昼と夜が、私たちが全く気づかないうちに過ぎ去っていた。それは、まるで短い眠り、束の間の夢のようだった。さらに信じがたいことに、ほぼ何も飲まず食わず（あのわずかなお粥の水分が、体を維持するのに十分なはずがない）で、それほど長い時間

が経ったにもかかわらず、私たちは空腹や疲労、衰弱を全く感じていなかった。それどころか、まるで新しいエネルギーが体に満たされたかのように、不思議なほどの爽快さと、明晰さを感じていた。さらには、トイレに行く必要さえ感じなかった。

私はチン・リンを見た。彼女の顔にもまた、極度の驚愕と、何か言葉では言い表せない感情が入り混じっていた。あの古い寺の夢、荘厳な読経の儀式の夢…それは一体何を意味するのだろうか？そして、過ぎ去った十三日間、私たちは、この深い、無意識の眠りの中で、一体どこにいて、何を体験していたのだろうか？

私の内なる科学者の理性が、これは完全に非合理的であり、私が知るいかなる生物学の法則にも反しており、起こり得ないと叫んでいた。しかし、目の前に現れた真実と、女将の飾りのない、真実味のある言葉が、私にそれを否定させなかった。

忘憂鎮（ワンヨウジェン）。この土地は、どうやら墨老先生（モーラオシェンション）がかつて示唆したことさえも遥かに超える、多くの秘密と、奇跡を秘めているようだった。

時間と老化について異質な体験、あるいは 観念を持つ人々

昨夜は、慣れない場所であることと、それ以上に大きいであろう、昨日から心に残り続ける忘憂鎮（ワンヨウジェン）の非常に異質な時間のリズムの感覚のせいで、どこか浅い眠りの一夜を過ごした後、私とチン・リンは、木製の窓の隙間から最初の朝の光がようやく差し込む頃に目を覚ました。ここの早朝の空気は不思議なほど清らかで、近くの川からのわずかな湿気と、山地特有の土の匂いを運んでくる。この時間帯、他の場所によく見られる喧騒とは全く異なり、忘憂鎮（ワンヨウジェン）はまだほぼ完全な静寂に包まれていた。遠くから聞こえる鳥のさえずりと、川の穏やかなせせらぎだけが、その広大な静けさを破る数少ない音だった。

私たちは階下へ降りた。そこでは、白髪の宿の女将——林（リン）さんという名だと私たちは知っていた——が、軒先の前の小さな土間をゆったりと掃き清めていた。陽が昇り始めているにもかかわらず、彼女の箒さばきはリ

ズミカルで、少しも急ぐ様子がなく、まるで静けさの輪郭を地面に描いているかのようにだった。彼女の髪は雪のように白く、顔には年齢相応のしわが多かったが、その目は澄み渡り、非常に鋭かった。彼女の手の甲には、老人斑が点在してはいたが、私がこれまで見てきた同年代の老人たちのような、乾燥してしわだらけの様子は全くなかった。彼女は軽やかに、優雅に動き、老いによる疲労や重々しさは微塵も感じさせなかった。

「おはようございます、お客様」と、私たちを見ると彼女は穏やかに微笑んだ。その笑みもまた…ここのすべてのように、ゆっくりとしていた。「昨夜はよくお眠りになれましたか？」

「はい、おはようございます。おかげさまで」とチン・リンが答えた。彼女の声もまた、無意識のうちにいつもより優しく、穏やかになっているのに私は気づいた。「この忘憂鎮(ワンヨウジェン)は、本当に平穏ですね」

「平穏でなければなりませんよ」と林(リン)さんは静かに頷き、手は規則正しく箒を動かし続けた。「この場所では、何も急いだり、慌てたりする必要はないのですから」

「おばあさんは、こちらに長くお住まいなのですか？」
私は、その非常に特別な外見と風格を持つ女性への好奇心を隠せずに、思わず尋ねた。

林（リン）さんは箒の手を止め、顔を上げて私を見た。その澄んだ目は、まるで相手の心の奥底まで見通すかのようだった。彼女はすぐには答えず、まるで遙かな記憶の中から何かを探しているかのようだった。「長いですよ」と彼女は静かに言った。その声は、どこか遠い場所から響いてくるかのようだった。「わし自身、この土地で一体いくつの雨季と乾季が過ぎたのか、正確にはもう覚えていないほどに長いです。この忘憂鎮（ワンヨウジェン）ではな、人々は日や月を数える習慣がないのですよ。ただそうやって生きるだけ。日がまた日へと続き、季節がまた季節へと続くのです」

彼女のどこか曖昧な答えに、私は驚きを禁じ得なかった。自分がどれだけ生きたか覚えていない？あるいは、そのことに関心がないのか？それは、時間と人生に対する私たちの通常の観念とは、あまりにもかけ離れていた。彼女は再び微かに微笑んだ。その笑みには、どこか神秘的な色があった。「この場所の時間は、あの川のようなのですよ。ある区間では岩を越えて激しく流れ、またあ

る区間では、穏やかな淀みの中で静かに囁くように流れる。ある場所では空全体を映す鏡のように水が深く、またある場所では、我々の肉眼では見えない流れが、水面下で渦巻いている。時間も、おそらくはそのようなものでしょう。それは決して止まることなく流れ続ける、終わりのない歌のようなものです。重要なのは、その特別な流れを感じ取れるほど、自分が静かになれるかどうか、それだけです」

そう言うと、彼女は再び自分の仕事に戻り、私たちをそこに、とりとめのない思考と共に残した。彼女の言葉は、聞けば非常に単純に聞こえるが、私がまだ完全には掴みきれない、時間に関する深い哲学を秘めているかのようだった。

林(リン)さん自身が用意してくれた、とろとろに煮込まれた白粥と、胡麻塩でいただく数種類の茹でた山菜だけの質素な朝食の後、私たちは、ここの人々の生活をより詳しく観察するために、町を散策することにした。そして、この場所では時間がゆっくりと流れているかのような感覚は、私の心の中でますます明確になっていった。道で出会うすべての人々――軒先で暖かな日差しを浴びる老人たち、背中に赤ん坊を負って早朝の市場へ向かう

女性たち、あるいは竹の垣根を修理したり、茅葺き屋根を葺き替えたりしている男たちまで――彼ら全員に、一つの共通した風格があった。それは、ゆったりとして、落ち着いており、そして人生のいかなるプレッシャーにも急かされている様子が全くない、ということだった。

私たちは、川の支流のほとりにひっそりとたたずむ、小さな陶芸工房の前で、かなり長い間立ち止まった。中では、五十歳くらいに見える中年の男性が、古い轆轤の前に一心に座り、その両手は、赤褐色の粘土の塊を優しく撫で、形作っていた。彼の動きは非常に集中的で、緻密でありながら、とてもゆったりとして、自由なリズムを持っていた。まるで、彼の一つ一つの土の撫で方が、天地の生命の脈動と調和した、ゆっくりとした、規則正しい呼吸であるかのようにだった。彼の巧みな手の下で徐々に形作られていく壺は、非常に素朴で、簡素でありながら、とても調和の取れた、均整の取れた美しさを持っていた。彼の周りには、完成品や、まだ制作途中の他の無数の陶器が、様々な大きさと形で置かれていた。それらはすべて非常に独特のスタイルを持ち、私たちがこれまで見てきたいかなる陶器とも、全く似ていなかった。

私たちが入り口でためらいがちに眺めているのに気づくと、彼は顔を上げ、とても穏やかな笑みを浮かべた。「お二人は、遠方から来られたお客様ですか？」

「はい、アメリカから参りました」と私は答えた。「素晴らしい陶器ですね。この仕事は、きっと大変な忍耐を要するのでしょうか」

彼はからからと笑った。その笑みは、目尻に深いしわを刻んだが、その目はとても輝いていた。「忍耐、ですか？わしは、そうは思いませんな。ただ、その自然さに従うだけです。土がどのような形になりたいか、それに合わせて手が動くだけ。作品を早く仕上げるか、遅く仕上げるかは、その壺が、それ自身の『魂』を持つかどうかということほど、重要ではありません」

私は、棚に丁重に置かれていた、翡翠色の美しい壺を指差した。「この壺は、さぞかし長い時間をかけてお作りになったのでしょうか？」

彼は私の指差す方向を見た。その眼差しは、まるで自分の精神的な子供を見るかのように、愛情に満ちていた。「これを作るのにかった時間、ですか？」彼は再び笑い、そして静かに首を振った。「正直なところ、わしも

もう覚えていませんな。ほんの数週間だったかもしれんし、あるいは数ヶ月かかったかもしれん。自分が本当に好きなことをしている時、それに完全に没頭している時、時間もまた、それに合わせて止まるかのようです。ただ、始まりと終わりだけが分かる。その間の過程は、まるで絶え間ない流れのようで、わざわざ測ったり、計算したりする必要などないのです」

文化と芸術に携わる者としての生来の感受性を持つチン・リンは、これらの独特な陶器に、非常に興味を示した。彼女は、この地方特有の陶芸技術、彼が使っている粘土の産地、そして壺に施された装飾文様の意味について、彼に尋ね始めた。彼は彼女のすべての質問に快く答えたが、私たちがうっかり時間や、彼の職人としての経歴、あるいは外の世界の急速な変化について触れると、彼はかなり無関心な様子を見せた。「外の世界は今、さぞかし目まぐるしく変わっているのでしょうか？」と彼は私たちに問い返した。「そこでは人々がいつもどこかへ急ぎ、何かを急いでやっている。一方、この忘憂鎮（ワンヨウジェン）では、万事がただゆっくりと進んでいくだけです。太陽が昇り、そして沈む。木々が芽吹き、そして季節に合わせて葉を変える。何も急ぐ必要はないのです」

私はこの陶芸家の男性を注意深く観察した。その姿は非常にがっしりとして健康的で、肌は風雪にさらされて日に焼け、両手は労働で硬くなっていた。しかし、何かがどうもしっくりこない。もし彼が、外見通り本当に五十歳くらいだとしたら、あの古風な様式を持ち、時の痕跡がはっきりと刻まれた陶器は、一体誰が作ったのだろうか？あるいは、この男性は、その壮健な外見よりも、実は遥かに年老いているのだろうか？私は彼の機嫌を損ねるのを恐れて、直接尋ねる勇氣はなかったが、その問いは頭の中でずっと渦巻いていた。

小さな陶芸工房を後にして、私たちは川沿いを散策した。巨大なガジュマルの木の、葉が茂った木陰が広大な土間を覆う下で、数人の老人がのんびりと囲碁を打っていた。石でできた碁盤は、長年の歳月で滑らかにすり減っており、白黒の碁石の一つ一つもまた、艶やかに光り、まるでその中に、過ぎ去った無数の静かな午後が込められているかのようなだった。老人たちは非常にゆっくりと碁を打ち、一手一手は極めて慎重に考えられ、時には丸一日かけても、ほんの数手しか進まないこともあった。周りの空気は非常に静かで、ただ、碁石が石の盤面に置かれる時の「こつん」という乾いた音と、老人たちの規則正しく、穏やかな呼吸の音だけが聞こえていた。

私たちは静かに、しばらくの間その様子を眺めていた。私が奇妙に感じたのは、老人たちの会話だった。彼らは盤上の現在の形勢について議論するだけでなく、時折、まるで昨日起こったことであるかのように自然な口調で、ずっと昔に起こった出来事について語り合っていた。一人の老人は、何年も前にこの地域全体を破壊した大洪水について語り、別の老人は、自分がまだ若かった頃の豊作の年について語った。彼らの話を聞いていると、彼らの意識の中では、過去と現在との境界がもはや明確ではないかのような、奇妙な感覚に襲われた。彼らにとって、時間とは、全く異なる流れなのだろうか？

「気づいた？」とチン・リンが私の耳元でそっと囁いた。「おじいさんたち、何十年も前の出来事を、まるで昨日のここのように話しているわ。それに見て、髪は真っ白で、肌にはしわが寄っているけれど、精神はとても明晰で、私たちが他の高齢者によく見るような、耄碌した様子や衰弱した様子が、少しもないわ」

私は頷いた。全くその通りだった。これらの老人たちは、間違いなく非常に高齢であるにもかかわらず、知性や健康が著しく低下している兆候は全くなかった。彼らは依然として明晰で、彼らなりのやり方で活発であり、そし

て極めて穏やかに、地域社会の生活に参加していた。ここでの老化は、非常に異なる形で進行しているようだった。よりゆっくりと、そして、私がよく見るような衰退の色を帯びるのではなく、むしろ、精神の円熟、沈殿といった趣があった。

忘憂鎮（ワンヨウジェン）の人々と接すれば接するほど、私はますます混乱していった。彼らが時間を認識し、体験する方法、彼らが体の老化と向き合う方法は、私がこれまで知ってきたすべてとは、全く異なっていた。それは、時間の流れを否定したり、それに抗おうとしたりするのではなく、むしろ、その存在さえもほとんど忘れてしまうほどの、調和と受容であるかのようにだった。彼らは、時間と競争するために生きているのではなく、まるで、全く異なる、より穏やかで静かな時間の流れの中で、本当に生きているかのようにだった。

医師として、私は、体の生物学的な老化プロセスが、決して避けられないものであることをよく知っていた。細胞は次第に老い、器官の機能は徐々に低下し、病気もまた多く現れる。それは、創造主の極めて自然な法則だ。しかし、この忘憂鎮（ワンヨウジェン）では、その法則が曲げられているか、少なくとも、非常に著しく遅らせら

れているように見えた。清らかな生活環境、隔絶された場所、常に静かな空気、そして悠々自適な心の持ちようが、本当にその生物学的プロセスに影響を与えているのだろうか？それとも、何か別の要因、この谷の奥深くにまだ横たわっている秘密、時間と空間の本質そのものと密接に関わる何かがあるのだろうか？

私はチン・リンの方を見た。彼女の目にもまた、私と同じような問いが満ちているのが見えた。まるで私たちは、時間が意図的に忘れ去り、外の世界の慣れ親しんだ法則がもはや大した意味を持たない土地に、迷い込んでしまったかのようなだった。そして、私たちが会った人々、年月に対する異常なほどの平然とした態度と、時間に関する非常に異なる観念を持つ彼らが、この場所の神秘を、私の心の中でさらに濃密なものにしていた。

伸縮する時間と、異次元空間？

忘憂鎮（ワンヨウジェン）の午後は、奇妙なほどに長く引き伸ばされているかのようなだった。黄金色の陽光が、苔

むした古風な瓦屋根の上に、静かに流れる川面に、まるで細い絹糸のように優しく留まり、私の腕時計によれば、とっくに夜の闇が迫っているはずなのに、まだ消え去るのをためらっているかのようなようだった。私たちは宿の軒先に置かれた木製のベンチに座り、静かに川を眺めながら、この場所の奇妙で、捉えどころのないリズムを感じ取ろうとしていた。年月に急かされることのない人々、そして老化さえもゆっくりと進んでいるかのような人々の話が、私の心の中でずっと渦巻いていた。

宿の女将である林（リン）さんは、午後の仕事を終えると、小さな椅子を持ってきて私たちの隣に腰掛け、古い竹のうちわをゆっくりとあおいだ。彼女は私たち二人を見つめた。その目は穏やかだが、どこか奇妙な理解を秘めていた。

「お客様がたは、どうやら、私たちのこの忘憂鎮（ワンヨウジェン）について、ずいぶんと思いを巡らせていらっしゃるようですな」と彼女は、いつものように抑揚のない、ゆっくりとした声で言った。

チン・リンは彼女の方を向き、穏やかに微笑んだ。「はい、おばあさん。ここは本当に特別な場所です。ここの時間は、他の場所とは全く違うように感じます。万事が

ゆっくりと進み、ここの人々もまた、そのリズムにとっても調和して生きているように見えます」

林（リン）さんは静かに頷き、その視線は谷の奥、霧の中にぼやけていく山々へと向けられた。「時間、ですか？」彼女はその言葉を、まるで非常に身近でありながら、どこか縁遠い概念であるかのように、繰り返した。

「外の世界の方々は、いつも時計でそれを測り、一刻一刻、きっちりと区切っておられる。しかし、この忘憂鎮（ワンヨウジェン）では、私たちはそれを、少し違った形で感じる人が多いのです」

彼女は少し間を置き、静かに流れる川に目を落とした。

「この昔の人々は、それをよくこの川に例えました。ある区間では、岩を越えて水が激しく流れ、またある区間では、穏やかな淀みの中で、囁くように静かに流れる。ある場所では、空全体を映す鏡のように水が深く、またある場所では、我々の肉眼では全く見えない流れが、水面下で渦巻いている。時間も、おそらくはそのようなものでしょう。それは、目に見える流れでありながら、同時に目に見えない流れでもあるのです」

私は彼女の言葉を一言一句、注意深く聞いた。彼女の表現はイメージ豊かだが、どこか曖昧で、いかなる科学的

な論理にも従っていなかった。「おばあさんの意図は…
この時間は、実際に速度を変えることができる、という
ことでしょうか？」私は、科学者としての好奇心を隠
せずに、より具体的に尋ねようとした。

林(リン)さんは穏やかに笑った。それは、私のどこか無
邪気な質問を嘲笑うようなものではなく、まるで大人が
子供に、自分たちにとっては自明なことを説明しようと
するかのような笑みだった。「あなた方が普段お考えに
なるような、『速度を変える』ということとは、少し違
います」と彼女はゆっくりと言った。「そうではなく、
ここで語り継がれているのは、ある時、ある瞬間には、
一日がまるで一週間の長さを感じられることもあれば、
またある時には、一つの季節が瞬く間に過ぎ去ることも
ある、ということです。聞くとところによると、人が何か
に心を完全に集中させている時や、心が完全に静まり返
り、何のこだわりもなくなった時に、そのことが特に感
じやすくなるそうです」

彼女はそっと首を傾げ、どこか探るような眼差しで私た
ち二人を見た。「お二人は、これまでに奇妙な夢を見た
ことはありませんか？その中で、一度も起こったこと

のない出来事を見たり、あるいは、ずっと以前に別れた親しい人々に再会したりするような夢を」

私とチン・リンは無意識のうちに顔を見合わせた。人生で誰しも、一度や二度はそのような奇妙な夢を見たことがあるだろう。しかし、彼女がこの質問をする意図は、もっと深い何かを指しているように私には感じられた。

「ここでよく語り継がれているのは」と彼女は、まるで秘密を囁くかのように声を潜めて続けた。「この場所では、時折、まだ訪れていない未来の断片を夢に見たり、あるいは、まるで昨日起こったことであるかのように鮮明に、古の記憶の流れに迷い込んだりすることがある、ということです。またある者は、そのような夢の中で、非常に奇妙な場所へ行き、我々のこの世界には属さないかのような人々にさえ出会った、と語っています」

「奇妙な場所？この世界に属さない人々、ですか？」チン・リンは、その目に明らかな好奇心を浮かべて問い返した。

林（リン）さんは頷いた。その時の彼女の視線は、まるで何か茫漠とした空間を見つめているかのようなだった。

「この忘憂鎮（ワンヨウジェン）の年寄りたちは、よく

『隠された扉』の存在を語り継いでいます。それは、我々のこの世界と、他の世界との境界が、朝霧のように薄くなり、ある特定の調和の瞬間を待つだけで、全く異なる現実が開かれると信じられている場所です。聞くとところによると、特に夜明けや黄昏のような一日の移り変わりの時や、満月の明るい夜に、あの山の森の奥深くで…」彼女は遠くのぼんやりとした山脈の方へ、そっと顎をしゃくった。「…道に迷った者が、ほんの一瞬、自分が全く見知らぬ場所にいることに気づいたことがあったそうです。そこでは木々も、家々も、太陽の光さえも全く違ってたと。そして、その直後の一瞬の瞬きで、また元の場所に戻っていた。しかし、過ぎ去った時間の感覚は、全く異なっていたそうです」

私は彼女の言葉を聞きながら、無意識のうちに背筋を冷たいものが走るのを感じた。彼女は異次元について話しているのか？多元宇宙の概念について？それらは皆、我々の最も進んだ理論物理学でさえ、まだ推測を提示し、激しい議論を続けているに過ぎない概念だ。それなのにここでは、ごく普通の老婆が、まるで語り継がれてきた物語、何世代にもわたって存在してきた信仰であるかのように、それについて話している。

「おばあさんがおっしゃった『他の世界』とは…実際にはどのようなものなののでしょうか？」私は、心の中で無数の考えが渦巻く中、できるだけ平静を保とうと努めて尋ねた。

林（リン）さんは静かに首を振った。「わしも、そう語り継がれているのを聞いただけですよ。この目で見たことは一度もありません。ある場所は非常に美しく、常に光と、心地よい、奇跡のような音や音楽に満ち溢れているが、またある場所は非常に陰鬱で、恐ろしいと言われています。しかし、それらはどうやら、常に我々のこの世界と並行して、まさにここに存在しているようです。ただ、我々が周りの空気を見ることができないのと同じように、我々の肉眼では見ることはできないだけなのです。聞くとところによると、心が本当に静かな者や、あるいは非常に特別な時に、因縁に導かれて、ようやく僅かに感じ取ったり、幸運にも見たりすることができるのだそうです」

林（リン）さんの言葉は、民話や、古くから伝わる信仰の形で述べられたものではあったが、私たちがこの忘憂鎮（ワンヨウジェン）での短い日々に体験し、感じ取ってきたことと、非常に奇妙な形で共鳴した。「伸縮」するか

のような時間の感覚、一部の住民の老化が遅れているかのような様子、私たち二人が共に見た奇妙な夢、そして今や、並行する空間、「隠された扉」という概念…。それらすべてが、徐々に結びつき、この場所の真の本質についての、非常に複雑で神秘的な絵画を形成しているかのようにだった。

これは、時空の歪みや、複雑な弦理論といった、何か高尚な物理学の理論ではない。これはむしろ、全く異なる視点——おそらくは、私の実証科学ではまだ到底到達できない視点——から見た、宇宙の機能に対する、一種の体験、直接的な認識であるかのようにだった。この場所では、時間は不変の直線ではなく、空間もまた、見慣れた三次元だけではないようだった。それらは、より流動的で、変化に富み、そして我々が普段想像するよりも、遥かに多くの層、多くの次元で存在しているのかもしれない。

私はチン・リンの方を見た。彼女もまた、眉を微かにひそめ、静かに物思いに沈んでいた。おそらく、これらの概念は、奇妙で信じがたいように見えても、彼女が幼い頃から触れてきた東洋文化の土台——仙界や、冥界、そして異なる空間に出入りする能力を持つ修煉者の物語が、

何千年もの間存在してきた文化——にとっては、全く縁遠いものではないのだろう。

「ではおばあさん、もしかして、このような特別な場所で生きているからこそ」とチン・リンは、林（リン）さんにゆっくりと問いかけた。「この忘憂鎮（ワンヨウジェン）の方々は、他の場所の人々よりも、時間や年齢に縛られずに、安らかでいられるのでしょうか？」

林（リン）さんは、含蓄のある笑みを微かに浮かべた。「おそらく、その通りでしょうな。この世界が、自分が思っているよりもずっと広いこと、時間が常にすべてを支配する唯一の主人ではないこと、そして死もまた、おそらくは完全な終止符ではないことを知れば、人は自ずと、日常の暮らしの些細な心配事や、争いごとが減っていくものです。人は自らゆっくりと生きることを知り、より多く耳を傾けることを知り、そしてより深く感じ取ることを知る。そして、人の魂が本当に安らかになった時、おそらくは過ぎ行く年月もまた、その人に優しくなるのではないのでしょうか？」

彼女はゆっくりと立ち上がり、手に持ったうちわは、相変わらず穏やかに揺れていた。「さて、そろそろ夕食の

準備をせねば。お二人は、どうぞご自由に、ここで夕暮れの景色を眺めていってください」

彼女は家の中に入っていき、私とチン・リンを、混沌とした感情と、まだ答えのない無数の思考と共に、そこに残した。彼女の説明は、科学的なものでも、検証可能な具体的な証拠があるわけでもなかったが、私たちの内なる、より深い認識の層に触れ、忘憂鎮（ワンヨウジェン）に関する私たちの疑問に、非常に独特な形で、部分的に答えてくれた。それは、この場所の神秘を消し去るどころか、むしろ、人の常識を超えた、奇跡的な事柄の存在を、私たちによりはっきりと感じさせた。

私たちはそこに座り、たなびく雲、緑豊かな木々の梢の一つ一つに、夕暮れの幻想的な紫色の光が徐々に染み込んでいくのを、静かに見つめていた。まるで全世界もまた、私たちの心に重くのしかかる思索と共に、一つの呼吸を共にしているかのようなようだった。私の心は今、答えのない問いでいっぱいだった。私がこれまで常に知っているとと思っていた「現実」とは、実は、それよりも遥かに複雑な、多次元、多層の宇宙の、極めて薄い一片に過ぎないのだろうか？時間と空間は、常に不変の定数ではなく、我々の科学がまだ解明しきれていない要素、例えば、

人の意識の状態や、ある場所の特別なエネルギー場によって、完全に「伸縮」したり、「湾曲」したりすることがあり得るのだろうか？

私には、まだ何の答えもなかった。しかし、そこに座り、忘憂（ワンヨウ）の谷に徐々に降りてくる幻想的な紫色の夕暮れを見つめながら、私は、自分の思考の限界が、少しずつ押し広げられているのを知っていた。この世界は、どうやら、私の分厚い科学書がかつて描写したことを、遥かに超える、あまりにも多くの奇跡と、謎を秘めているようだった。

不可知なるものの前で、思考を広げる

忘憂鎮（ワンヨウジェン）の夕暮れは、実に異質な体験だった。それは他の場所のように急いで消え去るのではなく、まるで旧友のようにどこか名残惜しげに、ゆっくりと黄金色、そして柔らかなオレンジ色、幻想的な紫色へと光の層を景色全体に広げていく。完全に夜の闇に沈む前に、すべてをもう少し引き留めようとしているかのよ

うだった。私とチン・リンは、宿の軒先に置かれた古びた木製のベンチに、ほとんど身じろぎもせず座り、ただその目は、空と、静かな川面の色の奇跡的な変化を、静かに追っていた。空気は次第にひんやりとし始め、一日中陽光を浴びた後の、土の湿った匂いと、山野の草木の香りを運んでくる。

ここにある静寂は、死を思わせるような寂しさではない。それは非常に深く澄んだ平穏であり、ただ時折、谷ならではの音によって彩られるだけだった。忘憂（ワンヨウ）の川の、規則正しく、穏やかな流れの音。川岸の鬱蒼とした茂みから、虫たちが夜の合唱を始める音。軽い風がそよぐたびに、木の葉がかさかさと微かに鳴る音。遠くでは、古風な高床式の家々で、いくつかのランプの光が揺らめき始め、木の壁に、何かをゆったりと、急ぐことなく行っている人の影を落としていた。テレビやラジオの騒がしい音も、車のエンジンの音もない。ただ、完全に自然と一体化したかのような、根源的で、純粋な生命のリズムがあるだけだった。

私は再び、無意識のうちに腕の時計に目を落とした。秒針は、まるで孤独な旅人のように、規則正しく、勤勉に時を刻み続けていた。そこでは、時間が非常に曖昧にな

り、もはや古い法則に従うことを望んでいないかのような世界で、一瞬一瞬を懸命に数えようとしている。しかし、まさにその機械的で、正確なリズムが、今や忘憂鎮(ワンヨウジェン)の空間の中では、全く異質で、痛ましいほどに場違いに感じられた。私は西の高い山の向こうに昇ってきたばかりの三日月に目を上げた。それは、夕暮れの残光の中で、実にぼんやりとして、幻想的に見えた。理論上は、空におけるその位置から時間を推測することは十分に可能だったが、ある種の漠然とした疲労感が、私を押しとどめた。この場所に、具体的な数字や、無味乾燥な論理的な計算を無理に当てはめようとすることは、全く無意味で、むしろ少し乱暴な行為であるかのようにだった。私は静かに首を振り、自分自身に苦笑し、そしてもう時計を見るのをやめた。

チン・リンはそっと息を吐き、そして私の肩に静かに頭をもたせかけた。この時の私たち二人の間の沈黙は、少しも息苦しいものではなく、むしろ、言葉を必要としない深い共感のようだった。私たち二人とも、この非常に特別な空気を、共に体験し、共に感じていた。

「ねえ、ミン」と彼女の声が、不意に、夜風に溶け込むほど小さく囁いた。「墨老先生(モーラオシェンション)

の言葉を、ふと思い出したの…私たちがまだ清溪（せいけい）にいた時、彼が話した魂や、業力（ごうりき）についてのことは、あの時はまだ縁遠くて、信じがたいことだった。でも今、この空間に座っていると、それらのことが、まるで自分の呼吸のように自然に、そっと心の中に忍び込んできて、もはや荒唐無稽だとか、非合理的だとか、少しも感じなくなったわ」

私はしばらく黙っていた。その視線は、静かな川面で次第に濃くなっていく闇を見つめていた。チン・リンの言葉は、私のまだ非常に曖昧な思考の流れに、的確に触れたかのようだった。これまでの度重なる体験、張峰（ジャン・フォン）氏との最初の出会いから、山頂の隠者、深遠な解釈を持つ墨老先生（モーラオシェンション）、そして今、この忘憂鎮（ワンヨウジェン）の特別な空間に至るまで、それらすべてが、一見バラバラに見えるパズルのピースのようでありながら、共に、この世界についての、より大きく、より複雑な絵画を指し示していた。「君の気持ちは分かるよ」と私は静かに、声もまた低くして答えた。「こういう場所では、どうやら全く異なる法則が、我々がこれまで全く知らなかった法則が、機能しているようだ」

林（リン）さんが私たちを夕食に呼んだ。家の中の揺らめくランプの光が、古い木の床に長い影を落としていた。今夜の食事でもまた、ごく簡素で、素朴なものだった。薄味で煮付けられた小さな川魚の皿、採れたてを茹でて胡麻塩でいただく山菜の皿、そして、まだ香ばしい香りのする、新米で炊いたご飯の鍋。私たちは低い木の卓を囲み、ゆっくりと、落ち着いて食事をした。林（リン）さんは多くを語らず、ただ時折、親切に私たちの腕におかずをよそってくれるだけだった。その穏やかな目は、いつも静かで、温かい笑みを浮かべていた。食事の雰囲気は実に素朴で、親密であり、私がこれまで豪華なレストランや、騒がしい社交の宴席で味わってきた、いかなる食事とも似ていなかった。そこには非常に特別な真実味、人と人との、そして人と周りの自然との、非常に簡素な繋がりがあった。

その夜、屋根裏の木の部屋で、きしむ竹のベッドに横になりながら、私はもはや、前の夜のように、とりとめのない思考で寝付けないということはなかった。私はもはや、無味乾燥な科学知識で物事を分析したり、解釈したりしようとするをやめ、ただ静かに、自分のすべての感覚を広げ、魂が忘憂（ワンヨウ）の夜の、ゆっくりとした、深い呼吸のリズムに沿って、自由に漂うのに任せ

た。庭から絶え間なく聞こえる虫の音と、川の遠く、ぼんやりとした流れの音によって、時折破られるだけの、この場所の夜の、ほぼ完全な静寂を感じる。窓の隙間をそっと吹き抜ける、山の涼しい夜風が運んでくる、清らかな香りを感じる。周りにたたずむ簡素な家々の、そしておそらくは、同じように非常に穏やかな眠りに沈んでいるであろう人々の、存在さえも感じる。まるで、目に見えない何か、特別な静けさが、この谷全体を包み込み、一つ一つの思考に忍び込み、頭の中の絶え間ない流れを和らげているかのようだった。私はいつの間にか眠りに落ちていた。深く、夢も見ない眠りだった。

翌朝、新しい一日の最初の光が、谷中にまだ立ち込める濃い霧をようやく突き抜けた頃、私たちは不思議なほど軽やかで、爽快な気分で目を覚ました。空気は、深く一息吸うだけで、胸が完全に清められたかのように感じるほど、清らかだった。忘憂鎮（ワンヨウジェン）の生活リズムは、相変わらず、ゆっくりと、そして非常に穏やかに流れていた。何人かの住民は、早朝のご飯を炊くために火を熾し、川へ水を汲みに行き、あるいは遠くの青々とした牧草地へ水牛の群れを追っていくなど、いつもの仕事で新しい一日を始めていた。万事が順序よく、リズム

ミカルに進み、少しも急いだり、慌てたりする様子はなかった。

私たちはわずかな荷物をまとめた。それぞれの心には、名状しがたい、名残惜しい感覚があった。忘憂鎮（ワンヨウジェン）に滞在したのは、ほんの数日だったが、この場所は、私たち二人の魂に、非常に深い痕跡を残していた。私たちが階下に降りると、林（リン）さんはすでに、温かい餅と、香りの良い薬草茶の急須を、朝食のために用意してくれていた。彼女は、私たちがどこへ行くのか、次に何をするのか、一切尋ねなかった。

私たちが旅立ちのために別れを告げた時、彼女は、山へと続く小道の始まりである、路地の入り口まで私たちを見送ってくれた。彼女はチン・リンの手に、乾燥させた木の葉が入った、非常に優しい香りのする、小さな布袋をそっと握らせた。「これは、この忘憂（ワンヨウ）の地の薬草です」と彼女は、変わらず抑揚のない声で言った。「心を安らげ、よく眠れるように助けてくれます。道中、お体を大切に」

チン・リンは薬草の袋を受け取り、しきりに感謝を述べた。その目には、どこか感動の色があった。私もまた、彼女にもう一度頭を下げ、感謝の気持ちを表現できる言

葉を探そうとしたが、結局、ごく簡単な一言しか言えなかった。「本当にありがとうございました。私たちは、この場所を決して忘れません」

林（リン）さんはただ静かに微笑んだ。その笑みは、相変わらず穏やかで、この谷そのものののように、どこか神秘的だった。「忘憂鎮（ワンヨウジェン）は、いつでもここにありますよ。人生の憂いを忘れたくなった時は、いつでも、どうぞお帰りなさい」

私たちは歩き出し、落ち葉で覆われた小道をたどった。かなり遠くまで来た時、私は無意識のうちに振り返った。忘憂鎮（ワンヨウジェン）は今もそこに、白い朝霧の海の中に静かにたたずみ、ただ、濃い茶色の瓦屋根と、立ち上る炊事の煙が、いくつかがすかに見えるだけだった。それは、まるで美しい夢、外の現代生活の喧騒と慌ただしさから、完全に切り離された世界のようなだった。

私が本当に、忘憂鎮（ワンヨウジェン）の秘密をすべて「理解」できたのかどうか、私には分からない。おそらく、できていないだろう。しかし、そのことは、この瞬間、もはやそれほど重要ではないように思えた。私はふと気づいた。おそらく、すべての問いが、すぐに明確な答えを必要とするわけではない。すべての謎が、理性に

よって暴かれなければならないわけではない。ある事柄は、どうやら、ただ単に存在するだけであり、私たちのすべきことは、より開かれた魂で、その存在を感じ取り、受け入れる方法を学ぶことなのだ。我々の現在の理解と解釈能力を超えた真実が、ただ単に存在する。そして、その「不可知なるもの」の存在を受け入れること、自分自身の限界を受け入れることこそが、時として、自らの思考をさらに広げ、より深い認識の層へと近づくための、最初のステップなのだ。

私はチン・リンの手をそっと握りしめ、慣れ親しんだ温もりを感じた。この数日間の旅路には、科学的な観点からは、説明しがたい点が多かった。しかし不思議なことに、そのことは、もはや以前のような当惑や、少しの恐怖さえももたらさなかった。ある種の好奇心、漠然とした高揚感が、胸の中で静かに芽生え、私に、さらに先へ進みたい、この神秘的な東洋の、さらなるベールをめくりたいと、駆り立てていた。

* * *

第六章：縁を結ぶ人

黄龍溪古鎮と川辺の老婆

忘憂（ワンヨウ）の谷を後にして、私たちは、まるで目に見えない重荷を下ろしたかのような感覚と、同時に、どこか名残惜しい、言葉では言い表せない気持ちを抱えていた。外の世界は、その慣れ親しんだ時間のリズムと共に、あの特別な場所で過ごした数日、特にあの奇妙な十三日間の眠りの後では、どこか異質なものに感じられた。私たちは、騒がしく活気のある大都市へ急いで戻ることはせず、中国の古い文化の面影を多く残す土地の探求を、続けたいと考えていた。

忘憂（ワンヨウ）から、次に乗る車を捕まえることができる麓の小さな町へ戻る途中、例の案内人の若者が、近くの山腹に陰しく建つ古い寺を指差してくれた。それは非常に靈驗あらたかな寺で、さほど大きくはないが、数百年もの歴史があり、時折、遠方から巡礼者が訪れるのだという。これまでの精神的な体験を経て、私とチン・リンは二人とも、訪れてみたいという衝動を感じていた。

その寺は、実に大きくはなく、古い松の木立の中にひっそりとたたずみ、空気は非常に清らかだった。私たちは、かなり高齢で、福々しい顔立ちと穏やかな眼差しを持つ住職に出会った。私たちが遠方からの客で、文化や聖地について学びたいと知ると、住職はとても喜んで話に応じてくれた。彼は私たちに寺の歴史や、かつてここで修行した高僧たちのことを語って聞かせた。

私たちが探求の旅を続けるつもりだと知ると、住職はしばらく物思いに沈み、そして言った。「もしお二人が、精神的な価値や伝統文化について、本当に深く知りたいと望むのであれば、おそらく四川（しせん）を見過ごすべきではありません。あの土地は、雄大な風景だけでなく、靈峰峨眉山（がびさん）や、荘厳な樂山大仏（らくさんだいぶつ）のように、多くの道観や寺院が集まる場所でも

あります。古の人は言いました。四川（しせん）を訪れるのは、天地の魂と、仏法の妙なることを感じるためだと」

住職の紹介は、他の多くの観光客に対する情報提供のようなものではあったが、不意に私の心の中の何かに触れた。四川（しせん）。私はこの土地について読んだことはあったが、実際にそこへ行こうと考えたことは一度もなかった。チン・リンもまた、非常に興味を示した。「四川（しせん）？私も、そこの文化遺産や、各流派の修煉については、たくさん聞いたことがあるわ」と彼女は、その目に好奇心を輝かせながら私に言った。「紹介されるという縁があったのだから、行ってみない？」

こうして、非常に自然な形で、私たちの次の目的地が決まった。古い寺から、私たちは小さな町へ戻り、そこから長距離バスに乗って貴陽（きよう）へ向かった。貴陽（きよう）からは、四川（しせん）省の省都である成都（せいと）行きの高速鉄道の切符を、容易に手に入れることができた。近代的な列車に乗り、平野や連なる山々を駆け抜ける旅は、改めて私にこの国の驚くべき発展を見せつけた。

成都（せいと）に着いても、私たちはこの大都市に長くは留まらなかった。一晩休んで体力を回復させ、必要な情

報をいくつか調べた後、私たちは、以前からその名を聞いていた世界的に有名な仏教の奇跡の一つ、樂山大仏（らくさんだいぶつ）を拝観するつもりで、運転手付きの専用車を借りて南へ向かうことにした。道中、私たちは、黄龍溪（こうりゅうけい）という名の、川沿いに静かにたたずむ古鎮があることを知った。そこはまだ古い建築様式と、非常に穏やかな空気を多く残しているという。私たちは、樂山（らくさん）への旅を続ける前に、そこで数日間休むことに決めた。

快適な車が、私たちを成都（せいと）の喧騒から連れ出した。高層ビルと絶え間ない車の流れが織りなす都会の風景はすぐに後方へと遠ざかり、その代わりに、広大な水田と、四川（しせん）盆地の豊かで穏やかな村々が広がった。運転手は、地元出身の中年の男性で、かなり親切で気さくであり、時折、美しい景色を指差したり、通り過ぎる場所についての面白い話を語ってくれたりした。

私たちが黄龍溪古鎮（こうりゅうけいこちん）に到着した時、そこは実に、独特の美しさを持っていた。穏やかな川に沿って続く石畳の小道、古風な反り橋、そして苔むした瓦屋根の木造家屋が、互いに寄り添うように建ち並んでいた。観光地化の兆しはいくつか見られたものの、

全体的な雰囲気はまだ素朴で、飾り気がなく、私たちは、これまでの精神的にかなり緊張した体験の後で、心からくつろぎ、安らぐのを感じた。

私たちは、川を望むバルコニー付きの、かなり簡素に見える小さな宿を見つけ、そこで一、二泊するつもりだった。午後、荷物を片付けた後、私たちはのんびりと川沿いを散策し、清らかな空気を吸い込み、ここの人々の素朴で、ゆっくりとした生活のリズムを観察した。

歩いていると、チン・リンの視線が、ふと、かなり古びてはいるが、まだ清潔で整頓された家の前にある、小さな土間に留まった。たわわに実をつけたヘチマの棚の木陰で、一人の老婆が低い竹の椅子に腰掛け、少し背中を丸め、その両手は、色とりどりの毛糸の玉と、竹の編み針で、せわしなく動いていた。彼女は色褪せた茶色の粗布の服を着て、真っ白な髪はうなじで綺麗にまとめられていた。その顔には長年のしわが深く刻まれていたが、その目は不思議なほどに輝き、穏やかだった。彼女は、周りの世界にはもはや何も気づいていないかのように、集中し、そして平然と編み物をしていた。

手工芸品が大好きで、常に各地の文化について知りたがるチン・リンは、非常に興味を示した。彼女はそっと私

の腕を引き、そして私たち二人は一緒に、より近くへと歩み寄った。私たちはしばらく黙って、老婆の仕事ぶりを観察した。年老いてはいるが、まだ非常に器用なその手は、竹の編み針を素早く動かし、一つ一つの編み目は均等で、次第に、かなり複雑に見える模様を、編みかけのセーターの上に作り出していった。それは非常に珍しい模様で、私はこれまで一度も見たことがなかった。まるで、多くの小さな模様が組み合わさり、それらが重なり合い、固く絡み合って、非常に調和の取れた、独特な全体像を成しているかのようだった。

誰かが見ているのに気づいたかのように、老婆は顔を上げた。その穏やかな目は私たちを見つめ、そして声にならない笑みをそっと浮かべた。その笑みはとても温かく、私たちは無意識のうちに、すぐに親しみを感じた。

「こんにちは、おばあさん」とチン・リンは、非常に正確な標準中国語で、礼儀正しく先に挨拶した。「とても綺麗に編まれていますね。この模様は、本当に特別です」

老婆はチン・リンを見た。その目には、彼女の言葉を聞いて、少し驚きと興味が浮かんだ。「ありがとう、お嬢さん」と彼女は、その眼差しと同じように、低く穏やかな声で答えた。「これは、この村の昔ながらの模様です」

よ。今の若い子たちは、もう、こんな複雑なものを辛抱強く編もうとする子は、ほとんどいませんからね」

「私も家で編み物をするのが好きですが、正直なところ、このような模様は一度も見たことがありません」とチン・リンは言い、そして、彼女が編んでいるセーターをより詳しく見るために、少し近づいた。「本当に手が込んでいますね。まるで、色の違うたくさんの糸が、出会い、そして一つに溶け合っているかのようです」

老婆は再び微かに微笑んだ。今回の笑みは、以前よりも深い意味を帯びているかのようだった。彼女は、自分の両手で絡み合う毛糸に目をやり、そして再び私たち二人を見上げた。「その通りですよ、お嬢さん」と彼女はゆっくりと言った。「この一本一本の糸には、それぞれの道があり、それぞれの色があり、太さも違います。しかし、ひとたびこの編み針の上で触れ合えば、先に行くもの、後を追うもの、内側にあるもの、外側を覆うもの、そのすべてが一つに合わさって、温かい一枚のセーターになるのです。人の世の縁というものも、それと同じですな。誰も、自分が誰と出会い、彼らとどのように結ばれるか、前もって知ることはできません。しかし、その

一つ一つの繋がりは、喜びであれ、悲しみであれ、それぞれに意味があるのです」

その一見非常に簡素な言葉が、まるで涼しい風のように、私の密集した思考の層を不意に吹き抜け、これまで私が言葉にしたことのなかった事柄を、そっと示唆した。その例えは、私の心の非常に深い何かに触れ、「縁」という二文字、そして私とチン・リンがこの旅の間中、漠然と感じ始めていた、目に見えない繋がりについての、とりとめのない思考を呼び起こした。私は老婆を、もう少し注意深く見た。彼女の外見はごく普通で、彼女のしている仕事も実に質素だったが、彼女の言葉には、決して平凡ではない、人生の哲学が込められていた。

老婆は、隣に空いていた竹の椅子に座るよう、私たちにそっと合図した。「お二人は、遠方から来られたお客様ですか？この辺りの方には見えませんが」

「はい、おばあさん。私たちはアメリカから参りました」と私は答え、チン・リンの隣に腰を下ろした。「私たちは楽山（らくさん）へ向かう途中で、ここで一休みし、また、黄龍溪（こうりゅうけい）のような古鎮の文化や、人々の生活について、もっと知りたいと思っています」

「ああ、樂山大仏（らくさんだいぶつ）へ向かう途中でしたか」と老婆は、手元の編み物から目を離さずに、静かに頷いた。「それなら、この黄龍溪（こうりゅうけい）で足を止められたのも、縁があったのですね。私たちのこの古鎮は小さいですが、面白いこともたくさんありますし、ここの人々も穏やかで、素朴です。どうぞご自由に、数日遊んで、元気を取り戻してから、旅を続けてください」

私たちはそこに残り、老婆とさらに言葉を交わした。初めは、日常の暮らしや、家の子供たちのこと、この古鎮についての、儀礼的な質問だけだった。しかし、やがて、非常に自然な形で、私たちの話は、より深い事柄へと、徐々に向かい始めた。まるで、老婆が、私たちが普通の美しい景色や、単なる観光体験を超えた何かを探し求めていることを、何らかの方法で、漠然と感じ取っていたかのようなだった。

川のほとり、たわわに実をつけたへちまの棚の下に座り、編み物をする老婆の、素朴でありながら深い言葉に耳を傾けていると、私は無意識のうちに、この偶然の出会いが、全くの偶然ではないかのような感覚に襲われた。何

か新しいもの、別の扉が、この四川（しせん）の地で、私たちの目の前に、再びゆっくりと開かれようとしていた。

輪廻と前世からの縁の物語

私たちは老婆のそばに座っていた。その空間は、遠くを流れる府江（ふこう）の絶え間ない囁きと共に、規則正しく響く編み針のかちりという音だけが聞こえるほど、静かだった。夕暮れの陽光は黄金色に傾き、軒先の前の小さな土間を優しく覆い、実に穏やかで温かい風景を作り出していた。

チン・リンは、老婆が編んでいるセーターの、どこか複雑な模様をじっくりと眺めた後、その声に感嘆の色を隠さずに尋ねた。「おばあさん、この毛糸は色も太さも様々に見えますのに、どうしてこんなにも調和させて編むことができるのですか。何か秘訣があるのでしょうか？」

老婆は少し手を止め、自分の作品を眺めてから、穏やかに笑った。「わしが器用だからというわけではないのですよ、お嬢さん。それはな、この毛糸たち自身が、元々

互いに縁を持っているからです。この糸はあの糸と一緒に
なる必要があり、濃い色の糸は、その美しさを引き立
てるために、薄い色の糸を必要とする。それらはそうや
って互いを探し求め、絡み合い、そして共に温かい一枚
のセーターになるのです」

彼女は編み物を続けながら、ゆっくりと、落ち着いた声
で言った。「この世の人々も、考えてみれば、それと同
じようなものです。私たち一人一人もまた、一本の糸の
よう。誰もが自分の色を持ち、自分の道を持っている。
しかし、やがて何らかの形で出会い、親となり、子とな
り、夫婦となり、友となる。時には、全く好かない相手
でさえも…。それらすべての出会いは、決して偶然では
ないのです。それは、目に見えない何らかの縁が、ずっ
と以前から彼らを結びつけているからです」

「縁…」チン・リンはその言葉をそっと繰り返し、その
視線はまるで、どこか遠い記憶の領域に触れているかの
ようだった。それは、非常に懐かしい感覚でありながら、
どこか漠然として、名状しがたい感覚だった。この概念
は、彼女がこれまで、古典文学作品や、中国文化の故事
の中で、何度も出会い、読み、そして講義さえしてきた
ものだ。しかし今日、この老婆自身が、実に素朴に、日

常的にそれを口にするのを聞くと、それは全く異なる色合いを帯びていた。「…それは、昔の書物でよく言われているようなものですか、おばあさん？」

老婆は静かに頷き、その目には満足の色が浮かんでいた。「その通りですよ。それこそが縁です。それは目に見えない糸のようなもので、ずっと昔から、時には遥か昔の前世から、互いに結ばれているのです」

「前世、ですか？」私は思わず口走った。私の中の、科学者としての生来の懐疑心が、不意に頭をもたげた。しかし、チン・リンの反応は全く違った。彼女は少し顔を上げ、その表情には、驚きと、非常に奇妙な既視感が入り混じっていた。「前世？」——この概念は、彼女がこれまで研究に時間を費やしてきた、無数のおとぎ話、神話、そして仏教や道教の教義を通して、実に馴染み深いものだった。それは、彼女が日々教えている文化の、ほとんど不可欠な部分ですらあった。しかし今日、小さな川のほとりでゆったりと編み物をする老婆の口から、まるで荒唐無稽なおとぎ話ではなく、自明の理を語るかのようにそれが発せられるのを聞くと、彼女は無意識のうちに、「虚構」と「現実」の間の儚い境界線が、ぼやけていくのを感じていた。概念の馴染み深さと、それを客

観的な現実として直面した時の異質な感覚が、まさに目の前で繰り広げられていた。

老婆もまた、私たち二人の反応の違いに気づいたようだった。彼女は私に寛容な笑みを微かに向けてから、チン・リンの方を向いた。「馴染みがあるようすな？きっと、たくさんの書物を読んでこられたのでしょうか？」

「は、はい…」チン・リンは、少し躊躇いがちに答えた。「私も、古い物語や経典の中で、これらのことについて読んだことがあります。でも…私はいつも、それらはただの象徴、道理を比喩的に表現する方法だと思っていた。今日、おばあさんのお話を聞いて、全く違う感覚を覚えました」彼女は、この地の現実の生活における、この信仰の「源流」がどのようなものなのか、心から知りたがっていた。

老婆は静かに頷き、その眼差しは変わらず穏やかで温かかった。「書物には、ほんの一部しか記録されていませんからな。世の人々の実際の体験は、また別の部分です。では、この黄龍溪（こうりゅうけい）の古鎮の物語を、お二人に聞かせましょう。わしの祖父母の代の話ですがね」

彼女は編み針を、そばに置かれた竹籠にそっと置いた。その遠くを見るような視線は、静かに流れる川に向けられ、そしてゆっくりと、阿生（アーシェン）という名の若者と、蓮（リエン）という娘の、悲恋の物語を紡ぎ始めた。温かい夕暮れの光に満ちていた空間に、不意に、一本の悲しみの糸が忍び込んだ。

チン・リンは注意深く物語に耳を傾け、その秀麗な眉は微かに寄せられた。彼女はこれらのモチーフをよく知っていた。社会の様々な偏見を乗り越えなければならない、叶わぬ恋の物語、民間文学ではおなじみの素材である、切ない悲劇。彼女は登場人物たちの運命に感動し、心を痛めたが、同時に、彼女の中の研究者としての理性は、物語の構造を分析しようと努めていた。

「悲しいお話ですね、おばあさん」と、老婆が物語の前半を終えて一息ついた時、彼女は静かに言った。

「本当に悲しいことです」と老婆も静かに同意した。「しかし、まだ終わりではありません」そして彼女は再び語り始め、数十年後、町の中の異なる二つの家庭に、長（チャン）という名の男の子と、安（アン）という名の女の子が生まれたことを話した。彼女は、その二人の子供の体に現れた奇妙な印や、夢について、そして、彼ら

が深い淵や、激しく流れる川に対して抱く、理由のない恐怖について語った。そして最後に、彼らを結びつけ、結婚した後、生涯幸せに暮らすことになった、非常に自然な良縁について語った。

老婆が、長（チャン）という男の子には、かつての蓮（リエン）の肩にあった刺青と非常によく似た、蓮の花の形の痣があり、安（アン）という女の子には、阿生（アーシェン）の手首にあった傷跡とそっくりな、薄い傷跡があったという細部を語った時、チン・リンは無意識のうちにそっと身震いした。これらのディテールは、もはや単なる文学的なモチーフではなかった。それは、無視するにはあまりにも具体的で、あまりにも「現実的」だった。

「この黄龍溪（こうりゅうけい）の年寄りたちは皆」と老婆は、確信に満ちた声で物語を締めくくった。「後の世の長（チャン）と安（アン）こそが、果たせなかった昔の縁を続けるために戻ってきた、阿生（アーシェン）と蓮（リエン）の生まれ変わりだと信じています。彼らの体に残された印と、あの恐怖こそが、輪廻の痕跡なのです。そして、彼らが最終的に互いを見つけ出し、夫婦となったのは、前世からの宿縁による、天の采配だったのです」

物語は終わり、長い沈黙が残された。チン・リンは黙って座り、その視線は遠く川面を見つめていた。その表情には、名状しがたい動揺が見えた。この物語における輪廻や、縁といった要素は、彼女の幅広い文化知識にとっては、おそらく縁遠いものではなかっただろう。しかし、老婆が、その目に揺るぎない信念を輝かせながら語るその様と、私たちがこの旅の間、共に体験してきた奇妙な現象とが、どうやら彼女に、すべてを再認識させているかのようだった。

彼女はそっと私の方を向き、その眼差しには、感動的な話を聞き終えた人の感動と、同時に、自らの知識と信念の両方に挑戦するような現象の前に立つ、学者の明らかな戸惑いがあった。「分かるでしょう？」彼女は、非常に小さな声で囁いた。「まるで、私たちが書物で読んできたことのように…でも同時に、もはや、ただの書物ではないのよ」

私はチン・リンを見た。その驚きの眼差しの中で、何かが砕け、溶けていくのが見えたかのようだった。彼女がいつも研究してきた、書物の中の馴染み深い概念が、今や、全く異なる重みを帯びていた。府江（ふこう）のほとり、沈みゆく夕日の下で、編み物をする老婆の物語は、

どうやら私たち二人の心に、目に見えない縁と、人の世の神秘的な輪廻についての、思索の種を蒔いたかのようだった。

万物を結ぶ、目に見えぬ糸としての業力 (ごうりき)

老婆が阿生（アーシェン）、蓮（リエン）、長（チャン）、そして安（アン）の物語を語り終えた後、私とチン・リンは二人ともしばらく黙っていた。彼らの思いと再会が、まだ空気の中に残っているかのようなようだった。私たちは共に黙って座り、遠くの川面に沈んでいく夕日を見つめていた。

「おばあさん」とチン・リンが口を開いた。その声にはまだ物語の余韻が残っていたが、その眼差しには、物事の根源まで突き詰めたいと願う者の、探求の色が輝いていた。「では、古の人々が『業力（ごうりき）』と呼んだものこそが、縁を生み出し、阿生（アーシェン）と蓮（リエン）を来世で再会させたのでしょうか？」チン・リン

が「業力（ごうりき）」という二文字を口にした時、私はふと思い出した。そうだ、清溪（せいけい）の墨老先生（モーラオシェンション）もまた、このことについて、生命を支配する因果の法則について語っていた。しかし正直なところ、あの時は、多くの奇妙な事柄と、理解を超える概念の中で、ただ聞き流すだけで、深くは考えていなかった。今、老婆の物語の後で、「業力（ごうりき）」という言葉は、にわかに重みを増していた。

編み物の老婆は静かに頷き、穏やかで理解に満ちた笑みを口元に浮かべた。彼女は竹籠から編み針を再び手に取り、その痩せてはいるが器用な指が、また働き始めた。

「この若いお嬢さんは、理解が早いですね」と彼女は、変わらず抑揚のない、低く温かい声で言った。「縁とは、人々を互いに結びつける綱のようなもので、時には近く、時には遠くにある。そして業力（ごうりき）とはな、まさにその綱を生み出した力、人々を果てしない輪廻の車輪の上で引き回すものなのです」

彼女は編みかけのセーターを少し持ち上げ、まるでその模様を私たちにもっとよく見せたいかのようだった。

「お二人とも、これをご覧ください」と彼女は、ゆっくりとした声で言った。「このセーターには、美しく、滑ら

かで、明るい色の毛糸もあれば、毛羽立って、色が暗く、切れやすそうな糸もある。業力（ごうりき）もまた、各人の人生という名の衣を織りなす、目に見えない糸の質のようなものです。善良な思い、真実の言葉、慈悲深い行いをなすことは、まるで自らの手で、良質で、丈夫で、輝く糸を作り出しているかのようです。一方、邪悪で利己的な思い、他人を傷つける言葉、人や物に害をなす行いは、まるで自ら、粗悪で、暗く、朽ちた糸を作り出しているかのようです」

彼女は少し間を置き、その視線は静かに流れる川の彼方へと向けられ、そして再び手元のセーターに戻った。

「昔の人は『蒔いた種は刈らねばならぬ』と言いましたが、それもまた道理です。それらの良い糸も悪い糸も、自然に消えることはありません。それは静かに蓄積され、その人の魂に、あるいは人々が言うところの、その人の神魂に、固く絡みついていくのです」ここまで聞いて、私とチン・リンは無意識のうちに顔を見合わせた。先日、清溪（せいけい）の墨老先生（モーラオシェンション）もまた、肉体を超える「真の実体」について語っていた。その時、彼が用いた「神識」や「霊体」といった言葉は、私にはまだ耳慣れないものだったが。今、老婆が「魂」や「神魂」について語るのを聞くと、呼び名は異なれど、

どうやら皆、人の核心となる、不変のものについて指しているように感じられた。

「そして、人がこの世を去る時」と彼女は、日常の出来事を語るかのように平然とした声で続けた。「その人の魂は、それらすべての良い業力（ごうりき）も悪い業力（ごうりき）の糸を携えて、新たな旅路へと入っていきます。それらすべての業力（ごうりき）が、その人がどこに生まれ変わるか、どのような境遇に出会うか、幸せか、苦しいか、健康か、病弱か、善人に出会うか、悪人に直面するかを、決定するのです…」

彼女は私たちを見た。その穏やかな目は、しかし、まるで時の川全体を宿しているかのように深かった。「先ほどの物語の阿生（アーシェン）と蓮（リエン）のように、前世では貧しく、多くの困難に遭いましたが、彼らの愛は誠実で、その心は善良でした。おそらく、彼らは善業と、そして非常に強い願いを生み出したのでしょう。それゆえ、この世では、まさにその業力（ごうりき）が、彼らをより良い境遇で再会させ、果たせなかった恩愛の借りを返し、そして自らが前に蒔いた福を享受できるように、導いたのです」

「では、業力（ごうりき）とは、あらかじめ定められ、変えることのできないものなののでしょうか？」私は、科学的な思考様式に従って明確さを求めようと、思わず尋ねた。「もし人が、生まれながらにして苦しまねばならないとしたら、それは前世からの業力（ごうりき）が定めたことであり、その人は永遠にそれに甘んじなければならぬのでしょうか？」この問いには、私の生来の懸念が隠されていた。もしすべてがあらかじめ定められているのなら、この現世における努力や、人の意志の意味は、どこに残るといえるのか？

老婆は静かに首を振り、その時の痕に刻まれた顔に、一瞬、思案の色が浮かんだ。彼女の手元の編み針は、変わらず規則正しく、休むことなく動いていた。「必ずしもそうではありませんよ、若いの」と彼女は、優しい声で言った。「業力（ごうりき）が非常に大きな力を持つことは確かです。それは、自分が生まれる境遇、出会う人々、経験する出来事に影響を及ぼします。しかし、それは、変更不可能な、判決印が押された宣告書ではないのです」彼女はこの点を強調した。

「それは、自分が前世から携えてきた『元手』と『負債』のようなものです。この世でどのような家庭に生まれ、

どのような健康状態であるかは、その最初の業力（ごうりき）の『元手』によるものです。しかし、それよりもずっと重要なのは、まさにこの世で、自分がどのように生きるか、自分が持っているものに対して、どのように振る舞うかなのです」彼女は私をまっすぐに見つめ、そして再びチン・リンに、励ますような視線を向けた。

「もし、善良なことを行い、可能な限り他人を助け、自分の心性を日増しに良くするように修めることを知れば、それは、自分が新たな善業を生み出しているということになります。自分の良い『元手』はますます増え、かつての悪い『負債』を徐々に返済するために使うことができ、そうして、自分の未来もまた、次第に良くなっていくのです。逆に、もし悪事を続け、さらに悪業を生み出せば、『負債』はますます積み重なり、苦しみはさらに苦しみを増し、この世だけでなく、後の世にまで影響を及ぼすことになるのです」

老婆は少し間を置き、まるで私たちに、彼女が言ったばかりの言葉をじっくりと考える時間を与えるかのようだった。そして彼女は続けた。「ですから、業力（ごうりき）について知ることは、それを頼りに運命のせいにしたたり、諦めて甘んじたりするためではありません。そうではなく、自分に起こるすべてのことには、その原因が

あり、偶然など何もないということを、理解するためなのです。そして、さらに重要なことは、今この瞬間の、一つ一つの思い、言葉、行いに対して、自分が責任を持たねばならないということです。なぜなら、まさにそれらのことこそが、たとえどんなに些細なものであっても、静かに自分自身の未来を、そして自分と縁のある人々の未来をも、織り上げているのですから」

老婆の説明は、ごく簡素で、素朴でありながら、まるで私の、懷疑によって乾ききっていた魂の大地に、深く染み渡る雨粒のようだった。因果の法則と個人の責任という概念が、彼女によって、実に生き生きと、そして身近に表現された。それは、過去の役割、過ぎ去ったものの役割を否定するものでは全くなかったが、未来を形作り、変えていく上での、現在、私たちが生きている一瞬一瞬の力を、特に強調していた。業力（ごうりき）は、彼女の語りによれば、もはや運命的な宣告や、あらかじめ定められた幸運の籤ではなく、各人の行動と心性そのものによって、絶えず生み出され、変えられていく、尽きることの無いエネルギーの流れだった。

私は静かに座り、その目に見えない業力（ごうりき）の網の目を、想像しようと努めた。それは、私がこれまで学

び、教えてきた物理法則よりも、遥かに複雑であるように思われた。それは単なる機械的な作用・反作用ではなく、心念の、意図の、そして、どれほどの生涯を経て織り上げられてきたか分からない、目に見えない繋がり、蓄積でもあった。目に見えず、緻密でありながら、しなやかな、すべてを覆う網。

チン・リンもまた、深く惹きつけられているようだった。私は彼女が静かに頷き、その眼差しが物思いに沈んでいるのを見た。この業力（ごうりき）という概念は、彼女が仏教の書物を通して知ってはいたものの、この老婆自身から、これほど生き生きと、日常的で簡素なイメージを用いて説明されると、その概念は、まるで冷たい書物のページから抜け出し、地下水のように、静かに、しかし力強く、彼女の意識の奥深くまで染み込んでいったかのようだった。それは、この世でよく起こる、一見非常に偶然に見える不公平や、苦しみ、あるいは幸福の一部を、彼女が解読するのを助ける、鍵のようだった。書物の知識のバラバラになったピースが、まるで目に見えない手によって並べ替えられ、より意味深く、より深遠な絵画を創り出しているかのようだった。

黃龍溪（こうりゅうけい）の川のほとりでの、編み物をする老婆との出会いは、セーターの珍しい模様への好奇心から始まったが、期せずして、私たちを、宇宙と人の世の両方を静かに支配しているかのような、目に見えない法則についての、より深い理解へと導いた。輪廻、縁、そして今や、業力（ごうりき）——これらの概念は、もはや書物の中の無味乾燥な、縁遠い言葉ではなく、私とチン・リンが、この東洋探求の旅で、一步一步体験している、非常に複雑な現実という名の布を、静かに織りなす、色とりどりの糸のように、次第に生き生きと、その姿を現しつつあった。一日の終わりの夕日が、まだ川面を黄金色に染めており、そして業力（ごうりき）の糸は、どうやら、私たちの目の前で、人の世の尽きることのない絵画を、静かに織り続けているかのようにだった。

縁のレンズを通して、自らの人生を映し出す

空は暗くなり始めていた。編み物の老婆も手を止めた。彼女の穏やかな目は、まるで彼女が語ったばかりの物語

や言葉の余韻に、まだ耳を澄ませているかのように、目の前の空間を見つめていた。私たちは、夕暮れの静寂の中に座っていた。それぞれが自分の思いに沈んでいたが、どうやら皆、同じ大きな問いに向かっているかのようだった。自分の人生を、輪廻、縁、そして業力（ごうりき）のレンズを通して見たなら、それはどのように映るのだろうか？

私は無意識のうちにチン・リンに目をやった。彼女もまた私を見ていた。その眼差しは深く、どこか馴染み深いものでありながら、まるで、発見されたばかりの何か新しいものを秘めているかのようだった。私たちが共に過ごした年月、大学のキャンパスでの日々から、夫婦としての生活に至るまで、私はそれを常に、私たち二人の選択、愛と調和の結果だと考えてきた。しかし今、老婆の話の後で、ふと一つの問いが頭に浮かんだ。私たちの出会いは、本当にただの偶然だったのだろうか、それとも、ずっと以前から、何らかの目に見えない糸によって結ばれていたのだろうか？老婆が語った長（チャン）と安（アン）の物語のように、私たちを巧みに引き寄せた運命の糸、遥か昔の生涯から定められていた縁というものが、あったのだろうか？その考えは、私が彼女に抱く愛を少しも減じるものではなく、むしろ、私たちの関係に、よ

り深い意味の層、どこか神聖で、より強固な結びつきを、加えるかのようだった。

そして、私の過去の他のイメージもまた、ゆっくりと蘇ってきた。医学教授兼企業家としてのキャリアの道、順風満帆に見えた時、予期せぬ成功が訪れた時もあったが、挫折も、順調に見えた提携話が理由も分からず突然破綻したこともあった。人生で出会った人々、私を助けてくれた人、私に困難をもたらした人…。彼ら全員が、私が全く気づかないうちに静かに働いている、何らかの縁や業力（ごうりき）によって私と結ばれた、鎖の輪だったのだろうか？私が経験してきたこと、喜びも悲しみも、すべては業力（ごうりき）の采配、私が過去に、あるいは覚えていないどこかの生涯で作り出した、「善悪の糸」の結果だったのだろうか？そう考えると、少しぞっとしたが、同時に、それはある種の秩序の感覚をもたらし、これまで私がただの幸運や偶然だと考えていた事柄の一部を、説明してくれた。

私は、チン・リンがそっとため息をつき、手で髪を優しく撫でるのを見た。彼女もまた、考えているのだろうと私は思った。彼女の人生、上海での日々から、家族と共にアメリカへ渡った大きな転機、そして教授になるまで

の勉強の日々。その旅路の中で、私たちは大学時代に出会い、そして共に家庭を築き、今やもうすぐ成人する子供たちもいる。それらすべてが、縁のレンズを通して見れば、きっと、どれほどの定められた結びつき、どれほどの業力（ごうりき）の導きを秘めていることだろう？そして、彼女が私と共に、この旅で中国へ戻り、このような話を聞くことになったのもまた、その采配の一部だったのではないだろうか？

老婆が、私たちに気づかせるかのように、軽く咳をした。彼女はすでに道具を片付け終えていた。「すっかり暗くなりました。わしも、そろそろ夕飯の支度に戻らねば。お二人の旅が、楽しいものとなりますように…ああ、そうだ、この道の突き当たりに、小さな食堂街がありますよ。もし夕食を召し上がるなら、そこも良いでしょう」

私たちは立ち上がり、彼女にもう一度、深く頭を下げた。「お時間を割いて、本当に意味深いお話を共有してください、心から感謝いたします」とチン・リンは、真心のこもった声で言った。

老婆はただ、穏やかに笑いながら、そっと手を振った。「ただの、昔の人が語り継いできた古い話ですよ。お二人が、楽しんで聞いてくださったなら何よりです」しか

し、彼女の目の中に、私は、それらの物語が私たちにとって、それ以上の意味を持つことを、彼女が知っているかのような感覚を覚えた。

私たちは、玉石を敷き詰めた道を、ゆっくりと宿へと歩いて戻った。道中、いくつかの家の軒先や、曲がり角に吊るされた、古風な赤い提灯（おそらくは中に電球が入っているのだろう）が、道の表面に温かい光の筋を落とし、昇ってきたばかりの三日月と相まって、きらびやかでありながら静かな、夜の古鎮の風景を作り出していた。誰も何も言わなかったが、私たち二人とも、考えに耽り、縁と業力（ごうりき）という新しい視点の下で、静かに自分の人生を映し出しているのだと、私は理解していた。

過去の人々、出来事、関係は、もはやバラバラの点ではなかった。それらは、目に見えない糸によって、意図的なものも、偶然のものもあるが、すべてが複雑な因果の網の目の中にあるかのように、一つに繋がっているかのようにだった。この見方は、私に運命に縛られていると感じさせるのではなく、むしろ、今現在の、一つ一つの思い、言葉、行いにおける、自分自身の責任を、より深く認識させた。なぜなら、老婆が言ったことが真実であるならば、まさにそれらのことが、私たち自身の、そして

周りの人々の、この世だけでなく、おそらくは次の旅路のためにも、人生という名の織物を、静かに織り続けているのだと、私は漠然と感じていたからだ。

黄龍溪（こうりゅうけい）の川のほとりでの、編み物をする老婆との偶然の出会いは、興味深い物語をもたらしただけではなかった。それ以上に重要なのは、それが私たちの心に、人生と、人間関係についての、新しく、より深い認識の仕方を、植え付けたことだった。私たちは、もはやただの孤立した個人としてではなく、広大な因果の縁の連鎖の中の、小さな鎖の輪として、支配される側でありながら、同時に、業力（ごうりき）の流れを生み出す一翼を担う者として、自分自身を映し出し始めていた。

* * *

第七章：運命の骨董店

奇妙な骨董店と謎めいた店主

黄龍溪（こうりゅうけい）を後にしてからも、老婆の語った縁や業力（ごうりき）の話が、私とチン・リンの頭の中でずっと渦巻いていた。それらの概念は、科学者である私にとっては、初めは奇妙に聞こえたが、考えれば考えるほど、その理屈が見えてくる。どうやら、私たちがまだ知り尽くしていない、より深く、別の法則が、この人生を動かしているかのようだ。この旅は、実に多くの新しいことを、私たちの前に開いてくれていた。

私たちは南へと旅を続けることにし、舞陽河（ぶようが）のほとりにあると聞く、鎮遠（ちんえん）という名の古都を目指した。鎮遠（ちんえん）はさほど大きくはないが、古い街並み、川を見下ろす高床式の家々、そしていくつかの古びた石橋があるという。なかなか面白そうだと思います、私たちは古い街区に小さな宿を見つけ、数日間滞在してみることにした。

ある日の午後、日差しも和らいだ頃、いくつかの寺院を巡り、川で舟に乗った後、私とチン・リンは古い街区の石畳の小道を散策することにした。それらの路地は大通りよりも人通りが少なく、両側は苔むした古い石壁で、家の門は木製で固く閉ざされ、時折、住民の姿が見えるだけだった。

ぶらぶらと歩いていると、私は偶然、ブーゲンビリアの棚の向こうに隠れるように掲げられた、古びた木製の看板に気づいた。看板には三文字の漢字が書かれ、その塗装も色褪せていた。それは「随縁閣（ずいえんかく）」と読めた。その真下には、低い木製の扉が半開きになっており、周りの家々と大して変わらない佇まいだった。きっと、繁盛している店ではないだろう。注意深く見ていなければ、通り過ぎてしまうところだった。

なぜか、私は好奇心をそそられた。「リン、あれを見て
ごらん」と私は妻の腕を軽く突いた。「随縁閣（ずいえ
んかく）だ。なかなか特別な名前じゃないか」

チン・リンはそちらを見た。彼女は漢字に詳しいので、
すぐに意味を理解した。「随縁（ずいえん）…普通の店の
名前には聞こえないわね」と妻は言い、その目にも好奇
の色が浮かんでいた。「入ってみない？」

私は頷いた。その名前と、静かな佇まいに、中へ入って
みたいと思わせる何かがあった。私たちはそっと、木の
扉を押した。

小さな風鈴がかすかな音を立て、そして鳴りやんだ。内
部は、自分の呼吸さえはっきりと聞こえるほど、静まり
返っていた。店内の光は弱く、紙を貼ったいくつかの窓
から午後の陽光が数筋差し込んでいるのと、部屋の隅に
置かれた小さなランプの光だけだった。空気はどこか息
苦しく、古い木の匂い、湿気の匂い、そして私がそれと
は分からない、何かの沈香の香りが、かすかに漂ってい
た。

部屋はさほど広くはなかったが、品物は、床から天井近
くまで、所狭しと置かれていた。棚の上、机の上、床の

上にも、どこもかしこも古いものだらけだった。ひびの入った陶磁器の壺、緑青を吹いた銅製の仏像、黄ばんだ古い絵画の巻物、くすんだ翡翠や銀の装身具、古風な羅針盤、銅鏡、石の硯、そして、私は何なのか全く分からない、まるで昔の道士の道具のような、奇妙な品々まで。すべてが雑然と置かれているようだったが、よく見ると、一つ一つが然るべき場所にあり、何年もそこに静かに置かれていたかのようだった。ほとんどすべてのものに、薄い埃の層がかかっていた。それは汚れた埃ではなく、時の埃だった。

この店の空気は非常に奇妙で、静かでありながら、どこか重苦しく、私たちがこれまで訪れたどの場所とも全く違っていた。ここの古い品物の一つ一つが、それぞれの物語を持っているかのような感覚があった。

そして私は、店主の姿を見た。

彼は隅にある高い木製のカウンターの後ろに、ぴくりとも動かずに座り、周りの古い品々と共に、ほとんど闇に溶け込んでいた。もし、揺らめくランプの光が彼の顔の片側を照らしていなければ、私たちはそこに人がいることにさえ気づかなかっただろう。彼は非常に年老いて見え、髪は真っ白で、まばらな数本が、うなじできちんと

まとめられていた。彼は古い、襟の高い、黒い絹の長衣を着ていた。体は小さく、背中は少し丸まっていたが、その目は奇妙だった。彼の目は、墨老先生（モーラオシェンション）や、毛糸を売っていた老婆のように澄んではない。それは深く、漆黒で、瞬きもせずに私たちを見ていた。その視線は、詮索するようでも、好奇心に満ちているようでも、あるいは客を誘うようでもない。まるで、この世のあまりにも多くのことを見てきた者が、今、自分の領域に足を踏み入れた二人の見知らぬ客を、ただ静かに記録しているかのようだった。

私たちが中に入っても、彼は一言も発さず、立ち上がって挨拶することもしなかった。ただそこに、両手をカウンターの上に置き、私たちをまっすぐに見つめて、静かに座っていた。彼のあまりの沈黙と、店の特別な空気に、私とチン・リンは少し気圧され、木の床の上を、忍び足で歩かなければならなかった。

「こ…こんにちは」私は、息苦しさを紛らわすために、先に声をかけた。「通りがかりに、面白いお店だと思ひまして、少し拝見させてください」

店主は、ほんの僅かに、静かに頷いただけだった。彼は何も言わなかった。その目はまだ私たちを見ており、そ

の視線はまるで、私たちの頭の中の考えをすべて読み取っているかのようなだった。チン・リンは私にさらに身を寄せた。妻もまた、少し緊張しているのが分かった。この場所と、この店主には、何か普通ではないものがある。好奇心をそそられると同時に、用心しなければならないと感じさせた。

随縁閣（ずいえんかく）。謎めいた店主。時の痕跡に満ちた、古びた品々。ふと、一つの考えが私の頭に浮かんだ。私たちがここに来たのは、偶然ではない。店の名前のように、おそらくは「縁」が、私たちをここへ、まだ見ぬ何らかの岐路へと、導いたのかもしれない。

品物一つ一つに宿る、選択と運命の物語

店主は依然として沈黙を守り、店内の空気をさらに特別なものにしていた。私とチン・リンは顔を見合わせ、そして、より注意深く品物を見て回り始めた。通路もまた狭く、いくつかの棚や、床にさえ置かれた品々の間を、

縫うようにして進まなければならなかった。私は数え切れないほどの古い品々に目を走らせた。どれも神秘的に見えたが、同時に、何かがある種の力で、私たちを密かに導いているかのような感覚があった。

チン・リンは、古びた小さなガラスケースの前で立ち止まった。中には、翡翠や銀の装身具がいくつか納められている。妻の目は、一つの翡翠のペンダントトップに釘付けになった。それは鮮やかな緑色で、鳳凰の姿が巧みに彫られていたが、片方の翼には、よく見なければ分からないほどの、小さなひびが入っていた。その翡翠は、薄い埃の層をまもってはいたが、どこか物静かで、誇り高い美しさを放っていた。

「きれいな翡翠…」とチン・リンは、ほとんど独り言のように、そっと言った。彼女は人差し指をガラスケースの表面に滑らせ、まるでそれに触れたいかのようにだった。

ちょうどその時、店主の低くしゃがれた声が、彼が身じろぎもせずに座っているカウンターの後ろから、ゆっくりと響いた。「翼の折れた鳳凰。美しいことは確かだが、それは、後悔の美しさだ」

その不意の声に、私とチン・リンは少し驚いた。私たちは振り返った。彼はまだそこに座り、その漆黒の目は、ケースの中の翡翠のペンダントをまっすぐに見つめていた。

「後悔、ですか？」チン・リンは、好奇心に満ちた声で問い返した。

店主は私たちを見ず、その目は依然として翡翠に注がれていた。「その昔の持ち主はな」と彼は、抑揚のない声で言った。「才色兼備の女性で、家柄もまた、並ではなかった。彼女は二つの道の前に立たされた。一つは、家族の意に従い、安穩と裕福に生きる道。もう一つは、愛に従い、貧しいが気の合う絵描きの元へ行く道だ」彼は少し間を置いた。「彼女は、最初の道を選んだ。栄華富貴に不足はなかったが、心は満たされなかった。生涯、絹の衣に身を包んで生きたが、真に心が安らぐ日は一日もなかった。あの鳳凰の翼のひび割れは…その選択の、痕跡なのだ」

彼は簡潔に語った。その声には何の感情もなかったが、聞く者には重く響いた。商品売るための作り話のようではなく、まるで、品物そのものから彼が読み取った、一つの真実のようだった。チン・リンは、言葉では言い

表せない表情で、ペンダントをじっと見つめていた。翡翠の美しさは、もはや単純なものではなく、どこか悲しみを帯びているかのようだった。

私は背筋が少し寒くなるのを感じた。まさか、ここの品物の一つ一つに、それぞれの物語があるというのか？選択と、その結果についての物語が？私は店の奥へとさらに進み、低い木の机の上に置かれた、埃まみれの銅製の羅針盤に、目を奪われた。それは現代の羅針盤とは似ておらず、その方位針は小さな亀の形をしており、甲羅には、理解しがたい古の記号がいくつか刻まれていた。銅の筐体は色褪せ、ガラス面は少し曇っていたが、亀の形の針は静かに、闇の中のある方向を指し示していた。

私は無意識のうちに、羅針盤の冷たいガラス面にそっと手を触れた。奇妙な感覚が指先を伝わり、まるで、ある記憶がよぎっては消えていくかのようだった。巨大な嵐に見舞われた大きな商船団のイメージ、そして、甲板に立つ、壮年の男性。彼は、これと全く同じ羅針盤を固く握りしめ、その目は、決意と、少しの当惑を浮かべて、風雨を見つめていた。

「道を探す羅針盤」店主の声が再び響き、私の頭の中のイメージを断ち切った。私は振り返り、彼が私を見てい

るのに気づいた。その黒い目は、私が今見たものを、読み取っているかのようだった。「それはかつて、ある商人が海上の交易路を見つけ出し、数え切れないほどの富をもたらすのを助けた」

私は黙って、彼が話を続けるのを待った。物語はまだ終わっていないと、直感が告げていた。

「しかし」と彼は、変わらず抑揚のない声で続けた。「その道の上で、事を成すために、彼は多くのことを選択せねばならなかった。時には良心に背き、時には友を捨て、時には策略を用いた。この羅針盤は、彼が正しい風向き、潮の流れ、利益の方向を見つけるのを助けたが、道理の、人の情けの進むべき道は、示さなかった」彼は、ほとんど聞こえないほどの、ごく軽い溜息をついた。

「晩年、彼は大層裕福だったが、独りだった。金の山の上で死んだが、そばには親しい者一人いなかった。羅針盤は富の方向は正しく示したが、心の方向は見失ってしまったのだ」

羅針盤の物語は、選択と運命についての、また別の例だった。物質的な成功は、時に、心の空虚さという代償を伴う。この店の古い品物の一つ一つが、人生の岐路、人の運命を形作った決断の、証人であるかのようだった。

それらは鏡のように、ただ昔の持ち主の過去を映し出すだけでなく、まるで、今それらを見つめている者たち、私やチン・リンのような者たちに、自分自身の選択について、密かに問いかけているかのようだった。

私は、物で溢れた部屋を見渡した。どれも時の埃の下で静まり返っていたが、それらが無言であるとは感じられなかった。それらは、まるでそれぞれの物語を囁いているかのようだった。夢、愛、裏切り、勇気、弱さ、犠牲についての物語…。そのすべてが、重要な時点での選択を中心に、展開されている。この随縁閣（ずいえんかく）という店は、ただの骨董店ではない。まるで、いくつもの人生が、沈黙の中で交差する、運命の交差点のようだった。

修煉における「定められた運命」と「自由意志」の間で

翼の折れた鳳凰のペンダントと、方角を見失った羅針盤の物語は、私たちが随縁閣（ずいえんかく）で他の古い品

物を見て回っている間も、私とチン・リンの頭の中でずっと渦巻いていた。まるで、ここの品物の一つ一つが、選択とその結果、そして過去の決断によって作り上げられた運命の道についての、一つの教訓であるかのようにだった。

私は、店主が座っている木のカウンターに近づいた。彼は以前と同じように静かに座り、目の前の空間を見つめ、何か物思いに耽っているかのようにだった。揺らめくランプの光が、彼の年老いた顔に光と影の筋を落とし、彼をさらに神秘的に見せていた。

「ご主人」と私は、心の中では混乱していたが、できるだけ平静を装って声をかけた。「先ほどお話しくださった物語…これらの品物の昔の持ち主たちの話は…まるで、彼らの運命が、誤った選択によって決定づけられてしまったかのようです。では、人生のすべては、あらかじめ定められているのでしょうか？ 私たちは、自分の道を変えるために、本当に自由に選択することができるのでしょうか？」

これは、編み物の老婆から縁と業力（ごうりき）について聞いて以来、私をずっと悩ませていた問いだった。もしすべてが前世の業の結果であり、もしすべての縁があら

かじめ結ばれているのなら、現在において努力することに、一体何の意味があるというのか？

店主はゆっくりと私の方を向いた。今度、彼の目はもはやどこかを見つめているのではなく、私の目をまっすぐに見つめていた。それは、私の考えていることをすべて読み取っているかのような、非常に深い眼差しだった。彼はしばらく黙っていた。店内は再び、重苦しいほどの静寂に包まれ、ただ、部屋の隅にある古い柱時計の、かすかなカチコチという音だけが聞こえていた。

そして彼は、変わらず低くしゃがれた、ゆっくりとした声で口を開いた。「運命と自由意志…それは、一枚の硬貨の裏表のようなものですよ、若いの」

彼は、骨ばった、痩せた指で、背後の壁にかかっている山水画の巻物を指差した。その絵には、連なる山々、立ち込める霧、そして山腹に、見え隠れする、曲がりくねった小さな小道が描かれていた。

「各人の人生の道も」と彼は言った。「あの絵の中の小道のようなものだ。その道は、山や川のあり様によって、あらかじめ形作られている。それらは、業力（ごうりき）のようなもの、自分が生まれた境遇、家族、社会のよう

なものだ。それは、自分が以前に行った業によって、自分が生まれた時の家族や社会によって、作り出された『運命』の部分だ。その道は、困難かもしれんし、容易かもしれん。広いかもしれんし、狭いかもしれん」

彼は間を置き、探るように私を見た。「しかし」と彼は声を強めた。「その道を歩む者には、歩き方を選ぶ完全な権利がある。彼は、水たまりや、鋭い石を避け、慎重に歩くことができる。疲れた時に立ち止まって休むことも、もっと速く進もうと努力することもできる。他の者と助け合って進むことも、利己的に先を争うこともできる。さらには、古い道がもはや合わないと感じたなら、たとえそれがより困難であっても、別の道へ曲がることを選ぶことさえできるのだ」

「それはつまり…？」私は、少し理解し始めたのを感じながら尋ねた。

「つまりだ」と彼は答えた。「最初の風景、最初の道は、ある程度、過去の業によって定められているかもしれん。それが『運命』だ。しかし、君がどのように歩むか、一つ一つの岐路での選択、それが『自由意志』だ。それは、誰も君の代わりに決めることはできん。そして、まさにこの現在における選択こそが、絶えず新たな業を生み出

し、前方の道を変え、ひいては最終的な目的地さえも変えることができるのだ」

彼は再び、店内の古い品々の方へ目をやった。「これらの品物の昔の持ち主たちは、皆、それぞれの道を持っていた。恵まれた境遇に生まれながら、後退する道を選んだ者もいる。困難から出発しながらも、努力し、正しい道を選んで、上へ登っていった者もいる。問題は出発点にあるのではない。道のりの、すべての選択にあるのだ」

「では、修煉についてはどうでしょうか？」チン・リンが不意に尋ねた。妻は、いつの間にか私の隣に立っていた。「修煉は、人が自分の道をよりはっきりと見極め、より良い選択を下す助けになるのでしょうか？」彼女の問いは、私たちが隠者や、墨老先生（モーラオシェンション）から聞いた修煉についての事柄が、彼女に、本当に深く考えさせていたことを示していた。

店主はチン・リンの方を向き、ごく軽い、ほとんど見えないほどの笑みが、その顔をよぎった。「良い問いですね」と彼は言った。「修煉とは、もし正しい道を歩むならば、まさに、自分の心を清らかにし、人の善良な本性や、本来備わっている明晰さを曇らせる、欲望や執着を取り除くための方法なのだ」

「心が清らかで、静かになれば、人は物事をより正しく見ることができる。感情や、私利私欲に目を眩まされることがなくなる。彼らは、何が善で、何が悪か、何が正しく、何が間違っているかを知るようになる。そこから、彼らは、道理に、良心に、より合致した事柄を選択することができるようになる」

彼は間を置き、その声は少し真剣味を増した。「さらに、正しい修煉は、人が過去に犯した悪業を減らし、徳や福をさらに積む助けにもなる。業が変われば、あの『運命』の道もまた、それに伴って変わることがある。困難な道が、より容易になるかもしれん。暗い道が、より明るくなるかもしれん。それこそが、心性を修めることによって、運命を変える力なのだ」

店主の説明は、私たちの頭の中の多くのことを、照らし出したかのようだった。それは、業や運命を否定するものではなかったが、各人の自由意志と選択を、特にその人が正しい修煉の道を歩む時のそれを、強調していた。運命とは、自分を縛り付けるものではなく、むしろ川のようなものであり、我々は、自分の船を、良い流れに沿って操り、危険な場所を避け、そして流れそのものを、より良くすることさえも、学ぶことができるのだ。

私は、体全体が軽くなるのを感じた。私は、自分が運命を完全に支配することはできないが、それを、日々の、一つ一つの選択によって、それに影響を及ぼす権利と責任を持っていることを、理解した。そして修煉の道とは、彼の言葉によれば、まさに、その正しいことを行うための、明晰さと力を得る、最良の方法なのだ。

目の前の岐路と、未来の可能性

店主の運命、自由意志、そして修煉についての説明の後、店内の空気はどこか変わっていた。もはや最初の頃のような重苦しさはなく、まるで、何かが解き明かされたかのようにだった。私の頭もまた、軽くなったように感じられたが、同時に、目の前の、一つ一つの選択の重みを、よりはっきりと理解していた。

私たちが店主に礼を言って帰ろうとした時、私の目は自然と、店の最も暗い隅、黒檀の低い棚の上に置かれた一つの品物に、吸い寄せられた。それは、他の品々のよう

に、華やかでも、奇妙でもない骨董品ではなかった。ただの、四角い、小さな木の箱で、濃い茶色をしており、古びてはいたが、まるで誰かがつい先ほど丁寧に拭いたかのように、不思議なほど清潔だった。私が注意を引かれたのは、箱の蓋に鍵も、模様の彫刻も何もなく、ただ、ランプの光の下で、わずかに鈍い光沢を放つ、滑らかな木肌があるだけだったことだ。それはそこに、静かに、控えめに置かれていたが、私に、まるでその中に何か非常に重要なものが収められているかのような、非常に奇妙な感覚を与えた。

私は無意識のうちにその箱に近づき、チン・リンもまた、好奇心に駆られて後に続いた。自然と、それを開けて中を見てみたいという衝動に駆られたが、同時に、少しの躊躇い、もしこの箱を開けてしまえば、もはや後戻りのできない何かが起こるのではないかという、漠然とした感覚もあった。

私は店主の方をちらりと見た。彼はまだカウンターの後ろに座っていたが、その黒い目は今、その木の箱を見つめ、そして私たちを見ていた。不可解な笑みが、再び彼の口元をよぎった。

「その箱は…」チン・リンは、少し躊躇いがちに、そっと尋ねた。「中には何が入っているのですか？」

店主はすぐには答えなかった。彼はただ私たちを見、そして再び箱を見た。その目は非常に深かった。「中身、かね？」彼は、低くしゃがれた声で繰り返した。「宝の地図かもしれん。あるいは、古からの呪いかもしれん。あるいはまた…ただの空箱かもしれん」

彼は間を置き、私たちの目をまっすぐに見つめた。「それは、開ける者による。その者の縁と、選択によるのだ」

彼の言葉は、聞けば曖昧だが、非常に重みがあった。あの模様のない木の箱は、突然、私たちがまさに立っているかのような、岐路そのものの象徴となった。この道を探求し続け、開かれたばかりの神秘的な精神世界へと、さらに深く分け入るのか。それとも、慣れ親しんだ、科学的で、理性的な生活へと、引き返すのか。どちらの道を選んでも、得るものと失うものがある。それは、あの箱の中にあるかもしれないものと、同じようだった。

私はチン・リンを見た。妻の目もまた、迷いに満ちていた。彼女は店主の意図を理解していた。私たちは、まるで目に見えない扉の前に立っており、それを通り抜ける

かどうかは、自分自身で決めるしかない。その選択は、これからの数日間に影響を及ぼすだけでなく、前方の長い道を形作り、ひいては、私たちが聞いてきた、業力(ごうりき)や輪廻の話にさえ、関係するかもしれない。

私たちはそこにしばらくの間立ち、暗い隅で静まり返る木の箱を見つめていた。私たち二人とも、手を出してそれを開けることはなかった。おそらく、今はまだ、決断する時ではなかったのだ。あるいは、おそらく、自分がそのような岐路に立っていると認識すること自体が、すでに重要なことだったのかもしれない。

ついに、私は深く息を吸い込み、振り返って店主に頭を下げた。「貴重な助言をいただき、ありがとうございます」

チン・リンもまた、会釈した。店主はただ静かに頷くだけで、その目は変わらず、以前と同じように、神秘的で、深かった。

私たちは背を向け、随縁閣(ずいえんかく)を出た。背後には、骨董品と、運命の物語に満ちた、物静かな空間が残された。ドアの上の風鈴が、再びかすかな音を立て、

そして鳴りやんだ。外の午後の陽光はすっかり色褪せ、一日がもうすぐ終わることを告げていた。

古い石畳の路地を歩きながら、私の心は多くのことでいっぱいだったが、同時に、何かより明確になったものもあった。随縁閣（ずいえんかく）と、その謎めいた店主は、私たちに最終的な答えを与えはしなかったが、選択の力と責任について、より深く理解させてくれた。前方の道はまだぼんやりとしており、どれほどの可能性と岐路があるか分からない。しかし今や、私たちの一步一步、一つ一つの選択が、自らが遭遇するであろう、まさにその「運命」を、作り上げる一助となっていることを、私たちは理解していた。答えのない木の箱についての問いと、それが示唆する未来の可能性は、きっと、これからも私たちについてくるだろう。翌日、それらの思いを胸に、私たちは鎮遠（ちんえん）を離れ、以前から訪れる予定だった、有名な大仏がある楽山（らくさん）へと、旅を続けた。

樂山大仏と世俗の観光地

翌日、木の箱と人生の選択についての思いを胸に、私たちは鎮遠（ちんえん）を出発した。車は私たちを南へと、樂山（らくさん）へと運んだ。そこには、これまで何度も耳にはしていたが、まだ目にする機会のなかった大仏があった。チン・リンもまた、心待ちにしているようだった。なぜなら、ここは中国で最も有名な仏教遺産の一つだからだ。

樂山（らくさん）への道はそれほど遠くなく、道中の風景も、棚田や点在する村々が織りなす、なかなか美しいものだった。到着して、私がまず印象を受けたのは、この地域の規模だった。私たちがこれまで訪れた小さな寺院や、人里離れた庵とは違い、樂山（らくさん）は、広大な駐車場が様々な観光バスで埋め尽くされ、人の波が絶えることのない、非常に大きな観光複合施設だった。

私たちは人の流れに沿って、観光エリアへと入っていった。大仏の全景を見るには、川から船に乗るのが最善の方法だった。私たちの乗った船は、仏像が彫られた崖へと、ゆっくりと近づいていった。巨大な仏像が次第に姿を現した時、その圧倒的な存在感は、実に言葉では言い

表せなかった。高さ七十メートルを超える弥勒仏の坐像が、赤い砂岩の崖に直接彫り込まれ、岷江（びんこう）、大渡河（だいとが）、そして青衣江（せいいこう）の三つの川が合流する地点を見下ろしていた。その建造物の規模は、特に、それが千年以上も前に造られたと考えると、実に驚くべきものだった。私は、古の人々がどのようにして、これほど偉大な作品を創り上げたのか、想像しようと努めた。仏像の頭は山の頂と肩を並べ、その足は川に置かれ、その姿は荘厳でありながら、どこか慈悲深さを帯びていた。遠くから見ると、仏像全体がまるで山と一体化しており、人の手と自然との、奇跡的な融合を見せていた。

チン・リンもまた、非常に感動しているようだった。彼女は黙って見つめ、時折、カメラを上げて数枚の写真を撮っていた。文化を研究する者である妻にとって、このような遺産を目の当たりにすることは、非常に特別な体験であると、私は知っていた。

しかし、建造物の壮大さとは裏腹に、私は周りの空気にも、注意を払わずにはいられなかった。様々な言語で絶え間なく流れるアナウンス、人々の騒がしい話し声、川沿いや通路で土産物売る人々の呼び声。船を降りた後、

私たちは、仏像にさらに近づくために、崖の横にある階段を登ってみた。高く登るにつれて、人の波はますます増え、時には、互いに押し合わなければ進めないほどだった。仏像の周りには、小さな仏像、腕輪、数珠から、軽食や飲み物まで、ありとあらゆるものを売る露店が、数多く並んでいた。中には、古代の衣装を借りて写真を撮る人々もいた。その光景はどこか雑然として、賑やかで、私が神聖な場所について抱いていた、静かで荘厳なイメージとは、全く異なっていた。

山にある隠者の庵の、ほぼ完全な静寂や、忘憂鎮（ワンヨウジェン）の、時を超越した空気、あるいは黄龍溪（こうりゅうけい）の、素朴で飾り気のない様子と比べると、樂山（らくさん）は全く異なる様相を呈していた。ここは、まさしく世界的に有名な観光地であり、それに伴うあらゆる賑やかさと、商業的な要素を備えていた。多くの観光客を惹きつける場所では、それは必然的なことなのかもしれないから、私が何かを批判するつもりはなかった。しかし正直なところ、そのごった返す人の波と騒音の中で、私は、以前の場所で感じたような、特別な「エネルギー」や、精神的な奇遇を、感じることはなかった。この旅は、私にとって、主に、偉大な建築物と彫刻、そし

て古の人々の信仰と創造力の証を、鑑賞するためのものだった。

私たちは、近くにある、同じく非常に靈驗あらたかだと聞く、いくつかの古い寺院を訪れるために、樂山（らくさん）にもう数日滞在するつもりだった。しかしある夜、宿で夕食を食べていると、チン・リンが不意に、アメリカからの電話を受けた。電話口の彼女の声は、初めは驚き、そして、狼狽と、嗚咽に変わった。私は、妻の目が赤くなっているのを見た。電話を切った後、チン・リンは私の方を向き、震える声で言った。「あなた…上海にいる、私の母方の従兄が…突然亡くなったって。母から、たった今連絡があったの」

それは、チン・リンが上海にいた頃、かなり親しかった従兄だった。後にアメリカへ渡ってからは、連絡を取る機会も少なくなっていたが。あまりにも突然の知らせに、私たち二人は呆然とした。私たちは、興味深い発見に満ちた旅の真っ只中にいたが、家族に不幸があったとあっては、それを無視することはできなかった。

「すぐに上海に戻らなければ」とチン・リンは、非常に悲しみながらも、より落ち着いた声で言った。「彼にお

線香をあげたいの。それに、叔母さんや叔父さんたちを、
励ましたい」

私は妻の決意を理解した。旅が中断されることには少し
名残惜しさがあつたが、これは、すべきことだった。

「分かったよ」と私は、彼女の手を握った。「できるだけ
早く、上海へ行く手はずを整えよう」

こうして、私たちの四川（しせん）をさらに探求する計画
は、突然の変更を余儀なくされた。旅は予定通りには続
けられず、その代わりに、故郷からの悲しい知らせと、
上海へと向かう、急な決断があつた。

* * *

第八章：表紙のない本

近代的な上海と、偶然の紹介

四川（しせん）の山岳地帯から上海（シャンハイ）への移動は、まるで一つの世界から別の世界へと足を踏み入れるかのようだった。快適な高速鉄道でわずか数時間、私たちは苔むした古鎮や、霧深い山々を背後に置き、そして気づけば、圧倒されるほど華やかで、賑やかな上海の真ん中に立っていた。摩天楼が林立し、ネオンの光が夜通し輝き、車の流れは絶えることがない。私にとって、これは大都市の、かなり見慣れた光景だったが、チン・

リンにとっては、その感情はもっと複雑だっただろう。ここは彼女が生まれ、アメリカへ渡る前に幼少期を過ごした場所なのだ。

私たちが上海に来たのは、少しの戸惑いと、そして悲しみを抱えてだった。この急な旅の主な目的は、チン・リンの従兄の葬儀に参列するためだったからだ。彼の突然の死は、こちらの家族全員を驚かせ、悲しませていた。駅に着くとすぐに、チン・リンの叔母と叔父が迎えに来てくれていたが、その顔には、皆、悲しみの色が漂っていた。その後の数日間、私たちは主に親戚の家で過ごし、彼らと共に儀式に参加し、風習に従って弔問客を迎えた。いずれにせよ、ここはチン・リンの母方の親戚であり、この時に顔を出すことは、長年の疎遠が関係を以前ほど親密なものではなくならせていたとしても、一族への敬意と情を示す上で、すべきことだった。家の中の空気は、かなり沈んでいた。チン・リンもまた、従兄との幼い頃の思い出を振り返り、少し悲しみ、物思いに沈んでいたが、主には、家族との分かち合いと、礼儀を守ることに徹していた。

そのような時、私もまた、合間を見てアメリカへ電話をかけ、子供たちの様子を尋ねた。幸い、彼らはもう大き

く、物分かりも良かったので、両親が家庭の事情で、予定より長く中国に滞在することになっても、それほど心配はしていなかった。

チン・リンの従兄の埋葬式が終わると、家の中の緊張も少し和らいだ。人々は、腰を据えて話をする時間が、より多く持てるようになった。ある夜、家族で夕食を共にしていると、チン・リンの叔父の友人が遊びに来た。彼は陳(チェン)という姓で、叔父と同じくらいの年頃、温厚で、よく笑う人に見えた。家族の事情について尋ねた後、話は次第に時事問題や、健康のことへと移っていった。

話の途中、陳(チェン)さんが不意に、最近、彼の近所で多くの人が行っているという、ある気功について口にした。「近頃、わしのところでは、法輪功(ファルンゴン)という気功をやる人が、たくさんいますよ」と彼は、ごく自然な口調で言った。

私とチン・リンは、陳(チェン)さんのその言葉を聞いて、顔を見合わせた。法輪功(ファルンゴン)という名前には、どこか聞き覚えがあった。アメリカで、インターネットか、あるいはいくつかの英字新聞で、この功法が中国で弾圧されているという情報に、ざっと目を通したことが

あったような気がする。その時は、特に深く調べる気もなく、ただ、そのようなことがあるらしいと、ぼんやりと知っているだけだった。

「法輪功（ファルンゴン）？」チン・リンは、少し驚き、そして用心深い声でそっと尋ねた。「陳（チェン）おじさん、それは、もしかして…政府に弾圧されているという、あの気功ですか？アメリカで、このことについてのニュースを、いくつか読んだ記憶があるのですが」

陳（チェン）さんは、チン・リンのその問いを聞いて、少し驚いた表情を見せ、そして頷くと、声もまた少し小さくなった。「ああ…はい、お嬢さんもそのことをご存知でしたか。確かに、そういうことがあります。健康に良く、真・善・忍（しんぜんにん）に基づいて善人になるよう教える功法が、どうしてそうなってしまったのか、理解できませんがね」彼はため息をつき、そして、できるだけ普段通りの声を保とうとしながら、続けた。「しかし、多くの人々は、まだ信じて、こっそりと煉功していますよ。わしの近所の年寄りたちは、これを始めてから、皆、元気になり、気持ちもずっと明るくなりました。以前は腰痛にずっと悩まされ、歩くのも困難だったお婆さ

んが、数ヶ月続けただけで、今では軽快に歩き、顔色も血色が良くなりました」

彼はここまで話すと、さらに声を潜め、以前よりも用心深く周りを見回した。「まあ、この話は複雑ですから、ここで深く話すのはやめましょう」彼はすぐに別の話題へと移した。明らかに、この敏感な問題に、深入りしたくないようだった。

陳(チェン)さんの言葉は、短く、どこか避けるようなものではあったが、私とチン・リンの心に、多くの思いを掻き立てた。ということは、私たちがかつてざっと目にした情報は、真実だったのだ。良さそうに見え、多くの人々に信じられている気功が、政府によって弾圧されている。ここで、一体何が起きているのだろうか？私たちの最初の好奇心は今、少しの戸惑いと、そして、事の真相をより深く知りたいという衝動を伴っていた。「法輪功(ファルンゴン)…真・善・忍(しんぜんにん)…弾圧…」それらの言葉が、私たちの心の中で、より鮮明に浮かび上がり始めていた。

街角での縁と、貴重な一冊の本

チン・リンの叔父の友人である陳(チェン)さんとの会話から数日後も、「法輪功(ファルンゴン)」、「真・善・忍(しんぜんになん)」、そして彼が口にした「敏感な」空気という言葉が、私の頭の中でずっと渦巻いていた。妻もまた、そのことについて多くを考えているようだった。ほんのかすかな情報ではあったが、それは名状しがたい好奇心と、少しの戸惑いを掻き立てた。

ある週末の朝、上海(シャンハイ)の天気はかなり良かった。数日間、主に親戚の家で家庭の用事を手伝って過ごした後、私たちは気分転換に散歩に出ることにした。チン・リンは、彼女が幼い頃によく遊んだという、叔母夫婦の家の近くにある公園へ行きたがった。その公園は市の中心部にあり、かなり広く、緑も多く、早朝から運動をしに来る人々で非常に賑わっていた。ここの空気は活気に満ち、現代的で、私たちがこれまで訪れた古鎮の静けさとは、全く異なっていた。

私たちは木陰の石のベンチを見つけ、静かに人々を観察していた。太極拳をする人、音楽に合わせて踊る人、早

足で歩く人。チン・リンは手帳を取り出し、時折何かを書き留めていた。一方、私はいつものように肩に鞆をかけ、これまでの体験と、そして陳(チェン)さんが語ったばかりのことについて、とりとめもなく考えていた。あの法輪功(ファルンゴン)という功法は、本当に彼が言うほど良いものなのだろうか。そして、なぜ政府から目をつけられているのだろうか？

物思いに耽っていると、私は不意に、近くでの異常なざわめきに、はっとした。私たちが座っている場所からそう遠くない、公園の入り口の方で、四十歳くらいの、学者風で、眼鏡をかけ、簡素なシャツを着た男性が、私服姿の、かなり人相の悪い二人の男に、行く手を阻まれているのが見えた。彼らの間の会話は緊張しているようで、学者風の男性は何かを説明しようとしていたが、他の二人は聞く耳を持たない様子で、中には、彼の肩を強く押す者さえいた。

漠然とした不安感が込み上げてきた。あの二人の男の振る舞いは、一般人とは違う。むしろ、私服警官のようだ。それは、私が少しずつ見分けることを学び始めていたことだった。学者風の男性は少し怯えているようだったが、

それでも平静を保とうとし、逃げ道か助けを求めるかのように、そっと周りを見回した。

そして、事態は非常に素早く展開した。二人の私服警官が油断している隙に、学者風の男性は不意に一步下がり、電光石火の速さで上着のポケットから小さな物を取り出し、私たちが座っている木の根元近くにある、装飾用の二つの大きな岩の隙間に、巧みにそれを押し込んだ。その行動は、控えめで、そしてあまりに速く、もし偶然、その瞬間にその方向を見ていなければ、私には決して見えなかっただろう。その直後、二人の私服警官は彼に詰め寄り、その腕を固く掴み、身体検査を始めた。

私とチン・リンは呆然と顔を見合わせ、心臓が激しく鼓動していた。明らかに、あの男性は大きなトラブルに巻き込まれており、彼が隠したばかりの物は、間違いなく、あの警官たちが探しているものだった。それは何だ？陳（チェン）さんが口にした、法輪功（ファルンゴン）に関係するものだろうか？

二人の警官は、学者風の男性を非常に念入りに調べたが、何も見つけられなかった。彼らの表情は、苛立ちと疑念に満ちていた。彼らは周りを見回し始め、その鋭い視線は、私たちが座っている場所を含む、近くのエリアを掃

くように動いた。私は平静を装い、まるで何も気にしていないかのように、行き交う人々の流れへと視線を移したが、心の中は燃えるようだった。もし彼らが、あの物を見つけてしまえば、学者風の男性は、間違いなく危険に陥る。

一つの考えが、私の頭をよぎった。何かをしなければ。彼らにあれを見つけさせてはならない。弱者を助けたいという反射的な思いと、そしておそらくは、聞いたばかりの話の後で、特に、隠された物への少しの好奇心から、私はチン・リンの方を向き、目で合図を送った。彼女は、その顔に明らかな心配の色を浮かべながらも、意図を理解し、静かに頷いた。

私は深く息を吸い込み、できるだけ自然に見えるように努めた。私は立ち上がり、ぶらぶらと散歩するふりをし、あの物が置かれた岩の隙間を、何気なく通り過ぎた。通り過ぎる際、二人の警官が学者風の男性を尋問するために背を向けているのを利用し、私は、まるで地面に落ちた何かを拾うかのように、素早く身をかがめた。そして、一瞬のうちに、私の手は、岩の隙間にある、硬く、ごつごつしたものに触れた。表紙のない、小さな本。冷たく、硬い。私はそれを巧みに拾い上げ、肩にかけていた鞆に

素早く押し込み、そして、心臓はまだ乱れ打っていたが、何事もなかったかのように、歩き続けた。

私はさらに数歩歩き、そして、平静を装いながら、チン・リンが座っている場所へ戻った。チン・リンは私を見た。その眼差しには、心配と、私の無謀さへの少しの感嘆が入り混じっていた。二人の私服警官は、周りで何も不審なものを見つけられず、そしておそらくは、公共の場で大きな注目を集めたくないという思いから、しぶしぶ、学者風の男性を解放した。しかし、立ち去る前に、彼らは脅すような口調で何かを言い、その目は、依然として彼を絶えず監視していた。明らかに、彼はまだ、監視から逃れてはいなかった。

二人の警官が姿を消した後、学者風の男性はしばらくじっと立ち、服と眼鏡を整えた。その顔にはまだ少しの動揺が残っていたが、落ち着きを取り戻していた。彼は岩の隙間の方へ視線を送り、そしてその視線は、私たちのところで止まった。彼は何かを悟ったかのように静かに頷き、そしてゆっくりと、私たちの方へ歩み寄ってきた。

私は立ち上がり、少し緊張するのを感じた。今や、あの本は私の鞆の中に、きちんと収まっている。

「ありがとう」と、近づいてきた男性が、小さな声で言った。その声は、先ほどの危険な状況とは全く対照的に、穏やかで、丁寧だった。彼は私の目をまっすぐに見つめた。「あなたが…助けてくれたのですね」

「いえ」と私も、声を潜めて答えた。「彼らのあなたへの扱いが、少し正しくないように見えただけです。これは…あなたのものですよ？」私は慎重に、鞆の方へ手を伸ばし、本を取り出す準備をした。

男性は慌てて手を振り、周りを見回すその目には、明らかな警戒の色があった。「待ってください」と彼は静かに言った。「彼らはまだ、遠くから私を見張っているかもしれません。今これを受け取るのは、あなたにとっても、私にとっても、非常に危険です」

私は理解した。「では…私はこれをどうすれば？」と私は尋ねた。不本意ながら、非常に敏感なものと思われる品物の保管者となり、少し戸惑っていた。

男性は、深い感謝を込めた、誠実な眼差しで私を見た。「数日間、預かっていただけませんか？もっと安全になった時に、あなたに連絡を取る方法を探します」彼は少し間を置き、そして、探るような、しかし繊細な眼差し

で私を見た。「あなたは、外国人の方ですね？中国へは、ご旅行で？」

「はい、私たちは、華僑系のアメリカ人です」と私は答えた。

彼は静かに頷き、その顔に思案の色が浮かんた。「おそらく…あなたがこの本を拾ったのは、偶然ではないのでしょうか」と彼は、含蓄のある声で言った。彼は、本が収められている、私の鞆の方へ視線を向けた。「これは、非常に貴重な本です。それは、宇宙と人間の、高遠な道理について、そして、自らの善良な本性へと立ち返るための、真の修煉の道について、説いています」

彼はもう一度、私の目をまっすぐに見つめた。「もしあなたが、本当にこれと縁があるのなら、読んでみてください。もしかしたら、あなたと奥様が、この旅で悩み、探し求めている事柄の、答えが見つかるかもしれません」

そう言うと、彼は私たちにもう一度、静かに会釈した。「行かなければ。本当にありがとうございました。どうぞお気をつけて！」彼は急いで立ち去り、すぐに通りの人混みに紛れ、時折、警戒しながら後ろを振り返っていた。

私とチン・リンはそこに立ち、彼の姿が遠ざかっていくのを見送った。表紙のない本が、今、私の鞆の中で静かに眠っている。それは、物理的な重さはないが、私は、その心の重さを感じていた。貴重な本？宇宙の道理と、真の修煉の道を説く？またしても「縁」？見知らぬ男性の言葉と、私たちが目の当たりにしたばかりの、切迫した状況とが、私の内に、強烈な好奇心と、そして、ある種の責任感と、運命の奇妙な導きの感覚を、掻き立てていた。

その夜、叔母夫婦の家に戻った後、私たちは話し合った。家族の助けには非常に感謝していたが、この本を落ち着いて研究するため、そして、もしこの本が、私たちが思うように本当に「敏感な」ものであるならば、親戚に余計な迷惑をかけないためにも、私たちは、別に住む場所を探すことに決めた。数日後、叔母夫婦の家族に感謝を伝え、別れを告げた後、私たちは、上海の中心部から少し離れた、かなり静かに見える、小さなホテルを見つけた。

初めての『轉法輪』との接触——衝撃と、 惹きつけられる力

新しいホテルに落ち着き、プライベートで静かな空間を得た後も、数日前の公園での出来事の後、私の心はまだ動揺が収まっていなかった。私は慎重に、表紙のない本を鞆から取り出し、テーブルの上に置いた。

最初の印象通り、これは専門的に印刷された本ではなかった。表紙は全くなく、ただ象牙色の紙の束が、縁で数個の、かなり粗末に見えるホッチキスの針で留められているだけだった。最初のページにも、著者や出版社の名前はなく、ただ大きな太字の漢字で「論語」と、序論のタイトルとして記されているだけだった。よく見ると、印刷の質も所々かすれており、明らかに、人々が手渡しで広めるために、自主的に印刷した資料だった。その簡素な外見が、かえって私に、これが何か貴重でありながら、禁じられているものであるかのような感覚を抱かせた。

「本当にそれを読むつもり？」とチン・リンは、私が本を吟味しているのを見て、少し心配そうな声で尋ねた。

「なんだか…普通じゃないみたい。それに、公園での出

来事とも関係がある。もしトラブルに巻き込まれたらどうするの？」

「分かっている」と私は、本から目を離さずに答えた。「でも、あの男性が僕たちに預かってほしいと頼み、しかも、あんなに切実な言葉を口にしたんだ。中身が何なのか、知っておくべきだと思う。それに、僕も好奇心がある」さらに、この出会いと、この本を手に入れたことは、偶然ではなく、おそらく、私たちのこの旅における、何らかの采配ではないかという気がしてならなかった。

私は本のページをめくった。すべて簡体字の漢字だった。私よりもずっと中国語に詳しいチン・リンは、隣に座り、最初の数段落を、ゆっくりと音読し始めた。

本の中の言葉は、実に直接的で、簡素であり、チン・リンがかつて語ってくれた多くの古い経典のように、華美な言葉や、難解な比喩は使われていなかった。著者は、まるで読者に直接語りかけているかのようであり、ごくありふれた言葉遣いで、宇宙、生命、そして人間であることの真の目的といった、非常に壮大な概念を表現していた。本は「法」について、「修煉」について、「心性」の重要性について語っていた。

私たちが注意を引かれたのは、本には表紙に名前が記されていないにもかかわらず、内容の中で、著者が時折、自らが説いている本の名前について言及していることだった。それは『轉法輪』だった。例えば、「私のこの『轉法輪』という本は、非常に高い次元で法を説いている…」あるいは「私が『轉法輪』を伝える真の目的は、人を高次元へと済度することです…」といった一節があった。これらの細部のおかげで、私たちは、自分たちが手にしている本の名前を知ることができた。

初め、本の内容を理解するのは、決して容易ではなかった。「真・善・忍（しんぜんにん）」、「業力（ごうりき）」、「徳」、「次元」、「法輪」といった多くの言葉が、私たちが知っているのとは全く異なる、非常に深い意味で使われていた。宇宙の多層構造、異なる空間の同時存在、遥か昔の文明、そして病の根源的な原因が業力（ごうりき）であることについて説く段落もあった。これらのことは、私が学び、常に信じてきた現代科学の知識とは、完全に相反するように聞こえた。私の科学的な頭は、絶えず疑問を投げかけ、多くの点が信じがたく感じられた。

「信じがたいわよね？」とチン・リンは、異星人の種族と、彼らが人類社会に干渉していることについて説く一節を読んだ後で言った。「書き方はとても率直だけど、内容は…本当に、想像を超えているわ」

「その通りだ」と私は頷いた。「ただざっと読んだだけなら、これは作り話だと、人は簡単に思い込んでしまうだろう。でも…」私は言葉をためらった。「…なぜか、僕は読むのをやめたくないんだ」

これらの簡素なページから、非常に奇妙な引力が放たれていた。最初の懐疑にもかかわらず、私たちはいつの間にか引き込まれていた。深く読めば読むほど、私たちは、『轉法輪』の中で提示されている法理の、その脈絡、合理性、そして非常に緊密な体系に、驚嘆していった。本は、ただ概念を提示するだけでなく、その起源、本質、そしてそれらの間の関連性を、最も小さなものから最も大きなものまで、一貫して、そして驚くほど深く、丁寧に説明していた。

そして奇妙なことに、これらの法理は、私たちが旅の間中体験してきた、疑問や、奇妙な出来事を、完璧に説明しているかのようだった。本が真の気功と、各法門の修煉について説く時、張峰（ジャン・フォン）氏と、山の上

の隠者の姿が、再び心に浮かんだ。本が魂、業力（ごうりき）、輪廻、そして運命を変える可能性について説く時、墨老先生（モーラオシェンション）、編み物の老婆、そして随縁閣（ずいえんかく）の店主の言葉が、より明確になり、より高い次元から認識されるかのようなかった。本が異なる空間と、時間の相対性について説く時、忘憂鎮（ワンヨウジェン）での体験は、もはや完全に非合理的なことではなくなった。

特に、『轉法輪』が、「真・善・忍（しんぜんにん）」は宇宙の最高の特性であり、善人か悪人かを測る唯一の基準であり、そしてすべての修煉の基盤であると説いた時、私は心に強烈な衝撃を感じた。それは単純で、直接的でありながら、すべてを内包していた。それこそが、私が常に、知らず知らずのうちに探し求めていた、根源、指針そのものだった。

私は顔を上げてチン・リンを見た。妻の目もまた大きく見開かれ、感動と、名状しがたい喜びに満ち溢れていた。「ミン」と彼女は、少し震える声で言った。「この本…私、感じるの…これは、本物よ。これこそが、真の法よ！」

私は妻の感覚を理解した。私自身もまた、同様の悟りを体験していた。まるで、暗闇を歩く者が、不意に朝の光を見たかのような。まるで、砂漠で渴いた者が、涼しい泉を見つけたかのような。これまでの精神的な体験から得た、すべてのバラバラのピースが、どうやら『轉法輪』によって、一つの、完全で、明確で、そして意味に満ちた真理の絵画へと、並べ替えられたかのようなだった。私の科学的な頭には、まだ、さらに考える時間を要する点がいくつか残ってはいたが、心の奥深くでは、自分が、非常に貴重なものを見つけたと、私は知っていた。

深遠な法理と、内なる深い衝撃

その後の上海での日々、私たちの生活は、まるで『轉法輪』という名の表紙のない本を中心に回っているかのようなだった。この華やかな都市の有名な観光地を訪れる代わりに、私たちは時間の大部分をホテルの部屋で、共に読み、共に思索して過ごした。その本には奇妙な引力があり、私たちを惹きつけて離さなかった。昼間は、交代で読み、時には相手に音読して聞かせ、またある時は、

黙って一人で熟考した。夜になると、ランプの光の下で、私たちはしばしば夜更けまで、読んだばかりのことについて語り合った。心に深く響いたこと、あるいは、まだ理解しがたい点について。まるで二人で、これまでの人生で最も壮大な探求に、足を踏み入れているかのようにだった。

この本は、実に特別だった。読めば読むほど、その一言一句に、尋常ならざる深さを感じた。それは、私がこれまで知っていた、いかなる宗教書や哲学書とも似ていなかった。本は、無数の異なる空間を持つ宇宙といった、非常に大きな事柄から、物質の中の非常に小さな事柄まで、私が知る現代科学さえも遥かに超えることについて語っていた。本はまた、人間の真の起源についても語っていた。私たちはただこの肉体だけでなく、それよりも核心的な、元神（げんしん）と呼ばれる何かを持っており、この世に來た目的は、ただ物質を享受するためではなく、修煉し、自らの善良な本性へと立ち返るためなのだ。

「真・善・忍（しんぜんにな）」が宇宙の根本的な特性であるという概念は、何度も繰り返された。本は、これが単なる道徳的な基準ではなく、宇宙の法であり、万物の基盤であると説明していた。真の修煉とは、まさにこの

三文字に従って生き、日々、より善い人間になるよう努めることだという。本はまた、因果関係、業力（ごうりき）と徳についても多くを語っていた。それらは、人の幸不幸を決定し、そして、行動と心性を修めることを通して、変えることができるものだ。これらのことは、私に墨老先生（モーラオシェンション）と、編み物の老婆の言葉を思い出させたが、ここでは、すべてがより体系的に、そして深く説明されていた。

「あなた、この一節を見て」と、ある夜、チン・リンが、本のページを指差しながら、小さな声で言った。「心性を修めることが最も重要だと、本は説いているわ。功（エネルギー）の能力や、体の変化といった、他のすべては、自分が本当に心性を高めているかどうかから来るものだって。ただ座禅を組んだり、功を煉ったりすれば良いというわけではない。日常の暮らし、仕事、家庭での矛盾に直面し、自分がどこで間違っていたかを見つめ、闘争心、嫉妬心、顕示欲のような、良くない心を取り除いてこそ、初めて向上できるのだと」

私は注意深く、それに従って読んだ。その通りだった。本は、修煉が日常の暮らしと結びつき、現実とぶつかり、試練に直面してこそ、真の修煉であると強調していた。

これは、修行とは寺に入り、山に登り、俗世から離れることだという、私の以前の考えとは、全く異なっていた。

しかし、科学者である私にとって、最も衝撃的だったのは、人類の歴史と、現代科学の限界について書かれていることだった。『轉法輪』は、私が常に正しいと見なしてきたダーウィンの進化論とは全く異なる、人間の起源についての見方を提示していた。本は、地球上の人類は多くの文明を経験しており、先史時代の文明の中には、現代よりも遥かに高い科学技術レベルに達していたものもあったが、最終的には、社会の道徳が退廃したために、すべて滅ぼされたと語っていた。

さらに明確にするために、本は、現代科学では説明できないか、あるいは既存の理論と一致しないために、意図的に無視されている、いくつかの考古学上の発見について言及していた。例えば、ガボンのオクロで発見された、二十億年前に稼働していた原子炉。あるいは、多くの場所で発見された、巨人の足跡。奇妙な生物や、未確認飛行物体を描いた洞窟壁画。あるいは、文明人が存在するはずのない地層から発見された、信じがたいほど精巧に作られた人工物…。

「ありえない！」私はこれらの箇所を読んだ時、呟いた。私が長年学び、教えてきた歴史、生物学の知識全体が、根底から揺さぶられるかのようにだった。私は、非合理的な点を見つけようと努め、これらの現象に対する科学的な説明を、思い出そうとした。しかし実際のところ、主流の科学界が非常に無理な説明をしたり、「謎」として片付けたりしている、異常な考古学的発見は、あまりにも多かった。まさか、進化論は、ただの不完全な、あるいは誤った仮説に過ぎないのだろうか？まさか、地球と人類の歴史は、私たちが普段思っているよりも、遥かに複雑で、古いものなのだろうか？

それらの問いが、私の頭の中で渦巻き、私に深く考えさせた。一方では、私は科学への、私が生涯従ってきた実証的方法への信念を、容易には手放したくなかった。他方では、『轉法輪』の中の事柄と、本が提示する証拠とが、科学が手も足も出ないように見える事柄さえも説明できる、非常に奇妙な説得力を持っていた。私は、現代科学の限界を、認識し始めていた。それは、自分が見ることのできる物質世界に、あまりにも集中しすぎ、精神、魂の部分を無視している。それは、観察ツールと実験方法によって、狭められている。そして、時には、既存の

理解の外にあるものを、受け入れることを敢えてしないほど、硬直化してしまう。

科学に対する見方の変化と共に、私が人生のすべてを見る方法もまた、変わり始めていた。私は、自分のキャリアにおける成功、持っている金銭、社会的関係を、本が説く業力（ごうりき）と徳、そして人生の真の目的の光の下で、思い返してみた。すると、それらはもはや、それほど重要ではなくなっているように見えた。以前は普通、あるいは必要でさえあると考えていた、仕事や人生における野心、損得勘定、闘争が、今や、良くないもの、捨て去るべきものとして、現れた。

私はまた、私たちが経験してきた、奇妙な出会いの意味も、理解した。張峰（ジャン・フォン）氏と、あの奇妙な「脈診」。隠者の説法。墨老先生（モーラオシェンション）の、魂と業力（ごうりき）についての説明。忘憂鎮（ワンヨウジェン）での、時間についての体験。編み物の老婆の、輪廻の物語。随縁閣（ずいえんかく）での、選択についての教訓…。それらすべては、偶然ではなかった。それらは、準備段階、目に見えない誰かによる、巧みな導きのようなものだった。それは、私が物質だけを信じるという、凝り固まった見方を、徐々に和らげ、縁があ

った時に、真の大法を受け入れられるように、私を助けてくれたのだ。

私たちはまた、法輪功（ファルンゴン）と、私たちがこれまで知っていたり、聞いたりした他の修煉法や宗教との、非常に大きな違いにも気づいた。この功法には、煩雑な宗教儀式も、寺院や、義務的な礼拝の場所も、金銭の徴収や寄付の受け取りもない。それは、真・善・忍（しんぜんにん）の基準に従って、日常の暮らしの中で、学習者の心性を修めることに、直接焦点を当て、同時に、体を浄化するために、五式の穏やかな功法を煉ることを組み合わせている。それは、非常に単純でありながら、非常に深く、人の心に直接向かう、大道の修煉の道だった。

『轉法輪』の中の法理の、その体系性、包括性、そして深さは、私たちがこれまでに、いかなる学説や宗教にも見たことのないものだった。

本の中には、まだ、私たちがすぐには理解しきれない多くのことがあり、頭の中にはまだ疑問も残ってはいたが、ある種の平穏な感覚と、大きな希望が、私たち二人のもとに、訪れ始めていた。まるで、長年漂流した後に、停泊地を見つけたかのような。長い夜の後に、朝の光を見たかのような。私たちは顔を見合わせた。その眼差しに

は、もはやただの夫婦の愛だけでなく、大きな道の、最初の数歩を、共に踏み出し始めたばかりの、同伴者としての、共感と、励ましがあった。私たちの関係は、心の中の変化、宇宙の深遠な法理を発見した喜びを、共に分かち合うにつれて、ますます固く、深くなっていくかのようだった。

数日間、ほとんど完全に『轉法輪』に没頭した後、私たちは、もっと知りたいという、強い衝動を感じていた。本の中には、五式の功法と、この本を書かれた師父の、他の説法についても言及があった。私たちは、その動作がどのようなものか、そして、他の経文をさらに読んでみたいと、切に願っていた。

習慣に従い、私が最初に考えたのは、インターネットで検索することだった。私はノートパソコンを開き、ホテルのネットワークに接続した。チン・リンも、期待に胸を膨らませて、隣に座っていた。私は、「法輪功（ファルンゴン）」という言葉で、英語と中国語の両方で、使い慣れた検索エンジンに入力してみた。しかし、結果は、実にかっかりするものだった。ほとんどのリンクはアクセスできず、あるいは、ウェブサイトエラーが表示されるか、さらに悪いことに、私たちが本を読んだ後で、

真実ではないと確信している、粗雑に歪曲された、否定的な情報ばかりだった。私は何度も試し、異なるキーワードを使ってみたが、結果は同じだった。

「どうしてこんなに奇妙なのかしら？」チン・リンは、驚いた様子で尋ねた。「こんなに良さそうな功法で、こんなに深遠な本があるのに、どうしてインターネットで情報を見つけるのが、こんなに難しいのかしら？」

私は、中国のインターネット検閲、いわゆる「グレート・ファイアウォール」について、かつて聞いたことがあるのを、ふと思い出した。おそらく、これが理由なのだろう。法輪功（ファルンゴン）に関連するすべての情報が、どうやら組織的に、遮断されているかのようなのだ。このことが、陳（チェン）さんが口にした、「敏感な」性質が、決して単純なものではないことを、私たちに、さらに感じさせた。

私は、テクノロジー業界で時折使われる、いくつかの壁越えツールを使うことも考えてみたが、正直なところ、それらにはあまり詳しくなく、また、中国にいる今、それが安全かどうか、確信が持てなかった。アメリカの友人に検索を頼んで、送ってもらうという方法もあったが、おそらく時間がかかり、直接的ではないだろう。

私たちは顔を見合わせ、少し途方に暮れていた。その時、チン・リンが不意に言った。「ねえ、ミン、もしかしたら…陳(チェン) おじさんに、もう一度聞いてみない？彼の近所の人たちが、たくさんこの功法をやっているって言っていたわ。もしかしたら、彼は誰かを知っているかもしれないし、少なくとも、彼らがどこでよく煉功しているか、知っているかもしれない」

チン・リンの意見は、理にかなっているように思えた。陳(チェン)さんは、親切な人のようだった。「敏感な」話については、用心深かったが、彼は法輪功(ファルンゴン)について、肯定的なことを共有してくれた。それは、一つの手がかりになるかもしれなかった。

テーブルの上の本を見、そしてチン・リンに目をやりながら、私は、もしもっと深く知りたいと、もし功法を学びたいと望むなら、ここでのインターネットだけに頼ることはできないと、分かっていた。本をくれた男性に再び連絡を取ることは不可能だったが、おそらく、陳(チェン)さんを通して、私たちは、この上海で、本当に法輪功(ファルンゴン)を修煉している人々を見つける機会を、得られるかもしれなかった。

新たな道へと、一步を踏み出す決意

インターネットで法輪功（ファルンゴン）の情報を探すごとに行き詰まり、チン・リンから陳（チェン）さんを訪ねてみてはどうかという提案が出た後、私たちは、これまでの体験と、これからの進むべき道について、より真剣に話し合うために、腰を据えた。ホテルの部屋は小さいが静かで、ただ黄金色のランプの光と、私たち二人の間に丁重に置かれた、表紙のない本があるだけだった。この三日間、『轉法輪』がもたらしたものは、私たち二人の世界観と、自己認識を、完全に変えてしまっていた。

最初に口を開いたのは、チン・リンだった。妻の目は、感動と、どこか荘厳な、名状しがたい感情で輝いていた。

「ねえ」と彼女は、静かだが、はっきりとした声で言った。「この三日間…まるで、長い旅路を歩んできたような気分よ。この本は…」彼女はそっと、『轉法輪』の上に手を置いた。「…私がこれまで知っていた、すべてのものとは、全く違う。まだ完全には理解できないところも、信じがたいこともいくつかあるけれど、心の奥深くでは、これが非常に真実で、非常に正しいと感じるの。

この旅の間中、私が悩み続けてきたこと、そして、ずっと以前から心に抱えてきた問いの、すべてに答えてくれたわ」

彼女は深く息を吸い込み、私の目をまっすぐに見つめ、その表情には、決意がはっきりと表れていた。「まるで…家に帰る道を見つけたような気分よ、ミン。私の魂が、おそらく、ずっと以前から探し求めていた、これこそが真の法、大道なのだと、内なる強い衝動が、私に告げているの」

私は黙って耳を傾け、その心は、彼女の一言一句に共鳴していた。私もまた、認識における革命を体験していた。私の確固たる科学的な世界観は、『轉法輪』の中の法理によって、深刻な挑戦を受けていた。緊密な論理、完全な体系、宇宙と人生のあらゆる側面を説明する能力、特に、歴史と先史文明に関する論証…。それらすべてが、私がかつて信じていたことについて、考え直させた。

「分かるよ、チン・リン」と私も、感情を込めて答えた。「僕も同じように感じている。僕の理性には、まだ多くの疑問があるが、これらの法理の深遠さと、その力を、否定することはできない。それらは、完璧な内在的論理を持っている。そして最も重要なのは、それらが良心に、

人の善良な本性に、触れることだ。あの真・善・忍（しんぜんにん）という基準…それこそが、普遍的な真理、最も正しい道だと、僕は感じる」

私は妻の目を深く見つめた。「思うに…僕たちは、本当に、探し求めていた道を見つけたのかもしれない」

沈黙が戻った。しかし今回は、それは、同調の、そして、次第に形を成していく、大きな決意の沈黙だった。私たちは、ただ読むだけでは不十分だと、分かっていた。もしこれが真の道であるならば、私たちは、その上を歩まなければならない。

「じゃあ…陳（チェン）おじさんに、もう一度会って、詳しく聞いてみることから始めるのね？」と、この考えが私たち二人で話し合われた後、チン・リンは尋ねた。その眼差しには、期待と、少しの戸惑いが入り混じっていた。「あの方は、事情を知っているようだったわ。功を煉るのを指導してくれる人を見つけるか、少なくとも、法輪功（ファルンゴン）をやっている人たちが、どこで活動しているか、教えてくれるといいのだけれど」

それもまた、私が考えていたことだった。真・善・忍（しんぜんにん）に従って心性を修めることは、すぐにで

も始められる。日々のあらゆる事柄で、自分自身を照らし合わせるよう努めることだ。しかし、五式の功法については、確かに、正しくできるようになるためには、具体的な指導者が必要だった。「ああ」と私は、明確な決意を感じながら、頷いた。「明日、あるいは、できるだけ早く、叔父さんを訪ねる口実を見つけて、陳（チェン）おじさんに、巧みに話を聞いてみよう。この件は、単純ではなさそうだから、非常に繊細に、そして慎重に行動しなければならない」

一つの決断が下された。私たちは、本を読むだけで、立ち止まることはしない。私たちは、すぐにでも実践可能なことを、始めるのだ。一つ一つの思い、行動において、真・善・忍（しんぜんにな）に従って生きるよう努め、そして、もし縁が許すならば、陳（チェン）さんの助けを通して、五式の功法を学ぶ機会を、積極的に探すのだ。法輪大法（ファルンダーファ）を修煉する道が、目の前に開かれた。そして、まだ多くの未知数があるものの、私たちは、見出したばかりの真理への、信念と希望を胸に、共に、最初の数歩を、踏み出すことを決意した。

最初の超常的な体験

あの率直な話し合いと、重大な決意の後、私たちのホテルの部屋は、高揚感と、どこか荘厳な感覚に包まれた。私たちはもはや、ただ好奇心で探求する旅行者ではなく、自ら、新たな境地へと、全く未知でありながら、心の奥底で渴望していたものを約束してくれる道へと、足を踏み入れたかのようにだった。

陳(チェン)さんに再会し、功法の指導者を見つけられるかもしれないという機会を待つ間、私たちは、ただじっと座っていることはしないと決めた。『轉法輪』という本は、法理を説くだけでなく、五式の功法についても、概略を説明していた。その中で、第五式の功法、静功である坐禅については、座る姿勢がかなりはっきりと述べられていた。

「ねえ…座ってまない？」と、ある夜、チン・リンが提案した。その目には、決意と好奇心が入り混じって輝いていた。「待っている間、とりあえず、できることを実践してみましょう」

私は頷いた。「ああ、やってみよう。本によれば、静功は主に心を静めることによるものだいうから、おそら

く、静かに座り、頭を空っぽにすることから始められるだろう」

こうして、ホテルの部屋の静かな空間で、私たちは、本に従って実践する、最初の試みを始めた。私は、本が説明する結跏趺坐の姿勢を真似ようとしたが、生涯、椅子に座ることにしか慣れていない私の硬い両足では、かろうじて片足をもう一方の腿の上に乗せる、半跏趺坐の姿勢がとれるだけだった。痛みと痺れのが感が、すぐに襲ってきた。私は深く息を吸い込み、体の不快感を無視しようと努め、本の指導通り、心を雑念から遠ざけることに集中した。しかし、雑多な思いが、招かれざる波のように、次々と押し寄せてきた。これは、私が思ったよりも、遥かに難しいことだった。

私はちらりとチン・リンに目をやった。彼女は、私よりもうまくやっているようだった。おそらく、生まれつきの柔軟性か、あるいは、アジア人伝統のいくつかの座法に慣れているからだろう。彼女は半跏趺坐の姿勢で、背筋を伸ばし、両手で結印し、腹の前に置き、目を固く閉じていた。初め、彼女が少し眉をひそめているのが見えた。おそらく、彼女もまた、足の痛みを耐えているか、あるいは、心を落ち着かせようと努めているのだろう。

しかし、しばらくして、私は何か異変に気づいた。チン・リンの体は完全に不動で、呼吸は規則正しかったが、その閉じられた目の顔には、二筋の涙が、静かに流れ落ち、頬を伝っていた。

「リン？」私は、少し心配になって、そっと呼びかけた。
「どうしたんだ？足が、とても痛むのか？」

彼女はすぐには答えなかった。どうやら、私が理解できない、ある種の状態に、まだ沈んでいるかのようだった。涙は流れ続けていた。私は戸惑い、どうすべきか分からず、ただ、疑問に満ちた心で、静かに様子を窺うことしかできなかった。彼女は、私たちが読んだばかりの、深遠な法理を思って、あまりに感動しているのだろうか？それとも、単に、初めて坐禅を組んだ時の、体の反応なのだろうか？

かなり時間が経ってから、彼女がゆっくりと目を開けた時、その眼差しはまだ涙に濡れていたが、驚きと、感動と、そして名状しがたい、どこか俗世離れした輝きを放っていた。彼女は私の方を向き、その声はまだ震えていた。

「ミン…私…たった今、見たの…」

「何を見たんだ？」私は、何か尋常でないことが起こったのを感じ取り、すぐに尋ねた。

チン・リンは深く息を吸い込み、はっきりと話そうと努めた。「よく分からないの…本に従って、心を静めようとしていたら…突然、目の前がもう暗闇ではなくなったの。私は見たの…別の目で、ここよ」彼女は、眉間のあたりを指差した。「光を見たの…これまでに見たどんな色とも違う、不思議なほど鮮やかな色彩を」

彼女の声は、信じられない夢を語るかのように、次第に小さくなっていった。「そして…そして、別の世界を見たの。とても美しく、壮麗で、素晴らしい世界。私は…私はそこにいたの。この姿ではなくて…別の姿で、とても豪華な衣装を着て…まるで…まるで、その世界の、王か、主であるかのように…」

妻の目から、再び涙が溢れ出た。「それに、私たちが、他の多くの人々と一緒に…その世界に別れを告げ、下へと…この人の世へと、下りていく光景も見たの…まるで、この時の、大法を待つための、何かの誓い、何かの使命があったかのように…」

私は、チン・リンの語る言葉に、完全に呆然として、静かに座っていた。壮麗な世界？王や主？世に下る誓い？これらのことは、私のあらゆる想像を超えていたが、彼女の強い感動の表情、絶え間ない涙、そしてその眼差しの真実味が、私にそれを信じさせずにはいられなかった。私は、『轉法輪』の中の、天目について、生命の真の起源について、異なる空間の層について語られていた一節を、ふと思い出した。まさか…まさかチン・リンは、初めて坐禅を試みただけで、本当に天目を開いたというのか？

彼女がそのような奇妙で、超常的な体験をしている一方で、すぐ隣に座っている私は、足の痛みと痺れ、そして頭の中の雑念以外、何も感じていなかった。明らかな違いだった。しかし、失望したり、疑ったりする代わりに、チン・リンの体験は、まるで私の認識に、強い一撃を与えたかのようだった。私は自らは見ていないが、妻の話は、私たちが読んだこと、そして以前の出会いと相まって、私の信念を、力強く固めてくれた。それは、本に書かれていることが、空論ではなく、真実であり、修煉を通して到達可能な境地であることを、私に示してくれた。私は、各人の修煉の道と状態は異なり、重要なのは、自分自身の根気と、悟る力なのだと、理解した。

「信じるよ」と私は、妻の肩に手を置きながら、そっと言った。「本に書かれていることは…おそらく、すべて本当なのだろう」

チン・リンは頷いた。その眼差しには、まだ深い感動の余韻が残っていた。その体験は、どうやら彼女の心に深く刻み込まれ、この人生の意味についての、根源的な理解をもたらしたかのようだった。

その後の数日間、私はまだチン・リンのような特別な体験はしなかったものの、私たち二人とも、他の、微細な変化を感じ始めていた。精神は、より爽快になり、頭は、不思議なほど明晰で、澄み渡っているようだった。人生の些細な悩み事が、以前よりも私たちを悩ませることが、少なくなったようだった。時折、私は奇妙な夢を見た。それは、はっきりとはしていなかったが、平穏な感覚をもたらしたり、何かを示唆したりするものだった。ある時には、小さな事柄についての不意の直感が、驚くほど正確に当たった。

これらのことが、私たちの心を、ずっと強くさせてくれた。この道は、どうやら、私たちが探していた道で、間違いなさそうだ。しかし、先に進むためには、特に、功法を正しく学ぶためには、指導者を見つけることが、絶

対に必要だ。それが、私たちが、次に行うべきことだった。

* * *

第九章： 法理の啓示と、修 煉者のコミュニティ

模索と、最初の繋がり

『轉法輪』を読み、思索にふけた数日間と、チン・リンが体験した奇妙な出来事の後、私たちは二人とも、非常に強い衝動を感じていた。明らかに、これはただの本ではなく、私たちが幸運にも出会うことのできた、一つの道、一つの導きだった。しかし、私が言ったように、先に進むためには、特に、五式の功法を正しく学ぶため

には、指導者を見つける必要があった。この中国で、インターネットで探すことは、もはや無駄だと分かっていた。

チン・リンの叔父の友人であり、家族での夕食の際に、期せずして法輪功（ファルンゴン）について口にした、陳（チェン）さんを訪ねてみてはどうかという考えが、私たちの頭の中でずっと渦巻いていた。その時、彼はこの話について、少し用心深い様子だったが、少なくとも彼はそれを知っており、近所の人たちが多くやっていると言っていた。それが、今の上海（シャンハイ）で私たちが持っている、唯一の、そして最も可能性のありそうな手がかりだった。

「陳（チェン）おじさんに、もう一度会う方法を探さないと」と、ある朝、私たちがホテルを出る準備をしている時に、チン・リンが言った。「このままただ待っているわけにはいかないわ。叔母さんに電話して、陳（チェン）おじさんを家に招待する方法はないか、あるいは、私たちが直接連絡できるように、彼の電話番号を教えてくださいませんか、聞いてみる」

私はその意見に賛成した。叔母夫婦にこれ以上迷惑をかけるのは少し気が引けたが、これは重要なことだった。

その後、チン・リンは叔母に電話をかけた。幸いなことに、叔母は特に何も尋ねず、ただ私たちが、先日お見舞いに来てくれた陳(チェン)さんに、お礼を言いたいのだろうと思ったようで、快く彼の電話番号を教えてくれた。

電話番号を手に入れると、チン・リンが直接、陳(チェン)さんに電話をかけた。彼女は非常に巧みに言葉を選び、先日の健康法についての彼の話に、私たちは非常に感謝しており、いくつか追加で質問したいことがあるが、少しお会いする時間はないかと尋ねた。初め、電話口の陳(チェン)さんの声は、少し躊躇しているように聞こえた。おそらく、私たちが何について尋ねたいのか、彼も察していたのだろう。しかし、おそらくは、チン・リンの声の誠実さが、彼を説得したのだろう。最終的に、陳(チェン)さんは、その日の午後、彼の家の近くにある、人目につきにくく、静かな小さな茶店で、私たちに会うことに同意してくれた。

約束の時間に、私とチン・リンは茶店を探し当てた。それは、路地の奥に隠れた、かなり静かな空間の、小さな茶店だった。陳(チェン)さんは、すでに隅のテーブルで待っていた。彼は先日と同じように温厚に見えたが、その眼差しは、より慎重になっているようだった。

いくつかの儀礼的な挨拶の後、チン・リンは、非常に落ち着いた、敬意のこもった声のまま、本題に入った。

「陳(チェン) おじさん、先日、おじさんの近所の方々が多くやっているという、法輪功(ファルンゴン)について、お話しになりましたね。実は、私たちも偶然、この功法の主著である『轉法輪』を読む縁に恵まれまして、その中の法理が、非常に深く、意味深いものであると感じています。私たちはもっと詳しく知りたいと、特に、功法を学びたいと願っているのですが、どこから始めればいいのか、また、こちらには知り合いも全くいないのです」

チン・リンは言葉を止め、期待と、少しの懇願を込めた眼差しで、陳(チェン)さんを見つめた。「これが、少し敏感な問題であることは、私たちも承知しています。しかし、私たちは本当に、心から願っているのです。おじさん、私たちを…助けていただくことはできませんでしょうか？あるいは、この功法を実践している方を、誰か紹介していただくことはできませんか？」

陳(チェン)さんはしばらく黙って、私たちを見、そしてまた、窓の外に目をやった。彼の顔に、ためらいの色がはっきりと見て取れた。政府から目をつけられている功法について、見知らぬ者を助けて探させることは、決し

て簡単なことではないだろう。茶店の中の空気が、不意に少し緊張した。私とチン・リンもまた、息をのんで待っていた。

ついに、陳(チェン)さんは静かにため息をつき、そして私たちの方を振り返った。その眼差しからは、最初の用心深さが薄れ、その代わりに、同情と、そしておそらくは、少しの共感が浮かんでいた。「お二人が、あの本と、そのようなご縁があったとは、思いもよりませんでしたな」と彼は、声を潜めて言った。「確かに、真の法というものは、そう簡単に出会えるものではありません。お二人の切実な思いは、よく分かります」

彼は少し間を置き、そして続けた。「この件は…確かに、公に話すには、少し不都合があります。しかし、お二人がそこまで知りたいという心をお持ちなら、私も断るわけにはいきません。実は、私にも、長年法輪功(ファルンゴン)を修煉している、親友であり、隣人でもある者がおります。彼は非常に善良で、博識な人物です。おそらく…お二人を、彼に紹介することができるでしょう」

陳(チェン)さんのその言葉を聞いて、私とチン・リンは、まるで重荷を下ろしたかのようなようだった。大きな喜びと希望が、心の中に広がった。

「それは、本当にありがたいことです！」とチン・リンは、急いで言った。「おじさんに、何とお礼を申し上げてよいか、分かりません」

陳(チェン)さんは手を振った。「どういたしまして。縁のある方が善きものにたどり着くのを助けるのもまた、善行ですからな。しかし、お二人には、万事、非常に慎重に、そして内密に行動すると、約束していただかねばなりません。今の時世では…」彼は言葉を濁したが、私たちにはその意図がよく分かった。

その後、陳(チェン)さんは、私たちに、その友人の住所と電話番号を教えてくれた。彼の名前は劉偉(リウ・ウェイ)といい、皆からは親しみを込めて劉(リウ)さんと呼ばれているという。陳(チェン)さんは、事前に電話で約束を取り付け、陳(チェン)さんの紹介であることを、はっきりと伝えるようにと、私たちに念を押した。彼はまた、具体的な功法の学び方については、直接、劉(リウ)さんと話し合うようにと言った。彼は長年の修煉者で、経験も豊富だから、この状況下で、お二人を、最も適切で、安全な方法で助ける術を、きっと知っているだろう、と。

陳(チェン)さんとの出会いは、短かったが、非常に重要な扉を開いてくれた。私たちは、大きな希望を胸に、茶店を後にした。ついに、多くの模索の末、おそらく私たちは、法輪大法(ファルンダーファ)を修煉する道を、本当に歩んでいる人々と、直接接触する機会を得ようとしていた。

法を学び、功を煉り、コミュニティに溶け込む

陳(チェン)さんの茶店を、劉偉(リウ・ウェイ)さんの連絡先と共に後にして、私たちは名状しがたい喜びと希望を感じていた。その日の午後すぐ、ホテルに戻った後、チン・リンは劉(リウ)さんに電話をかけた。彼女は慎重に自己紹介をし、陳(チェン)さんの紹介であることを伝え、法輪功(ファルンゴン)について学び、功法を習いたいという願いを表明した。受話器の向こうの劉(リウ)さんの声は、非常に温かく、気さくに聞こえたが、同時に、

ある種の慎重さもあった。彼は、知りたいと願う人がいることを非常に嬉しく思うと言い、チン・リンが陳（チェン）さんの紹介であることを再度伝え、劉（リウ）さんは、翌日の午後、話し合いのために彼の家で会う約束を取り付けてくれた。彼はまた、私たちに行き方をかなり詳しく教えてくれた。

約束の時間に、私たちは劉（リウ）さんが教えてくれた住所を探し当てた。そこは、古びた集合住宅の中にある、特に目立たない小さなアパートだった。すらりとした体つきで、福々しい顔立ちの中年の男性、劉（リウ）さんが、穏やかな笑みを浮かべてドアを開け、私たちを迎えてくれた。私たちを家の中に招き入れ、お茶を出してくれ、そしておそらくは、私たちが何も不審な様子がないことを見て取った後、彼はより心を開き始めた。

指導してくれる人を見つけたという喜びと安堵感は、すぐに劉（リウ）さんの熱意と誠実さへと繋がった。話し合い、私たちの誠実さと、知りたいという渴望を感じ取った後、劉（リウ）さんは、功法を指導するための時間を設けることを提案してくれた。彼は言った。「功を煉るには、静けさと集中が必要です。私の家で、お二人に個人的にお教えします。法輪功（ファルンゴン）には五式の功

法があり、四式は動功、一式は静功です。学ぶのは完全に無料で、一銭もいただきません」

こうして、私たちの最初のレッスンは、劉（リウ）さんのアパートの小さな居間で、すぐに始まった。空間は広くはなかったが、非常に清潔で、静かだった。劉（リウ）さんはさらに、同じく長年の学習者である、非常に福々しい顔立ちの陳（チェン）という姓の老婆（彼女のことは、後々私たちも非常に慕うことになる）を、私たちへの指導をより丁寧にするために、友として招いてくれた。二人は交代で、第一式の功法、「佛展千手法（ぶってんせんじゅほう）」の一つ一つの動作を指導してくれた。動作はゆったりとして、優雅に見えたが、自分でやってみると、決して単純ではないことが分かった。私の硬い体では、彼らのようにリラックスし、しなやかになることは難しかった。特に、体を伸ばし、張る動作では、自分のあまり動かしていない関節や筋肉の滞りを、はっきりと感じた。

第二式の「法輪椿法（ほうりんとうほう）」、輪を抱えるように立つ功法に至っては、実に、真の挑戦だった。

「頭前抱輪（とうぜんほうりん）」（腹の前で輪を抱える）の姿勢をわずか数分保つだけで、私の両腕は疲れ果て、

全身が震え始めた。私はちらりとチン・リンに目をやった。彼女は私よりは少しマシなようだったが、その額にも汗がにじみ、眉をわずかにひそめて、耐えようとしていた。それなのに、劉（リウ）さんと陳（チェン）さんは、まるで非常に軽い何かを抱えているかのように、揺るぎなく、平然とした顔で立っていた。

「頑張って」と陳（チェン）さんは穏やかに励ましてくれた。「初めは誰でもそうです。少し痛くて疲れますが、それを乗り越えれば、とても気持ちが良くなりますよ。重要なのは、意志です」

彼らの忍耐強さと善意に、私たちは非常に感動した。彼らは、私たちの不器用さに対して、焦ったり、非難したりする様子は全くなかった。彼らは、小さな姿勢の一つ一つを丹念に直し、各動作の要点を丁寧に説明し、私たちが基本を掴むまで、何度も繰り返してくれた。その後の数日間、私たちは約束の時間に、定期的に劉（リウ）さんの家を訪れ、二人と共に功を学び、煉った。次第に、私たちは五式すべての功法を学ぶことができた。第五式の静功、「神通加持法（じんつうかじほう）」は、結跏趺坐か、半跏趺坐で座ることを要求し、私の硬い足にとっては、また別の挑戦だった。しかし、チン・リンの体験

と、皆の励ましを思い出し、私もまた、根気強く努力した。まだ長く座ることも、頭を完全に空にすることもできなかったが、功を煉る時に、温かいエネルギーの流れが体を巡るのを感じ始め、毎回の練習の後には、不思議なほどの心地よさと、爽快感があった。

しかし、法輪功（ファルンゴン）の修煉は、ただ動作を煉ることだけに留まらなかった。劉（リウ）さんは私たちに、核心は、真・善・忍（しんぜんにん）の原理に従って心性を修めることであり、本を読み、法を学ぶことが、非常に重要であると説明してくれた。

ある日の午後、数日間知り合い、功を煉った後、劉（リウ）さんは私たちに、夕食を共にし、その後、彼の他の数人の友人と一緒に、グループでの学法に参加しないかと、誘ってくれた。「私たちはよく、夜に集まって一緒に本を読み、体験を分かち合っています。ただの小さなグループで、内密に、安全のために、個人の家で行っています。もしお二人が差し支えなければ、一緒に参加しませんか」

この招待に、私たちは非常に恐縮した。私たちは、現在の中国の状況下で、見知らぬ者、しかも外国人を、個人

の家でのグループ学法に招くことが、彼らにとって、非常に大きな信頼の証であることを、理解していた。

その夜、劉（リウ）さんの家での、質素だが心温まる精進料理の夕食の後、彼の友人がさらに数人やって来た。小さな居間は、再びきれいに片付けられていた。中にはすでに、七、八人が、敷物を敷いた床の上に、きちんと座っていた。劉（リウ）さんと陳（チェン）さんの他に、さらにいくつかの新しい顔があった。タクシー運転手をしているという青年、退職した紡績工場の女性、そして、見た目は苦労しているようだが、その目は非常に優しく、時折しか市内には来られないという、郊外の農民の男性がいた。部屋の空気は、非常に心温かく、どこか荘厳だった。

学法が始まった。皆が交代で、『轉法輪』の一節ずつを讀んでいく。その声は、はっきりと、敬虔だった。以前に自分で讀んでいたが、このような雰囲気の中で、皆と共に聞き、学ぶと、法理が、より深く心に染み渡るように感じられた。一つの講を讀み終えた後、皆は、自分が悟ったこと、修煉の過程での自身の体験、そして、生活、仕事、家庭での困難や矛盾を乗り越えるために、どのように法と照らし合わせたかを、分かち合い始めた。

激しい議論も、華美な言葉もない。ただ、誠実さと、率直さと、共に向上したいという願いがあるだけだった。ある人は、他人に誤解された時に、いかに耐えようと努力したかを分かち合い、またある人は、問題に直面した時に、いかに他人のことを先に考えようと努めたかを語った。彼らは、自分自身の欠点、良くない心を、ためらうことなく口にし、大法の要求に従って、それをいかに改めようと努力しているかを語った。チン・リンもまた、その流暢な中国語と文化への感受性で、法理についての自身の最初の感想を分かち合い、皆からの共感と励ましを受けた。

私は静かに耳を傾け、心は感動でいっぱいだった。ここでは、教授も、労働者も、技術者も、農民も、老いも、若きも、区別はない。皆が平等に、共に学び、共に助け合って、修煉の道でより良くなろうとしていた。いかなる組織形態も、指導者も、金銭の寄付も、礼拝の儀式もない。ただ、大法の本と、真に修煉したいという心があるだけだった。この人々の間の、純粹で、善良な空気と、誠実な結びつきが、目に見えないが、非常に力強い精神的な力を、生み出していた。それは、私がこれまで知っていた、いかなる組織、宗教、団体とも、全く異なっていた。

その後の数日間、私たちは、この小さくも温かいコミュニティに、徐々に溶け込んでいった。私たちは、彼らと共に法を学び、功を煉るだけでなく、さらに多くの話を聞き、さらに多くの人々と出会った。一人一人、境遇も、運命も異なっていたが、皆、真・善・忍（しんぜんにな）への共通の信念、より善い人間になりたい、自らの本来の面目へと立ち返りたいという、共通の渴望を持っていた。この溶け込みは、私たちが法輪功（ファルンゴン）についてより深く理解するのを助けただけでなく、私たちが選んだ道への、決意と信念を、さらに固めてくれた。私たちは、この旅路で、決して孤独ではないのだと、感じていた。

奇跡的な物語と、生きた証

劉（リウ）さんの家で新しく知り合った学習者たちのグループと過ごす時間が増えるにつれて、私たちは、彼らそれぞれの個人的な物語を、より多く聞くようになった。それらの物語は、何か高尚な理論や、難解な哲学ではなく、ごく日常的な体験でありながら、その中には、法輪

大法（ファルンダーファ）が持つ、人を変える力の、生きた証となる、奇妙な事柄が秘められていた。

共に本を読んだ後の、打ち解けた会話の中で、あるいは、お茶を飲みながら、人々はしばしば、自らが修煉の道へと至った経緯を、自然に語り始めた。医学教授である私が、最初に特に注意を引かれたのは、健康の変化についての物語だった。

私たちが会った、穏やかな笑みを浮かべる年配の女性、陳（チェン）さんは、以前は重い心臓病と、歩行を非常に困難にさせ、ほとんど寝たきりの状態だった関節炎に、ひどく苦しめられていたという。彼女は、医者から、自分の病気は薬で進行を遅らせることしかできず、生活はますます悪化する一方だと言われたと語った。しかし、数年前に法輪功（ファルンゴン）の修煉を始めてからというもの、彼女の精神が明るくなっただけでなく、健康状態もまた、信じられないほどに良くなった。今では、彼女は軽快に歩き、自分のことはすべて自分でこなし、さらには子供や孫の家の手伝いさえしている。

「初めは、ただ体を健康にするためだと思っていました」と彼女は、重病人だったとは思えない、晴れやかな笑みを浮かべて言った。「でも、劉（リウ）さんが、病を治し

たいなら、功を煉るだけでなく、自分の心を修めなければならない、と言ったのです」彼女は、そう言いながら、自分の胸を指差した。「闘争心、恨み、余計な心配事といった、そういう性質を、捨て去らなければならない。私は、本の中で李師父がお教えになったことに、従おうと努め、真・善・忍（しんぜんにな）に従って生きようと思いました。次第に、私の心は軽やかになり、もはや運命を恨んだり、子供たちに腹を立てたりすることがなくなりました。そして、病気は、いつの間にか、良くなっていったのです」

私が医学で学んだことに従えば、陳（チェン）さんの回復は、ほとんど説明不可能なことだった。しかし、目の前の真実を、信じずにはいられなかった。生命力に満ち、顔色は血色が良く、軽快に歩く老婆。そして、彼女は唯一の例ではなかった。タクシー運転手の青年、李（リー）さんは、長年彼を苦しめ、仕事に深刻な影響を及ぼしていた、どんな薬を飲んでも治らなかった慢性的な片頭痛について語った。それなのに、修煉を始めてわずか数ヶ月で、その痛みは次第に和らぎ、そして完全に消えてしまったという。退職した労働者の女性、洪（ホン）さんは、長年続いた不眠症と神経衰弱がもはやなくなり、人生の喜びを取り戻すことができた、と、分かち合った。

私は耳を傾け、心の中では、自分の医学知識と、これらの信じがたい現実との間で、葛藤せずにはいられなかった。明らかに、これらのケースは、通常、物質的な体のみ焦点を当てる、現代医学の説明能力を、遥かに超えていた。しかし、私は、まさに語っている人々自身から放たれる、健康と、快活な精神を、否定することはできなかった。彼らは、大げさに話したり、作り話をしたりしている様子は、全くなかった。さらに、彼ら全員が、一つの共通点を強調していた。健康の改善は、常に、心性を高め、真・善・忍（しんぜんにん）の原理に従って生きる過程と、共にあるということだ。どうやら、私たちの科学がまだ触れることのできていない、精神状態、道徳、そして肉体的な健康の間に、非常に緊密で、深い関係があるかのようなだった。

しかし、私とチン・リンを、最も感動させ、感服させた物語は、彼らの心性、生き方の変化についての、分かち合いだった。

強（チャン）という名の、以前は近所で、重度のアルコール依存症で、よく問題を起こしていたと聞く、男性がいた。彼は、誠実な、少し照れたような声で、自分の良くなかった過去、自分がどのように妻や子を苦しめ、隣人たちから避けられるようになったかを、語り直した。

「あの頃は、明日のことも考えずに生きていました。金があれば飲み、酔えば問題を起こす。妻は、数え切れないほど泣きました」と彼は言った。「幸いにも、ある人が、私に法輪功（ファルンゴン）を紹介してくれました。

『轉法輪』という本を読んで、私は、目が覚めたかのようでした。自分の苦しみの原因が、以前の悪事によって生み出された業によるものであり、それを変えたいなら、心性を修め、善人にならなければならないと、理解したのです」彼は、酒をやめ、性格を変える過程は非常に困難だったが、根気強く本を読み、功を煉り、そして常に、真に、善に、忍に従わなければならないと、自分に言い聞かせることで、次第にそれができるようになったと語った。今では、強（チャン）さんは完全に酒をやめ、責任感のある夫、父となり、人々と和やかに暮らしている。彼の現在の、温厚で、物腰の柔らかい様子を見ると、以前の彼を想像することは、実に難しかった。

劉（リウ）さんもまた、ある時、以前は仕事で名声を非常に重んじ、損得勘定ばかりし、時には、同僚と競争するために、良くない方法さえも使っていたことを、分かち合った。「大法を学んでから、私は、常人が一生をかけて争い求めるものが、実はただの幻影に過ぎないと、初めて理解しました」と彼は、物思いに沈んだ様子で言っ

た。「本当に持って行けるものは、業と徳だけです。人として、真に、善に生き、何事も、まず他人のことを考えなければならない。だから私は、見方を変え、もはや争うことをやめ、仕事は誠心誠意行い、人々には、より誠実に接するようになりました。心は安らかになり、人生もまた、ずっと軽やかに感じられるようになりました」

チン・リンは、これらの物語を、特別な注意を払って聞いていた。彼女は私に、彼らが実践している、誠実さ、善良さ、忍耐といった道徳的価値は、彼女がかつて研究した、中国の伝統文化の中の教えと、似ている点はあるが、ここでは、それが非常に現実的に、具体的に、そしてより体系的に、表現されていると言った。それは、書物の中の理論ではなく、一人一人が、日々の、一つ一つの思い、言葉、行動において、従おうと努めていることなのだ。

私たちがこの小さなグループで出会った、一つ一つの物語、一人一人の人間が、生きた証だった。彼らは、私たちを説得するために、何か高尚な言葉を使う必要はなかった。まさに彼ら自身の、健康における良い変化、道徳における成長、そして、彼らから放たれる平穏さと善良さこそが、法輪大法（ファルンダーファ）の奇跡について

の、最も説得力のある証拠だった。これらの物語と、これらの人々が、私たちに、さらなる力を与え、信念を固め、そして、修煉の道の、最初の数歩を、より確固として踏み出すよう、私たちを駆り立てていた。

真・善・忍の原理を、心に深く染み込ませる

私たちが聞いた、健康と生き方の変化についての物語は、実に印象的だった。しかし、私とチン・リンを惹きつけ、さらに深く知りたいと思わせたのは、それらすべての物語を貫く一本の赤い糸、すなわち、真・善・忍（しんぜんにん）の原理だった。この三文字は、どうやら単なるスローガンではなく、私たちが彼らの中に見出した、あらゆる良い変化の、真の基盤であるかのようだった。

学法の集いや、劉（リウ）さんや皆と話をする中で、私たちは、彼らがこの三文字について、何か高尚な分析をするのを聞くことはなかった。その代わりに、私たちは、彼らが、生活の中の非常に具体的な状況で、いかに自分

自身を真・善・忍（しんぜんにん）と照らし合わせようと努めてきたかを、聞かされた。

私たちは気づいた。彼らにとって、真とは、単に嘘をつかないということだけでなく、自分の心に正直に生き、何事もまっすぐに行い、偽らないということなのだ。かつてアルコール依存症だった強（チャン）さんは、彼が変わるための第一歩は、まさに、自分の過ちを正直に認め、逃げたり、誰かのせいにしたりしないことだったと、分かち合った。

善とは、彼らの語りによれば、ただ普通の善行をなすことだけではない。それは寛容さ、たとえ自分が損をする可能性があっても、常に他人のことを先に考えようと努めることだ。陳（チェン）さんは、年金の一部を誤って失くされた時のことを語った。怒ったり、何としてでも取り返そうとしたりする代わりに、彼女は、相手もまた困難な状況にあるのかもしれないと考え、穏やかに、水に流すことを選んだ。「善を修めているのですから、わずかなお金のために人を困らせ、自分の心を乱すわけにはいきません」と彼女は穏やかに笑った。

そして忍とは、おそらく、私たちが、彼らが困難に直面した時に、最も多く口にするのを聞いたことだった。そ

れは、弱々しい甘受ではなく、敬服すべき、内なる強さだった。私たちは、洪（ホン）さんが、法輪功（ファルンゴン）をやっていると知った、昔の同僚たちの嘲笑を、いかに耐え忍んだかを聞いた。言い返すことなく、ただ黙々と、自分の仕事を、より良くこなしたという。私たちは、劉（リウ）さんが、以前、仕事での不公平な事柄に対して、いかに忍耐したかを聞いた。争うことなく、それを、業を返し、自分を改める機会と見なしたという。どうやら、彼らにとって、一つ一つの矛盾、一つ一つの思い通りにならない出来事は、すべて一つの「試練」であり、忍の字を実践し、平静を取り戻し、そして修煉者の角度から問題を認識する、機会であるかのようにだった。

私たちが特に注意を引かれたのは、彼らが問題に直面した時、常に「内に向けて探す」ことを強調していたことだ。外を指差し、あれこれ人のせいにする代わりに、彼らは内に向かい、自問する。「自分に何か間違いはなかったか？」「この出来事に遭遇したのは、自分に何か良くない心（闘争心、嫉妬心、恐怖心など…）があったからではないか？」そのような問題の見方は、私たちには非常に奇妙に感じられ、また、非常に感服させられた。それは、常にまず他人の過ちを探すという、多くの人々の習慣とは、全く異なっていた。

それらの誠実で、簡素な分かち合いを聞き、彼らが互いに、そしてすべての人々と日々接する様子を見て、私とチン・リンは、次第に、真・善・忍（しんぜんにな）の原理の深さを、感じ取っていった。それはもはや、縁遠い言葉ではなく、一人一人の人間、一つ一つの物語を通して、非常に生き生きと、その姿を現していた。私たちは、自分自身を振り返り始め、どれほどの欠点、どれほどの利己的な考え、どれほどの短気な反応が、習慣となってしまっていたかに、気づいた。

変わりたい、それらの善きことに従いたいという、一つの衝動が、私たちの心の中に、形成され始めていた。私たちは、前方の道とは、まさに、この三つの黄金の文字に従って生きるため、実践するために、絶えず努力し続けることなのだと、理解した。それこそが、修煉の核心であり、より善い人間となり、自らの真の本性へと立ち返るための、鍵なのだ。真・善・忍（しんぜんにな）の光は、これらの最初の体験を通して、まだわずかに開かれたばかりではあったが、私たちが選んだ道への、より確固たる信念を、私たちにもたらし、照らすには、十分だった。

* * *

第十章： 赤い太陽の下 で——隠された真実

最初の、不穏な兆し

上海（シャンハイ）に滞在して約三週間、劉（リウ）さんと、彼の同修の友人たちの小さなグループに溶け込み、私たちは、幸運にも出会うことのできた、それらの善良な人々と、より親しく、固い絆を感じるようになっていた。劉（リウ）さんの家や、他のいくつかの人目につかない場所での煉功、そして夜の学法と分かち合いは、ここ

での私たちの日常生活の、不可欠な一部となっていた。それらの活動は、私たちの魂に平穏と、大きな希望をもたらしてくれた。しかし、まさに私たちが最も安らぎを感じていたその時、何やら不吉なことの前触れのように、最初の不穏な兆しが、静かに現れ始めた。

私たちが最初に気づいたのは、煉功の約束の変化だった。参加者の数が、時折、不可解に減ることがあった。数日間、顔を見せない、見慣れた顔もあった。そしてある朝、劉（リウ）さんから電話があり、その日の練習は一時中止だとか、時には、会う場所を突然変更しなければならないとか、はっきりとした理由は説明されずに、ただ「その方が都合が良い」とか、「少し急用ができた」とだけ、漠然と言われることがあった。

それだけではない。何人かの学習者の態度もまた、以前よりも用心深くなっているように見えた。学法の後の、活発で、開かれた会話が、今や時折、周りを探るような視線によって中断されたり、ある人が、いくつかの問題に言及する際に、不意に声を潜めたりすることがあった。いつもは熱心で、率直な、退職した技術者の劉（リウ）さんも、ある時、私たちと個人的に話している最中、私が気づいたのは、彼が時折窓の外に目をやり、その眼差し

には、以前には見たことのない、どこか心配の色が浮かんでいたことだ。彼は何もはっきりとは言わなかったが、その様子は、私に、原因不明の不安感を抱かせた。

ある日の午後、私とチン・リンが、劉（リウ）さんの家の近くを散歩していると、私は、向かいの通りの角で、私服姿の、かなり見慣れない男が、うろついているのに気づいた。彼は特に何もせず、ただ壁にもたれかかり、その目は時折、劉（リウ）さんのいる集合住宅の方へ、ちらりと向けられていた。ただの偶然かもしれないが、この状況下では、その光景は、私に少しの疑念を抱かせた。チン・リンも気づき、彼女はそっと、私の手を、より強く握った。

明らかに、私たちのまだ知らない何かが、水面下で進行していた。最初の、穏やかで、開かれた雰囲気は、どうやら、心配と慎重さの、薄い霧の層に覆われ始めているようだった。

ある時、劉（リウ）さんの家でのグループ学法（その日の参加者もまた、最初の頃よりずっと少なかった）で、私たちが本から悟ったことを分かち合っていると、穏やかな陳（チェン）さんが、ふとため息をつき、自分自身に言

い聞かせるかのように、小さな声で言った。「近頃の天気は、どうやら、もうすぐ変わりそうだね…」

私は驚いて聞き返した。「天気、ですか？空はまだ、きれいだと思いますが」

陳(チェン)さんはただ軽く、どこか不自然な笑みを浮かべ、それ以上何も説明しなかった。隣に座っていた劉(リウ)さんが、軽く咳払いを一つし、そして私たちを見て、声を低めて言った。「お二人は、外国人ですし、来たばかりで、知らないことが多いかもしれません。ここでは…物事は、見た目ほど単純ではないのです。善人であることも、時には容易ではない。お二人は…少し、注意した方がいい」

劉(リウ)さんと陳(チェン)さんの、ほのめかすような、含みのある言葉は、私の中の不安を、さらに大きくさせた。何に注意する？なぜ善人であることが容易ではない？それらの問いが、私の頭の中で渦巻いたが、今は、そしてここは、さらに尋ねるべき時でも場所でもない、私は感じていた。何か目に見えない幕が、真実を覆い隠している。それは、どうやら、私たちの新しい友人たちが、日々直面している真実であり、一方、私たちは、その縁に、触れたばかりなのだ。これらの不穏な兆しは、

まだ曖昧ではあったが、私たちの探求の旅が、間もなく、より危険で、多くの試練を伴う曲がり角へと、入ろうとしていることを、告げるには十分だった。

弾圧についての囁き

曖昧な警告と、日増しに慎重になる空気が、私とチン・リンの心の中の不安を、ますます大きくさせていた。公園での出来事や、インターネットで情報を探すことの困難さから、法輪功（ファルンゴン）の危険性と「敏感な」性質を、ぼんやりとは感じ取っていたものの、私たちはまだ、その全体像を思い描くには至っていなかった。より深く理解する機会が訪れたのは、ある夜、私たちが再び劉（リウ）さんの家に招かれた時のことだった。今回の空気は、どこか異なっていた。劉（リウ）さん、陳（チェン）さん、そして私たちだけ。小さな部屋はいつもより静かで、テーブルにはすでにお茶が用意されていたが、誰もそれに手をつけようとはしないようだった。

沈黙がしばらく続き、そして劉（リウ）さんは、私たちをまっすぐに見つめた。その眼差しには、最初の頃のような探るような様子はもはやなく、真剣さと、どこか非常に重苦しいものが満ちていた。彼は、まるで容易ではない決断を下したかのように、一度、深いため息をついた。

「お二人とも」と彼は、いつもより低く、ゆっくりとした声で話し始めた。「この数日、何か思い悩んでいる様子で、そしておそらくは、いくつかの異常なことも感じ取っておられるでしょう。私たちは、お二人を家族同然に思っており、隠し事はしたくありません。しかし、これらの事を話せば、お二人をさらに心配させてしまうのではないかと、恐れてもおります」

私とチン・リンは、息をのんで耳を傾けた。これから聞くであろうことが、私たちがぼんやりと知り、感じていたことを、より明確にしてくれるだろうと、分かっていたからだ。

劉（リウ）さんは続けた。「お二人が『轉法輪』という本を通して、すでにご存知のように、法輪功（ファルンゴン）、あるいは法輪大法（ファルンダーファ）は、仏家の、非常に高次元の修煉法門であり、人々に真・善・忍（しんぜんにん）に従って生きることを教え、健康と精神の

両方に、大きな恩恵をもたらします。以前は、この中国で、一億人近くの人々が学んでおり、それは共産党員の数よりも多かったのです」

彼は間を置き、お茶を一口すすった。「しかし…おそらくお二人が、本を渡してくれた同修の件で、いくらか感じ取られたように、1999年7月20日から、すべてが完全に変わってしまいました」彼の声は沈み、私はその中に、抑えられた痛みを感じ取った。「当時の中国共産党のトップであった江沢民は、個人的な嫉妬と、法輪功（ファルンゴン）のあまりに急速な発展に対する、理不尽な恐怖から、人々が党よりも真・善・忍（しんぜんにん）を信じることを恐れ、政治局内の他の多くの人々の反対を押し切って、法輪功（ファルンゴン）と、それを学ぶすべての人々を標的とした、非常に残酷で、不条理な弾圧を、全国で発動するよう命じたのです」

劉（リウ）さんがはっきりとそう語るのを聞いて、私たちが以前に得ていた情報の断片が、繋がり始めた。弾圧があること自体には、もはやそれほど驚かなかったが、当事者であり、私たちが尊敬する人物から、「全国規模の、非常に残酷で、不条理な弾圧」という言葉で断言される

と、問題の規模が、私たちが想像していたよりも、遥かに大きく現れ始めた。

「では、私たちがアメリカでインターネットで読んだことや、あの日に公園で目撃したことは…すべて真実で、それどころか、もっと深刻だということですね？」チン・リンは、事の重大さに、隠しきれない動揺を声ににじませながら、そっと尋ねた。「私にはまだ、理解できません。どうして彼らは、ただ善人になるよう教える、穏やかな功法に対して、あのような残酷な手段を用いなければならないのですか？」

劉（リウ）さんは、悲しげな表情を浮かべて、首を振った。

「共産党にとっては、自分たちの絶対的な支配下にあるものは何であれ、党のものではない、人々に対して大きな影響力を持つ思想体系は何であれ、すべて自分たちの権力への脅威と見なされるのです。彼らは、人々が神仏や、真・善・忍（しんぜんにん）のような普遍的な価値を信じることを、受け入れることができない。なぜなら、それは、彼らの無神論と闘争という本質に、反するからです」

彼は続けて、国家の巨大なプロパガンダ機関が、いかに組織的に、法輪功（ファルンゴン）を中傷し、誹謗するた

めに使われたかを語った。「彼らは、テレビ、ラジオから、新聞、インターネットに至るまで、あらゆるメディアを使い、昼夜を問わず、でっち上げを吹聴しました。彼らは法輪功（ファルンゴン）を『邪教』と呼び、無知な人々の憎悪を煽るために、ありとあらゆる悪事をでっち上げ、一つの世代全体を洗脳したのです。彼らは、天安門広場での『偽りの焼身自殺』事件さえも演出し、それを法輪功（ファルンゴン）のせいにしてしました。それは、稚拙な芝居でしたが、国内外の多くの人々を欺いたのです」

隣に座っていた陳（チェン）さんは、いつの間にか目が赤くなっており、声を詰まらせながら、そっと付け加えた。「何百万人もの私たちの同修の兄弟姉妹が、ただ真・善・忍（しんぜんにん）への信念を捨てなかったというだけで、理不尽に逮捕され、ありとあらゆる嫌がらせを受けました。家には昼夜を問わず押し入られ、大法の書籍は没収され、焼却され、仕事は解雇され、子供は学校で差別され、家族は監視され、ありとあらゆる圧力をかけられたのです…」

劉（リウ）さんと陳（チェン）さんの、穏やかながらも、一つ一つの言葉が、私の心に、まるでナイフのように突き刺さった。この迫害の規模と邪悪さは、私が以前に想

像していたものを、遥かに超えていた。もはや「敏感な」とか、「目をつけられている」といった話ではない。これは、意図的で、組織的で、そして非常に残忍な、信仰の絶滅作戦だった。私たちが知っている、穏やかで、親切な人々、ただ真・善・忍（しんぜんにな）に従って、より善く生きたいと願うだけの人々が、どうして「邪教」の濡れ衣を着せられ、あのような恐ろしい目に遭わなければならないのか？

私はチン・リンの方を見た。妻の顔もまた青ざめ、その目には、恐怖と憤りが満ちていた。私たちがつい先ほど見つけ、そして大切に思うようになった、美しい精神的価値が、今や、国家権力によって意図的に踏みにじられ、破壊されようとする標的として、現れたのだ。

「その規模は…本当に、想像を絶します」と私は、平静を保とうと努めながらも、隠しきれない震え声で言った。「私たちが以前に知っていたことは、ほんの僅かな一部に過ぎませんでした」

「自由な環境から来られたお二人にとって、これを受け入れ、すべてを想像するのは、非常に難しいことだと、私たちは理解しています」と劉（リウ）さんは、同情に満ちた声で言った。「しかし、それが、この国で二十年以

上も続いている、痛ましい真実なのです。それこそが、私たちが万事に、細心の注意を払わなければならない理由でもあります。私たちは、お二人を怖がらせるためにこれを話しているわけではありません。私たちが、そして何百万人もの他の学習者たちが、日々直面している、本当の状況を、お二人に、より深く理解していただくためなのです」

部屋は再び沈黙に包まれた。しかし今回は、暴かれたばかりの、残酷な真実によって、重く、息苦しい沈黙だった。弾圧の真の規模、その残忍さの度合い、そして、私たちの新しい友人たちが直面している危険についての問いが、私の頭の中で渦巻いていた。劉（リウ）さんと陳（チェン）さんが語ったばかりのことは、より大きく、より暗い、遥かに広大な絵画の、ほんの一部に過ぎず、そして私は、もっと深く、調べなければならないと、分かっていた。

残酷さと不条理の証拠

劉（リウ）さんと陳（チェン）さんからの弾圧に関する最初の話は、私とチン・リンを実に茫然とさせた。その後の数日間、私の頭は、それらの恐ろしい情報で混乱していた。真実が、これほどまでに残酷であり得るのだろうか？どこかに誤解や、誇張があるのではないか？私の科学的な頭は、依然として、何とか合理的な説明を見つけようとしていたが、私たちが会った学習者たちの、穏やかで、誠実な顔が心に浮かぶたびに、彼らに貼られた「邪教」というレッテルとは、全く相容れないものだった。

数日後、別の日に劉（リウ）さんの家を訪れた際、どうやら私たちがまだ多くの懸念を抱いているのを見て、彼は、より深く話すことを決めたようだった。今回は、私たちが以前会ったことのない、蘭（ラン）という名の中年の女性も、加わっていた。蘭（ラン）さんの顔には苦労の色が見えたが、その目には、奇妙なほどの不動の意志が輝いていた。劉（リウ）さんは、蘭（ラン）さんが、法輪功（ファルンゴン）の修煉を放棄しなかったというだけで、数年間、投獄されていたことがあると紹介した。

蘭（ラン）さんは、自分の物語を語り始めた。彼女の声は抑揚がなく、恨みの色合いはなかったが、その一言一句

は、聞く者の心を抉るかのようだった。彼女は、恐怖に泣き叫ぶ幼い子供の目の前で、警官が家に押し入り、家宅搜索をし、そして連行された夜のことを語った。彼女は、拘置所での、そしてその後は、強制労働収容所での日々を語った。

「彼らは、私たちを人間扱いしませんでした」と彼女は静かに言った。「彼らは、あらゆる手段を使って、私たちに真・善・忍（しんぜんにん）への信仰を捨てさせようとししました。彼らは、私たちに『三書』——もう修煉しないという保証書、悔過書、そして他の学習者を告発する書——を書かせたがったのです」

彼女は、自分や他の学習者たちが耐え忍んだ拷問について語った。それは、漠然とした話ではなく、私たちをぞっとさせる、具体的な細部だった。「彼らは、体の最も敏感な部分に、電気警棒を押し当てました。悲痛な叫び声が、廊下中に響き渡りました。彼らは、私たちに、何日間も、眠らずに、立たせるか、座らせ続けました。うとうとしようものなら、容赦なく殴打されました。何時間も手錠で吊るされ、気を失う者もありました。鼻から胃まで、硬いプラスチックの管を無理やり通され、汚水と混ぜた食べ物を流し込まれるという、拷問を受けた者も

いました。それは、恐ろしい痛みと、深刻な傷をもたらしました…」

ここまで聞いて、チン・リンは抑えきれずに、そっと手で口を覆い、その目にはすでに涙が滲んでいた。私の胸は、まるで締め付けられるかのようで、憤りと、嫌悪感が、体中に込み上げてきた。これは、法を執行する者の行為ではない。これは、明らかに犯罪だ。

「最も痛ましいのは、ただ肉体的に拷問されることだけではありませんでした」と蘭(ラン)さんは、少し声を震わせながら続けた。「精神的な拷問です。彼らは、私たちに、師父を、大法を中傷するプロパガンダビデオを、何度も何度も見させました。彼らは、最も下品な言葉を使って、私たちを罵り、侮辱しました。彼らは、あらゆる方法で、私たちの意志をくじき、信念を失わせようとしたのです」

私たちに、よりはっきりと見せるために、劉(リウ)さんは、鍵のかかった戸棚から、慎重に、何層もの布に包まれた、薄い資料の束を取り出した。彼がそれを開くと、中には、人の体についた、打撲の痕、電気警棒による火傷の痕を撮った、数枚の古い白黒写真があった。また、この地域で、逮捕されたり、判決を受けたり、あるいは、

理由も分からず行方不明になった、何人かの学習者の、名前、年齢、住所が、丁寧に手書きされたリストもあった。

「これは、ほんの僅かな一部に過ぎません」と劉（リウ）さんは、痛ましさに満ちた声で言った。「この国の、至る所の刑務所や、労働収容所で、苦しみに耐えている人々が、まだ、どれほどいることか。多くの人々が、拷問によって死に至り、あるいは、家族が真実を決して知ることのないまま、謎めいた方法で、抹殺されたのです…」

それらの写真、それらの文字を見、蘭（ラン）さんの、胸が張り裂けるような、真実の語りを聞いて、私の中に最後に残っていた、すべての懷疑もまた、消え去った。真実は、むき出しの、残酷で、そして非常に不条理な姿で、現れた。一方には、ただ健康を保ち、真・善・忍（しんぜんにん）の原理に従って、道徳を高めたいと願う、穏やかな人々がいる。もう一方には、巨大な国家機関全体が、虚偽のプロパガンダから、残虐な拷問に至るまで、あらゆる卑劣な手段を用いて、彼らの信仰を、根絶やしにしようとしている。

この対比は、私の心を、痛めつけた。どうして、これほどの不条理が存在し得るのか？法はどこにある？正義は

どこにある？人の良心はどこにある？私がかつて信じていた、科学的な論理と、社会秩序に基づいた世界観が、どうやら、目の前で、崩れ落ちていくかのようだった。

私はチン・リンの方を見た。妻が、静かに涙を拭いているのが見えた。憤りが、彼女の顔にはっきりと表れていた。彼女は中国で生まれ、故郷の長い歴史と文化を、かつて誇りに思っていた。今、この残酷な真実に直面して、おそらく、彼女の中の痛みと失望は、私よりも、ずっと大きいだろう。

その日の話し合いは、非常に重苦しい空気の中で終わった。私たちは、知ったばかりの真実の重荷を背負い、混乱した心境で、劉（リウ）さんの家を後にした。私たちが見つけたばかりの、法輪功（ファルンゴン）の、善き光が、今や、迫害という、恐ろしい闇に覆われていた。私たちは、もはや、ただ外部から見ているだけではいられないと、分かっていた。しかし、何をすべきなのか？その問いが、頭の中で渦巻き、私たちを、実に、どうしようもない、引き裂かれるような気持ちにさせた。

内なる葛藤と、真実との対峙

その夜、私とチン・リンは、ほとんど眠ることができなかった。ホテルの部屋に戻ったが、頭は、劉（リウ）さんの家で聞き、見たばかりのことで、重く沈んでいた。部屋は息が詰まるほど静かで、ただ、チン・リンのかすかなため息と、胸の中で激しく打つ、私の心臓の音だけが聞こえていた。法輪功（ファルンゴン）の弾圧についての真実、その残酷さと不条理の証拠は、私たち二人を茫然とさせ、その思考と感情に、深い傷を残した。

最初の衝撃が徐々に過ぎ去ると、その代わりに、身も凍るような恐怖がやってきた。私には、どうして、現代的な外観を持ち、私たちが会ったような、穏やかで、素朴な人々がいる中国という国が、ただ異なる信仰を持つというだけで、自らの穏やかな国民を、平気で拷問し、殺害するような国家機関を持ち得るのか、全く理解できなかった。科学的な論理と、ある種の社会秩序への信頼の上に築かれていた、私の世界観が、どうやら、粉々に砕け散っていくかのようにだった。光と闇、善と悪、真実と虚偽…すべてが、目の前で、痛々しいほどに、混ざり合っていた。

私はチン・リンの方を見た。妻はベッドの上で膝を抱え、夜の窓の外を見つめていた。涙はすでに乾いていたが、痛みと憤りが、その眼差しにはっきりと残っていた。彼女が、私よりも、もっと心を痛めていることを、私は知っていた。ここは彼女が生まれた故郷、彼女が愛し、そして常に教えてきた文化の地なのだ。この政権が、最も美しい道徳的価値を踏みにじり、最も善良な人々を破壊しているという真実に直面することは、間違いなく、非常に大きな傷つきと、失望だろう。

「どうして、あんなことができるのかしら？」チン・リンの声が、夜の闇に、弱々しく、しかし憤りに満ちて、響いた。「劉(リウ)さんや、陳(チェン)さん、蘭(ラン)さん…彼らは、ただ善人になりたいだけなのに。どうして、彼らを敵のように扱うの？」

私には、どう答えてよいか、分からなかった。あらゆる理屈が、この極限の不条理の前では、無意味になっていた。

そして、恐怖が忍び寄り始め、私の心を占拠した。私たちは外国人だが、法輪功(ファルンゴン)の学習者たちと、親しく接触してしまった。私たちは功法を学び、グループ学法に参加し、『轉法輪』という本を、持っていた。

私たちは、監視されているのではないか？私たちがこの真実を知ったことが、私たちを危険な立場に置くのではないか？自分自身の安全への懸念が、込み上げてきた。

しかし、その直後、羞恥の感覚が、私を襲った。私たちは、このことを知って、まだ数日に過ぎないのに、恐怖が、私たちを不安にさせている。では、私たちの新しい友人たちは、どうなのだろう？彼らは、この恐怖の中で、何年も生きてきたのだ。彼らは、いつ、逮捕され、拷問され、ひいては命を失うかもしれないという、危険に、直面しなければならなかったのだ。それなのに、彼らは、依然として、自分の信念を固く守り、依然として、善良に生きようと努め、依然として、他人を助けている。彼らと比べれば、私たちの恐怖は、なんと小さく、そして、どこか利己的なことか。

激しい葛藤が、私の頭の中で繰り広げられた。理性の一部分は、私に、直ちにこの場所を離れ、安全のためにアメリカへ帰るようにと、告げていた。中国はあまりにも危険だ。私たちは、この件に関わるべきではない。しかし、もう一方の、良心と、芽生えたばかりの真・善・忍（しんぜんにん）への信念の部分が、私が見て見ぬふりをすることを、許さなかった。私たちは、彼らに助けられ、

彼らに信頼されて、真実を分かち合ってもらったのだ。
今、立ち去ることは、卑怯であり、彼らの善意を裏切り、
私たちが学び始めたばかりの、まさにその価値を、裏切
ることになる。

私たちは、どうすべきなのか？何も知らなかったふりを
して、静かに立ち去るのか？それとも、とどまり、危険
に立ち向かい、自分たちの能力の範囲で、彼らを助ける
方法を探すのか？私たちに、何ができるというのか？私
たちは、ただの、何の権力も、こちらでのコネも持たな
い、二人の、普通の外国人に過ぎないのだ。

光と闇。安全と良心。逃亡と対峙。この引き裂かれるよ
うな葛藤が、私の頭を、混乱させた。これはもはや、普
通の文化探求の旅ではなかった。私たちは、善と悪、正
義と、権力の邪悪さとの間の、熾烈な対決の、真っ只中
に、巻き込まれてしまったのだ。そして私たちは、選択
を迫られていた。真実は、暴かれた。そして今、私たち
は、それと、自分自身の心と、向き合い、次に進むべき
道を、決定しなければならなかった。

* * *

第十一章： 嵐の夜の涙—— ある家族の悲劇

嵐の前の、穏やかな小さな家族

弾圧の残酷な真実をより深く知った衝撃の後、私とチン・リンの心は、重く沈んでいた。私たちは、一つには、自分自身で考える時間を持つため、また一つには、ますます緊張しているように見える状況下で、皆に余計な迷惑をかけないようにするため、一時的に、グループ学法への参加を、以前よりも控えるようにしていた。しかし、

私たちが依然として、かなり頻繁に連絡を取り続けていた家族が、一つあった。それは、心からの親愛の情と、そして、彼らの幼い娘が、チン・リンに非常になついていたからだ。それは、康裕（カン・ユー）さんと、陳梅（チェン・メイ）さんの家族だった。

私たちは、劉（リウ）さんの家での最初の学法で、彼らに出会った。康裕（カン・ユー）さんは三十歳くらいで、腕のいい大工であり、がっしりとした体つきで、話し方は素朴だが、その眼差しは、いつも真実の色を輝かせていた。妻の陳梅（チェン・メイ）さんは、小学校の教師だったが、すでに退職していた（おそらくは、修煉のことも理由だろうと私は推測した）。その顔立ちは非常に優しく、声は穏やかだった。彼らには、小蓮（シャオリエン）という名の、三歳くらいの、ふくよかで、大きくて黒い瞳が、非常にかわいらしい、幼い娘がいた。

彼らの小さな家族は、市の外れにある、簡素な集合住宅に住んでいた。富という点では、何もないが、いつも笑い声と、温かい空気に満ちていた。康裕（カン・ユー）さんも、陳梅（チェン・メイ）さんも、二人とも非常に熱心な法輪功（ファルンゴン）の修煉者だった。真・善・忍（しんぜんにん）への信念は、一つ一つの仕草、言葉、そ

して人々への接し方に、はっきりと表れていた。彼らは質素に暮らし、隣人とは和やかに接し、もしできれば、いつでも喜んで他人を助けた。

私たちは、何度か、彼らの家に夕食に招かれたことがあった。それは、自家製の野菜数品と、豆腐だけの、簡単な食事だったが、雰囲気は、非常に心温まるものだった。康裕（カン・ユー）さんは、工作中的の楽しい話をよく語り、陳梅（チェン・メイ）さんは、優しく娘の世話をし、そして小蓮（シャオリエン）ちゃんは、おしゃべりをし、時折、チン・リンの膝に駆け寄っては、お話をするとせがんだ。彼らを見ていると、私は、善き人生を生きようと努める人々の魂そのものから放たれる、非常に素朴で、真実の幸福、ある種の平穏を感じ取った。

小蓮（シャオリエン）ちゃんは、特にチン・リンになついていた。おそらく、チン・リンもまた、子供が大好きで、いつも辛抱強く、彼女と遊び、本を読んで聞かせていたからだろう。私たちが訪れるたびに、小蓮（シャオリエン）ちゃんは嬉しそうに声を上げ、チン・リンの足に駆け寄って抱きつき、「リンおばちゃん」に抱っこをせがんだ。その無邪気で、純粋な少女の姿は、私たちがこの

場所で感じていた、日増しに息苦しくなっていく空気の中の、温かい光のようだった。

なぜなら、その小さな家族の平穏と並行して、私たちは、弾圧の黒い影が、日増しに近づいていることを、知っていたからだ。他の学習者たちの、断片的な話を通して、そして、私たちが壁越えを試みて読んだ、僅かな情報を通して、私たちは、多くの場所で、状況が非常に緊迫していることを知っていた。新たな逮捕の波、修煉者への嫌がらせが、より頻繁に起こっていた。この上海（シャンハイ）でさえ、聞いた他のいくつかの場所よりは、穏やかに見えたが、心配の空気は、どこかでくすぶっていた。

私たちは、康裕（カン・ユー）さんと陳梅（チェン・メイ）さんの眼差しに、彼らがうっかり、全体的な状況に言及するたびに、よぎる心配の色を見ることができた。彼らは、自分自身と、他の同修たちが直面している危険を、よく知っていた。しかし、恐れたり、逃げたりする代わりに、彼らは、自分の信念に対して、ますます不動の態度を示していた。彼らは、依然として、家で静かに本を読み、功を煉り、依然として、善良な事柄で、娘を教える育てていた。

「私たちは、何も悪いことはしていません」と康裕（カン・ユー）さんは、ある時、私と二人で話している時に、低いが、非常に断固とした声で言った。「私たちは、ただ、真・善・忍（しんぜんにん）に従って、善人になりたいだけです。大法は、私の家族に、あまりにも多くの良いものをもたらしてくれました。ただの誹謗中傷と、脅迫のために、どうしてそれを、放棄することができるのでしょうか？」

彼らのその不動の心は、私たちを感服させると同時に、心配させた。この儚い平穏は、いつまで続くのだろうか？この小さく、幸せな家族は、日増しに近づいてくる嵐の前に、しっかりと立つことができるのだろうか？小蓮（シャオリエン）ちゃんの無邪気な笑顔、陳梅（チェン・メイ）さんの穏やかな眼差し、そして康裕（カン・ユー）さんの剛毅な様子を見ていると、私の心には、再び、名状しがたい不吉な予感が、込み上げてきた。私はただ、彼らが無事であることを、心の中で願うことしかできなかった。たとえ、理性が、この状況下では、祈りは、あまりにも儚いものだと、告げていたとしても。

真夜中の、残忍な急襲

康裕（カン・ユー）さん一家についての私の不吉な予感は、恐ろしいことに、私が想像していたよりも、遥かに突然で、残忍な形で、現実のものとなった。

その夜、私は寝返りを打つばかりで、どうしても眠りにつけなかった。おそらく、弾圧についての、学習者たちが直面しなければならない危険についての思いが、心を離れなかったのだろう。上海（シャンハイ）の夏の夜はかなり蒸し暑く、ホテルの部屋にはエアコンがあったが、私はそれでも息苦しさを感じていた。午前一時過ぎ、耐えきれず、私は夜の空気を少し吸って気を紛らわせようと、そっとバルコニーに出た。私たちのホテルは、康裕（カン・ユー）さんのいる集合住宅から、さほど近くはなかった。数百メートルは離れていたが、この高層階のバルコニーからは、その地域の一部を、見渡すことができた。

遠くを眺め、重苦しい思いを払いのけようとしていた時、私は不意に、真夜中にもかかわらず、康裕（カン・ユー）さんのアパートの明かりが、異常に煌々と灯っているのを見て、はっとした。そしてその直後、かなり距離があ

り、音もかなり遮られてはいたが、私は、ドアを叩きつけるような音、不明瞭な叫び声、そして、明かりの灯る窓の内側で、人影が乱雑に動くのが、かすかに見え、異常な物音が響いてくるのを、漠然と感じ取った。私の心臓は、まるで締め付けられるかのようだった。冷たい感覚が、背筋を駆け抜けた。私は慌てて部屋に戻り、私の物音ですでに目を覚ましていたチン・リンを呼んだ。

「リン、大変だ！どうやら…どうやら、康裕（カン・ユー）さんの家だ！」

少しの躊躇もなく、私たちは急いで上着を羽織り、そっとホテルを出て、康裕（カン・ユー）さんのいる集合住宅の方へ、急いで走った。私たちは、あまり近づく勇氣はなく、ただ、建物の端にある大きな木の陰に隠れ、そこから、数十メートル離れた康裕（カン・ユー）さんのアパートを見ることができた。

黄ばんだ街灯の光の下で、目の前の光景は、私たちを、まるで凍りつかせたかのようだった。康裕（カン・ユー）さん一家の小さなアパートのドアは、破壊され、蝶番さえも外れていた。警官の制服を着た数人の男と、非常に凶暴そうに見える私服姿の何人かが、ドアの前に立ちはだかっていた。アパートの中は、明かりが煌々と灯り、

怒鳴り声と、小蓮（シャオリエン）ちゃんの、胸が張り裂けるような泣き声が、依然として響いていた。

そして私たちは、彼らが康裕（カン・ユー）さんを外へ引きずり出すのを見た。彼は薄い寝間着を着ているだけで、両手は後ろでねじ上げられ、顔には、どうやら痣があるようだった。彼は必死にもがき、その眼差しは、痛みと無力感に満ちて、アパートの方へ向けられていた。その直後、陳梅（チェン・メイ）さんもまた、二人の私服姿の女に引きずり出された。彼女の髪は乱れ、その顔は呆然としており、彼女は娘の名前を呼ぼうとしたが、連中の一人に口を塞がれた。

「早くしろ！車に乗れ！」制服を着た一人が大声で怒鳴り、康裕（カン・ユー）さんと陳梅（チェン・メイ）さんを、近くに停めてあった、ナンバープレートのない、窓のない小さなバンの方へ、突き飛ばした。

康裕（カン・ユー）さんは、最後に一度、振り返ろうとし、大声で叫んだ。「法輪大法は素晴らしい！真・善・忍は素晴らしい！迫害を打ち倒せ！」

即座に、一人の警官が、銃床で彼の腹を強く突き、彼は痛みで身をかがめた。彼らは、夫婦二人を、乱暴に荷台

に押し込み、そしてドアをばたんと閉めた。車はエンジンを唸らせ、夜の闇の中へと走り去り、後には、空っぽの空間と、荒れ果てたアパートから、依然として響いてくる、小蓮(シャオリエン)ちゃんの、しゃくり上げるような泣き声だけが、残された。

残りの者たちは、さらにしばらく、中を物色し続けた。私たちは、彼らが、おそらくは大法の書籍や、関連資料が入っているであろう、いくつかの箱を運び出し、そして別の車に投げ込むのを見た。彼らが欲しいものを手に入れた後、彼らもまた、素早く車に乗り込み、去っていった。後には、破壊されたドア、灯りのついたままの明かり、そして、置き去りにされた子供の泣き声だけが、残された。

すべての出来事は、三十分もかからずに、悪夢のように、素早く、そして残忍に行われた。周りの他のアパートは、依然として固くドアを閉ざし、誰も、顔を覗かせようとはしなかった。おそらく、彼らは、このような光景に、あまりにも慣れすぎているか、あるいは、恐怖が、彼らに、いかなる反応も、起こさせなかったのだろう。テロの空気が、集合住宅全体を覆い、冷たく、そして恐ろしかった。

私とチン・リンは、木の陰で、まるで凍りついたように立ち尽くし、全身が震えていた。それは、夜の冷気のせいではなく、胸の中で沸き上がる、恐怖と憤りのためだった。私たちは、「人民政府」とやらの、その残忍さ、非人道性を、目の当たりにした。彼らは、真夜中に、平然と民家に押し入り、ドアを破壊し、殴打し、人々を、まるで動物を捕まえるかのように連行し、そして、三歳の幼子を、極度の恐怖の中に、置き去りにしたのだ。

無力感に、私の心は、締め付けられた。私たちは、彼らを助けるために、何もできなかった。私たちは、ただの、弱い部外者であり、悲劇が繰り広げられるのを、何もできずに、目撃するだけだった。この政権に対する憤りが、言葉にならないほど、込み上げてきた。そして、康裕(カン・ユー)さん、陳梅(チェン・メイ)さん、そして特に、小蓮(シャオリエン)ちゃんの運命への心配が、まるで大きな石のように、心に重くのしかかった。彼らは、どうなるのだろうか？そして、あの哀れな子供は、今、がらんとした家で、一人きりで、どうしているのだろうか？彼女の泣き声は、まるでナイフのように、私たちの心を切りつけ、心を離れず、そして絶えず、苛んだ。

次々と届く悲報——行方知れずの両親

康裕（カン・ユー）さん一家が連行される光景を目撃した、あの恐ろしい夜の後、心配と不安が、私たちと、私たちが知る他の学習者の兄弟姉妹の心に、重くのしかかった。その時、直ちに行うべきことは、康裕（カン・ユー）さんと陳梅（チェン・メイ）さんが、どこへ連れて行かれ、どのような状況にあるのかを、調べることだった。

しかし、この状況下で情報を探すことは、まるで大海で針を探すようなものであり、その上、非常に危険だった。警察署や、拘置所は、通常、家族に一切の情報を与えず、特に、法輪功（ファルンゴン）に関連すると見なされたケースでは、なおさらだった。いかなる問い合わせの試みも、疑われ、さらなる厄介事を招く可能性があった。

劉（リウ）さんと、経験豊富な、年配の学習者数人は、非公式な繋がりを通して、非常に内密に、そして慎重に、情報を探ろうと努めた。彼らは、下級の国家機関で働く知人に頼んだり、近隣地域の学習者に、何か知らないかと尋ねたりした。一日一日が、不安な待ち時間の中で過ぎていった。私たちは、交代で小蓮（シャオリエン）ちゃ

んの面倒を見に行った。彼女は、一時的に、親切だが、同時に非常に恐れている、隣人の家族に、昼間、預かってもらっていた。私たちは、彼女を慰め、一緒に遊ぼうと努めたが、小蓮(シャオリエン)ちゃんの、当惑し、怯えた眼差しと、「パパとママはどこ？」という無邪気な問いが、私たちの心を、さらに締め付けた。

あの恐ろしい夜から、約一週間後、最初の悲報が届いた。劉(リウ)さんが、呆然とした顔、寝不足と心配で赤く充血した目で、私たちを訪ねてきた。彼は、拘留所内部の、信頼できる情報源(おそらくは、その残虐さに耐えかね、こっそりと外部に知らせた、良心のある人物だろう)から、連絡を受けたという。康裕(カン・ユー)さんは…もう、いなくなってしまった、と。

「彼らは…彼らは、ユーが、取り調べ中に『突然死』したと言っている」劉(リウ)さんの声はかすれ、言葉が詰まった。「しかし、知らせてくれた者によると、その数日前、彼は、罪を認めず、『三書』を書かなかったために、非常に残虐な拷問を受けていたそうだと。彼は、依然として、法輪大法(ファルンダーファ)は素晴らしいと、一途に言い続けていたと」

私の心臓は、まるで止まったかのようにだった。康裕（カン・ユー）、私たちが知り合ったばかりの、素朴で、健康な大工が、逮捕されてわずか一週間で、「突然死」するなど、あり得るだろうか？それは、あまりにも、非合理的だった。

しかし、それ以上に恐ろしいことが、後に控えていた。劉（リウ）さんは声を潜め、ほとんど囁くように言った。その目には、名状しがたい憤りと、嫌悪が、はっきりと表れていた。「その者は、さらに言っていた…死ぬ前、ユーは、他の数人と一緒に、非常に詳しい『健康診断』に連れて行かれたが、そこは、普通の病院とは違う場所だったと。そして…遺体は、非常に素早く返され、家族に詳しく見せることもなく、ただ、腹に、非常に奇妙な縫い目があったという…彼らは、疑っている…」

劉（リウ）さんは、最後まで言わなかったが、私とチン・リンは、すぐに理解した。健康な法輪功（ファルンゴン）学習者からの、生きたままの内臓収奪という、恐ろしい疑惑——私たちがかつて噂で聞きながらも、決して真実だとは信じたくなかった、人道に対する罪——が、今、これまで以上に、明確に、そして恐ろしく、浮かび上がってきた。彼らは、康裕（カン・ユー）さんを、ただ彼の

信仰のために殺しただけでなく、彼の健康な内臓のためにも、殺したのかもしれない。

吐き気と、身も凍るような冷たさが、私の全身を駆け巡った。この政権の残虐さは、人間のあらゆる想像の限界を、超えていた。これはもはや、通常の政治的、あるいは宗教的な弾圧ではない。これは、人間性の破壊、最も野蛮な犯罪だ。チン・リンは椅子に崩れ落ち、両手で顔を覆い、しゃくり上げて泣き始めた。彼女は、あまりにも残酷すぎるこの真実に、耐えることができなかった。

同修の友を失った痛みがまだ癒えないうちに、数週間後、陳梅（チェン・メイ）さんに関する、さらなる知らせがあった。良心のある弁護士（法輪功（ファルンゴン）の事件を公に弁護することは敢えてしなかったが、陰で情報の調査を手伝ってくれた）を通して、私たちは、陳梅（チェン・メイ）さんが、「邪教を利用して、法律の施行を破壊した」という、でっち上げの罪状で、懲役八年の判決を受けたと知った。ずさんで、迅速な一審判決が出るとすぐに、彼女は、どこか遠く、人里離れた山岳地帯の省にある、女子刑務所へ移送されたという。それ以来、彼女に関するすべての情報は、途絶えた。家族は面会を許されず、手紙も止められた。彼女は、まるでこの世界

から完全に姿を消したかのようで、生きているのか、死んでいるのか、誰も知らなかった。

悲報は、次々と続いた。わずかな期間で、幸せだった一つの家族が、完全に、打ち碎かれた。夫は拷問によって死に至り、さらには、内臓収奪の犠牲者であるとさえ疑われている。妻は、いつ帰れるとも知れぬ、消息不明の獄中生活を送っている。ただ、不条理に満ちたこの世に、置き去りにされた、幼い娘だけが、残された。康裕（カン・ユー）さんと陳梅（チェン・メイ）さん一家の悲劇は、まるで深い切り傷のように、法輪功（ファルンゴン）迫害の、邪悪で非人道的な本質を、むき出しに暴いた。それはもはや、聞き伝えの話や、新聞の上の数字ではない。それは、私たちが知り合い、親しくなった、血肉を備えた人々の、今そこにある痛み、涙、そして血なのだ。この真実は、私たちの心に、決して消えることのない痕跡を深く刻みつけ、同時に、一つの緊急の問いを、投げかけた。私たちは、あの哀れな孤児、小蓮（シャオリエン）ちゃんのために、何をすべきなのか？

置き去りにされた子供と、心からの決断

康裕（カン・ユー）さんと陳梅（チェン・メイ）さんの運命に関する、痛ましい知らせが確認された後、一つの痛切な問いが、空気の中に漂っていた。小蓮（シャオリエン）ちゃんの面倒は、誰が見るのか？ わずか三歳の子供が、これ以上ないほど過酷な状況で、両親を共に失い、嵐の中で、か弱く、寄る辺のない存在となってしまったのだ。

親切な隣人の家族は、彼女のことを非常に不憫に思っ
てはいたが、明らかに、彼らが小蓮（シャオリエン）ちゃんを、長く引き取ることはできなかった。あの夜の、残忍な逮捕劇を目撃した後の恐怖が、依然として彼らを苛んでいた。彼らは、「法輪功（ファルンゴン）分子」と見なされた人々の子供を助けたことで、巻き添えになることを恐れ、びくびくしながら暮らしていた。ある時、劉（リウ）さんと話している中で、彼らは、自分たちの苦しい立場と心配を表明し、小蓮（シャオリエン）ちゃんを孤児院に入れるか、あるいは他の誰か親戚を探さなければならぬかもしれないと、それとなく口にした。それら

の選択肢が、小蓮(シャオリエン)ちゃんのような子供の将来にとって、いかに儚く、危険に満ちたものであるかは、誰もが知っていた。

私とチン・リンが、小蓮(シャオリエン)ちゃんに会いに行くたびに、私たちの心は、まるで誰かに締め付けられるかのようだった。彼女はもはや、以前のような、活発で、元気な小蓮(シャオリエン)ちゃんではなかった。今や、彼女は家の隅で、体を縮こまらせて座り、その大きな瞳は、常に恐怖と当惑に満ちて、大きく見開かれ、茫漠とした空間を、じっと見つめていた。彼女は口数が少なく、笑うことも少なく、時折、眠りの中で、「パパ！ ママ！」と叫び、そしてはっと目を覚まし、誰にもなだめられないほど、しゃくり上げて泣きじゃくった。無邪気で、純真な子供が、迫害という残酷な渦に巻き込まれ、両親の信仰というだけで、すべてを失ったその姿は、私たちの心に、名状しがたい痛みと憤りを、切り刻んだ。

私たちは、見て見ぬふりをすることは、できなかった。私たちが学ぼうと努めている、善の原理、そして、最も基本的な人の情が、小蓮(シャオリエン)ちゃんの、あまりにも悲惨な状況に、背を向けることを、許さなかった。彼女が差別され、虐待されるかもしれない孤児院に、彼

女を送ることは、私たちが決して、受け入れることのできないことだった。

しかし、助けの手を差し伸べるという決断は、非常に大きなリスクを伴っていた。私たちは外国人であり、このような敏感な状況下で、明確な書類のない中国の子供を、突然引き取ることは、自らを政権の監視下に置くことと、何ら変わりはなかった。私たちは、疑われ、監視され、ひいては逮捕されたり、国外追放されたりするかもしれない。自分自身の安全、アメリカへ帰国する計画、そのすべてが、深刻に脅かされる可能性があった。その恐怖は、全くの現実であり、それは一つ一つの思考に忍び込み、私たちを、躊躇させ、引き裂いた。

その夜、小蓮(シャオリエン)ちゃんが仮住まいしている隣人の家を出た後、私たちの心は、重く沈んでいた。私たちは、黙ってホテルの部屋へと歩き、それぞれが自分の思いを追っていたが、皆、同じこの困難な問題へと、向かっていた。部屋に着くと、私たちはしばらくの間、向かい合って座り、誰も何も言わず、ただ、かすかなため息だけが聞こえていた。

不意に、チン・リンが顔を上げた。私の目をまっすぐに見つめた。妻の眼差しには、もはや、いつもの躊躇いは

なく、その代わりに、奇妙なほどの不動の意志、心の奥底から湧き出たかのような、断固とした決意があった。

「ミン」と彼女は、声は震えていたが、非常にはっきりと、そして力強く言った。「私、よく考えたの。私…あの子を、放っておくことはできない。あの子のあんな姿を見ていると、胸が痛むの。私たちは、あの子のために、何かをしなければならない。どんなに危険でも、私は、小蓮(シャオリエン)ちゃんを一人で、この暗い未来に、立ち向かわせることはできない」

チン・リンの言葉は、まるで電流のように、私の体を駆け抜けた。それは、意見を求める問いではなく、確固たる断言、深い善の心から、おそらくは大法を通して彼女が感じ取った慈悲の心から、そして小蓮(シャオリエン)ちゃんの痛み直面した時の、良心の衝動から、形作られた、一つの決断だった。私の中の葛藤は、即座に消え去り、その代わりに、同意と、そして妻のその心に対する、感服の念が、満ちてきた。

「分かったよ」と私も、感情を込めて答え、彼女の手を固く握った。「君の決断は、全く正しい。私たちは、一緒にそれをやろう。私たちは、小蓮(シャオリエン)ちゃんを、引き取り、世話をし、そして守ろう」

最終的な決断が下された。それは、自分自身の安全についての、損得勘定によるものではなく、心の強い衝動、人への慈悲、そして私たちが学んでいる、真・善・忍（しんぜんにん）の価値への信念によるものだった。前方の道が、困難に満ち、危険が常に潜んでいることを、知ってはいたが、チン・リンの、不動の眼差しを見ていると、私は、奇妙なほどの、心の強さを感じた。

翌日すぐ、私たちは、自分たちの決断を、劉（リウ）さんと、隣人の家族に伝えた。初め、彼らは少し驚き、私たちのような外国人の安全を、心配せずにはいられなかったが、やがて、彼らもまた、私たちの心に感動し、理解してくれた。彼らの、内密な助けを借りて、私たちは、小蓮（シャオリエン）ちゃんを、自分たちのホテルの部屋に、引き取るために、必要なすべての準備を整えた。

私たちが着いた時、小蓮（シャオリエン）ちゃんは、まだ家の隅で、体を縮こまらせて座り、その目は、怯えた色に満ちていた。チン・リンこそが、優しく歩み寄り、彼女の目の高さまでかがみ、穏やかに微笑み、そして両腕を広げた。「小蓮（シャオリエン）ちゃん、いい子ね。おばちゃんのところへ、おいで」チン・リンの声は、温かく、そして優しかった。

少女は、数秒間、当惑したようにチン・リンを見つめ、そして、まるで妻から放たれる、安全と、真実の愛情を感じ取ったかのように、小蓮(シャオリエン)ちゃんは、おずおずと立ち上がり、小さな足取りでチン・リンの方へ歩み寄り、そして彼女の胸に、身を寄せた。チン・リンが、小蓮(シャオリエン)ちゃんを固く抱きしめ、その乱れた髪を優しく撫で、震える小さな背中をさする、その瞬間、私は、チン・リンの顔に、神聖な美しさ、広大な慈愛、そして、非凡な強さが、輝いているのを見た。

その光景、私が決して忘れることのないその光景を見て、私は、私たちの人生が、本当に、全く新しいページへと、入ったことを、理解した。当初は単純に思え、八月末に終わる予定だった三ヶ月の夏の旅が、今や、十月の終わりに近づくまで、長引いていた。初めは、ただこの修煉の道を、より深く知りたいという思いから、滞在を延長することを決めたが、今や、小蓮(シャオリエン)ちゃんの出現によって、この決断は、間違いなく、私たちを、この激動の地に、いつまでもと知れず、さらに長く、留まらせることになるだろう。私たちはもはや、ただの旅行者ではなかった。私たちは、不本意ながら、親となり、悲痛な境遇から抜け出したばかりの、か弱い命を、庇護し、守るという、神聖な責任を、肩に負ったのだ。チン

・ リンの善の心と、勇気から生まれ、私たち二人で心一つにして実行する、この心からの決断こそが、逆境の中で私たちが得た、最も深く、そして真実の、真・善・忍（しんぜんにん）の実践の学びだった。そしてそれはまた、私たちを、公式に、新たな旅路へと、危険に満ち、しかし意味に溢れた旅路へと、導いた。すなわち、迫害という嵐の中で、私たち三人全員の、生きる道を探す、旅路へと。

* * *

第十二章： 闇を越えて—— 対峙と、脱出

計画と、逃避行の始まり

チン・リンが小蓮 (シャオリエン) を腕に抱いたその瞬間、私たちは、この上海 (シャンハイ) で得ていた、相対的な安全が、もはや存在しないことを、非常にはつきりと理解した。私たちが、逮捕されたばかりで、一人は死亡、一人は行方不明となった、二人の法輪功 (ファルンゴン) 学習者の子供である、小蓮 (シャオリエン) を引き取った

ことは、間違いなく、治安機関の目を逃れることはないだろう。彼らがすぐに行動を起こさなくとも、小蓮(シャオリエン)を迎えてからの私たちのあらゆる行動は、おそらく、彼らの監視下にあつたのだらうと、私ははつきりと感じていた。このホテルに、あと一日でも滞在することは、あまりにも危険すぎる。私たちだけでなく、小蓮(シャオリエン)にとっても、そして、劉(リウ)さんのように、私たちを助けてくれた人々にとっても。

その夜、小蓮(シャオリエン)が、疲れ果ててチン・リンの腕の中で眠りについた後、私たちはホテルの部屋に座り、囁くような声で、計画を練った。状況は、非常に緊迫していた。

「直ちに出不ければならない。今夜、あるいは、遅くとも、明日の未明に」と私は、激しく打つ心臓を抑えながら、平静な声を保とうと努めて言った。「ここに留まることは、彼らが捕まえに来るのを、座して待つことと、何ら変わりはない」

チン・リンは頷いて同意した。その顔は青ざめていたが、眼差しは、非常に固い決意に満ちていた。「どこへ行くの？」

「選択肢は、一つしかない」と私は答えた。「アメリカ領事館へ、たどり着く方法を探さなければならない。幸いにも、この上海(シヤンハイ)には、領事館がある。それが、私たちの当面の目標だ」

チン・リンは、すぐには遠くへ移動する必要がないと知って、少し安堵したようだったが、すぐにまた、心配になった。「でも、どうやって、そこまで安全に行くの？ここから領事館の区域までは、近くはないし、もし彼らが、本当に私たちに目をつけているなら…」

その通りだった。たとえ目標が同じ市内であつても、正規の書類のない小蓮(シヤオリエン)を連れて移動することは、もし検問に遭えば、非常に危険だった。「私たちは、依然として、細心の注意を払わなければならない」と私は言つた。「おそらく、直ちに領事館へは行かず、まず、市の別の区に、本当に人目につかない、一時的な隠れ家を探し、状況を窺い、適切な時機を見つける。私たちは、最も監視の少ない交通手段、例えば、短い区間はタクシー、あるいは、迂回路を走るバスを使い、警官の多い中心部を、避けるようにしなければならない」

大まかな計画が立てられた。今夜中、あるいは早朝に、このホテルを出る。上海 (シャンハイ) の、より郊外の地域に、より人目につかない、新しい一時的な隠れ家を探す。そこから、私たちは、最も安全な方法で、アメリカ領事館への連絡、あるいは、道順の調査を試み、同時に、いかなる余計な注意も引かないように努める。

出発する前に、私は、私たちが事前に決めておいた、簡単な暗号化されたメッセージ（直接的な言葉は使わず、示唆する言葉だけを用いる）を通して、非常に慎重に、劉 (リウ) さんに再度連絡を取ろうと試みた。彼に、私たちの状況と計画を知らせ、同時に、もし可能であれば、もし状況が悪化し、私たちが上海 (シャンハイ) を離れなければならなくなつた時に、他の地域の学習者のネットワークに、私たちを支援できるよう、知らせておいてほしいと頼んだ。私たちは、これが劉 (リウ) さんにとって、非常にリスクの高い要求であることを、知っていたが、この状況下では、私たちには、他に方法がなかった。

準備は、暗闇の中で、素早く、そして静かに行われた。私たちは、最も必要なものだけを、二つの小さなバックパックに詰めた。数着の服、残りのわずかな現金、私たちの身分証明書、そしてもちろん、私たちが常に持ち歩

いていた、表紙のない『轉法輪』という本。チン・リンは、私たちが数日前に急いで買った、少量の粉ミルク、ビスケット、そして小蓮(シャオリエン)ちゃんのための小さな服数着を、追加で準備した。

小蓮(シャオリエン)ちゃんは、まだ深く眠っていた。おそらく、彼女は、起こったばかりの恐ろしい出来事の後で、疲れ果てていたのだろう。チン・リンは、彼女を優しく抱き上げ、大きなショールで、しっかりと包んだ。私たちは明かりを消し、ホテルの部屋のドアに、最後に鍵をかけ、そして、夜の闇に覆われて、静かに立ち去った。

夜の上海(シャンハイ)の通りには、まだ少しの光があったが、小さな路地は、静まり返っていた。不意の物音一つにも、私たちは、びくりとした。私は常に、誰かに見られているかのような、不安な感覚があったが、それを外に出さないように努めた。私たちは、かなり長い距離を歩き、市の外れにある、バスターミナルへ向かった。そこには、都内の長距離路線や、郊外の区へ向かうバスが、発着していた。

幸運なことに、私たちが隠れ家として目指していた、郊外の区へ向かう、夜行バスが、一台、出発準備をしていた。私たちは、できるだけ普段通りの表情を保とうと努めながら、切符を買い、そして素早くバスに乗り込み、暗闇に隠れた、一番後ろの二席を選んだ。チン・リンは、小蓮(シャオリエン)ちゃんを固く胸に抱き、彼女が眠り続けられるように、聞き慣れた子守唄を、そつと口ずさんだ。

バスが、のろのろと動き出し、賑やかだが、同時に多くの危険をはらむ、この中心部を離れた時、私は、ようやく、少しだけ安堵のため息をついた。しかし、それは、一時的なものに過ぎなかった。窓の外を見ると、濃密な夜の闇が、まるで、私たちの前で待っている、不確かな未来そのもののようだった。私たち三人の、危険に満ちた逃避行は、まだこの都市の範囲内での、最初の数歩に過ぎなかったが、すでに、始まっていた。私たちは、何に直面しなければならないのか、領事館へ、安全にたどり着くことができるのかどうか、分からなかった。ただ一つ確かなことは、私たちは、どんな犠牲を払っても、小蓮(シャオリエン)を守らなければならないということ、そして、この困難な道の上で、大法の、そして、善意の人々の助けを、信じることだった。

危険の中の、善良さのネットワーク

この広大な上海（シャンハイ）市の、私たち三人にとっての、新しい安全な隠れ家を探す旅は、緊張と疲労に満ちた日々の連続だった。夜行バスで郊外へ向かい、古いホテルを出た後、私たちは、一箇所に長く留まることを避け、絶えず移動しなければならなかった。人目につかず、書類の提示をそれほど厳しく要求せず、それでいて小蓮（シャオリエン）にとっても安全を確保できる宿を見つけることは、決して単純ではなかった。警官が巡回している地域を、たとえそれが通常の交通検問であっても、通らなければならないたびに、私の心臓は激しく鼓動した。私とチン・リンは、できるだけ平静を装い、チン・リンは、眠っているか、眠っているふりをしている小蓮（シャオリエン）を、固く胸に抱き、子供の存在が、彼らの注意を少しでも逸らしてくれることを、願っていた。

食事は、主にコンビニエンスストアや、道端の小さな食堂で、急いで買ったものだった。小蓮（シャオリエン）ちゃんは、まだ幼かったが、どうやら、異常な事態と、緊

張した空気を、感じ取っているようだった。彼女は、普段よりもずっとおとなしく、ぐずって泣くことも少なく、ただ静かにチン・リンの胸に寄り添い、時折、通り過ぎる、見慣れない街の風景を、当惑したように見つめていた。彼女のそんな姿を見ると、私たちの心は、早く安全な解決策を見つけなければならないという、決意を、さらに固めた。

困難に満ち、時には完全に孤立無援に思えた、最初の数日間、私たちは、暗号化されたメッセージで劉（リウ）さんに託した言葉が、実際に効果を発揮するとは、思いもよらなかった。真・善・忍（しんぜんにん）への共通の信念によって結ばれた、善意と相互扶助の、目に見えないネットワークが、まさにこの上海（シャンハイ）で、静かに活動し、私たちを助けてくれたのだ。

私たちが、別の区で、一時的な宿を探して、かなり苦労していた時、一日中さまよい歩き、少し絶望を感じ始めていた矢先、人気のないバス停で、福々しい顔立ちの中年の女性が、不意に、私たちに近づいてきた。彼女は多くを語らず、ただ、住所を記した小さな紙片をチン・リンに渡し、そっと言った。「劉（リウ）さんのお友達の方々ですね？私について来てください」

初めは、真相が分からず、少し躊躇したが、彼女の誠実な眼差しと、落ち着いた様子を見て、私たちは、信じることに決めた。彼女は私たちを、大通りから離れた、かなり静かな路地の奥にある、小さなアパートへ案内した。そこは、彼女の家だった。その夜、何日間も移動し続けた後で初めて、私たちは、温かい寝床、温かい食事、そして一時的な、安全な感覚を、得ることができた。彼女は、私たちの状況について、多くは尋ねず、ただ静かに、助けてくれた。彼女は、私たちが持ち運べるように、少しの乾物を追加で用意し、小蓮（シャオリエン）ちゃんには、いくつかのお菓子をくれ、そして、もし明日、さらに移動するなら、検問所や、私服警官の多い地域を避けるために、どの道を通るべきかを、教えてくれた。

「お二人は、どうぞ安心して、ここで一、二日、お休みください。ここは、一時的には安全です」と彼女は、私たちを休ませる前に言った。「私たちの多くもまた、困難な状況を経験してきました。助けられることは、助けるだけです。師父を信じ、大法を信じれば、万事、きっとうまくいきます」

その助けは、一度きりではなかった。その後の上海（シャンハイ）での日々、私たちが安全を確保するために、

何度か宿を変えなければならなかった時、私たちは、劉（リウ）さんのネットワークにいる、他の人々から、同様の支援を、再び受けた。ある時は、事前に知らされていた待ち合わせ場所で、一人の青年が私たちを迎えに来て、彼の家に一晩泊めてくれた。またある時は、年配の夫婦が、家主が良い人で、多くの書類を尋ねないであろう、小さな宿へ行くように、私たちに教えてくれた。一度は、私たちが不慣れな地域をいくつか通過する際に、ある学習者が、自家用車で私たち三人を乗せ、危険のありそうな場所を避けるのを、手伝ってくれたこともあった。

その助けを受けるたびに、私たちの心には、深い感謝の念が込み上げてきた。私たちは、これらの人々、この上海（シャンハイ）の中心で、質素に暮らすこれらの法輪功（ファルンゴン）学習者たちが、ただの紹介でしか知らない私たち――を助けるために、自分自身と、その家族を、少なからぬ危険に晒していることを、知っていた。彼らは、いかなる個人的な利益のためでもなく、ただ純粋に、善の心から、同修としての情から、そして、自分たちがしていることの正しさへの信念から、そうしているのだ。彼らの勇敢さ、落ち着き、そして無私の心は、この政権がばらまこうとしている、残虐さと恐怖とは、全く対照的な、非凡な精神的な力を、放っていた。

法輪功（ファルンゴン）の学習者だけでなく、時には、上海（シャンハイ）の一般市民、おそらくは法輪功（ファルンゴン）について知らないか、あるいは深く理解していないが、それでも良心と善意が行動を促した人々からも、予期せぬ助けを受けることがあった。ある時、私たちが道端の小さな食堂で疲れて休んでいると、女将が、小蓮（シャオリエン）ちゃんが疲れている様子を見て、黙って、温かいお粥を一杯、代金も取らずに、彼女のために持ってきてくれた。またある時には、一人のタクシー運転手が、私たちが寄る辺なく、幼い子を連れているのを見て、遠回りをせず、むしろ、目的地へ、最も早く、安全に着く方法を、教えてくれた。

それらの、たとえ誰からであれ、小さな親切な行いは、皆、この不安に満ちた日々の中で、私たちを温める、温かい炎のようであり、人間の善良な本質への、たとえ最も暗い状況下でも、善の光は常に存在し、静かに広がっているという信念を、私たちに、さらに与えてくれた。その目に見えない善良さのネットワークこそが、貴重な精神的な支えとなり、私たちに、領事館への道を探し続ける、自由と正義の光へと向かう旅を、続けるための、さらなる力と希望を、与えてくれたのだ。

網にかかる——王明（ワン・ミン）、逮捕される

善良さのネットワークと、同修たち、そして上海（シャanghai）の親切な市民の勇気のおかげで、私たちは、恐怖の中での潜伏と移動の日々を、何日も乗り越えることができた。古いホテルを出てから約二週間、この広大な都市の中で、一時的な宿を絶えず変え、できるだけ内密に移動する方法を探し続けた後、私たちは、ついに、目標であるアメリカ領事館に、非常に近づいたと感じていた。

私たちが調べた情報によれば、領事館は、かなり中心部の地域にあった。私たちは、領事館の近くのカフェか、あるいはどこか公共の場所を見つけ、そこから状況を観察し、中へ入る適切な時機を探す計画を立てていた。安全と、脱出への希望が、これまで以上に、力強く芽生え始めていた。

その日の午後、私たちは、アメリカ領事館から数百メートル離れた通りで、タクシーを降りたばかりだった。私

たちは、直接的な注意を引くのを避けるために、意図的に、少し離れた場所で降りた。この通りは、人通りがかなり多く、多くの店やオフィスがあった。チン・リンは、小蓮(シャオリエン)をあやしていた。彼女は、市内を移動した後で、少し疲れているようだった。私は、平静を保とうと努め、周りを観察し、領事館にもっと近づく前に、一時的に休める場所を探していた。

ちょうどその時、私は、何かがおかしいと感じた。私たちが車を降りた時から、近くをうろついているように見えた、数人の私服姿の男たちが、不意に、意図的に、私たちの方へ近づき始めた。私の心臓は、激しく鼓動した。虫の知らせが、不吉なことを告げていた。

「身分証を拝見」と、そのうちの一人が、冷たい声で言い、警察の身分証を、素早く見せて、すぐにしまった。彼の視線は、私たちを一瞥し、そして、チン・リンの胸で目をこすっている小蓮(シャオリエン)の上で、かなり長く留まった。

私は平静を保とうと努め、自分とチン・リンのパスポートを取り出した。最悪の事態には覚悟していたが、出来事があまりに速く、そしてまさにこの瞬間に起こったことに、私は、茫然とせずにはいられなかった。

「この子は、お前たちの子供か？」と別の男が、小蓮（シャオリエン）の方を指差して、尋ねた。

「はい、私たちの娘です」と私は、彼らがすでにすべてを知っていることを、心の中では分かっているが、自然に見えるように努めて、答えた。

「その子の書類はどこだ？」と最初の警官が、相変わらず抑揚のない声で、しかし、まるで私たちが持っていないことを確信しているかのように、その目はより鋭くなって、続けて尋ねた。

これこそが、私たちが最も恐れていたことだった。私たちには、小蓮（シャオリエン）が自分たちの子供であることを証明する、いかなる書類もなかった。私は、紛失したために、子供の書類を再発行手続き中だと、あれこれ説明し始めようとしたが…その説明が、全く無駄であることは、分かっていた。彼らは、私たちを追跡していた。彼らは、私たちが誰であることを知っており、そして彼らは、まさにこの時、私たちが保護を求められる場所に、たどり着く寸前のこの時を選んで、手を出してきたのだ。

私が最後まで言い終わるのを待たずに、一人が合図をした。即座に、近くの通りの角から、さらに数人が現れ、

素早く、私たちを取り囲んだ。空気は、突然、極度の緊張に包まれた。これで終わりだ。彼らは、この時を待っていたのだ。

「署まで、同行してもらおう」と、リーダー格の男が、声はすでに硬くなって、言った。「いくつか、はっきりさせねばならん問題がある」

「私たちは、何も悪いことはしていません！」チン・リンは、小蓮(シャオリエン)をさらに固く抱きしめながら、狼狽して声を上げた。「私たちは、アメリカ国民です…」

「黙れ！ついて来い！」と別の男が、チン・リンの手を、乱暴に払いながら、怒鳴った。

彼らは、私の腕を掴もうと、近づいてきた。反射的に、私は一步下がり、チン・リンと小蓮(シャオリエン)を、腕でかばった。「何をする気だ？我々には、領事館に連絡する権利がある！領事館は、すぐそこだぞ！」私は、通りの人々の注意を引くことを願い、できるだけ大きな声で言おうと努めた。

しかし、その行動は、どうやら、彼らをさらに怒らせ、より迅速に行動させるだけだった。大柄な二人が、即座

に飛びかかり、私の両腕を、背後でねじ上げた。私は必死にもがいたが、抵抗することはできなかった。冷たい手錠が、私の手首に、固く食い込んだ。

「ミン！ミン！」チン・リンは叫び、私を止めようと、飛びかかろうとしたが、別の男に、阻まれた。小蓮（シャオリエン）は、その光景を見て、恐怖に泣き叫び、その胸が張り裂けるような泣き声は、人通りの多い通りに、響き渡った。

「彼を放して！あなたたち、何をしているの！」チン・リンは、涙を流しながら、絶望の中で叫んだ。

私は、彼らに、近くの通りの角に、おそらくは以前から待機していた、ナンバープレートのない車の方へ、引きずられていった。私は、最後に一度、チン・リンと小蓮（シャオリエン）を、振り返ろうと努めた。私服姿の者たちと、集まり始めた野次馬の群れに囲まれて、泣きじゃくる母子の姿が、まるでナイフのように、私の心を突き刺した。極度の痛み、無力感、そして心配が、私を襲った。私は、どうなるのだろうか？それ以上に重要なのは、この街で、私がいらない中、チン・リンと小蓮（シャオリエン）は、どうすればいいなのか？

私は、荷台に、強く押し込まれた。ドアが、ぱたんと閉まり、私を、暗闇と、恐怖の中に、閉じ込めた。車は走り去り、後には、小蓮（シャオリエン）の泣き声と、チン・リンの絶望的な姿が、残された。それは、これからの、暗黒の日々の中で、私を苛むであろう、一つの光景だった。包囲網は、私たちが希望に、もう少しで手が届こうとしていた、まさにその時に、固く、締め付けられた。私は、網にかかったのだ。

暗黒の拘置所での日々

私は、彼らが「拘留・尋問センター」と呼ぶ場所へ連れて行かれた。実のところ、それは上海（シャンハイ）のどこかにある、一時的な拘置所であり、冷たく、湿っぽく、そして常に、息が詰まるような、恐怖の空気が漂う場所だった。指紋採取、写真撮影、そしてすべての私物の没収といった、形式的な手続きの後（幸いにも、あの時『轉法輪』という本はチン・リンのバックパックの中にあり、そうでなければ、きっと彼らに取り上げられてい

ただろう）、私は、二十人近くの他の者たちと共に、狭く、悪臭のする独房に、押し込まれた。

ここでの生活環境は、想像を絶するほど、劣悪だった。空気は常に、汗の匂い、カビの匂い、そして部屋の隅にある、むき出しの便所からの不快な匂いで、満ちていた。私たちは、冷たいコンクリートの床の上で、互いに押し合うようにして寝なければならず、一人一人には、破れた筵が一枚、与えられるだけだった。唯一の明かりは、天井から吊るされた、黄ばんだ電球で、それは決して消えることがなく、昼と夜の区別を、曖昧にさせていた。食事は、ほんのわずかな囚人食だけで、通常は、乾ききった白米と、少しの、煮崩れた野菜、そして数切れの、わずかな豆腐。それは、絶えずつきまとう空腹を、和らげるには、到底足りなかった。

しかし、肉体的な不快さは、私が耐えなければならなかった、精神的な圧力と、絶え間ない尋問に比べれば、何でもなかった。ほぼ毎日、通常は、真夜中や、夜明け前といった、最も意地の悪い時間に、私は独房から引きずり出され、小さく、冷たい尋問室へ連れて行かれた。そこで、顔に直接当たる、煌々とした電灯の下で、私は、

交代で尋問する、数人の警官に、対峙しなければならなかった。

彼らは、私たちがただの旅行者であり、小蓮（シャオリエン）を引き取ったのは、人情からだという、私の説明を、全く信じなかった。彼らは、私がアメリカのスパイであり、旅行を隠れ蓑にして、諜報活動を行い、「邪教組織」法輪功（ファルンゴン）と結託して、中国政府の転覆を企てていると、執拗に、罪を着せようとした。彼らはさらに、意図的に、事実を歪め、私が、何か黒い目的のために、小蓮（シャオリエン）を誘拐したのだと言った。

「早く吐け！誰の命令だ？お前たちのネットワークは、ここに誰がいるんだ？」彼らはテーブルを叩き、怒鳴りつけ、その声は、脅迫に満ちていた。「アメリカ国籍を持っていれば、いい気になっているのか？ここは、中国の土地だ！素直に白状しなければ、牢獄で朽ち果てることになるぞ！」

彼らは、あらゆる方法で、心理的な圧力をかけてきた。ある時は脅し、チン・リンと小蓮（シャオリエン）がどこにいるか知っている、もし私が協力しなければ、二人は危険な目に遭うぞと言った。またある時は、偽りの、懐柔的な態度を見せ、もし私が「功を立てて罪を償

う」――すなわち、でっち上げの罪状を認め、私たちを助けてくれた法輪功（ファルンゴン）学習者の名前を白状する――ならば、寛大な処置をし、早期に釈放されるよう助けてやると、約束した。

さらに圧力を加えるために、彼らは、精神的、肉体的な拷問も用いた。蘭（ラン）さんが語ったほど、残虐ではなかったが（おそらくは、私が外国人であるため、彼らにも少しの遠慮があったのだろう）、それでも、人を衰弱させるには、十分だった。私は、終わりのない尋問の間、しばしば、非常に不快な姿勢で、何時間も、立たされたり、座らされたりした。彼らは、意図的に、私に十分な睡眠を与えず、数時間おきに、尋問のために起こしたり、独房でわざと大きな音を立てたりした。一度、私が、彼らが押し付ける不条理なことを、断固として認めなかったために、一人の尋問官が、怒って、私の顔を強く平手打ちし、床に蹴り倒したこともあった。

彼らはさらに、法輪功（ファルンゴン）と、李洪志師父を、中傷、誹謗する、非常に粗雑なプロパガンダビデオを、私に見させた。彼らは、印刷済みの資料を私に渡し、大法を誹謗する記事を、読むように強要した。それは、ま

さに精神的な拷問であり、私の中に芽生えたばかりの信念を、揺さぶろうとする、試みだった。

その長く、暗く、そして時には絶望的に思えた日々の中で――私は、ここで、一ヶ月半、おそらくは二ヶ月近く、拘留されていたと見積もっている――チン・リンと小蓮（シャオリエン）への心配と、肉体的、精神的な苦痛が、私を打ちのめしかねないと思われた時、まさに、この拘置所で私が見、そして考えたことこそが、非常に大きな、精神的な支えとなった。

私の独房には、同じく、法輪功（ファルンゴン）の修煉のために逮捕された、他の囚人が、何人かいた。彼らは、自分の状況について、多くは語らなかったが、その小さな声、穏やかな仕草、そして、過酷な状況に直面した時の、奇妙なほど落ち着いた態度から、私は、彼らがそうであると、分かった。私は、彼らが、看守の注意が最も緩む時に、たとえほんの数分間であっても、静かに座って、坐禅を組んでいるのを、見た。私は、彼らが、誰も聞いていないと思って、『洪吟』の中の詩を、囁いているのを、聞いた。

私はさらに、彼らが尋問に連れて行かれ、体に新しい傷を負って戻ってくる光景を、目撃したが、その眼差しは、

依然として、奇妙なほどの、不動の意志を輝かせ、少しの恨みも、恐怖も、なかった。年配の農民の男性は、彼らに殴られ、歩くのも非常に困難なほどだったが、別の囚人が病気になった時、彼は、依然として、自分のわずかな食事を、譲ろうと努めた。このような極限の状況下での、彼らの、非凡な善良さと忍耐は、私に、非常に強い影響を与えた。

まさにそれらの光景と、私が、『轉法輪』で学んだ法理、特に、真・善・忍（しんぜんにん）の原理を、頭の中で絶えず繰り返していたことが、私が、理性と信念を、固く保つのを、助けてくれた。私は、なぜ彼らが、これほどまでに、不屈でいられるのかを、理解し始めた。なぜなら、彼らは、真理を、人生の真の意味を、見出したからだ。彼らは、これらの苦難が、ただ一時的なものであり、自分自身を鍛え、業力（ごうりき）を消し去り、そして、本来の善き本性へと、立ち返るための、機会であることを、知っていたのだ。

最も善良な市民に対する、中国共産党の、その残忍で、不条理な本質を、目の当たりにしたことは、私が、劉（リウ）さん、陳（チェン）さん、そして蘭（ラン）さんが語ったことについて、最後に残っていた、すべての疑い

を、払拭した。私は、これが、ある政権と、ある種の「迷信深い」人々の集団との間の、戦いではなく、善と悪、正と邪の間の、真の対決であることを、はっきりと認識した。そして私は、自分が、どちらの側に立つべきかを、知っていた。

暗黒の拘置所での、二ヶ月近くは、私を、打ちのめしはしなかった。逆に、それは、試練の炉のようであり、私の、法輪大法（ファルンダーファ）への信仰を、これまで以上に、固いものにすることを、助けてくれた。体は疲れ、飢え、そして、どうなるか分からない未来に、直面しなければならなかったが、私の心の中には、奇妙なほどの、明晰さと、不動の意志があった。私がいつ、この場所から、脱出できるのかは、分からなかったが、一つだけ、確かなことを、私は知っていた。私は、決して、悪に屈することはない。私は、決して、自分が幸運にも見出すことのできた、真の修煉の道を、放棄することはない、と。

外交的介入と、劇的な脱出

十二月の初め、上海（シャンハイ）の天気もまた、冷え込み始めていた。湿っぽい独房の中で、私は次第に時間の感覚を失い、ただ、信念と、心の中で繰り返す法理だけを頼りに、状況の過酷さと、体に染み入る寒さに、耐えていた。チン・リンと小蓮（シャオリエン）が今どうしているのか、妻と子が安全なのか、この広大な都市で、誰か彼らを助けてくれる者がいるのか、私には分からなかった。その心配は、しばしば、殴打や尋問の言葉よりも、私を苦しめた。

そして、ある冷たい朝、私が凍えるようなコンクリートの床の上で、懸命に座禅を組もうとしていた時、独房のドアが、突然開かれた。一人の看守が、無愛想な声で、私の名を呼んだ。「王明（ワン・ミン）！外へ出ろ！」

私は、何が起こるのか、分からなかった。また尋問か？あるいは、どこか別の場所へ、移送されるのか？私は、飢えと、寝不足と、寒さで、ふらふらになった体で、よろよろと立ち上がり、心の中では、多くを期待せずに、静かに看守の後について、独房を出た。

しかし、見慣れた尋問室へ連れて行かれる代わりに、私は、別の廊下を通り、どうやら事務室のような区域へ、案内された。そこでは、上官らしき幹部が、一人、待っ

ていた。彼は、測りがたい眼差しで、私を頭のとっぺんから爪先まで眺め、そして、机の上に置かれた、清潔な服（私の物ではなかったが）の方へ、顎をしゃくった。

「着替えろ」と彼は命じた。「お前は、釈放だ」

私の耳は、まるで鳴っているかのようにだった。釈放？二ヶ月近くもの間、拘留され、拷問され、不条理な罪状を着せられた後で、今、彼らは、突然、私が釈放されると言うのか？私は、自分の耳が信じられなかった。「なぜ…？」私は、どもりながら尋ねた。

「多くを聞く必要はない」と彼は、焦れたような声で、遮った。「調査の過程で、『誤解』があった。上層部が、お前の記録を、再検討した。お前は、アメリカ国民だ。我々は、国際法を尊重する。行ってもよい」

「誤解」？私は、それが、ただの言い訳に過ぎないことを、よく知っていた。間違いなく、外部からの、何らかの強い介入があったに違いない。まさか…チン・リンが、やり遂げたのか？まさか、この上海（シャンハイ）の、アメリカ領事館が、動いたのか？希望の光が、心の中に、差し込み始めたが、私はまだ、確信が持てなかった。

非常に迅速に、いくつかの簡単な書類手続きを終えた後、私は、拘留所の門の外へ、連れ出された。冬の、弱々しい太陽の光が、目に差し込み、私は、目を細めなければならなかった。外の冷たい空気が、顔に吹き付けたが、それは、自由の空気だった。私は、深く息を吸い込み、しっかりと立とうと努めた。

そして、私は、彼女を見た。チン・リンが、門からそう遠くない場所で、待っていた。その顔は、心配と寝不足で、やつれ、青ざめていたが、その目は、私を見ると、輝いた。妻の隣には、見知らぬ中年女性（私は、間違いなく、法輪功（ファルンゴン）の学習者だろうと推測した）に手を引かれて、小蓮（シャオリエン）ちゃんがいた。彼女もまた、ずいぶん痩せ、その目にはまだ、怯えの色が残っていたが、私を見ると、そっと「ミンおじちゃん！」と呼んだ。

その瞬間、私の中で抑えられていた、すべての力が、まるで堰を切ったかのように、溢れ出た。私は、彼らの方へ、駆け寄った。チン・リンもまた、駆け寄り、私に抱きつき、しゃくり上げて泣き始めた。私は、妻を固く抱きしめ、その痩せた体が、腕の中で震えているのを、感じた。私の涙もまた、抑えきれずに、流れ出た。それは、

嬉しさと悲しさが入り混じった涙、過ぎ去った痛みの涙、そして、もはや得られないと思われた、再会の喜びの涙だった。

「私…私、やったわ…あなた、釈放されたのよ…」 チン・リンは、私の腕の中で、しゃくり上げた。

「分かっていた…君ならと、分かっていたよ…」 私は、声を詰まらせながら答え、妻の乱れた髪を、撫でた。

私は、身をかがめて小蓮(シャオリエン)ちゃんを見た。彼女は、まだ少し、おずおずとしていた。私は、彼女を優しく抱きしめた。「小蓮(シャオリエン)ちゃん、いい子だ。もう大丈夫だよ。おじちゃん、君のところへ、帰ってきたよ」

一緒にいた女性は、穏やかに微笑んだ。「この数週間、この子は、私たちと一緒にいて、無事でした。奥様は、あなたのために、本当に大変なご苦労をなさいましたよ」

後になって、チン・リンは、彼女の、苦難に満ちた全過程を、私に語ってくれた。私が逮捕された後、妻は、ひどく混乱した。しかし、この親切な女性と、劉(リウ)さんが連絡を取ることができた、他の数人の学習者の助け

のおかげで、彼女と小蓮（シャオリエン）ちゃんは、上海（シャンハイ）の、人目につかない場所で、一時的に、安全な宿を、得ることができた。その直後、危険を顧みず、彼女は、あらゆる方法を探して、上海（シャンハイ）のアメリカ領事館へ、たどり着いた。初め、接触し、事情を説明することは、決して容易ではなく、官僚主義と、どこか疑念に満ちた態度に、直面した。しかし、その粘り強さ、私が不当に逮捕されたことの証拠（彼女は、私のパスポートを、持っていた）、そして、私たちと法輪功（ファルンゴン）との関連について、言及するという、無謀さ（非常にリスクが高いと知りながら）をもって、ついに妻は、一人の領事館員を、信頼させ、動かすことに、成功した。彼らは、公式に、外交公電を送り、中国側に、事件の解明と、アメリカ国民である王明（ワン・ミン）の釈放を、要求した。二ヶ月近くにわたる、絶え間ない外交的圧力が、最終的に、上海（シャンハイ）の地方政府を、譲歩させたのだ。

私たちの再会は、短かったが、感情に満ちていた。私たちは、自分たちが、まだ、本当に安全ではないことを、知っていた。ここは、依然として、中国の土地であり、彼らが私を「釈放」したことは、ただ一時的なものかも

しれない。私たちは、できるだけ早く、ここを離れなければならなかった。

私が釈放された後の、領事館からの、より積極的な支援を受けて、私たちは、三人全員にとって必要な手続きを、完了させるために、時間との競争を始めた。小蓮（シャオリエン）ちゃんの渡航書類を申請することは、非常に多くの困難に直面したが、領事館の強い介入と、緊急の人道的理由のおかげで、最終的に私たちは、彼女を、私たちと共に、中国から出国させるための、特別許可を、得ることができた。

ついに、十二月の最後の日々、世界中がクリスマスの雰囲気包まれる頃、私たちは、アメリカへ帰国する航空券を手し、上海浦東国際空港（シャンハイプードンこくさいくうこう）にいた。闇を越え、危険に立ち向かい、そして最終的には、劇的な脱出を遂げた、この旅は、終わった。私たちは、生き延び、小蓮（シャオリエン）を守り抜き、そして最も重要なことに、私たちの信仰は、破壊されるどころか、これまで以上に、強固なものとなっていた。トンネルの先の光が、本当に、現れたのだ。

* * *

第十三章： 東方は、光に満ちて——帰還と、広がり

帰国のフライトと、自由の地

上海浦東国際空港（シャンハイプードンこくさいくうこう）の滑走路を、ゆっくりと離れていく飛行機の上で、私は、チン・リンの手を、固く握っていた。極度の緊張感は、飛行機が、本当に中国の大地から、身を浮かせた時に、ようやく、少し和らぎ始めた。待合室での、出国手続き中の、最後の瞬間まで、行く手を阻まれるのでは

ないか、嫌がらせを受けるのではないかという恐怖が、私たちの頭の中に、常にあった。今、窓から、中国の大地が、次第に遠ざかっていくのを見ると、まだ多くの、とりとめのない思いが入り混じってはいたが、非常に大きな安堵感が、ようやく、心の中に、忍び込んできた。

太平洋を越える長いフライトは、私たちが、危険な場所から、脱出したのだと、本当に意識するために、必要な、静寂の時間であるかのようにだった。恐ろしい数週間の後で、疲れ果てた体は、私とチン・リンを、すぐに眠りへと誘った。小蓮（シャオリエン）ちゃんも、おそらくは、空気の変化を感じ取ったのだろう、旅路の大半を、チン・リンの温かい腕の中で、すやすやと眠っていた。時折目を覚まし、隣で、安らかに眠るチン・リンと小蓮（シャオリエン）ちゃんを見ると、私の心には、私たち三人が、すべてを乗り越えるのを助けてくれた、何か奇跡的な加護への、名状しがたい感謝の念が、込み上げてきた。

しかし、その安堵感も、心の中の重荷を、消し去ることはできなかった。殺害された康裕（カン・ユー）さん、獄中で行方不明となった陳梅（チェン・メイ）さん、そして、劉（リウ）さん、陳（チェン）さん、蘭（ラン）さん、そして、故郷に残され、依然として残酷な弾圧に直面してい

る、どれほど多くの他の学習者たちの姿が、心に浮かび、私を、苛んだ。私たちは、自由を得た。しかし、彼らは、どうなのだろう？再会し、危険から脱出した私たちの喜びは、どうやら、悲しみの色を帯び、彼らを置き去りにしてしまったことへの、漠然とした罪悪感を、まとっていた。

ついに、決して終わらないかと思われた長い旅路の後、飛行機は、アメリカの国際空港に、着陸した。この時、すでに、十二月の最後の日々だった。飛行機のドアから出て、慣れ親しんだ空気を吸い込み、聞き慣れた音を聞き、第二の故郷の、懐かしい風景を見ると、絶対的な安全の感覚が、私たちを包んだ。空港は、きらめく装飾の明かり、クリスマスツリー、そして、スピーカーから流れる、心地よいクリスマスのメロディーで、華やかに飾られていた。ここの、温かく、賑やかで、そして自由な空気は、私たちが、中国で経験したばかりの、息が詰まるような、緊張し、危険に満ちた空気とは、全く対照的だった。

ここだ、自由の地。私たちは、本当に、帰ってきたのだ。

チン・リンは、小蓮(シャオリエン)ちゃんを固く抱きしめた。彼女は、好奇心に満ちた、大きな瞳で、周りのす

べてを、当惑したように見ていた。その光景を見て、私は、深く認識した。私たちが帰ってきた時、もはや、出発した時の、二人ではなく、三人なのだと。私たちは、新しい家族を、嵐の真っ只中で形成された、新しい家族を、連れてきたのだ。小蓮(シャオリエン)ちゃんは、私たちが引き取った、ただの孤児ではない。彼女は今、私たちの娘であり、過ぎ去った、激動の旅路の、生きた証であり、私たちが、心から、背負うことを誓った、神聖な責任なのだ。

慣れ親しんだアメリカの地に足をつけ、安全と自由の感覚が、満ち溢れていたが、私の心は、依然として、重かった。中国での、七ヶ月近くの記憶――最初の好奇心から、奇妙な出会い、大法を見つけた時の幸福、そして、迫害を目撃し、直接経験した時の、恐怖に至るまで――すべてが、まだ、あまりにも新しく、あまりにも深く、色褪せることは、なかった。私たちは、自由の地へ、帰ってきた。しかし、私たちの魂の一部は、どうやら、依然として、東方に、不屈の精神で耐え、そして、より明るい明日を、希望する、同修の友人たちと共に、残っているかのようにだった。この帰国のフライトは、劇的な脱出の、終わりを告げたが、同時に、私たちの人生におけ

る、新しい章の、始まりでもあった。この自由の地での、大法の光の下での、新しい人生の。

大法（ダーファ）の光の下で、新しい生活を築く

アメリカへ帰国してからの最初の日々、私たちは、中国での七ヶ月近くの後、完全に覆されてしまった生活を、立て直そうと努めた。私たちの見慣れた家には、今や小蓮（シャオリエン）ちゃんの、たどたどしい話し声と笑い声が加わり、新鮮な空気をもたらしたが、同時に、小さな責任も伴っていた。私たちは、家族、友人、同僚に連絡を取り、自分たちの長い不在と、家族の新しい一員の出現について、できるだけ簡潔に説明しようと努めた。大半の人々は、驚き、好奇心を示したが、同時に、私たちに同情と支持を表明してくれた。家にいた、私たちの年長の子供たちも、最初の心配の後、両親が無事に帰ってきたことを非常に喜び、小蓮（シャオリエン）ちゃんを、小さな妹として、歓迎してくれた。

今、最も重要なことは、小蓮 (シャオリエン) ちゃんが、新しい環境に溶け込むのを、助けることだった。彼女は、経験してきたことの後、まだ心理的なトラウマを抱えていた。夜には、しばしば、びくっとして泣き叫び、両親の名を呼んだ。チン・リンは、ほとんどすべての時間を、彼女のそばで、世話をし、慰め、そして愛することに、費やした。忍耐強さと、誠実な愛情をもって、妻は、次第に、小蓮 (シャオリエン) ちゃんが、より安全に、より心を開き、そして、英語と、新しい生活に、慣れ始めるのを、助けていった。チン・リンが、小蓮 (シャオリエン) ちゃんの世話をしている様子を見ると、私は、母親の、そして、自分が信じることを実践しようと努めている人の、善良さと寛容さを、はっきりと見た。

家庭生活を安定させると同時に、私たちは、素早く、地元の法輪功 (ファルンゴン) 学習者のコミュニティと、繋がる方法を探した。家に帰ってわずか数日で、私たちは、最寄りの煉功場所を見つけ、朝の煉功と、週末のグループ学法に、参加し始めた。

監視されたり、逮捕されたりする心配をすることなく、屋外で自由に功を煉り、公に大法の書籍を読み、そして同修たちと修煉の体験を分かち合えるという感覚は、私

たちが中国で経験したこととは、全く異なる、非常に貴重なものだった。ここでは、私たちは、多くの国、多くの異なる文化から来た学習者たちに出会ったが、皆、真・善・忍（しんぜんにな）への共通の信念を持ち、より良くあろうと、共に努力していた。ここの、開かれた、和やかで、清らかな修煉の空気は、私たちが、さらなるエネルギーと力を、与えられているように感じさせてくれた。

本を読み、功を煉ることを、規則正しく堅持することが、私たちの新しい生活の、確固たる基盤となった。『轉法輪』の中の深遠な法理は、私たちが、経験した苦難の意味を、より深く理解するのを助けただけでなく、私たちの前方の道を、照らし出してくれた。私たちは、悲しい記憶に、より平然とした心で向き合い、それを、心性を高めるために乗り越えなければならない、試練と見なすことを、学んだ。私たちは、その良くない体験を、さらに熱心に修煉するための、原動力へと変えることを、学んだ。

私たちの人生は、恐ろしい嵐を経験したが、今や、以前よりも、ずっと意味深く、そして安らかになっていた。私たちは、人生の目的が、外部の物質的な名利を追い求

めることではなく、修煉し、自らの本来の善き本性へと、立ち返ることなのだと、より深く理解した。一日一日が過ぎる中で、私たちは皆、自分の行動、思考を、真・善・忍（しんぜんにん）の基準と照らし合わせ、家庭と社会における、自分の役割を、より良く果たそうと努めた。

私とチン・リンの関係は、共に経験した、ほとんど生死を分けるような試練の後、ますます固く、理解し合うものとなった。私たちは、ただの夫婦ではなく、帰り道で、互いに注意を促し、導き合う、同修の友でもあった。私たちは、共に法の本を読み、共に自分が悟ったことを分かち合い、相手に何か良くない兆候が見られた時に、互いに注意を促し合った。

私たちはまた、小蓮（シャオリエン）ちゃんを、愛情と、真・善・忍（しんぜんにん）の価値に満ちた環境で、育てようと努めた。私たちは、彼女に、優しさ、誠実さ、そして寛容さについての物語を、語って聞かせた。次第に、彼女の唇に、笑みが戻り、その目は、澄み渡り、活発になった。彼女は、大法についてすべてを理解するには、まだあまりにも幼かったが、私たちは、善良さの種が、彼女の純真な魂に、蒔かれていると、信じていた。

旅が長引き、予期せぬ出来事が、私たちに多くの仕事の計画を、一時的に断念させ、また、少なからぬ費用を費やさせはしたが、私たちの、アメリカでの新しい生活は、精神的な面で、遥かに意味深いものとなっていた。大法の光が、生活の隅々までを照らし、私たちが、魂の平穩、困難に立ち向かう力、そして、より高潔な人生の目的を、見出すのを、助けてくれた。私たちは、自分たちの生活を、ただ物質的なものによってではなく、まさに、信念と、日々の真・善・忍（しんぜんにん）の実践によって、再建していた。

平穩の中の嵐

中国大陸で私たち夫婦が直面した恐ろしい激動の後、アメリカでの私たちの生活は、徐々に安定を取り戻していった。私が心血を注いで築き上げた製薬会社は、着実な発展の歩みを始め、製品は市場に好意的に受け入れられ、家族の主な収入源となっていた。それと並行して、私たち夫婦は二人とも、大学での教職を得ていた。この仕事からの収入は、会社の利益に比べれば、取るに足らない

ものではあったが、それは私たちに、学術的な環境で貢献する喜び、科学的な名声を保つこと、知識人層と交流する機会、そして私たち二人が共に情熱を注いでいた研究活動が続けるという、喜びをもたらしてくれた。私たちは、個人の修煉、共同での学法、深い静坐の時間、そして地元の法輪功（ファルンゴン）学習者たちと共に法を広める活動に参加する時間を、より多く持つようになった。そこでは、同じ中国文化のルーツを持つ多くの人々と、共感と絆を見出すことができた。私の心の中では、依然として中国大陆で苦難に耐えている同修たちへの思いが重くのしかかっていたが、私たちの小さな家は、再び笑い声で満ち溢れていた。

しかし、平穏は長くは続かなかった。

最初の波紋は、私の製薬会社で現れた。初めは、いくつかの小規模な契約が、土壇場で、曖昧で理解しがたい理由でキャンセルされただけだった。ビジネスの経験から、私はそれを、通常の商業リスクだとしか考えなかった。しかし、やがて、問題は、より頻繁に現れ始めた。私たちがヨーロッパへ輸出したあるロットの製品が、社内の品質管理プロセスが非常に厳格であったにもかかわらず、突如として品質基準の問題に直面した。続いて、会社の

製品に関する、根も葉もない噂が、いくつかのオンラインフォーラムで広まり始め、消費者の間に、疑念を植え付けた。長年のパートナーたちは、用心深い態度を示し始め、いくつかの有望な新製品の研究開発プロジェクトが、原材料の供給不足や、不可解な重要情報の漏洩により、突然停滞した。

私の頭は、張り詰めた弦のようだった。私は、科学者としての明晰さを保とうと努め、管理、運営の各段階を再調査したが、致命的な欠陥を、どうしても見つけ出すことができなかった。無力感と、漠然とした不安が、私の心を、占拠し始めた。

致命的な一撃は、私の義理の兄が、元々大株主であり、会社の方向性を非常に信頼していたにもかかわらず、「個人的な投資ポートフォリオの再構築」を理由に、突然、全株式の売却を宣言した時に、やって来た。私は、その理由の背後に、根も葉もない噂に対する混乱と、そしておそらくは、私の会社が苦境に立たされているのを見て、彼自身の家族からの圧力があることを、知っていた。私が常に実の兄弟のように思っていた、義理の兄の決断は、まるで爆弾のように会社全体を揺るがし、ドミノ効果を引き起こした。かつては快く融資を約束してい

た銀行が、突然、承認済みのローンを凍結し、あらゆる理由をつけて、融資の実行を遅らせた。その一方で、以前の投資に対するローンの利子は、依然として、容赦なく請求され、まるで、会社の首を徐々に絞める、縄のようだった。

会社の嵐と並行して、同様の黒い影が、私たち夫婦の教職にも、覆いかぶさり始めた。私の学部では、囁き声や、探るような視線が現れ始めた。かつては親しかった数人の同僚が、今やよそよそしい態度を示すようになった。学部長は、具体的な証拠を何も示さずに、「改善が必要な業績」や、「学生からの、あまり好意的ではない意見」について、それとなく口にした。妻のチン・リンもまた、彼女の学部で、同様の状況に直面していた。目に見えない圧力は日増しに大きくなり、私たちが愛し、大切にしていた、学術的な職場環境を失う危険が、私たち二人の頭上に、垂れ込めていた。

チン・リンは、心の中では混乱していたが、それでも、私の精神的な支えになろうと努めてくれた。私たちの二人の年長の子供たち、一人は大学二年生、もう一人は高校二年生で、もう大きく、多くのことは自分でできるが、それでも、特に彼らもまた、起こっている混乱を感じ取

っている時には、家族からの少なからぬ支援を、必要としていた。しかし、小蓮(シャオリエン)ちゃんは違った。彼女はまだ幼く、また、孤児院での、そして逃避行での、恐ろしい日々のトラウマを、心に抱えていた。彼女は、徐々に回復するために、特別なケア、無限の愛情と忍耐を、必要としていた。夜、小蓮(シャオリエン)ちゃんを寝かしつけた後、私たち夫婦は、再び隣り合って座った。それは、果てしないかのような混乱を、どう解決するかを話し合うためではなく、共に法を学び、坐禅の中で静けさを見出すためだった。チン・リンは、しばしば、私に、法理の教え、逆境における「忍」の字について、そして、自分自身に、手放すべき執着がないか、内に向けて探すことについて、優しく思い出させてくれた。

仕事から積み重なる困難に加え、私たちは、家族からの心配にも、直面しなければならなかった。私の両親は、今や七十歳を超え、退職し、私の長兄の家族と共に暮らしていた。彼らは中国で生まれ育ち、1970年代にアメリカへ移住してきたため、中共の本質を、非常によく理解していた。二人とも、法輪功(ファルンゴン)と、私たちが追求していることについて、まだ本当に深くは理解していなかったが、父は、より平然としており、元々口数が少なく、常に子供たちの選択を、尊重していた。母

は違った。時折、彼女は電話をかけてきて、そのたびに、それは私にとって、一つの試練だった。私が中国で二ヶ月近く拘留されたことを知って以来、彼女の中の、中共への恐怖は、さらに深まっていた。彼女は私を愛し、私の家族が耐えなければならないことを、不憫に思っていたが、彼女の表現の仕方は、私をひどく疲れさせた。母は、しばしば、心配に満ちた、半分諭し、半分責めるような声で言った。「ミン、母さんは、少しも良くないと思うの。あなたが、そうやって法輪功（ファルンゴン）に関わり続けて、その上、会社のこと、大学のことが、次々と問題を起こしているのに、何も異常だと思わないの？母さんがただ心配なのは…彼らが、また、中国での時のように、あなたたちを、放っておかないのではないかということなのよ」彼女は、私がもっと「柔軟に」なり、「身の程をわきまえ」、ひいては、「身を守る」ために、修煉のことを「一旦脇に置く」べきだと、それとなく、私を説得しようとした。

そのような時、私の心の中にも、不可解な偶然の一致によって、少しの波紋が立つことはあったが、私は依然として、母を、そしてまた、自分自身を、安心させようと

努めた。私は、おそらく母が、古いトラウマのせいで、過度に心配しているのだろうと思った。アメリカ、自由で、法の支配を重んじる国で、どうして、そのような巧妙な、水面下での破壊活動が、起こり得るだろうか？私は依然として、会社の困難は、内部の管理問題、市場の変動、あるいは、私の能力不足によるものだと、信じていた。私は、何か目に見えない力のせいにするのではなく、自分自身で、原因と解決策を、見つけ出さなければならなかった。母の言葉は、それが愛情と、生来の恐怖から来ていると、分かってはいたが、それでも、私をさらに重苦しくさせ、時には、彼女を安心させられないことに、無力さを感じさせた。

「ミン」とある時、母からのそのような電話の後で、チン・リンが、私にそっと言った。「私は、起こることすべてが、偶然ではないと思うの。おそらく、これは、師父が、私たちを試練にかけている時なのよ。私たちの信仰が、揺るぎないものかどうか、私たちが、本当に、この世の物質的なもの、そして、これらの感情的なしがらみを、手放すことができるかどうかを、見ていらっしゃるのよ」

私は黙って、妻の手を握った。私は、理解した。しかし、理解することと、それに立ち向かい、乗り越えることは、また別の、困難な旅路だった。財政的な圧力、何百人もの従業員への責任、家族の将来への不安、二人の子供の学費の工面、そして何よりも、小蓮(シャオリエン)ちゃんの回復のために、最良の環境を、どう確保するかということ、それに加えて、両親を安心させられないという、絶え間ない痛みが、私の肩に、重くのしかかっていた。

状況は、日増しに悪化した。会社を救うために、私は、痛みを伴う決断を、下さざるを得なかった。人員削減の波が始まった。かつては、五百人以上の従業員が、意気揚々と働いていた会社から、それは、傾いた骨組みだけが残るまでに、縮小した。最後の会議を、悲痛な空気が包み、かつて私と共に歩んだ人々の、失望し、当惑した眼差しが、私の心を、締め付けた。最終的に、残ったのは、わずか二十人余り、本当に情熱を持つか、あるいは、何らかの理由で、沈みゆく船に、留まることを選んだ人々だけだった。

しかし、その最小限の人員でさえ、運営費の重荷、そして特に、銀行からのローンの利子は、依然として、耐え難いものだった。債権者たちは、絶えず催促の電話をか

け、会社の資産を差し押さえると、脅した。もはや、他に方法はなく、何夜も寝返りを打った後、私はチン・リンと相談し、私たちがアメリカでの年月で蓄えた、三つの不動産のうち、二つを、売却することを決断した。それは、投資用の家と、賃貸用のアパートだった。資金は逼迫しており、また、急いで工面する必要があるため、私は、実質価値よりも、遥かに低い価格での、「投げ売り」を、受け入れざるを得なかった。私の家族は、一番小さな家に移り住み、不要な出費は、すべて切り詰めた。私たちがかつて使っていた、一台二百万ドル以上もする、豪華な車もまた、売却しなければならなかった。その代わりに、私たちは、一台一万ドル余りの、中古車を二台買い直し、移動には、それで十分だった。週末に、家族全員で、高級レストランに集う夜も、完全に、なくさなければならなかった。その代わりに、質素で、心温まる、家庭料理の夕食があった。私の家族の物質的な生活は、今や、以前とは、実にかげ離れたものとなっていた。

三ヶ月、そして六ヶ月もの間、嵐は、絶えず私たちを試練にかけた。会社は、ただ、かろうじて活動を続けているだけだった。私たち夫婦も、どれほど努力しても、最終的に、大学側から、教員契約を更新しないという、通知を受け取った。私たちは、最後の安定した収入源を失

ったが、それ以上に重要なことに、私たちは、専門知識を貢献し、科学的な信頼を維持し、そして知識人社会と繋がることのできる、学術的な環境を、失ったのだ。

その暗黒の日々の中で、私は、絶えず自問した。私は、厳しい現実直面し、正直に（真）、原因を探ろうと努めたが、あらゆる努力は、行き詰まった。私は、運命を恨んだり、誰かを責めたりはせず、ただ、黙々と耐え忍んだ（忍）。会社に残った二十人余りに対して、私は、彼らの最低限の生活を保障するために、全力を尽くし、自分の善良さと誠実さをもって、彼らを励まそうと努めた（善）。

多くの夜、チン・リンが、以前の豪華な生活習慣を放棄し、小さな家での、より質素な生活に、静かに適応し、一つ一つの出費を、慎重に考え、週末のレストランでのパーティーの代わりに、手ずから家庭料理を準備し、以前は簡単に買えた、遠出の旅行や、ブランド品を、諦めているのを見ながら、そして、依然として、小蓮（シャオリェン）ちゃんの世話に、全力を注ぎ、彼女の心の傷を、癒そうと努めているのを見ながら、私の心は、切り裂かれるようだった。家族の基本的な、衣食住の必要は、残されたもので、依然として保障されてはいたが、百万

長者の生活から、ただの、普通の公務員家庭のように、
かろうじてやりくりするレベルへの、急落は、私に、目
に見えない重荷を、感じさせた。私は、自問した。自分
は、科学者、成功した企業家という、名声に、あまりに
も執着しているのではないか？大学での地位を失い、学
術界からの承認を失ったことは、自分が依然として、し
がみついている、「名」を、手放させるための、試練の
一部ではないのか？私は、高価な車、豪華な食事、ある
いは、贅沢な休暇といった、物質的な成果、便利さ、豊
かさに、あまりにも心を奪われ、修煉者としての、人生
の真の意味を、忘れてしまっているのではないか？それ
らの問いが、心の奥深くまで、突き刺さり、私に、内に
向けて探し、自分自身の意識の、最も深い層に、向き合
うことを、強いた。

灰の中から立ち上がり、光を目指す

最も暗い日々は、どうやら底を打ったかのようにだった。
私たち夫婦は、築き上げてきたものの、ほぼすべてを失
ったが、依然として、自分たちの信念を、固く守ってい

た。残った二十人余りの従業員、会社が傾きかけた時に、留まることを選んだ彼らが、私にとって、ささやかではあるが、貴重な原動力となった。彼らはもはや、単なる従業員ではなく、死の渦から脱しようと努める、同じ船に乗る、仲間だった。

ある日、偶然、年配の同修と会った。彼は、長年アメリカに住み、同じように、浮き沈みを経験してきた人だった。私は、会社と、私のキャリアに、立て続けに襲いかかった、奇妙な出来事について、分かち合った。理不尽にキャンセルされた契約、根も葉もない噂、義理の兄の資本引き揚げ、そして、中共の手が及んでいる可能性についての、母の心配に満ちた警告についても、語った。同修は、非常に注意深く耳を傾け、そして、物思いに沈んで言った。「王明 (ワン・ミン) さん、お母さんの言葉は、根拠がないわけではないかもしれませんがよ。アメリカでは、中共のスパイが、非常に巧妙に、そして横行しています。あなたの仕事が、順調だったのに、突然、あのように異常な形で急落したのは、偶然ではないのではないかと、私は危惧します。法輪功 (ファルンゴン) に関わる人々や、大陸での不公正について、声を上げることを敢えてする人々を、妨害するために、彼らの手が、及んでいる可能性が、非常に高い。もう一度、詳しく調査

してみてもいいですか。手がかりが見つかるかもしれません」

同修の言葉は、まるで警鐘のように、私の心に響き、以前、特に母の警告の後で、心の中に忍び寄っていた、漠然とした疑念を、照らし出した。以前は、私は、それをどこか、退け、アメリカではそんなことは起こり得ない、自分自身の中に、過ちを探さなければならないと、考えていた。しかし今、経験豊富な同修が、そう語るのを聞いて、バラバラだったピースが、繋がり始めた。私は、理不尽な細部、説明のつかない出来事を、ふと思い出した。もしかしたら、母は、正しかったのかもしれない？ 「完全に自由な世界」についての、私の無邪気さが、私を、油断させていたのかもしれない？ チン・リンからの励ましもあり、私は、たとえそれが、どれほど厳しいものであっても、真実を見つけ出さなければならないと、決意した。

科学者としての思考様式で、私は、システム全体、取引、人事記録を、再調査し始めた。特に、会社が問題を抱え始めた時期に、新しく採用された従業員に、注意を払った。私は、信頼できる友人である、サイバーセキュリティの専門家に、密かに、会社のコンピュータシステムと

通信情報全体を、再検査するよう依頼した。その結果は、私を、呆然とさせ、そして苦しませた。営業部の、一人の新しい従業員、私がかつて、精力的で、社交的だと評価していた人物が、疑わしい活動の兆候を示していた。職務範囲外のデータへのアクセス、外部への異常な連絡、そして、さらに重要なことに、この人物が、意図的にプロジェクト情報を漏洩し、重要な契約を妨害したことを示す、証拠があった。

自分が、別の華僑、中共政権の手先と見なされる者に、妨害のために、潜り込まれていたという、辛い真実に直面し、最初は、憤りの感情が、私の中に込み上げてきた。しかし、私はすぐに、自分は修煉者であると、自分に言い聞かせ、善と忍についての、師父の教えを、思い出した。私は、怒りや恨みに、自分の行動を支配させるわけにはいかなかった。十分な証拠を集めた後、私は、会社の弁護士と共に、事の次第すべてを、アメリカの関連当局に、報告した。その潜入スパイは、すぐに解雇され、法の調査に、直面することになった。それが引き起こした、甚大な損害を、直ちに回復することはできなかったが、この「害虫」を取り除いたことは、会社が、目に見えない重荷を、下ろすのを助け、そして、さらに重要なことに、それは、私の疑念を裏付け、この迫害の本

質——それが、中国の国境だけに、留まるものではないということ——を、より深く理解させてくれた。

残った、わずか二十人余りの情熱的な人々と共に、私は、会社が、旧来のモデルで、活動を続けることはできないと、理解した。私たちは、全面的に再構築し、新しい方向性、真に画期的な、核心となる製品を、見つけ出さなければならなかった。緊張感がありながらも、建設的な精神に満ちた会議の中で、アイデアが、形になり始めた。大法から私が悟った、伝統的価値を尊ぶこと、人と自然との調和についての教えから、そして、私の現代科学の知識とを組み合わせ、私は、大胆なアイデアを、思いついた。東洋の伝統医学の精華と、西洋の厳格な科学研究・検証プロセスとを組み合わせた、新しい医薬品ラインを、開発することだ。

私は、このアイデアを、残ったチームと、分かち合った。多くの者は、初めは、懐疑的だった。なぜなら、それは、私たちがこれまで行ってきたこととは、あまりにも、異なっていたからだ。しかし、私の熱意とビジョン、そして、具体的な科学的分析が、次第に、彼らを説得していった。私たちは、限られた資源と、しかし、高い決意の精神をもって、新しい冒険に、着手した。私とチン・リ

ンは、残った中核的な科学者たちと共に、昼夜を問わず、研究室に、没頭した。私たちは、東洋医学の宝庫にある、何百種類もの貴重な薬草を研究し、有効成分を抽出し、それらを、現代科学の原理に従って配合し、効果を最適化し、副作用を最小限に抑える方法を、探した。研究プロセスは、非常に困難で、何度も失敗し、諦めなければならぬかと思われた。そのような時、私たちは、また共に法を学び、心の静けさと、信念を、取り戻した。師父の姿と、法の中の教えが、再び、私たちに力を与えてくれた。

一年近くもの、絶え間ない努力の末、ついに、一つの新製品が、誕生した。それは、慢性疾患の治療を補助する薬で、東洋医学の知識に基づき、完全に天然成分から、調合されていたが、西洋医学の厳格な基準による、臨床試験を通して、その効果と安全性が、標準化され、検証されていた。

製品が市場に投入された日、私の心は、期待でいっぱいだった。私たちが経験してきた、すべてを考えれば、多くを期待する勇気はなかった。しかし、肯定的な兆候が、現れ始めた。初めは、試用した、少数の患者からの、良いフィードバック、そして次第に、医師や、医療専門家

もまた、製品の独創性と効果、特に、その安全性と、副作用がほとんどないことに、注目し始めた。製品の信頼性は、実際の結果と、使用者からの紹介を通して、徐々に築かれていった。注文は、明らかに増加の兆候を見せ始め、希望と、会社が徐々に安定を取り戻すのを助ける、最初の収入を、もたらした。

私の小さな会社は、破産の瀬戸際から、にわかに、肯定的な転換を遂げた。以前は深刻な打撃を受けた、製薬業界における私の信頼もまた、一步一步、回復し始めていた。これらの好ましい兆候をもって、私は、徐々に会社を再建し、条件が許せば、かつての情熱的な従業員の一部を、再び招き入れ、そして、慎重に、生産規模を拡大していくための、基盤を得た。

しかし、財政的な回復の兆候よりも、さらに重要なことに、私たち夫婦は、より深い喜びを、感じていた。私たちは、逆境を、機会へと変えた。それは、ただキャリアを立て直すためだけでなく、伝統医学の知恵と、現代科学の透明性の両方を、その中に宿す、真に人々の役に立つ製品を、生み出すためだった。前方の道は、再び、広く開かれた。それは、ただの一企業の未来だけでなく、敢えて信念を固く守り、敢えて試練に立ち向かい、そし

て、自分自身の修煉から、光を見出した、人々の未来でもあった。私たちが経験した、あらゆる苦難は、すべて、意志を鍛え、執着を洗い流し、そして私たちが、帰り道で、よりしっかりと歩むことができるようにするためのものであったと、私は理解した。

嵐の中から響く希望の歌、光を広げる

中国大陆での恐ろしい激動の後、アメリカでの生活は、徐々に安定を取り戻したかに見えたが、真の平穏は、長くは続かなかった。財政的、そしてキャリア上の困難が、次々と襲いかかり、私の心血を注いだ会社を、破産の瀬戸際へと追いやり、私たち夫婦二人を、教職から失わせた。初めは原因が分からなかった逆境に、長い間直面した後、私たちはついに、中共スパイによる水面下での妨害工作を発見し、東洋と西洋の医学を組み合わせ、新しい方向性をもって、灰の中から、一步一步、キャリアを再建していった。

その嵐を乗り越えたことは、私たちがキャリアを立て直すのを助けただけでなく、意志を鍛え、執着を洗い流し、そして大法への私たちの信念を、固めてくれた。そしてまさにこの時、生活が徐々に安定を取り戻した時、私とチン・リンは、自分たちの責任が、より大きなものであることを、ますます感じていた。

中国から帰国し、新しい家族だけでなく、かの地で繰り広げられている、残酷な迫害の真実という重荷をも、背負ってきた私たちは、自分たちが、真実を語らなければならないと、感じていた。私たちは、真・善・忍（しんぜんにん）への信念というだけで、何百万人もの罪のない人々が、苦難に耐えなければならないことを、そして、恐ろしい臓器狩りの犯罪が、依然として世界の陰で続いていることを、知りながら、沈黙していることはできなかった。

この真実を広めることは、決して容易ではなかった。特に、西洋の公衆の一部が示す、無関心、懐疑、あるいは、ためらいに、直面した時は。しかし、康裕（カン・ユー）さん、陳梅（チェン・メイ）さん、劉（リウ）さん、陳（チェン）さん、蘭（ラン）さん、そして私たちが会った、どれほど多くの他の人々の姿が、そして、私自身が拘置所

で経験した、恐ろしい体験が、私たちに、行動しなければならないと、駆り立てた。

私たちは、最も身近な人々——家族、友人、心を開いてくれる同僚——から、始めた。私たちは、自分たちの旅路を語り直し、法輪功（ファルンゴン）の美しさと、弾圧の厳しい真実について、分かち合った。次第に、語りの誠実さと、私たち自身の肯定的な変化が、多くの人々が、より真剣に耳を傾け、考えるように、させた。

しかし、個人的な分かち合いだけでは、不十分だった。私たちは、地元の法輪功（ファルンゴン）学習者のコミュニティが主催する活動に、積極的に参加した。週末には、他の学習者たちと共に、中国領事館の前で、穏やかに立ち、パレードに参加し、ドキュメンタリー映画の上映会や、真・善・忍（しんぜんにん）国際美術展を、開催した。チン・リンは、その言語能力と文化への理解をもって、しばしば、法輪功（ファルンゴン）について紹介し、質問に答えた。私は、請願書への署名集めに参加し、立法府の議員や、人権団体へ、手紙を送った。

一つ一つの活動は、たとえ小さなものであっても、沈黙を破るための、努力だった。私たちは、少なからぬ困難に直面した。無関心、中国政府側からの、水面下での妨

害、そして時には、誤解さえも。しかし、他の学習者たち、その多くが、同じく迫害から逃れてきた難民でありながら、依然として、粘り強く、穏やかに、そして根気強く、何年にもわたって真実を語り続けている姿を見て、私たちは、再び、力を与えられた。私たちは、真実を広めることは、中国で苦難に耐えている人々に対する、責任であるだけでなく、自分自身の良心と、世界の未来に対する、責任でもあると、理解した。なぜなら、悪の前での沈黙は、まさしく、悪への加担だからだ。

私たちが、すべてを再建し始めてから、時は、あっという間に過ぎ去った。小蓮(シャオリエン)ちゃんとの新しい生活、自分自身を修煉し、真実を広める努力は、絶え間ない旅路となった。過ぎ去った道のりを振り返ると、私は、感慨にふけらずにはいられない。実証科学だけを信じる、一人の医学教授、一人の企業家から、私は、認識と信仰において、完全な変貌を遂げた。その旅路は、私を、懐疑から好奇心へ、発見から受容へ、最初の信仰から、法輪大法(ファルンダーファ)への、神仏の存在と、宇宙の高遠な法理への、揺るぎない確信へと、導いた。

私はかつて、世俗的な基準による、名声と成功の、頂点に立っていたが、空虚さを感じていた。今、生死を分け

るような試練を経験し、極限の悪に直面し、そして、無限の善意を目撃した後で、私は、初めて、生命の真の意味を、見出した。それは、物質的な享楽や、取るに足りない名利の争いではなく、先天的な、純粋な本性へと、立ち返ること、宇宙の最高の特性、すなわち、真・善・忍（しんぜんにん）に、同化することだった。大法を修煉する道こそが、天へと架かる、梯子なのだ。

私たちが経験した苦難は、たとえ痛ましく、過酷であったとしても、まさに、意志を鍛え、業力（ごうりき）を消し去り、心性を高めるために、必要な試練だった。危険に直面するたびに、自分自身の安全と、良心との間で、選択を迫られるたびに、私たちは、大法の加持を受け、信念と勇気を、固めることができた。康裕（カン・ユー）さんと陳梅（チェン・メイ）さん一家の悲劇、迫害の残虐さ、そのすべてが、私たちを、恐れさせたり、後退させたりするのではなく、逆に、中共の邪悪な本質と、私たちが選んだ道の、偉大さと、正義を、よりはっきりと認識させた。

私は、真・善・忍（しんぜんにん）が持つ、人の心を動かす力を、強く信じている。この光は、私たち修煉者を照らすだけでなく、世界中のすべての人々の良心を感化し、

目覚めさせる力を持っている。邪惡の闇が、依然として中国の大地を覆い、迫害が、依然として残酷に続いてはいるが、私は、それが、夜明け前の、最後の狂乱に過ぎないと、信じている。

なぜなら、法輪大法（ファルンダーファ）は、すでに五大陸に広まり、何億もの人々の心に、深く根を下ろしているからだ。真の修煉者たちは、真・善・忍（しんぜんにん）への不動の心、穏やかさと、無限の慈悲をもって、昼夜を問わず、真相をはっきりと伝え、嘘偽りを打ち破り、邪惡な政権の罪惡を、暴く努力をしている。泥の中から、清らかな蓮の花が、咲き誇るように、彼らは、まさに自分たちの善良さと忍耐をもって、暴力に立ち向かい、真実をもって、欺瞞に、打ち勝っているのだ。

私は、中国の人々が、中共の真の姿に気づく日、法輪功（ファルンゴン）迫害の真実が、公の場で、完全に暴かれる日が、もはや遠くないと、信じている。その時、闇は消え去り、邪惡は淘汰され、そして、伝統的な道徳的価値が復興する、信仰の自由な、輝かしい未来が、本当に、古の中国の地に、訪れるだろう。真の夜明けが、東方に、訪れるのだ。

そして私は気づいた。真・善・忍（しんぜんにん）は、縁遠いものでも、東洋だけのものでもないのだと。それは、魂の奥深くでは、おそらく誰もが、目指している価値なのだ。時に人を迷わせる現代世界の中で、法輪大法（ファルンダーファ）は、まるで清らかな泉のように、私が、平衡を取り戻し、道徳を高め、そして人生の真の意味を、より深く理解するのを、助けてくれた。私は信じている。善きもの、真なるものは、それ自体が、広まる力を持っているのだと。

* * *

結び

『紅塵（こうじん）、金光（きんこう）』の物語が幕を閉じる時、おそらく読者の心に残るのは、個々の登場人物の筋書きや運命ではないでしょう。むしろ、それは、静かでありながら、強烈な一つの対比です。すなわち、塵に満ちた人の世と、常に現れようとする、一つの純粋な光との間の。

一見すると、これは、ばらばらな人生の断片の集まりです。一人一人が、それぞれの思い、それぞれの重荷、そして、この世の損得の間での、それぞれの葛藤を抱えています。彼らは、運命の流れ、野心の流れ、そして傷つきと過ちの流れに、飲み込まれていきます。それこそが、紅塵（こうじん）の――息が詰まるような、混沌とした、そして魅力に満ちた――絵画なのです。

しかし、一步下がって観察すると、一本の黄金色の糸が、静かに、共通の織物を、織り上げていたことに気づきます。最も暗い瞬間に、最も困難な選択の中で、金光（きんこう）は、現れました。その光は、救いのために天か

ら降ってきた、奇跡ではありません。それは、まさに人間性の、最も深い場所から生まれた、一つの選択なのです。利他的な行動、許しの言葉、執着を手放す瞬間、あるいは、逆境の中で固く守られた、善良な一念。

したがって、この作品は、ただ彼らの物語を、語っているわけではありません。それは、私たち自身を、照らし出しているのです。読者一人一人が、自分自身の重荷と、自分自身の選択を抱えて、自分自身の紅塵（こうじん）の中を、歩んでいます。

そしておそらく、この本が残す、最も重要な問いは、登場人物が何を見つけたか、ということではなく、これです。

人生の、無数の塵の中で、私たちは、自分自身の光を、認識し、そして守り抜くことができるのだろうか？

ソフィア・ベル (Sophia Bell)

THE LIVES MEDIA

著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトにつ いて

著者について

ソフィア・ベル (Sophia Bell) は、政治、文化、社会、科学、精神性といったテーマを探求する独立系作家です。彼女の作品は真実を追求し、良心を呼び覚まし、人類の運命についての深い思索に声を与えています。

彼女の作品は、誠実さと感情の深さ、そして啓発の精神をもって記録された実際のインタビューに基づくことがよくあります。

プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニュースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

連絡先

- ✧ ウェブサイト： www.thelivemedia.com
- ✧ E メール： editor@thelivesmedia.com
- ✧ QR コード：



同プロジェクトの他の作品

THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

- 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light) → 本書
- 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)
- 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
- 紅の帳 (The Red Veil)
- 時の以前の響き (Echoes Before Time)
- 俗世間へ (Entering The World)
- 最後の鐘 (The Last Bells)
- 我々以前 (Before Us)
- 千の人生 (Thousand Lives)

この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます。
真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が
あらんことを。